魔法少女リリカルなのはA's Another

外神 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ７６１２Ｎ

【作者名】
外神　恭介

【あらすじ】
騎士達は、ただ安らげる場所が欲しかった。壊れた少女は、ただ悲しみを終わらせたかった。孤独な少女は、ただ温もりが欲しかった。狂った少女は、ただ友達が欲しかった。作られた少女達は、ただ己の意味が欲しかった。そして優しい少年と少女達は、彼女達を救いたいと願った。これは、海鳴市を舞台に繰り広げられる、もしかしたらあったかもしれないもう一つの物語、その続き。魔法の力は想いの力。例えどんなに悲しくても、友達と一緒ならきっと乗り越えていける。例えどんなに遠くても、願えば想いはきっと届く。

桜色の天使は、金の閃光は、夜天の王は、絶望の輪廻を断ち切れるのか。白銀の刃は、悲しみの闇を切り裂けるのか。魔法少女リリカルなのはA's Another、始まります。※はい、前作こと魔法少女リリカルなのはAnotherの続編です。前作を読まなきゃイミフなこと間違いなしなので、前作を読んでから読むことをオススメします。相変わらずの中二っぷり＋原作崩壊っぷりですが、なのはを、フェイトを、はやてを、ナツキを、温かく見守ってやって下さい。それだけが前原…、げふん。それだけが作者の望みです。

プロローグ（前書き）

はい、皆様お久しぶりです。そうでない方はおはこんばんちは。
ロリコンこと外神恭介、遂に戻って参りました。
という訳でアナザー二期Ａ－ｓ編、始まります。

プロローグ

6月3日、深夜11時58分。ちょうど、海鳴市を舞台にした一つの事件が終わりを告げて、しばらくした頃の出来事。

私は読んでいた本から顔を上げ、時計へと視線を送る。午後11時58分。日付が変わるまで、

「あと二分、か…」

ベットに寝そべった私は、我知らず溜め息をつく。明日、6月4日は私、八神はやての誕生日。特に気にしていた訳ではないが、自分は今年で九歳になるような子供なのだ。無意識下ではやはり気にしていたのかもしれない。

「…祝ってくれる人なんて、おらへんのにな…」

両親はおらず、広い家の中で一人暮らし。足も病気で動かず、外に出る機会もない。そんな私に、誕生日を祝ってくれる人などいない。

「…ああもう、やめやめ」

辛気臭い思考を断ち切り、読み掛けのページに栞を挟む。パタンと本を閉じると同時、三本の針が、真上を向いて重なった。

――瞬間、部屋の空気が変質する。

「……！！」

部屋に横たわる濃密で重厚なプレッシャー。その気配の源泉は、意外とあっさり見付けることが出来た。
他の本が本棚に納められている中、一冊だけ飾ってあった奇妙な本。
茶色い表紙に、数百ページにも及ぶ分厚さ。そして何よりも違和感を抱かせる、
――本を封じるかの如く巻かれた、銀鎖。
その歪な本がゴトゴトと自らを揺らしながら、光る闇とでも言うべき黒い光を放っていた。

「え…！？」

輝きをそのままに、それはふよふよと私の方に飛んできた。大気を震わせるそれは、絶対的な力の顕現。
――王の、力。

「な…、何…！？」

銀鎖を軋ませ、自らを膨張させたそれは、
――その戒めを、打ち破った。
それは風もないのに自らを構成するページを広げ、白紙のそれを見せびらかすようにめくり続ける。

《Ich entferne eine Versiegelung（封印を解除します）》

「！？」

そして白が茶色へと変わった瞬間、声と共にそれが閉じた。そのまま私の前に舞い降りたそれは、金色の十字架が装丁された表紙を向

けて、

《Ａｎｆａｎｇ（起動）》

――黒い輝きを、放った。

（…目覚めてしまったか）

それと時を同じくして目覚めた私は、ぼんやりとした頭で考える。目の前では、四人の守護騎士達が主の前に降り立つところだった。

（…まだ若い）

今回の主であろう、ベットに座り込んだ少女に視線を移す。まだ十にも満たない子供だろう、黒い光を放つ私を見て怯えているのがわかった。

（…無理もない）

彼女からすれば、部屋に飾られていた本が現実には有り得ないことを起こしている状態なのだ。以前の主の中にも似た反応をしていた者がいる。

（…こんな少女を、死に追いやることになるのか）

自分の業に巻き込まれてしまった少女に、悲しみと哀れみの念を抱く。私は呪い。私は闇。そんなものに巻き込まれて命を落としてきた今までの主の顔が、走馬灯のように脳裏を過ぎる。

（…せめて、非情な主ならば良かったのにな…）

優しげな少女を見てそれだけを思い、私の意識は闇に溶けて行った。

何も無い空間。黒一色で塗り潰された、方向感覚すら消えた空間。

その中で、あたし達四人は向かい合っていた。

「…目覚めたわね」

「…そのようですね」

あたしの呟きに、右側に佇む少女が答えた。肩までの茶髪に青い瞳。

彼女を作る上で元にした人物を忠実に再現しているが、その身に纏う衣服は正反対に黒い。

「それで、これからどうするのですか？我が主」

「いい機会だわ。この機に乗じて、あの二人を殺す」

私は即決した。こんな機会はそうそうない。今を逃したら次はない、そんな確信染みた何かがあった。

「…それはつまり、ボク達の出番、ってことかな？」

あたしの言葉に、今度は左側の少女が反応した。ツインテールにした水色の髪に、ピンクの瞳、漆黒の服。この少女も、オリジナルを完璧に再現している。

「ええ、そうよ。あなた達の生まれてきた意味がようやく叶うの」

二人はある目的の為、あたしが作ったマテリアルだ。一から作るのは手間だったが、

――自分と同じ姿をした者に殺される。

なんと最高に最悪な殺し方だろう。そんなことを夢想しながら没頭すれば、完成はあっという間だった。

「高町なのは、ですか。芯こそ強いものの、基本的には魔力が高いだけの、未だ発展途上の魔導師でしたね」

「フェイト・テスタロッサ、だっけ。確かに強いんだろうけど、精神的には未熟みたいだね。ボクの敵じゃない」

自らのターゲットの情報を確認するように、二人は呟き数度頷く。あの二人が彼女達を見たらどんな反応をするだろう？想像しただけで笑いが止まらない。

「そして我がうぬの兄の足止め、か。妥当なところであろう」

と、そこに割って入るように、四人目の少女が口を挟んだ。

「ええ、期待しているわよ？闇統べる王」

「我を誰だと思っておる？うぬが作った最強のマテリアルであろう。任せておけ」

闇統べる王と呼ばれた彼女、白銀の髪に緑の瞳を持つ彼女は、ニヤリと嫌らしく笑う。その顔に溢れているのは、傲慢とも言える過剰

なまでの自信だった。

「何言ってるんだよ!!最強はこのボクだ!!」

「ほう…、王の名を冠する我の相手になるとでも?」

彼女の言葉に水色の少女、雷刃の襲撃者こと通称Ｌが反応し、闇統べる王こと銀髪の少女、通称Ｄが少女を煽る。

「はいはい二人共そこまで。実際三人共一長一短なんだから個人間の優劣に意味なんてないわ」

「そうですよ二人共。私達は皆平等です」

あたしの言葉を引き継ぎ茶髪の少女、通称Ｓが場を収めるように言うが、

「…星光の殲滅者を襲名したうぬが言えたことか」

Ｄのセリフに、星光の殲滅者たるＳは沈黙した。そう、三人の中でただ一人、あたしの奥義を受け継がせた彼女は、マテリアルの中でも特別な立ち位置にいる。まあ、相手もその技を持っているのだから当然と言えば当然なのだが。

「何言ってんのよＤ。あんたにもＬにも神々の力やったでしょうが」

だが、他の二人も負けてはいない。Ｌには雷神の力が宿っているし、Ｄに至っては古代の神々の力を複数に渡って与えている。だから、

「あんた達三人なら、誰にだって勝てる」

三人の主人（マスター）たる私は、きっぱりと断言する。これだけの力を持ってして、たかだか二人の少女を葬れない道理はない。

「ええ。オリジナルを殺すことで、私達の方が優れていると証明してみせます」

「もちろん！！ただ縋ってるような甘い子供には負けないよ！！」

「うぬの兄がどれ程の手練れかは知らんが何、軽く捻り潰してくれるわ」

S、L、Dが威勢良く答える。とてもいい返事だ。手駒として申し分ない。…でもね、

「D、一つだけ教えてあげるわ」

私は髪の奥から、踏ん反り返るように座るDを見据える。

「お兄ちゃんを侮辱するなら…、あたしがお前を殺してあげる。生きたまま縛り上げて、ありとあらゆる残虐な方法で」

あたしは壊れたように笑い、言葉という名の鎖で彼女を縛り付ける。

「お前は「モノ」だ。あたしが気まぐれに作り出した、偽りの命だ。生殺与奪はあたしが握っていることを忘れるな」

あたしの異様なプレッシャーに気圧されたのか、Dは冷や汗をかき始める。

「う、うむ…。わかっておる…。すまなかった…」

あの唯我独尊を体言したかのような存在であるDを屈服させたことに満足し、私は嗜虐的な笑みを浮かべる。

「わかればいいのよ」

そう。この場の支配者はあたし。逆らえば最後、彼女達は一瞬で無に還る。

「待っててね、お兄ちゃん…」

あたしは上へ手を伸ばし、うっとりとした声を投げ掛ける。見る者が見れば、それは恋する乙女のようにも見えただろう。

「近い内に、迎えに行くから」

実の兄（お兄ちゃん）に恋い焦がれる狂気（あたし）の魔女は、静かに目覚めの時を待つ。

――――全てを、取り戻す為に。

呪われた少女と、狂った少女。そして、悲しみを乗り越えた少年と少女達。出会うはずのなかった彼らが出会う時、再び世界は動き出す。

聖なる夜が悲しみの闇に覆われたとしても、その先には白と黒に彩られた空があるから。桜と金と白銀が、きっと闇を貫くから。

だから、名前を呼んであげて。闇の雲を振り払う、祝福の風の名を。

魔法少女リリカルなのはA's Another、始まります。

プロローグ（後書き）

はい、短めですが今回はここまでです。
第一話は前作同様、明日の同時間に投稿予定です。
感想やレビュー、ダメだしやクロスなどは絶賛募集中なので遠慮なくどうぞ。

第一話「再会」（前書き）

はい一話です。
昨日のはいわば序の口、いよいよ今日から本番でＳ（ディバインバスター
まあ、まだ序盤ですんでそこまで変わった展開はありませんが。
ではどうぞー

第一話「再会」

季節は流れ、１２月。空気が肌寒い朝６時半。私、高町なのはは桜台に来ていました。

「それじゃあ、今朝の練習の仕上げ、シュートコントロールやってみるね」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

無人の広場に響く、私のものとは違う声。その声はベンチに畳まれたコート、その上に置かれた赤い宝石から響いていた。

「すぅーっ…、はぁーっ…」

目を閉じて、深呼吸。心を落ち着かせ、集中すること。彼も言っていた、魔法の基本。

「リリカル、マジカル」

私の声に答え、足元に桜色に輝く図形が広がる。円の中に四角形を二つ組み合わせたそれは、まごうことなき魔法陣。

「福音たる輝き、この手に来たれ。導きのもと、鳴り響け」

詠唱と同時、中身の入った缶、オレンジのプリントがされたそれを上へ放る。

「ディバインシューター、シュート！！」

指先に点った桜色の弾丸が、空に舞う銀色目掛けて駆け上がった！！

「コントロール…」

缶を跳ね、軌道を変えた弾丸に意識を集中させる。弾丸が急なカーブを描き、缶を更に高く跳ね飛ばす！！

ターン、ヒット、ターン、ヒット、ターン、ヒット。

《Ｅｉｇｈｔｅｅｎ．Ｎｉｎｅｔｅｅｎ．Ｔｗｅｎｔｙ．Ｔｗｅｎｔｙ－ｏｎｅ》

「アクセル！！っ…！！」

弾丸を加速させ、目をつむり制御に全神経を費やす。缶を潰さないように、尚且つ缶を跳ね上げるだけの威力をキープ。そのまま速度をひたすらに上げていく。

《Ｆｉｆｔｙ－ｆｉｖｅ．Ｓｉｘｔｙ．Ｓｉｘｔｙ－ｆｏｕｒ．Ｓｉｘｔｙ－ｅｉｇｈｔ．Ｓｅｖｅｎｔｙ．Ｓｅｖｅｎｔｙ－ｔｈｒｅｅ》

「くっ…、うっ…」

辛いけど。苦しいけど。彼はこれを六歳でやり遂げたんだ。私だって…、私だって…！！

《Ｎｉｎｅｔｙ－ｅｉｇｈｔ．Ｏｎｅ　ｈｕｎｄｒｅｄ》

「はぁっ…」

ノルマの百回をこなし、ようやく一息。宙に舞った缶が、クルクルと回りながら落下してくる。

「ラストっ！！」

地面スレスレのそれを跳ね上げ、バシンと左手でキャッチ。

「いたた…」

思ったより勢いがあって、左手をぶらぶらと振る。ちょっとカッコつけ過ぎちゃったかな…。

《Ｓｐｌｅｎｄｉｄ（お見事です）》

ベンチに座り、缶に傷がないか眺め回す私に赤い宝石、レイジングハートから声が掛けられる。

「…タイムは？」

《Ｉｔ　ｉｓ　４２　ｓｅｃｏｎｄｓ（４２秒です）》

…そんなに掛かっちゃったんだ。必死で集中してたからもっと短いかと思ってた。

「…ナツキ君とユキさんはいくつだっけ」

《Ｉｔ　ｉｓ　１２　ｓｅｃｏｎｄｓ　ａｎｄ　３　ｓｅｃｏｎｄｓ（１２秒と３秒ですね）》

彼ことナツキ君が考案したこのトレーニング法、「中身の入った缶を破損させず、地面に落とさず尚且つ最速で１００回当てる」というシュートコントロール。彼とその妹さんは、破損しやすいアルミ缶でそれだけのタイムを叩き出している。

「……はぁ」

手元の缶、アルミ缶より丈夫なスチール缶を開封し、一口飲んで溜め息をつく。ナツキ君の初成功時のタイムは３０秒。まだまだ１０秒以上もの差がある。

≪Ｄｏｎ't ｍｉｎｄ，Ｍｙ Ｍａｓｔｅｒ. Ｉｔ ｉｓ ａｎ ｅｎｏｕｇｈ ｌｅｖｅｌ ｉｆ ｃｕｔｔｉｎｇ ｆｏｒ ｏｎｅ ｍｉｎｕｔｅ ｉｆ ｉｔ ｉｓ ｔｈｉｓ ａｇｅ（上出来ですよ、マスター。この年齢なら一分切れれば十分なレベルです）≫

「あはは…。ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートの励ましの言葉に、私は弱々しく微笑む。彼と同じ場所に立ってみて、初めて気付く彼の凄さ。

「頑張らないとな…」

私はジュースを飲みながら、力不足を痛感する。これでも頑張ってはいるけれど彼を支えるには、彼の隣に並ぶにはまだまだ強くならなきゃいけない。

「今日の練習、採点すると何点？」

《Ａｂｏｕｔ　ｅｉｇｈｔｙ　ｐｏｉｎｔｓ（約８０点です）》

「そっか」

ジュースを飲み干し、缶を再び放り投げる。宙に舞った缶は桜色の弾丸に吹き飛ばされ、ごみ箱の中へホールインワン。

「…帰ろっか」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

コートを羽織り、レイジングハートを首から提げて。私は桜台を後にした。

私こと高町なのは。割と最近までは、ごくごく平凡な小学三年生だったんですが、春先に起こったとある事件がきっかけで、魔法使いになってしまいました。

「これで大丈夫…、かな」

制服に着替え身嗜みを整えた私は、机の上に飾ってあった写真立てを見遣る。そこに写っているのは、満面の笑顔を浮かべる少女と、困ったように笑う少年。

私に魔法と、いくつもの出会いや勇気をくれたあの時のみんなとは、今は少し、離れ離れ。でも、きっとまたすぐに会えるから。

「なのはー、郵便が来てるぞー」

「あっ、本当!?」

階下に降りた私に、お兄ちゃんから声が掛けられる。それってもしかして…!!

「海外郵便。差出人、天城ナツキとフェイト・テスタロッサ」

「ありがとうお兄ちゃん!!」

お兄ちゃんが差し出した茶色の小包を受け取る。やっぱりナツキ君とフェイトちゃんだ!!

「いつものあの子達だね。またビデオメール?」

「うん、きっとそう」

お姉ちゃんの質問に笑顔で答える。フェイトちゃんが考えたこの方法を、「何もないと寂しいしな」とナツキ君が全面的に賛成、こうして度々手紙とビデオメールを送っている訳だ。

「その文通も、もう半年以上になるよな」

「ナツキ君にフェイトちゃん、今度遊びに来てくれるのよね。家に来てくれたら、お母さんうーんと歓迎しちゃう」

「うん!!」

家族のみんなもビデオメールを見ているので、ナツキ君やフェイトちゃんに会いたがっている。二人共いい子だし、すぐに仲良くなれると思う。

「ユーノも本当の飼い主が見付かっちゃって、めっきり寂しいしねー」

「お前は特に可愛がってたからな」

溜め息をつきうなだれるお姉ちゃんに、お兄ちゃんが苦笑する。

「えっと、でも、また預かることになるかもだよ。その飼い主さん次第」

ユーノ君もちょっと用事が出来た為、今このお家にはいない。少し寂しいけど、すぐに戻ってくるって言ってたし大丈夫。

「だといいなぁ…」

お姉ちゃんの声を流しつつ、小包を見ながら思いを馳せる。ナツキ君にフェイトちゃん。ユーノ君、クロノ君にリンディさん、エイミィさん。

（みんな元気かなぁ…）

時空管理局艦船アースラ。そのブリッジ内は、穏やかな空気に包まれていた。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

「ん、予定は順調。良いことね」

私もその空気に当てられたのか、両手を伸ばして一息つく。と、

「失礼します。艦長、お茶のお代わりいかがですか？」

「ありがとうエイミィ、いただくわ」

エイミィが急須を運んできてくれた。気が利く子はホントにありがたい。

「本局にドッキングして、アースラも私達もやっと一休みね」

「ですね」

エイミィが湯呑みに注いだお茶に、角砂糖をドボドボと入れる。やっぱりお茶は甘いのに限るわね。

「子供達は？」

「今は、四人で休憩中のはずですよ。フェイトちゃん、さっきまでナツキ君の戦闘訓練受けてましたし」

ナツキ君は天城一族史上最高の天才である天城ユキを妹に持ち、自身も極めて優秀な魔導師だ。そんな彼の提案する一風変わった訓練は、なのはさんを短期間であそこまで成長させる程。フェイトさんが興味を持つのも頷ける。

「そしてフェイトちゃんを指導する片手間クロノ君と模擬戦って…、相変わらず無茶苦茶ですよね」

「可愛い妹の手前、負ける訳にはいかないものね」

と言っても、ナツキ君が全力を出したらアースラが撃沈してしまうので、力をセーブしているらしいのだが。クロノがあそこまでムキになるのを見たのは久しぶりかもしれない。

「ユーノ君もそれに付き合って、結界張ってましたから」

「そう。明日は裁判の最終日だっていうのに、マイペースねぇ」

追加でミルクをたっぷり注いだお茶を啜り、はふぅと一息。ホント、このお茶は最高だわ…。なんでみんな飲まないのかしら。

「まぁ、勝利確定の裁判ですから」

私の差し出した水羊羹を受け取り、ニッコリ微笑みながらエイミィが答えた。

「ぜぇっ…、ぜぇっ…、ぜぇっ…」

食堂のテーブルに突っ伏したクロノが、荒い息をついている。お兄ちゃんとの模擬戦で、バテバテのようだ。

「おいおい、大丈夫か？」

さすがに心配なのか、お兄ちゃんが尋ねる。ちなみにお兄ちゃんは汗一つかいていない。

「ホント…、容赦ないな…」

「今更だな。それに、手ぇ抜いたら意味ないだろ？」

クロノの言葉に対しお兄ちゃんは涼しく笑う。確かに一見無茶苦茶に見えるけど、ちゃんと相手の実力を計った上でそれに応じてメニューを組み直したりしているのを私は知っている。何でもないように振る舞ってはいるけど、お兄ちゃんはちゃんと陰で頑張っている。

「ま、愚痴やらご意見ご感想は後にしてさっさと打ち合わせしようぜ。そうすりゃゆっくり休めるだろ？」

注文したビスケットをみんなに配り、そのうちの一つをサクサク頬張りながら提案するお兄ちゃん。さりげなく私のだけ少し多かった。

「…それもそうか」

クロノが溜め息と共に起き上がり、どこからともなく端末を取り出す。

「さて、じゃあ最終確認だ。被告席のフェイトは、裁判長の問いにその内容通りに答えること」

「…うん」

クロノに答え、そっとお兄ちゃんの手を握る。大丈夫。お兄ちゃんやクロノが頑張ってくれたんだから、きっと大丈夫。

「今回はアルフも被告席に入って貰うから」

「わかった」

私の左に座ったアルフが頼もしく答える。いつもはお兄ちゃんと念話だったけど、アルフがいれば心強い。

「で、僕とシスコンとフェレットもどきは証人席。質問の回答はそこにある通り」

「オッケー」

「うん、わかった」

私の右に座ったお兄ちゃんが気楽に、アルフの正面に座ったユーノが真面目に答える。お兄ちゃんは勿論、ユーノも過去の資料を色々と調べて頑張ってくれた。今回最終日ということで、急遽来て貰ったのだ。

「っておい！！」

「何だ？」

と、ユーノがテーブルを叩きながら隣のクロノを睨む。

「誰がフェレットもどきだ誰が！！」

「君だが…、何か？」

フェレットの姿でいた時のことを突っ込まれ、ユーノが一瞬石化する。

「そりゃ、動物形態でいることも多いけど、僕にはユーノ・スクライアっていう立派な名前が…」

「ユーノ、まあまあ…」

立ち上がって力説し始めたユーノをアルフが宥める。

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃダメだよ…」

「大丈夫、場を和ませる軽いジョークだ」

「和んでない和んでない」

私の注意に平然と答えるクロノに、お兄ちゃんが手を振りながら突っ込む。

「ていうか何でナツキは平然としてるんだよ!?シスコンって言われたのに!!」

が、逆にその冷静さをユーノに指摘されるお兄ちゃん。

「…いやまあ。事実だし」

「……っ!!」

お兄ちゃんがちらりとこちらを、正確には私の握った手を見ていることに気付いて、私は赤面する。

「…反応されないと逆に辛いんだが」

「クロノに負ける程甘くはないさ」

溜め息をついたクロノに対し、ニヤニヤと答えるお兄ちゃん。
楽しそうに笑うお兄ちゃん、お兄ちゃんをジト目で睨むクロノ、クロノを唸りながら睨むユーノ、ユーノを宥めるアルフ、お兄ちゃんの手を握ったまま赤面する私、そんな混沌とした光景に、周りからヒソヒソと声が聞こえてきた気がする。

「…事実上、判決無罪。数年間の保護観察という結果は、確実と言っていいんだが…、一応、受け答えはしっかり頭に入れておくように」

場の空気を払拭しようと、クロノが強引に話を締めた。

「ああ」

「はい…」

「へいへい」

「…はい」

アルフ、私、お兄ちゃん、ユーノもそれを察し、約二名程さっきの空気を引きずりながらも答える。

「よし、それじゃ解散」

こうして、締まらない空気の中私達は解散した。

「お疲れ様リンディ提督。予定は順調？」

明日のスケジュール調整の為、ブリッジに入った僕を出迎えたのはそんな声だった。

「ええ、レティ。そっちは問題ない？」

「…ドッキング受け入れと、アースラ整備の準備は、ね」

母さんの言葉に対し画面の向こう側にいる女性、レティ・ロウラン提督は溜め息混じりに答える。

「こっちの方では、あんまり嬉しくない事態が起こってるわよ」

「嬉しくない事態って？」

本局運用部の彼女の言葉に、母さんの目付きがやや鋭くなる。

「ロストロギアよ…。一級捜索指定が掛かってる超危険物」

「っ！？」

一級捜索指定…！？まさか…！！

「いくつかの世界で痕跡が発見されてるみたいで、捜索担当班はもう大騒ぎよ」

「…そう」

「捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね」

「…そっかー」

母さんとレティ提督が何やら話しているが、僕の耳には入らない。

「…まさか、な」

ただの杞憂であって欲しい。そうでなければ、またあんな…。

「…っ！！」

頭を振りその想像を追いやる。余計なことは考えなくていい。今は目の前のことに集中しないと。

「艦長」

その為にも、まずは明日の確認だ。

「…はぁ」

部屋に入った瞬間、フェイトがパタリとベットに倒れ込む。

「ちょっと疲れた…」

「お疲れさん」

ベットに座り、ごろりと寝返りを打ったフェイトの頭をわしゃわし

ゃと撫でる。限界ギリギリの訓練メニューだったし、明日は裁判の最終日。体も心も休養を欲しているのだろう。

「…えへへ」

と、何がいいのかニコニコ微笑んだフェイトは、身を起こし俺に引っ付いてきた。

「…はぁ」

懐いてくれるのは嬉しいのだが、何だろう、この微妙な心境。まあ、言ったところで聞かない、というより聞いてはくれるが涙目のフェイトに俺が折れるので言わないが。

「…大丈夫、だよね」

顔を俯かせ、不安げな声を出すフェイト。…ったく、ホントにこいつは…。

「あっ…」

ちょっと強引にフェイトを抱き寄せ、頭を撫でてやる。言葉だけじゃ…、不安だもんな。

「大丈夫だ。俺やクロノ、ユーノがあれだけ頑張ったんだから絶対大丈夫。それとも、俺の言うこと信用出来ないか？」

「そんなことっ…」

即座に否定するフェイトに俺は笑い掛け、

「んじゃ大丈夫。安心して任せとけ。俺がなんとかしてやるから」

きっぱりと断言した。

「…ふふっ」

フェイトはぽかんとした後、柔らかな笑顔を浮かべ、

「ありがとう、お兄ちゃん」

ぎゅうっと抱き着いてきた。

「どーいたしまして」

答えながら枕元の写真立てを手に取る。写っているのは三人の少女。俺の人生を変えてくれた少女と、今の彼女の生き方のきっかけとなった少女達。

「さっさと終わらせて、顔見せに行かないとな」

そう言って、傍らの少女を見遣る。奇妙な縁から始まり、この半年を共に歩み続けてきた、人一倍優しい少女。

「うんっ！！」

そんな俺の妹、フェイトは満面の笑顔で頷いた。

「ザコいな…」

深夜2時。大の男二人をぶっ倒したあたしは、ぽつりと呟く。確かに世間一般のレベルで言えば強いのだろうが、あたしにとっちゃそこらのザコと変わりない。

「こんなんじゃ、大した足しにもならないだろうけど」

一歩を踏み出し、左手に持っていた闇の書を掲げる。開かれた本が黒く輝き、二人の体内から輝く球体を引きずり出す。

「おまえらの魔力、闇の書の餌だ」

輝きが増すと同時、二人の悲鳴が路地裏に響き渡った。

「じゃあ、また明日ね」

学校を終えた夕方、風芽丘図書館の前で降ろして貰った私は、中の二人に声を掛ける。

「うん、また明日」

「バイバーイ」

アリサちゃんとなのはちゃんの声を背に、私は図書館へ入った。風芽丘図書館。海鳴市一の蔵書数を誇るこの図書館は、子供から老人まで様々な年代の人に利用されている。

「う〜ん…」

先生の言っていた本を、タイトルを頼りに探し回る。多分この辺りのハズなんだけど…。

「あ…」

だから、そう。あの少女と出会うことは必然だったのかもしれない。

「よい…、しょ…」

車椅子に座った少女が、高い位置の本目掛けて必死に手を伸ばしている。ここに来る時たまに見掛けていた、茶色い髪の少女。

「ん…、もうちょっと…」

「……っ」

ほっとけなくて。助けたくて。気が付いたら私は、少女の手の先にある本を棚から抜いていた。

「これ…、ですか？」

差し出した私に、呆然としながらも。

「…はい、ありがとうございます」

彼女は、柔らかく微笑んだ。

「そっか、同い年なんだ」

「うん、時々ここで見掛けてたんよ。あ、同い年くらいの子や、って」

私はその少女に車椅子を押して貰いながら、少しずつ言葉を交わしていく。度々前から見掛けて、気にはなっとったからなぁ。

「あ、実は私も…」

「…ふふっ」

なんや、二人して同じこと思ってて、ずっとすれ違っとったんか。

「えっと、私、月村すずか」

「すずかちゃん…。八神はやていいます」

お互いに名乗り合う。すずかちゃん、か。ええ名前やな。

「はやてちゃん…」

「ひらがなで「はやて」、変な名前やろ?」

すずかちゃんみたいな綺麗な名前やったらよかったんにな。

「そんなことないよ、綺麗な名前だと思う」

「ふふっ、ありがとう」

ありがとな、すずかちゃん。私、なんやかんや言っても自分の名前、結構気に入ってるみたいやわ。

「はやてちゃーん」

と、向こうから歩いてきた、グレーのコートを着た金髪の女性に声を掛けられる。わざわざ迎えに来てくれたんか。

「ありがとうすずかちゃん、ここでええよ」

「うん、それじゃ」

すずかちゃんが車椅子に提げていたかばんを手に取って、小さく手を振る。

「お話してくれておおきに、ありがとうな」

「うん、またね、はやてちゃん」

互いに笑い合って、私達は別れた。

「はやてちゃん、寒くないですか？」

車椅子を押して外に出ると同時に女性、シャマルが尋ねてくる。ほんま心配性やなぁ。

「うん、平気。シャマルも寒ない？」

「私は全然」

シャマルはニコニコ微笑みながら答える。大丈夫そうやな。

「…あ、シグナム！！」

図書館の敷地から出ると同時、白いコートに紫のマフラー、ピンクのポニーテール姿を見付けて声を上げる。

「はい」

シグナムは私の声に表情を緩め、私達と並んで歩き出した。

「晩御飯、シグナムとシャマルは何食べたい？」

「ああ…、そうですね…。悩みます」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか」

「ん、そやね」

この半年で、すっかり定着したこんな日常。今まで一人やった私の、家族。

「そういえば、ヴィータは今日もどこかお出かけ？」

ふと脳裏に紅い髪の少女の姿を思い描き、シャマルに尋ねる。

「あー、えっと…。そうですね」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていますので。

あまり心配は要らないですよ」

詰まったシャマルに代わり、シグナムがすらすらと答える。ザフィーラがいるなら大丈夫やな。

「そか…」

「でも…」

でもやっぱり寂しくて。少し俯いた私にシャマルが声を掛けてくる。

「少し距離が離れても、私達はずっとあなたの傍にいますよ」

「はい。我らはいつでも、あなたの傍に」

二人の優しい言葉に、胸の奥があったかくなって。

「…ありがとう」

私は幸せ者やなぁ、なんて思う、夕暮れ時でした。

「どうだヴィータ、見付かりそうか?」

夜。あたしとザフィーラは宙に立ち、求める獲物の気配を探る。

「いるような…、いないような…」

ザフィーラの声に答えながら、あたしはアイゼンを肩に担ぐ。

「こないだっから時々出て来る妙に巨大な魔力反応…。あいつが捕まれば、一気に２０ページくらいは行きそうなんだけどな」

急いで集めねぇとな…。時間だって無限にある訳じゃない。

「別れて探そう。闇の書は預ける」

背後に振り返ると、蒼い毛並みを持つ巨大な狼があたしに背を向けるところだった。

「オッケー、ザフィーラ。あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

軽く言い返したあたしに短く答え、ザフィーラは姿を消した。

「…さて」

あたしもさっさとやらないとな。

「アイゼン」

肩に担いだ柄の長いハンマーを振りかぶり、足元に魔法陣を描く。

紅く輝くそれは、三つの円を頂点にした三角の形をしていた。

「封鎖領域…、展開」

《Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ》

アイゼンの声と同時、あたしを中心に薄く褪せた色の球体が広がっていく。街を覆ったそれは、魔法に関わる者以外を除外する異相結界。

「……」

目を閉じ集中。ひたすらに結界内の反応を洗い出す。

……来た。

「魔力反応、大物見っけ！！」

左手に握ったままの茶色い本、闇の書を仕舞いつつ、アイゼンを振るい魔法陣を消す。

「行くよ、グラーフアイゼン」

《Ｊａｗｏｈｌ（了解）》

相棒の頼もしい答えと共に、私は宙を蹴った。

《Ｃａｕｔｉｏｎ，Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ（警告、緊急事態です）》

「へ？」

部屋で宿題をしていた私は、レイジングハートの声に顔を上げる。

――瞬間、世界が変質した。

「結界！？」

僅かなプレッシャーを孕んだ、慣れ親しんだ魔力の気配。だけど、なんで!?

《Ｉｔ　ａｐｐｒｏａｃｈｅｓ　ａｔ　ａ　ｈｉｇｈ　ｓｐｅｅｄ（対象、高速で接近中です）》

「近付いて来てる…？こっちに!?」

今まで指示をくれたナツキ君や、頼れる時空管理局の人達もいない。どうしよう…。

「……」

濁った空を見上げ、そのずっと向こうにいる彼の姿を思い描く。彼ならこんな時、どうするか。

「…うん」

そうだよね。考えるまでもないよね。

「レイジングハート」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（了解しました）》

レイジングハートを握りしめ、私は再び空を見上げた。

《Ｇｅｇｅｎｓｔａｎｄ　ｋｏｍｍｔ　ａｎ（対象、接近中）》

高速で飛翔する私は、アイゼンの言葉に一瞬だけ視線を送る。

「……」

無言のまま、加速した。

《Ｉｔ　ｃｏｍｅｓ（来ます）》

見晴らしのいいビルの上で、周囲を見回していた私はレイジングハートの声に顔を上げた。

「っ！？」

視界の隅にあった僅かな点がどんどんその大きさを増しながら、紅き流星となって突っ込んでくる！！

《Ｈｏｍｉｎｇ　ｂｕｌｌｅｔ（誘導弾です）》

誘導弾ということは回避は難しい。そう判断した私は左手からラウンドシールドを展開する。

「くっ…、う…」

重く、強い一撃。ナツキ君と斬撃と同等か、それ以上の威力。一瞬でも気を抜いたら、やられる！！

「っ！？」

が、背後からの殺気に、私は空を見上げる。

「テートリヒシュラーク！！」

紅いゴスロリ風のドレスを着た少女が、外見に似合わぬ巨大なハンマーを振り下ろしてきた！！

「ぐっ…！！」

辛うじて受けるものの、非常に重い。床が悲鳴を上げ、足がめり込み始める。紅い流星さえ利き手の左手で受けるのが精一杯なのだ。それ以上の攻撃を右手でいつまで受けきれるか…。

「きゃあっ！！」

均衡が崩れ、ビルの屋上から投げ出される。けど紅い少女は、迷うことなく追撃に掛かる！！

「くうっ…、レイジングハート！！お願い！！」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ》

右手を庇いながらの私の声に、幾多の戦いを共に乗り越えてきた相棒は、即座に答えた。

体が桜色の光に包まれると同時、オレンジのシャツに白いパーカー、デニムのミニスカートに白いニーソックスが光に溶ける。赤い宝石を中心に金色のパーツが展開、柄と合体したそれは、共に歩んできた私の愛杖。握ると同時、聖祥附属のものをイメージしたバリアジャケットを身に纏い、フェイトちゃんと交換した黒いリボンも純白

へと変わる。久しぶりだったからちょっと不安だったけど、

「変身…、完了！！」

さあ、本番はここからだよ！！

「…やる気になったみてぇだな」

バリアジャケットを装着したのを確認したあたしは、どこからともなく砲丸サイズの鉄球を取り出す。

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

無機質な声と同時、宙に舞ったそれをアイゼンで思いっ切りぶん殴る。加速した鉄球は先程の流星のように、桜色のバリアにぶち当たる！！

「おらあああああっ！！」

それを確認したあたしは宙を蹴った。桜色の弾丸をかわし、奴のいた地点にアイゼンを振り下ろす！！

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど…！！」

が、奴は爆煙に紛れてそれをかわし距離を取る。

「どこの子！？一体なんでこんなことするの！？」

あたしは答えず、更にゴルフボール大の鉄球を二つ取り出す。

「教えてくれなきゃ…、わからないってば！！」

奴が叫びながら右手を振りかぶると同時、背後に殺気。

「っ！？」

振り返ると、さっきかわした弾丸が反転し、あたし目掛けて飛来するところだった。

「っ！！ぐっ！！」

一発目は辛うじてよけるものの、二発目をかわしきれず防御。

「んのやろおおおお！！」

怒りを速度に変え急上昇。振りかぶったアイゼンを全力で薙ぎ払う！！

《Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ》

が、ブーツから展開された羽が輝きを増すと同時、奴が一瞬であたしの視界から消えた。

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ》

振り向くと同時、奴が音叉状に変形した杖を構える。

「話を…！！」

《Ｄｉｖｉｎｅ》

その先端に集束していく、膨大な量の魔力。

「っ！？」

マズい、回避を…！！

「聞いてってば！！」

《Ｂｕｓｔｅｒ》

奴とデバイスの声がシンクロすると同時、桜色に輝く極太のレーザーが放たれた。

「ぐうっ…！！」

辛うじて直撃は避けたものの、衝撃で大きく吹き飛ばされる。同時に、頭上の感触が消失した。

「あっ…！！」

見下ろすと、ウサギのマスコットが付いたあたしの帽子が、一部焦げた状態でふわふわと落下していくところだった。

「あ…」

奴もそれに気付いたのか、気まずそうに顔を逸らす。

「〜〜〜っ！！」

――キレた。

アイゼンを振りかぶり、足元に魔法陣を展開する。ハンマーの柄が伸び、銃弾のような赤い弾丸がセットされる。

「グラーフアイゼン！！カートリッジロード！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

アイゼンが答えると同時に柄が縮み、弾丸、カートリッジがロードされる。

《Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ》

弾丸に込められた魔力を消費し、アイゼンが変形を開始する。ハンマー部分の片方に尖った先端が付き、反対側に展開されるのはジェットエンジンを基にした推進機構。

「っ！？ええっ…！？」

「ラケーテン！！」

奴が驚いたような表情をするが、構いはしない。ジェットに点火、アイゼンを構えながら魔法陣の上でぐるぐると回り加速、突撃する。

「っ！？」

「うおおおおおお！！」

奴が慌てて回避するが、ロケット（ラケーテン）の名は伊達ではない、即座に追い付き、アイゼンを叩き込む！！

「っ！！」

奴がとっさにシールドを展開するが、甘い。あたしのアイゼンに、壊せないものなんかない。

「っ！？」

一瞬でシールドをぶち破り、奴のデバイスを刈りながら、

「ハンマアアアアアア！！」

――――アイゼンを、振り抜いた。

「きゃあああああ！！」

奴が悲鳴と共に吹き飛ばされ、ビルの中に突っ込むが、

「逃がすかよっ！！」

あたしはそのまま、追撃に移った。

「けほっ…、けほっ…」

ビルの中に吹き飛ばされた私は、粉塵や埃を払いながら息を整える。

（なんなのあの子…！？一瞬でシールドを破るなんて…！！）

いかにとっさだったとは言え、私のシールドはかなり固い方だと自負している。それを一瞬で…、どれだけの力なのあの子！？

「でえええええい！！」

「っ！？」

身を起こすと同時、あの子がハンマーを振りかぶって突っ込んできた！！

「はあああああっ！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

辛うじてバリアを展開するけど、

「あっ…、くっ…、ううっ…」

この小さな体のどこに秘められているのかと思ってしまう程のパワーで、力任せに押し込んでくる。

「ぶち抜けえええええええっ！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）》

二人の声がシンクロした瞬間、ジェットの噴射が増し、

バリィィィィン！！

――バリアが、砕けた。

「っ！？」

慌てて回避しようとするけど、もうハンマーは目の前で。声一つ上げることも赦されず、私は思いっ切り吹き飛ばされた。

「がっ！！」

壁に激突し、そのままズルズルと座り込む。バリアジャケットはズタズタのボロボロで、上着に至っては原形を留めていない。それ程彼女の攻撃が凄まじかったのだろう。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

少女は荒い息をつきながらも、ハンマーを振りかぶる。柄が伸びて、硬質な音を響かせながら、赤い弾丸が排出される。

「う…、あ…」

ダメージで体を起こすことすら出来ない私に、少女が静かに歩み寄る。

「……っ」

なんとかレイジングハートを構えるけど、腕は震え、視界も霞み、レイジングハートもひび割れて弱々しい警告音を鳴らしている。

「……」

少女は無言のまま、ハンマーを大上段に構える。その目はただ、目の前の敵(私)を倒すことしか考えていない。

（…こんなので、終わり…？）

嫌だ。嫌だ。嫌だ。まだ、やりたいことがあるのに。会いたい人がいるのに。

（嫌だ…、嫌だよ…）

今まで出会ってきたたくさんの人達の顔が、まるで走馬灯のように脳裏を駆け巡る。

「終わりだ…」

少女の声と同時、ハンマーが無情に振り下ろされる。目標は、もちろん私。

（フェイトちゃん…、ナツキ君…っ！！）

来るであろう衝撃に、固く目を閉じた瞬間、

――――硬質な金属音が、響き渡った。

「……？」

恐る恐る目を開けた私の前に居たのは、漆黒の髪とコートを風になびかせ、右手に握った白銀の刀でハンマーを受け止める、一人の魔導師。

――――私を守ると誓った、少年。

「ゴメンなのは、遅くなった」

「動かないで。すぐ回復魔法を」

肩に乗せられた温かな感触に振り返ると、そこにいたのは金髪の少女と少年。どちらも大切な友達で、大分懐かしい顔。

「フェイトちゃん…？ユーノ君…？」

緑色の魔法陣を展開するユーノ君と、私を庇うように立つフェイトちゃんを見て、少女が舌打ちする。

「ちっ…、仲間かよ…！！」

刀を弾きながら後退する少女を、俯いたままだった少年が睨みつける。

「仲間…、ね。てめぇのそんな薄っぺらい言葉じゃ、俺達の関係は表せねぇよ」

静かな、しかし、怒気を込めた少年の声に、少女が僅かにたじろぐ。

「言ってやれ、フェイト。お前達の絆を」

「うん」

フェイトちゃんがバルディッシュを握り、少年の斜め後ろに立つ。

「私は…」

《Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ》

フェイトちゃんが口を開きながら、

「…友達だ」

鎌となったバルディッシュを構える。

「そう。そして俺は…」

《Ｔｗｉｎ　Ｆｏｒｍ》

二刀を構え不敵に笑った彼、ナツキ君は、右手のアクセルを少女に向けて。

「二人を、守る者だ」

はっきりと、そう答えた。

第一話「再会」（後書き）

ナツキキター！
はいごめんなさい調子乗りました。

颯爽と現れた訳ですがアニメを見ている方ならこの後の展開もバレバレ（ｒｙ
……なんて、言うと思いますか？（ニヤリ
ああごめんなさい石投げないで（泣

さて次回、波乱の展開です。多分。

第二話「狂気」（前書き）

はい二話です。
前回颯爽となのはを助けに現れたナツキ達ですが、はてさてどうなることやら。
タイトルからしてアレですが、まあ見ればわかｒ（ｒｙ
それではどうぞー

第二話「狂気」

『あはは、そっか。そうだったんだ』

「うん、そうなの。それでね…」

夜。今日出会った車椅子の女の子、はやてちゃんの話をしていたら、いつの間にかこんな時間になってしまった。楽しいと時間はあっという間に過ぎ去ってしまう。

『でも、ナツキやフェイトに会えるの、ちょっと楽しみよね』

写真をめくっているのか、ピラピラと音を立てながらアリサちゃんが柔らかく笑う。

「うん、そうだね。でも…」

手元の写真に映る黒髪の少年と金髪の少女を見て、なのはちゃんの顔を思い浮かべる。

「私達でもこんなに楽しみなんだから、ナツキ君やフェイトちゃんと一緒の思い出がたくさんあるなのはちゃんは、もっともっと楽しみなんだろうね」

楽しそうに二人のことを話してくれたなのはちゃん。きっと楽しみで仕方ないのだろう。

『そうねぇ…。ナツキとフェイトがこっちに来るって聞いて、なのは本当に嬉しそうだったもんね』

「うん」

そのことを話してくれた日、なのはちゃんは一日中ニコニコしていて、あまりにも嬉しそうなオーラに先生でさえ苦笑した程だった。実際に会ったら、嬉しさのあまり倒れるかもしれない。

『ナツキとフェイトのお迎えイベント、今の内から考えとこうか』

「あ、いいね」

ナツキ君とフェイトちゃんの歓迎パーティ。きっと二人共喜んでくれるだろう。

『うん、パーッとやろう』

「誰のお家でやろうか？」

『んー、喫茶翠屋とかどう？』

私達はあれこれ相談しながら、久しぶりに会う少年とまだ見ぬ少女に思いを馳せる。ナツキ君とフェイトちゃん…、今どこで何してるのかな？

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪どころじゃ済まないぞ」

「何だてめぇ…、管理局の魔導師か？」

レイジングハートが弱々しい警告音を響かせる中、ナツキ君は目の前の少女を睨みつけた。少女は警戒を露に、ハンマーを構え直しながら尋ねる。

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ」

フェイトちゃんが一歩踏み出し、凛とした声で名乗りを上げる。

「同じく嘱託魔導師、天城ナツキ」

そしてナツキ君の声は、
――――少女の背後から聞こえた。

「っ！？」

「おっと」

慌てて振り返ろうとする少女の首筋に、白銀の刃が突き付けられる。

「なのはと戦って消耗した状態で、二人の魔導師を相手に勝てるとでも？」

挑発するような言葉を投げ掛け、不敵に笑う黒衣の少年。プレシアさんの時程じゃないけど、ナツキ君、凄く怒ってる。

「抵抗しなければ、君には弁護の機会がある。同意するなら、武装を解除して…」

「誰がするかよっ！！」

フェイトちゃんの言葉を遮り、少女が怒鳴る。ハンマーを振るってアクセルを弾き、外に向かって飛び出した。

「ちっ…！！フェイト、追うぞ！！ユーノ、なのはは任せた！！」

「うんっ！！」

「わかった！！」

最後にちらりとこちらを見たナツキ君は、フッと柔らかな笑みを浮かべ飛び立った。フェイトちゃんもナツキ君に続いて、窓から飛び出す。

「じっとしてて」

呆然としたままの私に、ユーノ君が手を翳した。緑色の光が私を包み、ダメージを癒していく。

「フェイトの裁判が終わって、みんなでなのはに連絡しようとしたんだ。そしたら、通信は繋がらないし、局の方で調べたら、広域結界が出来てるし…。だから、慌てて僕達が来たんだよ」

「そっか…」

さすが管理局、情報の回りが速い。迷惑掛けちゃったな…。相手が誰だかわからないのに、不用意に近付いたりしたから…。

「ごめんね…、ありがとう…」

「あの子は誰？なんでなのはを？」

罪悪感に苛まれる私の気を逸らそうと、ユーノ君が質問を投げ掛けてくる。

「わかんない…。急に襲って来たの…」

少なくとも知ってる子じゃなかったから、恨みを買うようなことはしていないはず、だけど…。

「でも、もう大丈夫。ナツキやフェイトがいるし、アルフもいるから」

「アルフさんも？」

見上げた私を安心させるように、

「うん」

ユーノ君は、ニッコリ微笑んだ。

「バルディッシュ」

《Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ》

外に出た三人の中、私が先陣を切った。バルディッシュを振りかぶり、三日月型の斬撃を飛ばす。

「はあっ！！」

「ちっ…！！」

対し少女は舌打ち一つ。デバイスであろうハンマーを振りかぶる。

「グラーフアイゼン！！」

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

指の間に挟んだ、四つのゴルフボール大の鉄球を宙に放り投げ、

「らぁっ！！」

思いっ切り、打ち据えた。加速した弾丸は高い誘導性を持ち、私をしつこく追い回す。

「障壁！！」

《Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ》

少女はそれを気にも留めず、魔導障壁を展開した。紅いバリアで体を覆い、アークセイバーを防ぐ。

「バリアアアアアア！！」

が、その隙をアルフは見逃さなかった。魔力を纏った右手を振りかぶり、少女目掛けて駆け上がる。

「っ！！」

私もうまく弾丸を誘導し、互いを激突させ相殺する。状況は、こちらに傾きつつあった。

「ブレイクッ！！」

アルフが叩き込んだ拳が障壁を粉砕し、少女が吹き飛ばされる。

「こんの…！！」

少女が慌てて体制を立て直すが、
――――背後には、刃を構えたお兄ちゃんがいた。

「っ！？」

「蜃気一閃！！」

辛うじてハンマーで受け止めるが、それでもギリギリとお兄ちゃんは無理矢理押し込んでいく。

「はあっ！！」

「っ！？」

更に、背後から鎌を振りかぶった私が現れたことで、少女が顔色を変える。

《Ｐｆｅｒｄｅ》

「せぇっ！！」

デバイスの声と同時にアクセルを弾き、一瞬で視界から消える。

「っ！？」

お兄ちゃんに対してバルディッシュを振り下ろす形になった私だけど、不安はなかった。お兄ちゃんなら、絶対になんとかしてくれる。そんな確信染みた信頼があった。

「アルフ！！」

私の使い魔であるアルフに指示を飛ばすと同時。私の僅か下に回り込んだお兄ちゃんは両手を組み、そこに私の足を乗せる。

「ふっ！！」

アルフが少女の足にバインドを掛けると同時、お兄ちゃんは私を放り上げる！！

「はあああああっ！！」

同時に私は手を蹴って加速、バルディッシュを薙ぎ払う！！

「ちぃっ…！！」

少女がハンマーでバルディッシュを受け止め、歯を食いしばる。

「くっそ…！！カートリッジさえあれば…！！」

私達ミッドチルダ式とは違う魔法陣。明らかに近接戦闘を主体に考えたデバイス。そして、

（…カートリッジ？）

私の記憶の片隅に眠る、それらのワードが何かを訴え掛けてくる。
お兄ちゃんに見せて貰った魔法文献に、そんなワードがあった気がする。

（まだ、何かありそう…）

ハンマーを弾いた私は、油断なく少女を見据えた。

「アルフさん、来てくれたんだ…」

どうにか持ち直し外に出た私の視界に映るのは、目を瞠るコンビネーションで少女を追い詰める三人の姿。

「クロノ達も、アースラの整備を一旦保留にして動いてくれてるよ」

「クロノ君も…」

みんな…、私の為に…。

「おらあああああっ！！」

視線を戻すと、少女がフェイトちゃんに殴り掛かるところだった。

「いい加減…、止まれっ！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｆａｌｌ》

「ぐっ！！」

が、ナツキ君の重力操作で動きを止められ、

「捕まえ、たっ！！」

アルフさんのバインドで、四肢を拘束された。

「ぐっ…、うっ…、くそっ…」

少女がもがくけど、橙色のリングはしっかりと手首と足首を縛り上げ、びくともしない。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えて貰うよ」

バルディッシュを向け、静かに宣告するフェイトちゃん。状況は決した。なのに、この言いようのない不安は一体なんなの…？

「…っ！！ナツキ君！！フェイトちゃん！！アルフさん！！」

「っ！？」

フェイトに向けられた、目の前の少女のぶつけるような殺気とは別の鋭い殺気。それに対し、俺の体は考える前に反応した。

「ぐっ！！」

フェイトの前に回り込んでアクセルを構えると同時、高速で飛翔してきた一人の少女が、俺目掛けて剣を振るう！！

「お兄ちゃん！！」

「問題ない！！」

重い一撃に弾き飛ばされながらも、フェイトの不安げな声に答えを返す。

「…シグナム？」

赤紫を基調としたインナーに、白いコートを羽織り、白い剣を構えた少女。拘束された少女は、彼女をそう呼んだ。

「うおおおおおお！！」

「がっ！？」

が、それだけでは終わらなかった。突如として現れた青年が雄叫びと共に、アルフをガードした腕の上から蹴り飛ばす！！

「レヴァンテイン、カートリッジロード」

アルフを蹴り飛ばした彼、黒いインナーに青いコートを着て、犬科の耳と尻尾を生やした白髪の青年を一瞥し、シグナムと呼ばれた少女は剣を掲げる。

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

デバイス、レヴァンテインと呼ばれた剣が答え、柄の機構（ギミック）を動かす。
カバーが上部にスライドし、赤い弾丸を排出、装填。カバーが閉じると同時、轟々と燃え盛る業火が剣を覆う！！

「紫電一閃…、はあっ！！」

シグナムが宙を蹴り、フェイト目掛けてレヴァンテインを振り下ろす！！

「っ！！」

とっさにフェイトがバルディッシュを構え防御するが、

「っ！？」

レヴァンテインの一撃は、バルディッシュの柄をたやすく両断した。
たった、一撃で…！？

「はあっ！！」

そのままシグナムはくるりと剣を回し、再度の斬撃を叩き込む！！

「っ！！」

「させるかっ！！」

《Ｄｅｆｅｎｓｅｒ》

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

一瞬でフェイトの前に回り込み、バルディッシュが張ったバリアの内側にシールドを展開。辛うじて受け止める、が…。

「甘い！！」

「がっ！！」

「きゃあっ！！」

バリアごと吹き飛ばされ、俺達はビルに突っ込んだ。

「フェイトぉっ！！」

アルフがフェイトの元へ飛ぼうとするが、青年に行く手を遮られる。

「こんのぉ…っ！！」

歯を剥き唸るアルフと、手甲に覆われた拳を握りしめた青年が、橙と青白い輝きを纏ってぶつかり合う。

「ナツキ君…、フェイトちゃん…、アルフさん…」

「マズい…、助けなきゃ」

さすがに3VS3、しかもそれぞれがかなりの実力者となると、ナツキ達でもキツいだろう、すぐに援護に行かないと…。

「妙なる響き、光となれ」

指で印を組み、なのはの足元に魔法陣を展開。緑色の輝きが、周囲を仄かに照らす。

「癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ」

詠唱を終えると同時。魔法陣からドーム状に光が溢れ、なのはを守るように包み込んだ。

「回復と、防御の結界魔法。なのはは絶対ここから出ないでね」

「…うん」

不安げなのはに笑い掛け、僕は地を蹴った。

「どうしたヴィータ。油断でもしたか？」

レヴァンテインを提げ、振り向いた私はヴィータを見上げる。ぽかんとしたままだった彼女は、頬を赤く染め顔を逸らす。

「うるせぇよ。こっから逆転するところだったんだ」

「そうか。それは邪魔したな。すまなかった」

右手を向け、魔力を集束させる。彼女を拘束する四つのリングを破壊すると、ヴィータは窮屈そうに肩を回した。

「だがあんまり、無茶はするな。お前が怪我でもしたら、我らが主も心配する」

「わあってるよ、もう」

ヴィータは顔を背けたまま答える。…ホント、強情というか意地っ張りというか。

「それから、落とし物だ」

「あ…」

取り出した帽子を頭に冠せてやると、ヴィータが驚いたように私を見る。

「破損は直しておいたぞ」

「ありがと、シグナム…」

しおらしく礼を述べるヴィータに背を向け、眼下でぶつかり合うザフィーラと橙色の少女を見遣る。…さて。

「状況は四対五だが、実質四対四。しかも互いの一人は補助特化、つまり三対三だ」

最後の一人も、どこかで介入のタイミングを計っているだろう。彼女の存在にはまだ気付かれていない。状況が決するとしたら、彼女が動く時だ。

「一対一なら、我らベルカの騎士に」

「負けはねぇっ！！」

威勢よく叫ぶヴィータに続き、私も飛翔し隣に並ぶ。

「あれ…？」

と、並走するヴィータが、何やら背中をごそごそ弄っている。…何かあったのか？

「闇の書が…、ない！？」

…人の話を聞かない奴だな。四対四だと言っただろうに。

「二人共、大丈夫？」

私が身を起こすと同時、ユーノが私達の前に降り立つ。

「私は大丈夫…」

バルディッシュとお兄ちゃんが身を呈して守ってくれたから、ダメージはほとんどなかった。むしろ、ビルに激突する瞬間、間に入ってくれたお兄ちゃんの方が心配。

「ってー、力任せにも程があるぞ…」

ゆっくりと立ち上がり、お兄ちゃんが肩を回す。バリアジャケットが所々汚れている以外、目立った外傷もない。よかった…。

「フェイト、バルディッシュは？」

お兄ちゃんの声に、私は握ったままのバルディッシュを見遣る。一刀両断されてしまった、私の大事なパートナー。

「…ひどい」

「大丈夫。本体は無事」

《Ｒｅｃｏｖｅｒｙ》

顔を歪めたユーノに微笑むと同時、バルディッシュが修復を開始する。コアである黄色い水晶さえ無事なら、バルディッシュは復元可能だ。

「ユーノ、この結界内から全員同時に外へ転送、いけるか？」

「うん。アルフと協力出来れば、なんとか」

答えたユーノに上等、と笑い掛け、お兄ちゃんは上空を見据える。

「俺があのハンマー女をやる。フェイトはシグナムとか言う剣士の足止め、ユーノはアルフと協力して、あのワンコ野郎の相手と転送準備。やれるな？」

「うん」

「わかった」

『アルフもそれでいいな？』

『ちょっとキツいけど、なんとかするよ』

お兄ちゃんの念話に、アルフが答える。確かにキツいけど、みんなでならきっとやれる。

「それじゃ、頑張りますか」

「「うん」」

互いの拳を軽くぶつけ合い、三人揃って宙に飛び立つ。

「あ…」

ふと見下ろすと、とあるビルの屋上に緑色の輝き。中にいるのは、傷付いてボロボロな、私の初めての友達。

「……」

安心させるように笑い掛け、友達を守る為、私は加速した。

――彼女のデバイスが一瞬、漆黒という違う色を点したことに気付くこともなく。

『もしもし？』

「あ、もしもし、はやてちゃん？シャマルです」

『あ、どした？』

脳内に響いたはやてちゃんの声に、私はあらかじめ考えていた言い訳を話し始める。

「すみません、いつものオリーブオイルが見付からなくって…、ちょっと遠くのスーパーまで行って、探してきますから」

『んー、別にええよ？無理せんでも』

はやてちゃんは疑うことなく、私を気遣ってくれた。…少し、罪悪感。

「出たついでに、みんなを拾って帰りますから」

『そうか』

既に何か作っているのか、包丁がまな板を叩く音が聞こえる。

「お料理お手伝い出来ませんで、すみません」

『あはっ、平気やって』

はやてちゃんは笑うけど、やっぱりその声は少し寂しそうで。

「なるべく急いで帰りますから」

その声を聞いた瞬間、私は反射的にそう答えていた。

『あ、急がんでええから。気ぃつけてな』

「はい。それじゃ」

通話を終え、眼前の空で繰り広げられる戦闘を見守る。銀と紅。金と紫。緑、橙と、白。七人の魔導師がぶつかり合う中、私が行ったところで戦力差は覆らない。

「そう、なるべく急いで、確実に済ませます。クラールヴィント、導いて」

《Ｐｅｎｄｅｌｆｏｒｍ》

私の声に、右手の人差し指と薬指に嵌められた金の指輪が答えた。青と翠のダイヤ型の宝石が外れ、宙に舞う。軌跡を漂う金色の粒子が集束し、宝石とリングが翠色の糸で結ばれる。さながらそれは、振り子（ペンデュラム）。

「さあ、始めるわよ」

《Ｊａ（了解）》

ギィン！！

「「っ！！」」

斧と剣をぶつけ合い、私とシグナムは至近距離で睨み合う。

「くっ！！」

《Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ》

レヴァンテインを弾きながら距離を取り、雷の槍を四つ生み出す。

「レヴァンテイン、私の甲冑を」

《Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ》

主の命令に、剣は静かに答えた。レヴァンテインを掲げたシグナムの体を、紫色の魔力が鎧のように包み込む。

「撃ち抜け、ファイア！！」

直感的に嫌なものを感じ取った私は、バルディッシュを振りかぶり、発射を命じた。大気を切り裂いて、四本の閃光がシグナム目掛けて襲い掛かる！！

「……」

対しシグナムは微動だにせず、目を閉じる。全弾命中したにも関わらず、フォトンランサーは紫の鎧に阻まれ、シグナムに届くことはなかった。

「そんな…！！」

「魔導師にしては悪くないセンスだ」

驚く私に対し、シグナムはゆらりとレヴァンテインを構える。

「だが、ベルカの騎士に一対一を挑むには…、まだ足りん！！」

シグナムが宙を蹴った瞬間、彼女の姿が視界から消失した。

「はあっ！！」

「くっ！！」

上方からの襲撃に辛うじてバリアを張るが一瞬で破られ、バルディッシュのコアに一撃を喰らう。

「はあああっ！！」

弾いた私に食らい付き、レヴァンテインから弾丸を排出する。

「レヴァンテイン、叩き斬れ！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）》

二人の声がシンクロした瞬間、レヴァンテインが業火を纏う。全てを焼き消す焔と化した、魔剣をシグナムが振りかぶる！！

「くっ！！」

辛うじてバルディッシュで受け止めるが、彼女の狙いはそれだった。バルディッシュのコアに、ビシビシと亀裂が走り始める！！

「はあああああっ！！」

大きく振るわれたレヴァンテインに吹き飛ばされ、私はビルに突っ

込んだ。

「フェイトちゃんっ！！」

「ぐっ…」

マズい。この人…、強い…！！

「せやあああああっ！！」

「おらあああああっ！！」

一本に戻ったアクセルと、ハンマーを何度もぶつけ合う。射撃魔法などいらない。もはやそれは戦闘ではなく、純粋な力と力のぶつかり合いだった。

「クソが…！！」

なのはを傷付けられたことで、自分の内に眠る凶暴性が加速する。それを戦う意志に変え、守る為に刃を振るう。

（くっそ…！！）

だが、状況は芳しくない。一人とはいえなのはを撃墜し、俺やフェイトを相手にしても立ち回れるだけの実力者。それと同クラスが、三人。

「アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！》

しかも、あの弾丸。あれには濃密な魔力が込められている。それを消費することで、一瞬とはいえ爆発的な力を発揮出来るのだ。残りが何発あるか知らないが、早々に片付けないと…、

「おらあああああっ！！」

「っ！！」

ハンマーがアクセルにぶち当たり、その刀身を欠けさせる。今までそんなこと一度もなかったのに、一体どれだけの爆発力だよ…！？

『くっそ、ユーノ！！状況は！？』

俺でさえこの有様なら、フェイトやユーノ、アルフはもっと危険だ。手早く片付けてサポートに回らないと…！！

『転送の準備は出来てるけど、空間結界を破れない！！アルフ、そっちは！？』

『やってんだけどこの結界、無茶苦茶固いんだよ！！』

「くっそ…！！」

二人の悲鳴染みた声に、俺は必死に頭を回転させる。どうする…！？グラビティフォールで空間制御？ダメだ、その間ハンマー女がフリーになる。ならレールガンでぶち抜くか？却下、時間が掛かり過ぎる。

「クソがあああああああっ！！」

要するに、こいつを潰さなきゃ何も始まらないって訳だ！！

「おらあああああっ！！」

ハンマーとアクセルがぶつかり合い、激しく火花を散らす。

「っ！？」

欠けた部分から、アクセルに亀裂が走り始めた！！

「ちぃっ！！」

ハンマーを弾き後退、手の中の相棒を見下ろす。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓａｂｅｒ》

対しアクセルは、刃に重力を纏っただけだった。

「…はっ」

コーティングすれば問題ないってか？…上等。

「全員守りきるまで、死ぬんじゃねぇぞ！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ！！（了解！！）》

黒い刃を構え、俺は再び加速した。

「……」

レヴァンテインの柄が伸び、中に仕込まれた空間にカートリッジを放り込む。

《Ｎａｃｈｌａｄｅｎ》

装填完了を告げ、レヴァンテインの柄が元に戻る。私が相対している少女はふらつきながらも、立ち上がり私を見据えていた。

「終わりか？ならばジッとしていろ。抵抗しなければ命までは取らん」

「誰が…っ！！」

私の言葉に答え、鋭い視線を送る少女。その瞳に宿るのは、友を守ろうとする不屈の意志。…いい気迫だ。相手にとって不足はない。

「私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将、シグナム」

宙に飛び上がった彼女に、私は正々堂々と名乗りを上げる。

「そして我が剣、レヴァンテイン。お前の名は？」

「ミッドチルダ式魔導師、時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッサ。この子はバルディッシュ」

尋ねた私に対し彼女、テスタロッサはデバイス、バルディッシュを構えながら答えた。

「テスタロッサ…、それにバルディッシュか…」

それだけを呟き、私はレヴァンテインを構える。言葉は、もういらない。

「「……っ！！」」

同時に宙を蹴り、私達は得物をぶつけ合った。

「ふんっ！！」

「おらあっ！！」

紅い鉄槌と白銀の刀が、火花を散らしぶつかり合う。

「はあっ！！」

「ふっ！！」

紫の魔剣と炎が、金色の斧と雷と混じり合い、爆煙を上げる。

「おおおおおおっ！！」

「はあああああああっ！！」

「せやあっ！！」

白と橙、緑が入り乱れ、素早く動き回る。

――――そんな光景を、私は見てるだけ。

「助けなきゃ…、うっ…」

動こうとしただけで、全身に痛みが走る。回復はしてるけど、まだまだ戦えるような状態じゃない。だけど、

「私が…、みんなを、助けなきゃ…」

それでも、私は前へ進む。みんなが必死で戦ってるのに、私だけ黙って見てることなんて出来ない。

《Ｍａｓｔｅｒ（マスター）》

と、レイジングハートが声を上げる。

「ゴメン、だけど、私がやらなきゃ…」

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ，Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

私の声を遮り、レイジングハートが翼を展開する。

「レイジングハート…？」

《Ｌｅｔ' ｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ，Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ（撃ってください。スターライトブレイカーを）》

……え？

「そんな…、無理だよ、そんな状態じゃ…！！」

《Ｉ　ｃａｎ　ｂｅ　ｓｈｏｔ（撃てます）》

諌めようとする私に、レイジングハートは短く答える。

「あんな負担の掛かる魔法…、レイジングハートが壊れちゃうよ！！」

スターライトブレイカー。周囲に存在する魔力をかき集め、極大の砲撃を叩き込む私の、ユキさんの最高の魔法。そんなものを撃ったら、レイジングハートが…！！

《Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　Ｍａｓｔｅｒ．Ｙｕｋｉ　ｉｓ　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ，ａｎｄ　ｗｈｏ　ｓａｖｅｄ　Ｎａｔｓｕｋｉ　ａｒｅ　ｂｅｌｉｅｖｅｄ（私はあなたを信じています。ユキを受け継ぎ、ナツキを救ったあなたを信じています）》

「っ！！」

レイジングハートの言葉に、私は口をつぐむ。

《Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（だから、私を信じてください）》

「……っ！！」

私は無言で、レイジングハートを抱きしめる。私を信じてくれたこ

の子に、私に応えようとしてくれているこの子に、私も応えたい。

「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ」

レイジングハートを構え、四人に向けて念話を飛ばす。

『ナツキ君、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん、私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を！！』

『なのは！？』

『無茶だよ、そんな状態じゃ！！』

突然な私の言葉にユーノ君とアルフさんが否定の声を上げるけど、

『…頼む』

『お兄ちゃん！？』

ナツキ君の言葉に、フェイトちゃんが絶句した。

『状況は八方塞がり、しかもジリ貧だ。なら全滅を避けるには、それしか方法はない』

『『『……』』』

現在の状況を的確に告げられ、三人共押し黙る。

『なのは、お前に任せた。遠慮はいらねぇ、デカいの一発かましてやれ』

『大丈夫。スターライトブレイカーで撃ち抜くから！！』

不敵なナツキ君の笑顔を思い描き、私は足元と正面に魔法陣を展開する。

「レイジングハート、カウントを！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

レイジングハートが私に応え、魔力を集束させていく。全ての魔力が集束していくその光景は、正に桜色の流星。

《Ｃｏｕｎｔ　ｎｉｎｅ，ｅｉｇｈｔ，ｓｅｖｅｎ，ｓｉｘ，ｆｉｖｅ，ｆｏｕｒ…》

フェイトちゃんがシグナムさんに斬り掛かる。ナツキ君がヴィータちゃんの前に立ち塞がる。アルフさんがザフィーラさんを殴り飛ばし、ユーノ君が手の平の輝きを強める。みんなが時間を稼ぐ中、私達はひたすら魔力をかき集める。

《Ｔｈｒｅｅ，ｔｈｒｅｅ，ｔｈｒｅｅ…》

「レイジングハート、大丈夫？」

カウントを3で止めたレイジングハートに、思わず私は声を掛けるが、

《Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ（大丈夫です）》

レイジングハートは、しっかりとそう答えた。ならば私は、この子を信じてただ撃つだけ。

《Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｒｅｅ，ｔｗｏ，ｏｎｅ…》

ゼロに合わせて、レイジングハートを振りかぶった瞬間、

「っ！？」

――全身に、衝撃が走った。

「え…」

「な…」

ユーノとアルフが、眼前の光景に呆然と声を上げる。かく言う俺も、体がフリーズしたかのように動かない。

「なの…、は…？」

フェイトの虚ろな声が、やけに耳に響いた。

「あ…、ああ…」

私は恐る恐る痛みの元凶、胸元に視線を送る。そこにあったのは、翠色に輝く人の頭くらいの大きさの穴と、

――――そこから生えた、一本の、手。

「しまった…、外しちゃった…」

そんな声と共に手が引き抜かれ、再び手が突き入れられる。

「っ！？」

再度胸を貫いたその手に握られていたのは、桜色に輝く小さな珠。
何の知識のない私でも、それがとても大切な何かだということだけはわかる。

「なのはあああああああ！！」

「させん！！」

フェイトちゃんがこちら目掛けて飛翔するが、シグナムさんの一撃に後退を余儀なくされる。

「リンカーコア、捕獲。蒐集開始」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）》

再び声が響くと同時、桜色の輝きが薄れ始める。高町（私）なのはを構成する大切な何かが、どんどん擦り減っていくような感覚。
――――自分が消えてしまうかのような、恐怖。

「あ…、ああ…」

嫌だ。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！！

『…眠りなさい』

（え…？）

どこかで聞いた声が脳内に響くと同時、意識が闇に包まれ始める。

（待って…、あなたは…）

『助けるのは癪だけど、あんただけの体じゃないからね』

脳裏を過ぎる、一人の少女。銀髪を伸ばし、赤い瞳を輝かせた、フェイトちゃんにそっくりの少女。

『あんたはおとなしく寝てなさい』

その声を最後に、私は意識を失った。

「よし、これなら…」

ページを埋めていく闇の書を見て、私は安堵の息をつく。この少女、莫大な魔力を秘めていて、一気に２０ページくらいは稼げそうだ。

「……ふふっ」

と、クラールヴィントの線が描いた円、そこを通した向こう側の空間から、笑い声が響いた。

「……？」

今この円の向こうは、少女の胸元に繋がっている。少女は自らの核とも言えるリンカーコア、魔法を操るのに必要な重要な器官、魔導師の命とも言えるそれを吸収され、全身を喪失感に襲われているはず。なのに、何故…？

「…え？」

ふと、左手に温かな感触。私の手を握って振りほどこうとしているのかな、などと考えていた私の呑気な思考は、

――体を引き寄せられる感覚によって、遮られた。

「！？」

どうやら別の空間にいる私を無理矢理引き寄せたようだ。冷たい床に投げ出され、私が顔を上げた先にいたのは、

――狂気の、少女。

結ばれていた茶色の髪は解けて銀色に変わり、綺麗な紫の瞳は血のように赤く輝いている。左手には漆黒に染まった杖を携え、私を見下ろしていた。

――まるで、下等な虫けらを見るような視線で。

「……あはっ」

少女は歪んだ笑みを浮かべ、完全に修復された杖を私の顔に向ける。そこに集束していく、馬鹿げてるとしか言いようのない膨大な量の魔力。

――闇の、力。

「死んじゃえ」

少女はニッコリと微笑み、何の躊躇もなく漆黒の砲撃を放った。

「うおおおおおおっ！！」

が、間一髪ザフィーラが割り込み、私を抱えて離脱する。私の頭を吹き飛ばすはずだったそれは射線上のビルを貫通し、深さ５００ｍ、直径１ｋｍにも及ぶクレーターを地面に生み出した。

「っ！？」

僅か数秒でかき集めた魔力にも関わらず、あの威力。仮に非殺傷設定だったとしても、あんなものを喰らったら一撃で死に至る。

「ちょこまかめんどくさいなー」

高速で離脱しているにも関わらず、少女の呟くような声は、なぜか耳に届く。困ったようなセリフだが、その声には余裕が秘められていた。

「あ、これ使おうか」

少女が見上げた先、そこにあったのは、桜色の魔力の塊。それに杖を伸ばした瞬間、桜色が漆黒へと塗り変えられる。

「カウント、ゼロ」

少女はニヤリと笑い、掲げた杖を振り下ろす。

「スターライト…！！」

魔法陣と杖がぶつかった瞬間、集束した一本の線が空を掛ける。その射線上には私達だけでなく少女の味方である少年や少女の姿も。

「まさか…！？」

「ちょ、なのは！？」

場の全員を驚愕と恐怖で染め上げたその少女は、

「ブレイカアアアア！！」

狂い壊れた笑みを浮かべ、砲撃を放った。

「アレックス！！結界抜き、まだ出来ない！？」

『解析完了まで、あと少し！！』

エイミィの声に、アレックスと呼ばれた茶髪のオペレーターが答える。

「術式が違う…。ミッドチルダ式の結界じゃないな」

「そうなんだよ…。どこの魔法なんだろう…、これ…」

画面に表示される全く見覚えのない術式に、二人揃って首を傾げた直後、

『結界、破れました！！映像、来ます！！』

アレックスの声に、画面を注視する。そこに映し出されたのは、
――――天へと昇る、漆黒の閃光。

「な、なにこれ…、どういう状況…？」

エイミィが戸惑いながらもコンソールを操作し、次々に画面を映し出していく。そんな中映し出された、

「これは…、こいつらは…っ！！」

見覚えのある四人の姿に、僕は固まる。そんな、まさか…！！

『結界が抜かれた！！離れるぞ！！』

『心得た』

『シャマルゴメン、助かった』

『うん。一旦散って、いつもの場所でまた集合！！』

互いに念話をかわし、脱出する。目的は果たした。結界が破られた以上、この場に用はない。

『シャマル、闇の書は？』

『大丈夫。ちゃんと死守したから』

私の問いにシャマルがしっかり答えたことを確認し、私はレヴァンテインを振るう。

『よし、離脱するぞ！！』

『『了解！！』』

「ああっ、逃げる！！ロック急いで！！転送の足跡を！！」

『やってます…！！』

必死にエイミィがキーを叩く中、それは映し出された。茶色い装丁がなされた、一冊の本。

「っ！？あれは…っ！！」

「あーあ、逃げられちゃった」

けらけらと笑いながら残念そうなセリフを吐くそいつ、俺達目掛けて放ったスターライトブレイカーの射線を直角に変えるという離れ業をこなした少女に向けて、俺は一歩踏み出す。

「…お前、なのはじゃないな？」

砕け散る寸前のアクセルを構え、俺は静かに問い掛ける。確かにバ

リアジャケットや顔はなのはだが、他のありとあらゆるものが違い過ぎる。

「あらら、ボロボロだねアクセル。やっぱレイジングハート共々、カートリッジシステム組み込むしかないかなぁ」

対し目の前の少女はけらけら笑い、どこから取り出したのか巾着袋を投げてくる。中に入っていたのは、銀色のマガジンと一枚のメモ。

「それの指示通りに改造（カスタム）すれば、アクセルとレイジングハート、バルディッシュもあいつらに対抗出来るようになるよ」

「！？」

バルディッシュはともかく、アクセルとレイジングハートのカスタム？まさか、いや、そんなバカな…。

「種も蒔いたし、今回はここまでかなぁ」

「お前は…、誰だ…？」

意味不明なことを呟く少女に、震える声で尋ねる。

「あれ？ひどいなーもう。一年くらい会わなかったから顔忘れちゃった？」

対し少女はニコニコと微笑み、

「久しぶりだね、…お兄ちゃん」

――その名を、呼んだ。

「っ！？」

「あ、もう限界だ。ゴメンお兄ちゃん、話はまた今度」

動揺する俺をよそに元に戻ったレイジングハートを床に置き、少女がうーんと伸びをする。

「待て！！お前は…、お前は…！！」

「大丈夫。私はこの子の中にいるから。いなくなったりしないよ」

必死に呼び止める俺を安心させるように、少女は柔らかく微笑んだ。

「待て！！ユキ！！」

それでもなお呼び止める俺の声を振り切り、

「またね、お兄ちゃん」

彼女、天城ユキは静かに目を閉じた。

「……」

瞬間、髪の色が元に戻ったなのはが、ふらりと倒れ込む。

「っ！！」

辛うじて抱き抱えるが、俺も脱力して膝をつく。近寄って来たフェ

イトやユーノが何かを言っているが、まるで耳に入らない。

「なんで…、だよ…」

顔を俯かせ、なのはを抱きすくめながら。俺はただ、理不尽な現実を呪い続けた。

『いけないわ、急いで向こうに医療班を飛ばして！！』

『中継転送ポート、開けます！！』

『それから、本局内の医療施設の手配を！！』

『了解です！！』

母さんがなのは達の為医療関連を手配し始める中、エイミィは必死にキーを叩き続ける。

『ダメです、ロックが外れました…！！』

「ああ、もう…！！」

アレックスからの宣告に、エイミィがバンッ！！とデスクを叩く。

「ゴメン、クロノ君…。しくじった…」

だけど、僕の視点はただ一点、一冊の本のみを注視していた。

「第一級捜索指定遺失物…。ロストロギア、闇の書…」

「…クロノ君、知ってるの？」

ぎりぎりと拳を握る僕に、エイミィが恐る恐る聞いてくる。

「ああ…、知ってる…」

画面の中では、なのはを抱き抱えてくずおれるナツキと、二人を心配げに見守るフェイトとアルフ、治癒魔法を展開するユーノの姿。

「少しばかり…、嫌な因縁があるんだ…」

――――最悪の予想が、現実になりつつあった。

第二話「狂気」（後書き）

うんわかってる。みなまで言うな。
なんだよこれ！いきなり原作無視ですよ奥さん！？
ナツキ達がボコられるのはいいけど守護騎士ボコり返すってなんだよ！？ユキ無双にも程があるよ！
とまあそんな訳で一期１３話のフラグを無事？回収しほっと一息。
今後ともオリジナルが加速して原作クラッシャーするのでご了承を。

次回、ようやく三人がお話出来ます。

え、ユキさんがフラグ？
…ナンノコトデショウカ？

第三話「状況」（前書き）

はい三話です。
別名ｇｄｇｄ説明回。
基本的にｇｄｇｄ。そしてちょーっとだけ糖分みたいな何か。
ではどーぞー

第三話「状況」

時空管理局本局、その広大な建物内のとあるエレベーター。私達はそこに乗っていた。

「検査の結果、怪我は大したことないそうです」

私の背後に控えたエイミィが、メモをパラパラとめくりながら報告する。案件は勿論、なのはさんの容態だ。

「ただ、魔導師の魔力の源、リンカーコアが異様な程小さくなってるんです」

「そう。じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね？」

確認するように尋ねた私に、エイミィは頷く。

「はい、間違いないみたいです。休暇は延期ですかね。流れ的に、うちの担当になっちゃいそうですし」

「仕方ないわ。そういうお仕事だもの」

一連の事件の犯人と接触した以上、うちにお鉢が回って来るのは仕方ない。

「ははは…」

「ふふ…」

互いに苦笑しながら、私達はエレベーターを降りた。

「いや、君達の怪我も軽くてよかった」

医務室から出た俺達を、クロノがやれやれと言わんばかりに出迎えた。フェイトはバルディッシュの破片が左腕を掠め擦過傷、俺は軽い打撲が数箇所と言ったところ。あれだけの連中を相手にして、この程度で済んだのは奇跡に近い。

「クロノ、ごめんね心配掛けて」

「君となのは、ナツキのせいでもう慣れた。気にするな」

しおらしく謝るフェイトに、クロノは苦笑しながら返した。…俺もかよ。

「ごめんなさいでしたー」

僅かな抵抗を込めて、棒読みと共に頭を下げる。

「おいおい…、ひねくれてるな…」

「ダメだよ、お兄ちゃん。心配掛けちゃったんだから」

そんな俺の態度にクロノが苦笑し、フェイトがジト目で窘める。

「はいはい、わかってるって」

三人並んで、なのはの病室へ向けて歩き出すと同時、

『さて、本題だ』

クロノが念話を放ってきた。…やっぱりな。

『あの漆黒のスターライトブレイカー、本当になのはが撃ったのか？』

やはり気になっていたのだろう。ユキと再会した衝撃によって、今の今まで俺も精神的に不安定だった為聞きたくても聞けなかったのだ。

『正確にはなのはの体を借りたユキ、だな』

『…どういう意味だ？』

俺の答えに、クロノが訝しげに聞き返す。

『原因はわからないが、なのはの中にユキが眠っている、としか言いようがない』

あの姿形や言動は、間違いなく天城ユキのものだった。兄である俺が、間違えるはずがない。

『ユキが目覚めたトリガーは、おそらくなのはのリンカーコアが奪われそうになったことだ。あいつは事故に遭ってから、リンカーコアに過剰な反応を示すようになったから』

事故により半身不随と、リンカーコアに重傷を負ったユキ。自らの

生きがいである魔法を奪われ、彼女はその悪魔染みた才覚を発揮させていったのだ。

『…だが、何故天城ユキがなのはの体を？』

『…わからない』

これぱっかりはわからない。自慢じゃないがユキのＩＱは、試験官が測定を投げる程のレベルだ。どんな方法かなんて考えたところで、俺達にわかるとは思えない。

『それにこれは俺の勘だが…、近いうちに、ユキはまた目覚める。その時に、全部聞くつもりだ』

彼女は「またね」と言った。つまり彼女はいずれ、俺の前に姿を現すつもりだろう。ならその時にはっきりさせればいい。

『だから…、なのはやフェイトには、言わないでおいてくれ』

『…わかった』

俺の願いを、クロノはあっさり承諾した。彼としても、なのはに不要な不安を抱かせたくないのだろう。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

と、顔に出ていたのか、フェイトが首を傾げて尋ねてくる。

「いや、感動の再会シーンになるなぁ、と」

俺は話題を逸らしながら、ユキのことをひとまず記憶の片隅に押しやった。

「ふむ…」

医療班のおじさんが、バーコードリーダーみたいなものを私の胸に翳して、傍らのキーボードを叩く。

「さすが若いね、もうリンカーコアの回復が始まっている」

ニッコリと微笑み、周辺機器を片付け始めた。

「ただ、しばらくはほとんど魔法が使えないから、気をつけるんだよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると同時、病室の扉が開いた。そこから顔を覗かせたのは、クロノ君、ナツキ君、フェイトちゃんの三人。

「ああ、ハラオウン執務官、少しよろしいでしょうか」

と、おじさんがクロノ君に呼び掛け、手元の端末をちらつかせた。

「はい、なんでしょう」

「こちらへ」

二人は揃って、部屋を出て行った。それと同時、ナツキ君がこちらに歩いて来る。

「なのは、具合はどうだ？」

「あ、うん。全然平気」

半年前と変わらない声に、どこか安心しながら答える。優しいところも変わってなくて、少しホッとした。

「ああ…、よかった…」

と、答えを聞いた瞬間、安堵したようにナツキ君が脱力して椅子に座り込む。

「もう…、目覚めないんじゃないかって…」

「そんな大袈裟な…」

言いかけて、ナツキ君の声と体が震えていることに気が付く。

「守るって、言ったのに…。また…、目の前でいなくなるんじゃないかって…」

…ああ、そうか。やっぱり、怖かったんだよね。

「…大丈夫」

ナツキ君をそっと抱きしめ、私は断言する。

「私は絶対に、いなくなったりなんかしない。だから…、安心して」

「…ありがと」

約束する私に笑い、目元を拭ったナツキ君は立ち上がる。

「んじゃ、俺は外で待ってるよ」

「「え？」」

扉に向かって歩き出したナツキ君に、二人の声がシンクロする。

「半年ぶりの再会なんだから、積もる話もあるだろ？」

なのはの無事を確認出来たし十分だよ、と吹っ切れたように笑うナツキ君。

「お兄ちゃん…」

「話したいこと、たくさんあるんだろ？好きなだけ話してこい」

不安げなフェイトちゃんにナツキ君は大丈夫、と優しく笑い、部屋を後にした。

「フェイトちゃん…」

「なのは…」

二人きりの空間に、沈黙が横たわる。何から話していいのか、わからない。

「あ、あの、ごめんね。せっかくの再会がこんなで。怪我、大丈夫？」

「あ、ううん。こんなの、全然。それより、なのはは？」

とりあえず話題の糸口を作るべく尋ねた私に、左腕を隠すように後ろで手を組みながら、フェイトちゃんが聞き返す。

「私も平気。フェイトちゃんやナツキ君のお陰だよ」

元気元気、と両手を握ってアピール。

「……」

でも、フェイトちゃんの顔は暗いままで。

「フェイトちゃん…、あっ」

「っ、なのは！？」

立ち上がろうとしてふらついた私を、フェイトちゃんが支えてくれた。

「あはは…、ごめんね…。まだちょっとふらふら…」

安心させようと思ったんだけど、まだ起き上がるのは無理みたい。

「なのは…」

「助けてくれてありがとう、フェイトちゃん。それから、また会えて凄く嬉しいよ」

私の言葉に、やっとフェイトちゃんが笑ってくれた。優しい子だから、自分のせいだって抱え込んでたのかもしれない。

「…うん。私も、なのはに会えて嬉しい」

そのままフェイトちゃんは、私をぎゅっと抱きしめる。私達は再会と無事を喜んで、しばらく抱き合った。

「あ、ナツキ」

「なのは!!フェイト!!」

部屋に入った俺達四人を、ユーノとアルフが出迎える。

「ユーノ君!!アルフさん!!」

駆け寄ったなのはに、笑顔を向ける二人。

「なのは、久しぶり」

「無事みたいでよかった」

「みんな…」

感動の再会をよそに、俺とフェイトは部屋の中央、二重のリングの

中に浮かぶ三機を見遣る。

「……ひどいな」

「バルディッシュ…。ごめんね、私の力不足で」

レイジングハートもバルディッシュも大破して亀裂が走り、アクセルに至っては刀身が砕け柄だけの状態。それだけ連中が手強かったということだ。

「破損状況は？」

「…正直、あんまり良くない。今は自動修復を掛けてるけど、基礎構造の修復が済んだら一度再起動して、部品交換とかしないと…」

クロノの質問に、作業に戻ったユーノが答える。手元のコンソールを操作し、デバイスのスキャンを行っているようだ。

「そうか…」

「ねぇそういえばさぁ、あの連中の魔法って、なんか変じゃなかった？」

頭を掻いた俺に、アルフが首を傾げながら尋ねてくる。…そういえばその話はまだだったな。

「あれはおそらく、ベルカ式だ」

「ベルカ式？」

クロノの口から出た聞き覚えのない単語に、アルフが更に首を捻る。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

ユーノが作業を続けながら、ベルカ式魔法についての説明を始めた。

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して、対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は騎士と呼ばれる」

「確かに…。あの人、ベルカの騎士って言ってた」

クロノの付け加えた解説に、思い当たる点があるのかフェイトが頷く。

「最大の特徴は、デバイスに組み込まれたカートリッジシステムって呼ばれる武装」

「儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る。危険で物騒な代物だな」

そんな強力なシステムを、何故管理局は運用しないのか。その理由は、術者とデバイスへ掛かる深刻なダメージにある。

「その扱いづらさと危険さから衰退していき、今ではほとんど見られないらしい。管理局ではミッド式がベースだから、結界が抜けなかったのも仕方ないな」

それだけの強力なシステムを組み込み、尚且つ近接戦闘に特化したデバイス。それらを扱えるのはごく一握りに過ぎない。それ故に、ベルカ式は衰退の道をたどってしまった訳だ。

「いっぱい頑張ってくれてありがとね、レイジングハート。今はゆっくり休んでてね」

『…ユーノ、あっちの方はどうなってる？』

レイジングハートを労うなのはをよそに、俺はユーノに例のモノについて尋ねる。

『解析の結果、アクセル専用のカスタムパーツだってことはわかったけど…』

ユキに渡された巾着袋の中には、レイジングハートとバルディッシュの強化パーツ発注リスト、アクセルのカスタムパーツが入っていたのだ。

『じゃあ答えは一つだな』

『ナツキ…、正気か？』

迷わず即答した俺に、クロノが恐る恐る尋ねてくる。

『頼む。それにあいつも、組み込まなきゃ梃子でも動かないと思うぜ？』

アクセルと俺は、守りきれなかった。守る為の刃の名を持った以上、あいつと俺が求めるモノはただ一つ。

――守る為の、力。

『…わかった。依頼しておく』

『助かるよ』

ユーノに礼を述べ念話を切ると同時、クロノが一歩前に出る。

「フェイト、ナツキ、そろそろ面接の時間だ」

「うん」

「はいはい」

あらかじめ知っていた俺達は二つ返事で承諾。次いでクロノがなのはを見る。

「なのは、君もちょっといいか？」

「え？うん」

よくわからないまま頷くなのはを連れて、俺達四人は歩き出した。

ガコン！！と音を立て、取り出し口に落下してきた缶ジュースを取り出す。さっきまでほとんど休みなしでデバイスを見ていたから、引き継ぎの人と変わって貰えることになったのだ。

「ユーノ君、アルフ」

「エイミィ」

不意に掛けられたエイミィさんの声に、テーブルに座っていたアルフが手を上げる。

「レイジングハートとバルディッシュの部品、さっき発注してきたよ。今日明日中には届けてくれるって」

「あ、ありがとうございます」

先程依頼したばかりなのに、仕事が速い。さすが、この若さでアースラの管制官を務めるだけのことはある。

「でね…、さっき正式に今回の件がうちの担当になったの」

「え？でもアースラは整備中じゃ…」

元はと言えばその為に本局に留まっているのだ。フェイトの裁判が無事終わった以上、僕達はここに用はない。

「そうなんだよね…。あ、そだ。クロノ君知らない？」

首を傾げながら、エイミィさんが先程までいた部屋に入る。どうやら引き継ぎは彼女のようだ。

「なのはとフェイト、それにナツキと一緒に面接だって」

「なんか、管理局の偉い人だそうですけど…」

首を傾げて答えながら、彼女に続いて部屋に戻る。実際何も聞かされていない為、よくわからない。

「へぇー。もしかしてグレアム提督かな？」

グレアム提督？初めて聞く名前だ。

「エイミィさん、グレアム提督って？」

「ギル・グレアム提督は、クロノ君の指導教官だった人なんだよ。歴戦の勇士。一番出世してた時で、艦隊指揮官、後に執務官長だったかなー」

僕の質問に、手元のコンソールを弄りながらエイミィが答える。って、艦隊指揮官に、執務官長！？

「めちゃくちゃ偉い人じゃん！？」

「うん、でもいい人だよ。優しいし」

アルフの驚いた声にエイミィは笑いながら答え、視線をコンソールに戻した。

「失礼します」

「クロノ。久しぶりだな」

クロノに続いて入室した私達を出迎えたのは、恰幅のいい中年の男性だった。ソファに腰掛けたその男性は人のいい笑顔を浮かべ、カップに紅茶を注ぎ始める。

「ご無沙汰しています」

クロノがお辞儀と共に、私達に座るよう促す。遠慮なく座ったお兄ちゃんの左に恐る恐る座ると、対抗するようになのはも右側に座った。…むう。

「初めまして。フェイト・テスタロッサ君の保護観察官に当たる、ギル・グレアムだ。と言ってもまあ、形だけだよ」

挨拶をした男性、グレアムさんが手元の資料をめくりながら私を見る。

「リンディ提督から、先の事件や君の人柄についても聞かされたしね。とても優しい子だと」

「あ…、ありがとうございます…」

俯いて礼を言う私に微笑み、隣のお兄ちゃんに視線を送るグレアムさん。

「天城ナツキ君、だったね。君のこともよく聞いている。優しく仲間思いの、勇敢な少年だと」

「…大したことじゃないですよ」

グレアムさんの言葉を、お兄ちゃんはそっぽを向いて否定する。早くに両親を亡くしたせいか、褒められるのに慣れないみたい。

「ん…？なのは君は日本人だったな。懐かしいなぁ、日本の風景は」

「え？」

資料の一点を注視しながら呟いたグレアムさんに、なのはがぽかんと聞き返す。

「私も、君と同じ世界の出身だよ。イギリス人だ」

「ふえええ！？そうなんですか！？」

あまりの驚きように、私は思わずなのはに視線を送る。なのはのいた世界は管理外世界に分類されていて、魔法に関わる者は極々稀だ。こんなところで同じ世界の人間に会えるとは思っていなかったのだろう。

「あの世界の人間のほとんどは魔力を持たないが、稀にいるんだよ。君や私、彼の先祖のように、高い魔力資質を持つものが」

「へ？彼って…」

二人揃って、間に座るお兄ちゃんの顔を見遣る。え、もしかして…。

「…俺の先祖はなのはの世界、日本の出身だ。どうも何かの事件に巻き込まれて、ミッドに飛ばされた後移住したらしい。そもそも天城なんて苗字、ミッドでつけられるようなもんじゃないしな」

「「えええええええ！？」」

いきなりの衝撃発言に、私達は悲鳴染みた声を上げる。確かに天城なんてなのはやすずかみたいな苗字、ミッドにはないけど…。

「そ、そうだったの？」

「ま、百年以上前の話だ」

恐々と尋ねる私に、お兄ちゃんは苦笑する。その笑顔に、どこか安心している私がいた。なのはと同じ世界と聞いて、お兄ちゃんとの距離が開いてしまったような錯覚を抱いたのだ。

「ははっ。魔法との出会い方まで、私とそっくりだ」

そんな私達に笑い掛けながら、グレアムさんは自分の魔法との出会いを語り始める。

「私の場合は、助けたのは管理局の局員だったんだがね。もう五十年以上前の話だよ」

「はぁー…」

そんなことがあるんだ、と頷くなのは。正直私も同じ心境だった。

「フェイト君、君はなのは君の友達なんだね？」

「はい」

向き直り尋ねたグレアムさんに、私は迷わず頷く。

「約束して欲しいことは一つだけだ。友達や自分を信頼してくれる人のことは、決して裏切ってはいけない。それが出来るなら、私は君の行動について、何も制限しないことを約束するよ」

目に真剣な光を湛え、私を見るグレアムさん。

「出来るかね？」

――――そんなこと、決まってる。

「はい。必ず」

私は決して裏切らない。私を信じてくれたお兄ちゃんを、なのはを、クロノ達を信じてる。

「うむ。いい返事だ」

迷わずはっきりと答えた私に微笑み、話は終わりだよと告げるグレアムさん。

「提督、もうお聞き及びかもしれませんが、先程自分達がロストロギア、闇の書の捜索・捜査担当に決定しました」

と、部屋から退出する直前、クロノが提督、グレアムさんに報告する。

「…そうか、君がか。…言えた義理ではないかもしれんが、無理はするなよ」

グレアム提督の言葉に、クロノが頬を緩める。

「大丈夫です。急事にこそ、冷静さが最大の友。提督の教え通りです」

「うむ、そうだったな」

しっかりと答えたクロノに、グレアム提督も表情を和らげる。

「では」

私達は頭を下げ、部屋を後にした。

「はやてちゃん、お風呂の支度出来ましたよ」

「うん、ありがとう」

ヴィータと一緒にリビングの床に座り、蒼い毛並みを持つ狼に寄り掛かってテレビを見ていた主はやてが、シャマルの声に振り返る。

「ヴィータちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね」

「はーい」

エプロンを外しながらのシャマルの言葉に、ヴィータも素直に頷く。

「明日は朝から病院です。あまり夜更かしされませんよう」

「はーい」

読んでいた新聞から顔を上げ、忠告した私に主はやてが笑い掛ける。

「では、よいしょっと。シグナムはお風呂どうします？」

足が不自由な主はやてを抱き抱えたシャマルが私を誘ってくるが、

「私は今夜はいい。明日の朝にするよ」

「そう」

断った私に頷き、シャマルはあっさり勧誘を諦めた。

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまには、そういう日もあるさ」

訝しげに私を見るヴィータに対し、微かに笑いながらソファに寄り掛かる。

「ほんならお先に」

「はい」

三人が出ていくと同時、蒼い狼、ザフィーラが私の前に歩いてきた。

「今日の戦闘か」

「聡いな…、その通りだ」

一瞬で見抜かれたことに驚愕しながらも、私は服の裾をめくる。そこにあったのは、

――――斬撃の、跡。

「お前の鎧を打ち抜いたか…」

「澄んだ太刀筋だった。良い師に学んだのだろうな」

あのテスタロッサという少女、おそらく幼い頃から英才教育を受けた上で、あの少年に教わったのだろう。

白銀の刃を持つ、テスタロッサとよく似た太刀筋をしたあの黒い少年。どういうつもりかヴィータ自身を狙わず、デバイスであるグラーフアイゼンだけを狙っていた。もしそうでなければ、ヴィータにも私と同じかそれ以上の傷が刻まれていただろうことは、想像に難くない。

「武器の差がなければ、少々苦戦したかもしれん」

「だが、それでもお前は負けないだろう?」

裾を戻しながら呟く私に、ザフィーラが静かに問い掛ける。

「…そうだな」

闇の書を携え窓際に赴き、夜空に輝く月を見上げる。

「我ら、ヴォルケンリッター。騎士の誇りに懸けて」

絶対に、負けはしない。

「え? 親子って、フェイトちゃんとナツキ君、リンディさんが?」

「そう。まだ本決まりじゃないんだけどね。養子縁組の話をしてるんだって」

エレベーターで目的のフロアに向かう中、エイミィさんの話した出来事に私は驚く。

「プレシア事件でフェイトちゃん、天涯孤独になっちゃったし。ナツキ君が義理のお兄ちゃんとして支えてはいるけど、やっぱりそういうのって大切だと思うから、って艦長から」

お母さんを目の前で亡くして、寂しさに押し潰されそうだったフェイトちゃんに、兄妹という繋がりをあげたナツキ君。もしかしたら本当の兄妹になるのかもしれないと思うと、嬉しいやらハラハラするやら。

「ナツキ君は、なのはがくれた「天城」の姓を無くしたくない、って断ったんだけど、フェイトちゃんを艦長の養子にする方には大賛成で、今はフェイトちゃんの気持ちの整理がつくのを待ってる状態だね」

「そうですか…」

ナツキ君が今のままだと聞いて嬉しい反面、まだどこかで大切な絆を作ることに怯えているんじゃないかという不安が鎌首をもたげてくる。…大丈夫、だよね？

「なのはちゃん的にはどう？」

「え？んーと…。なんだか、凄くいいと思います」

でも、これだけは言える。例えどう転ぼうとも、フェイトちゃんにとってはプラスになるから。出来れば、リンディさんの養子になって欲しいと思う。

「そっか」

「でも、そうするとクロノ君、お兄ちゃんですね。フェイトちゃんの」

ニッコリと微笑んだエイミィさんに、ふと思い付いたことを言ってみる。

「しかも艦長、養子は無理でもナツキ君を引き取るつもりらしいから、三兄弟妹だね」

チッチッチッと指を振り、更にそんなセリフを口にするエイミィさん。

「まあ、さすがに小学生に一人暮らしは無理ですもんね…」

私の家で暮らし始めるまで一人だったとはいえ、１０歳の子供には辛いだろう。

「でも、なんだかんだ言ってもあの三人、結構気が合うみたいだし、案外いい感じになると思うよ」

「ですね」

ふざけた冗談を口にするナツキ君、それに溜め息をつくクロノ君、場を収めようとするフェイトちゃん。そんな三人の姿が容易に想像

出来て、私は思わず笑ってしまうのでした。

「あ…」

「あら、フェイトさんにナツキ君」

クロノがいるであろう部屋の扉の前で、リンディ艦長とばったり鉢合わせする。

「リンディ提督…」

「どもでーす」

俺の軽い挨拶に対し、フェイトはややぎこちない。…自分の母親になるかもしれない人なのに、何をそんなに緊張してるんだか。

「リンディ艦長もクロノに？」

「ええ。今後について、ね」

俺の意図を察したのか、リンディ艦長はすぐに話を合わせてきた。気の利く人はホント助かる。

「俺達はクロノとしゃべろうかなーと思って来ただけなんで。ご一緒しても？」

なのはは念の為再検査で、エイミィが付き添っている。ユーノとアルフはデバイスを見ていて、やることのない俺達は適当に歩いてい

たという訳だ。

「ええ、勿論」

「どうも。フェイト、行こうぜ」

快諾したリンディ艦長に礼を述べ、フェイトの手を引っ張る。

「あ…、うん」

フェイトも手を握り返し、俺の後ろで歩き出す。彼女は少し押しの弱いところがある為、少しくらい強引な方がちょうどいい。

「クロノ」

「あ、艦長。ナツキとフェイトも一緒か」

リンディ艦長に続いて入った部屋では、クロノが修理中のアースラを眺めていた。

「よっ」

「うん」

「今回の事件資料、もう見た？」

挨拶を済ませると同時、リンディ艦長が手元の端末をクロノに渡す。中には今回の件に関するデータが入っているらしい。

「はい。さっき全部」

「なのはの世界が中心なんですよね、魔導師襲撃事件って」

リンディ艦長に確認を取りながら、休憩用のテーブルに腰を下ろす。クロノが俺の正面、リンディ艦長がその隣、フェイトは迷わず俺の左に座った。

「そうね。なのはさんの世界から、個人転送で行ける範囲にほぼ限定されてる」

「あの辺りは本局からだとかなり遠いですね。中継ポートを使わないと転送出来ない」

頷いたリンディ艦長の言葉に、クロノが腕を組みながら呟く。なのはの住む第97管理外世界、地球。本局からは大分離れているが、周りに一つも世界がないと言う訳ではない。中継世界を伝っていけばなんとかなるが…。

「アースラが使えないの…、痛いですね…」

「空いている艦船があればいいんですが…」

フェイトの呟きに、クロノが頭を掻きながらアースラを見遣る。この件の担当になったからこそ、アースラを不完全な状態で出航させる訳にはいかないのだ。

「長期稼動出来る船は、二ヶ月先まで空きがない、ってさ」

「そうか…」

苦々しく呟いたクロノが、ふと気付いたように俺とフェイトを見る。

「というかナツキ、フェイト、君達はいいのか？」

「？何が？」

心当たりがない為、フェイトと揃って首を傾げる。

「嘱託とはいえ、あくまで君達は外部協力者だ。今回の件にまで、無理に付き合わなくても…」

クロノの言葉にああ、と納得する。俺とフェイトは裁判と並行して、嘱託魔導師の試験を受けていたのだ。どうにかこうにか合格したおかげか、裁判の進行もかなりスムーズだった。

「いやまあ、俺としてはあんまり危険なことに首突っ込んで欲しくないんだが…」

だからその気になれば外部協力者として干渉することも出来るのだが、俺はちらりと傍らの少女を見下ろす。

「クロノやリンディ提督が大変なのに、呑気に遊んでなんかいられないよ。アルフも付き合ってくれるって言ってるし、手伝わせて」

フェイトはクロノを真っ直ぐ見据え、はっきりと答える。この少女、普段はどこか危なっかしいが一度決めたことは絶対に曲げない芯の強さがある。まるでなのはのようだ。

「とまあ、妹がこう言う以上、兄としてはほっとけない訳で」

「…相変わらずのシスコンっぷりだな」

苦笑しながら後を引き継いだ俺に、クロノがジト目で呟く。…否定はしないけどな。

「まあそれは理由の半分。もう半分はなのはだよ。あの連中一発ぶっ飛ばさなきゃ気が済まないし」

『それに、ユキの件もあるしな』

念話で続けながら、クロノにニヤリと笑い掛ける。あの連中を一回殴りたいというのもあるが、それ以上に二人のことが心配だ。ユキという不確定要素もあるし、何より恩人と妹が戦っているのを、黙って見過ごす程俺は落ちぶれちゃいない。

「うん…、ありがたくはあるんだが…」

「ま、断られても勝手にやるし、あいつなら迷わず首突っ込んでくると思うぞ？」

頭を掻きながらぼやくクロノにトドメを刺すと同時、何やら考え込んでいたリンディ艦長がパン、と手を打つ。

「やっぱり、アレで行きましょうか」

「「…アレ？」」

心当たりがないので、再度二人で首を傾げる。対しリンディ艦長は、

「ふふっ」

と、悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストロギア闇の書の捕獲、及び魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました」

私とフェイトちゃんやナツキ君達、アースラのスタッフ全員をとある一室に集め、リンディさんが口火を切る。

「ただ、肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置くことになります」

確かにアースラが使えない以上、近場に待機する方がいいだろう。至極妥当な判断だ。

「分割は、観測スタッフのアレックスとランディ」

「「はいっ」」

半年前にもお世話になった、茶髪に眼鏡の男性と、紺色の髪の男性が頷く。

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同」

「「「「「「はいっ」」」」」」

私達の背後に控えた数人のスタッフが、凛とした声で答える。

「司令部は、私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、ナツキ君、フェイトさん。以上三組に別れて駐屯します」

そこまで言い終えたリンディさんは表情を緩め、

「ちなみに司令部は、なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのお家のすぐ近所になりま～す♪」

私達を見てそんなことを宣った。

「「「……え？」」」

思わず三人、顔を見合わせる。その言葉の意味が浸透しきった瞬間、

「「やったぁ！！」」

私とフェイトちゃんは同時にナツキ君の手を握り、ぴょんぴょんと跳びはねる。

「はは…、とんだサプライズだな…」

振り回されて苦笑しながらも、ナツキ君はリンディさんに頭を下げた。

「どういたしまして～♪」

対しリンディさんはひらひらと手を振りながら、当然だと言わんばかりに答えた。…さて、これから楽しくなりそう。

第三話「状況」（後書き）

どうもgdgd感が拭えないのは俺だけだろうか（ぇ
客観的な目が欲しいと思った今日この頃。

次回はゆるぐだ、時々糖分。ちょっとだけオリジナル込みの予定。

第四話「家族」（前書き）

はい四話です。
gd gdで話が進まない上糖分です。
コーヒーを用意してからの視聴をオススメしますw
ではどーぞー

第四話「家族」

「うわー、すごーい！！本当に近所だー！！」

「え、本当！？」

「うん！！ほら、あそこが私ん家！！」

とあるマンションの一室。最上階に程近いフロアで眺めもいい為辺りを見回していたのか、玄関から廊下に出た二人がはしゃいでいる。

「まさか5分も掛からない近場なんてな…。で、ユーノとアルフはその姿、と」

壁に寄り掛かって苦笑しながら、足元に視線を落とす。

「新形態、子犬フォーム！！ってね」

小型犬サイズになったアルフが、胸を張って自慢する。そりゃまぁ、犬耳と尻尾生やした少女が街中歩いてたらおかしいが。

「なのはやフェイトの友達の前では、こっちの姿でないと」

言いながら頭を掻くユーノも、懐かしのフェレット姿だ。まぁ今更人型でアリサやすずかに会うのも色々と面倒だけど。

「なんつーか…、苦労してるなぁ…」

苦笑と共に、心の中で合掌を送る。主にユーノに。月村家的な意味

で。

「わぁ…！！アルフ可愛い…！！」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶりー」

と、俺達の会話を聞き付けたのか、二匹をぎゅうっと抱きしめる二人。なのはは元からだけど、フェイトもこういうの好きなんだなぁとほのぼのしながら思う。

「なのは、フェイト、ナツキ、お客さんだ」

と、一人黙々と運び込みの手伝いをしていたクロノが、二人の少女を引き連れて現れる。その後ろにいたのは、

「こんにちわー」

「来たわよー」

すずかとアリサの二人だった。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「よ、半年ぶりだな」

既に顔見知りな俺はサクッと挨拶を済ませ、俺以上に対面を楽しみにしていたフェイトを押し出す。

「わ、お兄ちゃん…」

「はいはい引っ込まない」

振り返るフェイトの言葉をスルーし、アリサとすずかに微笑み掛ける。ビデオメールでは従兄妹みたいなもの、と説明しておいたので呼称に関しては突っ込まれなかった。

「初めまして、ってのもなんか変かな」

「ビデオメールでは、何度も会ってるもんね」

二人が俺の意図を汲んで、にこやかにフェイトに話し掛ける。

「…うん。でも、会えて嬉しいよ、アリサ、すずか」

もじもじしながらも、フェイトも二人に答えを返す。うん、ちょっと感動。

「フェイトさん、お友達？」

と、声を聞き付けたのか、リンディ艦長が現れた。いつもの青スーツではなくシャツにベスト、スカートにストールと普通の格好だ。

「「こんにちわー」」

「アリサさんにすずかさんね。ビデオメール見せて貰ってるわ。よかったらみんなでお茶でもしてらっしゃい」

挨拶する二人ににこやかに微笑み、ふと提案するリンディ艦長。

「あ、それじゃあ家のお店で」

「そうね。じゃせっかくだから、私もなのはさんのご両親にご挨拶を…。ちょっと待っててね」

パタパタとスリッパの音を響かせ、リビングに引っ込むリンディ艦長。

「綺麗な人だねー」

「フェイトとナツキのお母さん？」

すずかとアリサが尋ねてくる。ま、普通は気になるよな。

「残念、半分だけハズレ」

「うん…。今は、まだ」

笑う俺とはにかむフェイトを見て何かを察したのか、二人はそれ以上何も言わなかった。

「そんな訳で、これからしばらくご近所になります。よろしくお願いしま…」

「リ、リンディさん！！」

なのはの両親が経営する喫茶店、翠屋のカウンターで仕事をしていた、なのはの父さんと母さん。二人に挨拶をしているリンディ提督に、外から飛び込んだ私は慌てて声を掛ける。

「あああああの、これ、これって」

私の手に握られているのは、翠屋でお茶してたところにアレックスさんが持って来た、一着の白い制服。

――――なのはと同じ、聖祥の制服。

「転校手続き取っといたから、週明けからなのはさんのクラスメートね♪」

「あはは…、俺だけ仲間ハズレか…」

リンディ提督の言葉に男子用制服を箱に仕舞った一個年上、四年生のお兄ちゃんが苦笑する。確かにそれは私もちょっぴり残念だけど、問題はそこじゃなくて。

「あら、素敵じゃない」

「聖祥小学校ですか。あそこは良い学校ですよ」

でもなのはの父さんと母さん的には大歓迎だったみたいで、ニコニコと微笑み掛けてくる。

「俺も少し通っ…、ごほん。ま、なのは達もいるし、大丈夫だろ」

「うんうん！！きっと楽しいわよ！！」

「お昼は五人で一緒だね」

「わぁ、すっごい楽しみ！！」

「あの…、えと…」

オロオロする私をよそに、アリサやすずかを筆頭にみんなは盛り上がっていく。そんな中のお兄ちゃんの気遣いが、やけにありがたかった。

「よかったわね、フェイトさん」

温かい言葉の集中放火に、思わず箱で顔を半分隠して。

「ありがとう…、ございます…」

真っ赤になりながら、リンディ提督にお礼を言った。

「ねぇナツキ君、久しぶりに「アレ」やって？」

アリサやすずかと別れた夕暮れ時。マンションに戻って来たなのはが、そんな言葉を発した。キラキラと輝く綺麗な瞳とピコピコと跳ねる二カ所でくくられた茶色の髪が、何故か嫌な予感を漂わせている。

「…アレってなに？」

アルフを撫で回していたフェイトが、可愛いらしく首を傾げ尋ね返す。何を言っているのかわからず、俺となのはの間で視線を彷徨わせている。

「…右に同じく」

同じく何を言っているのかわからず、心当たりのない俺はフェイト同様質問する。代名詞で全てが通じるのは裏の人か超能力者だけだ。…まあある意味、魔導師たるこの場の三人には両方当て嵌まるのだが。

「ほら、半年前。私の護衛で学校に来た時の」

「……あー」

脳内の記憶になのは、護衛、学校で検索を掛けたところ、一件だけヒットした。…でも、なあ…。

「…何でアレ？」

俺は恐る恐る聞き返す。アレはぶっちゃけ面倒だし、デバイスがない以上かなり集中しなければならない。しかも、嫌な予感は継続中。警戒するなと言う方が無理だ。

「えーと、久々に見たいなぁ、なんて」

対しなのははてへっ、と舌を出す。顔が良いからそんな仕草も様になっている辺り、計算してんじゃないのかと思ってしまう。

「やだよめんどくさい…。ていうか脈絡なさすぎだろ」

何だってこんな時にそんなことを言うのかわからず、ジュースを啜りながら尋ねる。

「いやー、久々にフェレットのユーノ君見たら、ね」

そうか貴様が元凶か。

『よしユーノ、後で月村家の猫天国に放り込んでやる』

『ええっ！？濡れ衣だよ！！』

「…私も見たいなぁ」

アホな念話を交わす俺達をよそに、好奇心がそそられたのかフェイトもジーッとこちらを見ている。頼むからフェイト、瞳を潤ませながらそういうことを言わないでくれ。素なんだろうけど一歩間違えればただの悪女だ。

「…ちょっとだけだぞ」

敗北を悟った俺は、溜め息と共に魔法陣を展開した。…嫌な予感が杞憂でありますように。

「…あは、久しぶりー」

銀色の光が収まり、中から出て来た一匹の黒猫に声を掛ける。

「別にお前を喜ばせる為に習得した訳じゃないんだけどなぁ…」

そう言いながら黒猫、ナツキ君は溜め息をついた。ナツキ君は変身魔法を習得していて、黒猫に化けることが出来る。ユーノ君同様そ

の状態でも魔法は使える為、かばんに入って私の護衛をしていたことがあったのだ。

「いいじゃない、可愛いもん」

私はニコニコしながら黒猫の頭を撫でる。言ってることはいつもと同じなんだけど、可愛い黒猫の姿で言っているからギャップがあってそそられる。いつもと立場が逆転してて、なんだか面白い。

「だから男に可愛いはないっつーの…」

ナツキ君は呆れて、されるがままになっている。うんうん、素直でよろしい。

「しっかし変化も上手いねー。そこら辺の猫に混じってもバレないよきっと」

「…まぁ、それなりに頑張ったからな。主に体が不自由で動物と触れ合うことすら出来ないユキの為だが」

アルフさんの言葉に、ナツキ君が溜め息混じりに答える。確かに本物だと衛生上の問題もあるし、そっちの方が速かったんだろうけど…。

（ただのシスコンなんじゃ…）

「……か」

冷や汗混じりに考えると同時、今まで沈黙を保っていたフェイトちゃんが急に呟いた。

「…？どした？」

「可愛い…！！」

そんな発言と共に、フェイトちゃんがナツキ君を抱き寄せる…、って！？

「ちょ、フェイトちゃん！？」

「うわぁ…、うわぁ…！！」

私の声が聞こえていないように、いや実際聞こえていないのだろう。瞳をキラキラと輝かせながらフェイトちゃんがナツキ君を眺め回す。

「お兄ちゃん可愛い…！！」

そしてそのまま、思いっ切り抱きしめた。手加減無しの全力で。

「ちょ、フェイト、苦しい、死ぬ、死ぬ」

ナツキ君がギブアップと言わんばかりにフェイトちゃんの腕をぽふぽふ叩くが、

「うわぁ…！！」

そんな可愛らしい抵抗が更に拍車を掛けたのか、抱きしめる力が更に強まる。

「いやマジヤバいなのは助け、ぐふぁっ」

そんな声を最後に、ナツキ君は意識を失った。フェイトちゃんは気付かず、そのままほお擦りをしている。

「……ご愁傷様です」

苦笑と共に、私とユーノ君、アルフさんは手を合わせました。合掌。

「お兄ちゃーん、出て来てよー」

私は棚の隙間に入って背を向ける黒猫、もといお兄ちゃんに声を掛ける。

「……」

お兄ちゃんは丸まったまま反応を返さなかった。一番奥にいるので、手を伸ばしても届かない。

「……くすん」

冷たいお兄ちゃんの態度に、思わず落ち込んでしまう。あの後なのはに、猫の体にとっては女の子の力でも十分危ないと聞いて、私が恐る恐る見下ろしたお兄ちゃんは気絶していた。しばらくして目覚めたものの、私から逃げるようにしてここに入ってしまった。

「お兄ちゃ～ん」

ちょっと涙声になるのを自覚しながら、私は声を掛け続ける。確か

にちょっとだけ暴走しちゃったけど、可愛いんだから仕方ない。

「…今なら一緒に寝てあげるから～」

無言。いつもなら「一緒に寝たがってるのお前だろ」とか何かしらツッコミが入るのに、それすらない。

「うぅ…」

あ、なんか泣けてきた…。頑張れ、私。

「……はぁ」

と、溜め息と共に起き上がったお兄ちゃんが、とことこと私の方へ歩いてきた。そのままぺたんと床に座り込んでいた私の膝に乗り、体を丸める。

「…床だと冷たいからな」

そっぽを向いてそんなことを言うお兄ちゃんが可愛くて、嬉しくて。

「お兄ちゃんっ！！」

「いやちょ学習しろよおまヤバいマジヤバい」

再び抱きしめてしまうのでした。

「…はぁ」

なんとか仲直りしたあの後、私達は街に出て来ていました。リンディさんに頼まれて晩御飯のお買い物の最中で、フェイトちゃんを街の雰囲気にも慣れさせようという、一石二鳥の企画なのです。

「なら何故俺がこのままなのか説明してくれ…」

フェイトちゃんの頭に乗った黒猫、もといナツキ君が溜め息をつく。微妙な重量感と温もりが気に入ったのか、フェイトちゃんはさっきからニコニコしてばっかりです。いいなぁ…。帰りは私の頭に乗って貰おっと。

「せめて荷物持ちくらいさせろよ…」

ナツキ君が何か言ってますが、無視です無視。今のナツキ君は猫さんなのです。

「きゃっ」

と、浮かれていたフェイトちゃんが向こうから来る人に気付かず、正面からぶつかってしまいました。

「あ、す、すみませ…」

「あれ、お嬢ちゃん可愛いねー。どこの子？」

が、そのぶつかった人は運悪く、軽い感じの学生さんでした。

「えと、あの、その」

「えー、緊張しちゃってるの、カワイーなー」

矢継ぎ早な言葉にオロオロするフェイトちゃん。ここは私が守らないと…。

「あの、私達急いで…」

「あれれ、こっちの子も可愛いねー。何？お友達？」

ですが、その人は逆に私まで自分のペースに巻き込み始めました。

「え、や、えと」

「あ、なんだったらこの後お茶でも…」

思わずまごつく私達に、学生さんが手を伸ばす。

（マズい…）

ナツキ君が猫のままだったのは失敗だった。女の子二人じゃ、声を掛けられても仕方がない。

「…ひうっ」

フェイトちゃんが恐怖に目を閉じた瞬間、

――差し出された手が、赤く染まった。

「「「……え？」」」

何が起こったのかわからず、思わず視線を落とす。そこにいたのは、

――漆黒の、守護獣。

「ニャア」

爪についた血を舐め取り、瞳をぎらつかせ、夕暮れを背負った黒猫は、一度だけ鳴いた。

――二人に、手を出すな。と言わんばかりに。

「っ!?あー、ゴメン、俺ちょっと用事思い出したわ…。じゃあねっ!!」

その異様な猫らしかぬプレッシャーに気圧されたのか、手首から流れ出る血を押さえながら学生さんが作り笑顔と共に逃走する。

「シュート」

対しナツキ君は宙に銀色の弾丸を精製、発射。学生さんの頭にヒットすると同時、なんだか挙動不審になる。

「記憶を適当に弄っといたから、向こうは何も覚えてない。傷に関しても血が出やすい場所を切っただけだから、しっかり止血すればすぐ収まる」

やれやれ、と軽く欠伸をしながら、思いっ切り伸びをするナツキ君、もとい猫。

「「……す」」

「す?スルメイカ?」

私達の呟きに、首を傾げるナツキ君。

「「すっごーい！！」」

次の瞬間、私達は同時にナツキ君を抱きしめていました。

「うおおおおう！？」

「え、嘘、ナツキ君凄い！！」

「お兄ちゃんカッコよかった…！！」

口々にナツキ君を称賛しながら、ナツキ君を思いっ切り抱きしめる私達。

「ちょ待てギブギブギブぐふっ」

もみくちゃにされて気絶したナツキ君に、私達が気付くのはそれから五分後のことでした。

「ほい、出来上がりっと」

お兄ちゃんがそんな掛け声と共に、皿に盛った野菜炒めをテーブルに置く。

「「「「「「「「……」」」」」」」」

でも私達はぽかんとしたままお兄ちゃんを、正確にはフライパンと

さいばしを器用に操るお兄ちゃんを見遣る。

「え…、これ全部、ナツキ君が？」

リンディ提督が恐る恐ると言った感じで、お兄ちゃんに尋ねる。

「いや全部見てたでしょみんなで」

お兄ちゃんが呆れたように溜め息をつき、椅子に座ってテーブルを見遣る。

――そこにあったのは、満漢全席もかくやと言う程の大量の料理。野菜炒めやハンバーグ、マカロニサラダに肉じゃが、色とりどりの家庭的な料理の数々。

「え、何これ。ナツキマジック？」

「どこの言葉だ」

混乱のあまり訳のわからない言葉を呟くエイミィに、クロノがチョップで突っ込む。

「でも、なんでこんな…」

実家の喫茶店を手伝っていてそれなりに料理出来るなのはが、冷や汗混じりにお兄ちゃんに尋ねた。

「言っただろ？六歳で両親亡くしたって。だから必然的に俺がユキを養う必要があったんだよ」

事故で両親が亡くなって、天才故に孤立していたユキを支えて生き

なければいけなかったお兄ちゃん。生活スキルが高いなぁとは思ってたけど、そういうことだったんだ…。

「せめて美味いもん食って貰いたくてな…。気が付いたら料理スキルが凄まじいことになってた」

あっはっはと笑うお兄ちゃん。なんか前から思ってたけど、この人他人が絡むと頑張るなぁ…。

「で、久しぶりなので調子乗った結果ボリュームが、な…」

ちらっとテーブルを見て、冷や汗をかくお兄ちゃん。さすがにやり過ぎたと思ったみたい。

「ま、そん時はあたしが残さず食うから安心しなよ」

人型に戻ったアルフが胸を張って宣言。同じく人型に戻ったユーノも苦笑しながら椅子に座る。

「んじゃ、いただきます」

「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」

そんな訳で、ボリュームにげんなりしながら食べ始めた訳だけど。

「…おいしい」

素直にそう思えた。というかそうとしか言いようがない。食欲をそそる飽きさせない味、とでも言えばいいのだろうか。アルフは既に会話を放棄し、肉じゃがをがつがつと掻き込んでいる。

「見た目に違わず味もパーフェクトだ…」

エイミィが呆然としながらもひょいひょいと口にハンバーグを放り込んでいく。

「もう我が家の家事はナツキ君にお任せしようかしら」

「過労死しますからやめて下さい」

微笑みながらのリンディ提督の言葉に、溜め息混じりに答えるお兄ちゃん。でもホントに美味しい。

「ていうか母さん、ナツキは一応小学生だからね？」

野菜炒めを取り分けつつ、リンディ提督に注意するクロノ。まぁ、こんなハイパー小学生そうそういないと思うけど…。

「この分だと残さず済みそうだね…」

「あはは…」

ユーノの言葉になのはが苦笑い。とかなんとか言ってるうちにアルフが全体の二割程を消化していた。美味しいのはわかるけどアルフ早過ぎ。

「んじゃ、アルフが完食する前に俺達も食おうか」

ひょいひょいと小皿におかずを取り、私となのはに渡すお兄ちゃん。

「うん」

「おいしー」

こっちの世界に来て初めてのご飯は、とても美味しかった。

「…で。何故こうなった」

一悶着どころか十悶着くらい経た夜。なのはを家まで送り風呂を済ませ、ソファに座った俺の膝にはフェイトが座っていた。

「たまには今日みたいなのも良いけど、やっぱり私はこっちの方が好き」

すりすりと胸元に顔を寄せ、はふー、という効果音がピッタリ似合いそうな満足げな表情を浮かべる。まあ、そこはまだいい。いや、良くないけど。

「…何故にお前はドライヤーを握って俺に微笑んでいる？」

風呂上がりに薄いグリーンのパジャマを着た彼女は、湿り気を帯びた髪とドライヤーを俺の方に向け、ニコニコ微笑んでいる。…え、何この状況。

「たまにはお兄ちゃんにやって欲しいなぁ、って」

「…その「たまには」がほぼ毎日になりつつある気がするんだが？」

以前、テレビでそんな光景を羨ましそうに眺めていたフェイトに一度やってあげたところ、何が気に入ったのか度々せがんでくるようになっていた、という訳である。

「……ダメ？」

…だからその上目遣いは反則だっつーの。

「…ほら、貸せ」

「…うんっ」

フェイトの肩にタオルを敷き、ドライヤーとブラシを受け取る。緩やかな温風を当てながら、綺麗な金髪に手を通す。最初から櫛を通すと髪が傷む為だ。

「気持ちいい…」

とろんと目を閉じ、体を預けてくるフェイト。…って、

「こらこら。寄り掛かられたら髪乾かせないだろ」

「は～い」

言われて素直に身を起こし、気持ちよさそうに目を細めるフェイト。こんな触れ合いでも、彼女にとってはかなり大事なことなのだろう。何よりも家族との繋がりを欲する、彼女には。

「…お兄ちゃん？」

急に抱きすくめられ驚いたのか、フェイトが俺を見上げてくる。

「いや、あったかいの好きかなー、って」

「…うん。…大好き」

俺に応えるようにギュッと抱きしめ返すフェイト。その小さな体は儚げに見えるけど、芯には強いものを持っていることを俺は知っている。

「…ま、悪いことじゃないよな」

独り言のようにぽつりと呟いた言葉に、

「…そうか？」

意外な声が返された。

「「！？」」

唐突な声に硬直し、二人揃って恐る恐るそちらに視線を向ける。そこにいたのは、

「妹が可愛いのはわかるが…、甘やかし過ぎじゃないのか？」

同じく風呂上がりに黒い部屋着を着たクロノだった。生真面目な彼は頭を掻きつつ進言してくるが、

「…むぅ」

少なくとも今回は、膝の上の妹様には不評だったようだ。ジトーッと恨みがましくクロノを見つめている。

「…まあ、程々にな」

最後にそれだけ言い残し、頭を掻きつつ部屋から立ち去るクロノ。

…ご愁傷様。

「甘え過ぎ、かな…」

クロノが部屋から出ると同時、気にしてはいたのか、フェイトが不安げに尋ねてくる。…ったく。

「まあ確かに、否定は出来ないな」

肯定する俺の言葉に、フェイトがビクリと身を竦めた。

「じ、じゃあ…」

「でも、お前は今まで甘えることも出来なかったんだから、俺くらいは全力で甘やかしてやる」

そのまま立ち上がろうとするフェイトを抱き寄せ、きっぱりと断言する。ダダ甘大いに結構。俺が今までの分まで甘やかして幸せにしてやる。

「……ふふっ」

すっぽりと抱き収められたフェイトはぽかんとした後、笑いながら再度俺に寄り掛かる。

「やっぱりお兄ちゃんは優しいね…」

「普通だ普通」

そんな言葉を交わし合い、互いに微笑む。フェイトの瞳には、もう不安げな光はなかった。

「さて、そんじゃ仕上げに掛かるか」

「うん」

ブラシを握り直し、俺は作業を再開した。

「……」

自分の部屋の前に立ち、ちらりと背後を振り返る。そこにいるのは、枕を抱えたフェイトさん。

「……こっちでも？」

「……」

諦めたように尋ねた俺に、枕で半分顔を隠したフェイトはコクリと頷く。

「……好きにしてくれ」

今日は色々と疲れたので、言い返す気力も湧かない。半ば投げやりに答えながら、俺はドアを開けた。

「……」

とことことついて来たフェイトは、ベットに倒れ込んだ俺の隣に潜り込み、もぞもぞと動き始める。アースラでも日常茶飯事だったので慣れたものだ。

「…えへへ」

そのまま俺の腕を枕にし、ピッタリと引っ付くフェイト。…枕持ってきた意味ないじゃん。

「…おやすみ」

だがそれに言い返す気力もなく、俺は睡魔に身を委ねる。

「おやすみ…」

フェイトの声と寝息を聞きながら、

（…寝付きはえーよ）

そんな思考と共に、俺の意識は黒く塗り潰された。

「ロストロギア、闇の書の最大の特徴。それは、そのエネルギー源にある」

画面に映し出された闇の書を睨みつけ、クロノ君が語り始める。

「闇の書は魔導師の魔力と魔法資質を奪う為に、リンカーコアを食うんだ」

魔導師襲撃事件の被害者も、リンカーコアにダメージを受けていた。
闇の書に吸収されたと見て間違いないだろう。

「なのはちゃんのリンカーコアも、その被害に…」

「ああ…。間違いない」

私の言葉にクロノ君がぼやき、苦々しげに闇の書を睨む。

「闇の書はリンカーコアを食うと、蒐集した魔力や資質に応じてページが増えていく。そして、最終ページまで全てを埋めることで、闇の書は完成する」

「完成すると、どうなるの…？」

恐る恐る尋ねた私に対しクロノ君は、

「少なくとも、ロクなことにはならない…」

顔を俯かせ、それだけを答えた。

「…来たか」

屋上の扉を開けると同時、あたしを迎えたのはシグナムのそんな言葉だった。

「ああ」

三人の隣に並びながら、返事を返す。寝ているはやてを起こさずに抜け出すの、大変だったんだからな。

「管理局の動きも本格化してくるだろうから、今までのようにはいかないわね」

「少し遠出をすることになるな…。なるべく離れた世界での蒐集を」

「今、何ページまで来てるっけ」

作戦会議中の二人に、肝心の闇の書の状態について聞いてみる。

「３４０ページ。こないだの白い服の子で、かなり稼いだわ」

「おし、半分は越えたんだな。ズバッと集めてさっさと完成させようう」

シャマルの言葉に頷き、あたしは両手を握りしめる。

「早く完成させて…、ずっと静かに暮らすんだ…。はやてと一緒に…」

ただ、平穏に暮らすこと。それだけが、あたし達全員の願い。

「…行くか。もうあまり時間もない」

「ああ」

しんみりした空気を断ち切るようにザフィーラが言い、シグナムが同意する。

「行くぞ、レヴァンテイン！！」

《Ｓｉｅｇ（了解）》

シグナムの鋭い声に応え、レヴァンテインが炎を上げた。ネックレスが剣に姿を変え、シグナムに騎士甲冑を纏わせる。

「導いてね、クラールヴィント！！」

《Ａｎｆａｎｇ（お任せを）》

シャマルの静かな声にクラールヴィントが応え、宝石の輝きと共に翠のドレスのような甲冑を纏わせる。

「やるよ、グラーフアイゼン！！」

《Ｂｅｗｅｇｕｎｇ（起動）》

あたしもネックレスに呼び掛け騎士甲冑を纏い、ハンマーへと姿を変えたグラーフアイゼンを握る。

「それじゃ、夜明け時までにまたここで」

シャマルが振り返り、全員にいつもの指示を出す。夜明けまでフル稼動。ちっとキツいが仕方ない。

「ヴィータ、あまり熱くなるなよ」

「わあってるよ」

注意を促すシグナムに投げやりに返し、あたし達はビルから飛び立った。

「はいはーい、エイミィですけど」

モニタールームに入ると同時に通信。スクリーンを見ると、眼鏡にショートカットの少女が映っていた。

「あ、エイミィ先輩。本局メンテナンススタッフのマリーです」

「ああ、何？どしたの？」

後輩からの通信に気楽に聞き返しながら椅子に座るが、後輩の顔は困惑に彩られていた。

「アクセルはカスタムパーツも組み込み終えて完全復活したんですけど…、残りの二機、なんだか変なんです」

「え？」

残りの二機って…、レイジングハートとバルディッシュが？

「部品交換と修理は終わったんですけど、エラーコードが消えなくて。必要な部品が足りないって」

「ちょっとデータの一覧を…、あ、来た来た」

送られてきたデータに目を通すにつれ、ディスプレイに反射した私の顔が驚愕の色に染まっていく。

「え…、足りない部品って、これ？」

「ええ。…これ、何かの間違いですよね」

困ったように確認するマリーをよそに、私はもう一度それに目を通す。

『エラーコードＥ２０３。必要な部品が不足しています。エラー解決の為の部品、“ＣＶＫ－７９２”を含むシステムを組み込んで下さい』

「天城ユキの発注リストを見た時から、嫌な予感はしてたんですけど…。二機共、このメッセージのままコマンドを全然受け付けないんです。それで困っちゃって…」

確かに発注リストの中に、そのパーツはあった。だが、何かの間違いだろうと思って無視したのだ。

（レイジングハート…、バルディッシュ…、本気なの？）

ＣＶＫ－７９２。天城ユキの渡したカスタムパーツ。ナツキ君のア

クセルにも組み込まれたその機構は、

（ベルカ式、カートリッジシステム…！！）

『お願いします』

二機の言葉は、データの最後に書かれた六文字だけだった。

第四話「家族」（後書き）

ええ、わかってます。何も言わんでください。
なあにこれえwフェイトキャラブレイクってレベルじゃねぇぞw
基本的にうちのフェイトは終始こんなノリなので、クールなフェイトさん好きの方はご了承ください。

次回、新デバイスお披露目回です。

第五話「新たな力」（前書き）

はい五話です。
ｇｄｇｄと糖分回その２です。
…というかそれ以外に言いようが（ｒｙ
ではどーぞー

第五話「新たな力」

「…ふぁ」

目覚ましを止めて、ゆっくりと起き上がる。朝６時半。そろそろ朝ご飯の支度せなあかんな。

「ん…」

隣でぐっすり寝てるのはヴィータ。歳が近いこともあって、妹のように可愛がっている。

「…おやすみな」

ヴィータに毛布を掛け、私は部屋をそっと後にした。

「……」

リビングではシグナムがソファに座ったまま寝ていて、ザフィーラも床で丸まっていた。ベットで寝ればええのに…。

「…しゃーないなぁ」

私は笑いながら、あるものを取りに部屋を後にした。

朝６時半、ようやく日の昇った時間帯。私達は、桜台に来ていました。

「ふっ！！」

「よっと」

鉄パイプを構えたフェイトちゃんと、木刀を握ったナツキ君が訓練中。私とユーノ君、アルフさんは三人、ベンチに座って見学です。

「はぁっ！！」

「ほいっと」

打ち掛かるフェイトちゃんを、軽々とあしらうナツキ君。この構図がさっきから5分程続いています。

「せやぁっ！！」

「よいしょっ」

大きく振りかぶったフェイトちゃんの一撃をかわし、

「ていっ」

「あっ」

手元をぺちっと叩くナツキ君。力の入れ方か疲労なのか、フェイトちゃんはあっさり鉄パイプを手放してしまいました。

「んー、やっぱ感覚狂うなぁ…」

重さや長さが違う木刀をくるくる回しながら言うナツキ君に、

「「ナツキ君（お兄ちゃん）が言っても説得力ないよ」」

私達はハモってツッコミ。真冬とはいえ、汗一つかかないのはおかしいよ…。

「とりあえずアレだな。フェイトの課題は、攻撃に幅を持たせること。終盤余裕なかったせいか、かなり単調だったぞ？」

受けに徹していたせいか、ほとんど疲労していないナツキ君がパイプを拾い、木刀共々次元の狭間に放り込む。グラビティフォールの応用で、異次元空間に色々と収納しているらしい。魔法はデバイスなしじゃめんどいけど、時間さえ掛ければ出来るとのこと。

「うーん、魔法が使えればバリエーションも増えるんだけどなぁ…」

残念そうに呟くフェイトちゃんに、ドンマイと頭を撫でるナツキ君。

「あんまり魔法に頼りすぎると、そっちに偏っちゃうからな。大事なのはバランスだ」

むしろ俺は魔法が補助みたいなもんかな、とナツキ君が苦笑する。確かに思い返してみると、加速系と強化系、牽制射撃以外はほとんど見たことがない。

「で、なのはの方は？」

「あ、うん」

ナツキ君の声に、私は意識を集中させる。僅かな魔力をかき集め、手の平に集束させる。

「……っ」

が、一瞬だけ現れた桜色の弾丸は、即座に宙に霧散してしまった。

「うにゃ…、ダメだ…」

「まぁ、まだ二日だしな。この分なら早けりゃ今週末には治るだろ」

むしろ同年代の一般魔導師に比べれば速い方だと言うけれど、ナツキ君の心情的なものなのかもしれない。彼の傍には、いつまでも壊れたままのリンカーコアを抱えたユキさんがいたから。

「さて、そろそろ準備しないとだし、帰りますか」

と、そうでした。今日は月曜日なので、学校の準備をしなきゃいけません。

「はーい」

「うん」

私は預かっていた二人のコートを渡して、ユーノ君を肩に乗せる。アルフさんを抱えるフェイトちゃんと、伸びをしながら歩くナツキ君に続いて、一緒に歩き出しました。

「ん…」

包丁がまな板を叩く音で、私はまどろみから覚めた。

「ごめんな、起こした？」

背後からの声に振り返ると、主はやてが台所で朝食の準備をしていた。…シャマルがいないところを見ると、彼女も寝過ごしたようだ。

「あ…、いえ…」

ふと視線を落とすと、私とザフィーラに毛布が掛けられていた。この分だとヴィータも寝ているだろうから、誰が掛けてくれたのかは想像に難くない。

「ちゃんとベットで寝なあかんよ。風邪ひいてまう」

「す、すみません」

立ち上がりながら毛布を畳む。冬の肌寒い空気に、少しずつ意識がクリアになってきた。

「シグナム、夕べもまた夜更かしさんか？」

「ああ…、その…、少しばかり」

視線を逸らしながらぼそぼそと答える。昨夜も闇の書の蒐集を夜明け前まで続けていた為、少し寝不足なのだ。

「そか…。はい」

が、主はやては気にもせず、トレーに乗せたマグカップを差し出してきた。

「ホットミルク。あったまるよ」

「…ありがとう、ございます」

怖ず怖ずと受け取ると同時、主はやてはザフィーラの前に、受け皿に入れたミルクを差し出す。

「ザフィーラにもあるよ。ほら、おいで」

「すみません、寝坊しましたー」

と、シャマルがエプロンを着けながら、パタパタとリビングに入って来た。

「おはようシャマル」

「おはよう、ああもう…、ごめんなさいはやてちゃん」

ペコペコと頭を下げながらシャマルが謝り、料理の手伝いに加わる。

「ええよー」

「……おはよー」

笑顔で許す主はやてに、寝ぼけているのか寝起きのヴィータがベタッと引っ付く。

「ヴィータめっちゃ眠そうやなー」

「眠い…」

主はやての車椅子に寄り掛かり、ズルズルと滑り落ちるヴィータ。気合いを入れて頑張っていたとはいえ、ちょっとだらけすぎな気がしなくもない。

「もう…、顔洗ってらっしゃい」

「ん…、ミルク飲んでから…」

見兼ねたシャマルが椅子に座らせ、手にマグカップを握らせる。

（…温かい、な）

確かに手の中のマグカップは温かい。ホットミルクだから当たり前といえば当たり前だが、そんな平穏な光景を見ていると、遥か昔に失ったはずの温もりを思い出す。

（…だからこそ）

早めに、片付けなければ。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやって来ます」

先生の声に、クラスの中がにわかに騒がしくなる。ううー、緊張するなぁー。

「海外からの、留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

「し、失礼しますー」

先生の声に促され、恐る恐る教室に入る。みんなから送られてくる好奇の眼差し、その中に三人だけ、温かな笑みを浮かべている人達がいた。

「それじゃ、自己紹介を」

「…あの、フェイト・テスタロッサと言います。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げると同時、温かな拍手に包まれる。なのはがニコニコ笑いながら、私に手を振ってくれた。

「……ふふっ」

こうして私は、すんなりとクラスの一員として迎えられた。

休み時間。フェイトの様子が気になったので、なのは達のクラスを覗きに行ってみた。

「ねぇ、向こうの学校ってどんな感じ?」

「わ、私、学校には…」

「すっげー急な転入だよね、なんで？」

「その、色々あって…」

「日本語上手だね、どこで覚えたの？」

「前に住んでたのってどんなとこ？」

「えと…、あの…、その…」

…予想通りというか、なんというか。フェイトの周囲には、クラスの半分以上が集まって人垣を作っていた。海外からの急な留学生、しかも金髪の美少女。食いつかない訳がない。

「…まるで芸能人だな」

「な、ナツキ君！？」

苦笑しながらの呟きに、俺に気付いたなのはが驚いている。

「よ、なのは。様子見に来た。アリサもすずかもおはよ」

ちゃっ、と片手を上げて挨拶する俺に、仲良し三人組の顔色が変わる。

「なななななんでそんなところに！？」

「いやまぁ、可愛い妹がどうしてるかなぁ、って」

すずかが若干挙動不審気味に尋ねてきたので、俺は苦笑しながら素直に答える。…まぁ、そんな態度になるのも無理ないか。なんせ、

「…だからって、なんで窓から来るのよ」

――俺は今、真上から吊されたロープに片手でぶら下がり、なのはの教室の窓枠に片足を掛けた状態だからだ。

「いや俺の教室ここの真上でさ。階段遠くてめんどかったし」

スタッと教室に降り立ち三人に説明する。ロープを適当な柱や机に結び付け、そこからするすると降りてきた訳だ。

「…ナツキ君、自分のクラスは？」

「囲まれるの目に見えてたし、フェイトが心配だから逃げてきた」

再起動したすずかの質問に、俺はサラリと答える。教室に入って適当に自己紹介を済ませた時点で、興味津々なオーラがクラス中から感じ取れたからだ。…まぁ、謎の美少女留学生と同じ日に編入な上帰国子女。誰だって気になるだろう。

「そこであっさり自分の環境じゃなくてフェイトちゃんを取る辺りがナツキ君らしいよね…」

「凄まじいシスコンね…」

なのはとアリサが冷や汗混じりに苦笑い。…しょうがないだろ、気になるものは気になるんだから。

「ま、あいつがこんな大人数と関わる機会なんてなかったからな。やっぱ心配だし」

呆れる二人に苦笑しながら、困った様子のフェイトに視線を送る。

「あ…」

と、こちらに気が付いたのか、フェイトが僅かに声を上げた。親とはぐれた迷子のような表情のままとたとたと俺達の方に歩いて来て、そのまま俺の後ろに隠れる。

「……はい？」

フェイトは俺を壁にして半分だけ顔を出し、呆気に取られた人垣をジーッと恐る恐る見ている。

「あ、ども。フェイトの兄です」

自然と視線が俺に集中してしまったので、とりあえず口を開いてみた。

「「「……似てない」」」

そりゃそうだろうよ。血は全く繋がってないんだからな。

「はいはい、編入初日の留学生を、そんなにみんなでもみくちゃにしないの」

見兼ねたアリサがパンパンと手を叩き、間に割って入った。さすが

委員長気質、ナイスフォロー。

「アリサ…」

「それに質問は順番に。フェイト困ってるでしょうが」

フェイトを俺の陰から押し出し、アリサが全員を見回す。

「はい、じゃ俺の質問から」

「はい、いいわよ」

先陣を切った少年に、アリサが腕を組みながら許可を出す。

「向こうの学校って、どんな感じ?」

「え、えっと、私、普通の学校には行ってなかったんだ。家庭教師というか、そんな感じの人に教わってて…」

俯きながらもフェイトがしっかりと答える。確かリニス、と言ったか。プレシアの使い魔で、幼いフェイトの面倒を見てくれたらしい。

「へー、そうなんだ」

「はいはーい、次私」

「いや、ここは僕が」

「ううん、あたしが」

「はい待った。あんた達がっつき過ぎ」

連続で名乗りを上げるクラスメートに、アリサがツッコミを入れながら仲裁した。

「…ま、この分なら大丈夫そうだな」

そこまで見届けた俺はホッと一息つき、教室を後にする。

「あれ、いいの？」

「おまえらがいれば大丈夫だろうし、いつまでもべったりって訳にもいかないからな」

今はまだ幼いからいいが、いずれは自立させなければいけない。頼るのは悪いことではないが、過ぎたそれは依存となる。もしそうなってしまえば、プレシアのような悲劇を生み出してしまうかもしれないから。

「ただ甘やかすだけじゃなくて、ちゃんと考えてたんだね…」

そんな俺を見て、すずかが感心したように呟く。…俺をなんだと思ってたんだ。

「ま、兄ですから」

末永く可愛がりたいしな、と答えながら手を振り、教室を後にする。

（…俺がいなくても、あんな風に笑えるようになれればいいんだけど、な…）

みんなに囲まれて、ぎこちないながらも笑顔を浮かべる妹の姿を尻目に、俺は自分の教室に戻った。

「クロノ君、駐屯所の様子はどう？」

「機材の運び込みは済みました。今は周辺探査のネットワークを」

机に腰掛け魔法陣の向こう側にいる女性、レティ提督を見遣る。元々この件に携わっていただけあって、やはり気になるのだろう。

「そう。ご依頼の武装局員一個中隊は、グレアム提督の口利きのおかげで、指揮権を貰えたわよ」

レティ提督もだが、グレアム提督にも頭が上がらない。闇の書事件解決に動く僕達に、最大限の援助をしてくれている。

「ありがとうございます。レティ提督」

「それから、グレアム提督のところの使い魔さん達が会いたがってたわよ？可愛い弟子に会いたい、って」

ああ…、そういえば最近会ってないっけ…。でも…、なぁ…。

「リーゼ達ですか…。その…、適当にあしらっておいていただけますか」

はいはい、と苦笑するレティ提督の顔を最後に通信を切り、部屋を

出る。

「おー、クロノ君。どう?そっちは」

「武装局員の中隊を借りられた。捜査を手伝って貰うよ。そっちは?」

リビングに入ると同時、冷蔵庫をごそごそ弄っていたエイミィが声を掛けてくる。

「よくないね…。夕べもまたやられてる。今までより少し遠くの世界で、魔導師が十数人。野生動物が約四体」

「野生動物…?」

そう、とエイミィが頷きながらリモコンを操作し、テレビの上のスクリーンに何やら映し出す。

「魔力の高い、大型生物。リンカーコアさえあれば、人間でなくてもいいみたい」

大型の亀のような生物を指差しながら、ソファに腰掛けるエイミィ。確かに大型生物は稀にリンカーコアを持つこともあるにはあるが…、

「まさになりふり構わずだな…」

「でも、闇の書のデータを見たんだけど、なんなんだろうね、これ」

呆れて溜め息をつく僕に、エイミィが首を傾げながら尋ねてくる。

「魔力蓄積型のロストロギア。魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを食って、そのページを増やしていく…」

「全ページである６６６ページが埋まると、その魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

それだけの巨大な力を一介の魔導師が扱いきれる訳がない。その先に待つのは破滅だけだ。

「で、本体が破壊されるか、所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する、と」

「様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者に守られ、魔力を食って永遠を生きる。破壊しても、何度でも再生する。停止させることの出来ない、危険な魔導書」

いくら殲滅しようとも何度でも再生し、数々の人達の人生を狂わせる天災染みたロストロギア。

「それが、闇の書…。私達に出来るのは、闇の書の完成前の捕獲」

「そう。あの守護騎士達を捕獲して、更に主を引きずり出さないといけない」

完成する前なら、被害は最小限に食い止められる。絶対に探し出し、捕まえなければいけない。これ以上、被害を出さない為に。

「はぁ…」

どうにかこうにか四限目が終わり、机にパタリと倒れ込む。なんだかドッと疲れた…。

「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう?」

近付いて来たすずかが、私に尋ねてきた。

「歳の近い子が、こんなにたくさんいるの初めてだから…。なんだかもう、ぐるぐるで…」

「あはははは…」

遅れて近寄って来たなのはが苦笑い。さすがに、今までずっと時の庭園やアースラに篭りっぱなしの生活してました、なんて言える訳がない。

「ま、すぐに慣れるさ」

「うん、だといいな…。って」

聞き覚えのある声に視線をずらすと、ロープに掴まって窓枠に腰掛けるお兄ちゃんの姿が。

「よ、みんな。昼飯くらい一緒に食おうぜ」

「お、お兄ちゃん!?危ないよ!?」

思わず疲労も忘れて飛び出し、お兄ちゃんをぐいぐい引っ張る。

「むしろお前が危なっかしいから落ち着け。ほら、場所空けて」

よっと、と軽い声と共に、お兄ちゃんが床に着地する。

「せめて普通に登場しなさいよ…」

「いやー、案外これ面白くてな」

呆れたアリサがツッコミを入れて、お兄ちゃんが楽しそうに笑ってるけど、私はそれどころじゃない。

「ダメだよお兄ちゃん！！落ちたりしたら大変だよ！！」

「いや別に二階から落ちるくらいなら…」

私の注意に苦笑いしながら、お兄ちゃんが反論する。確かに重力を操れるから大丈夫だとは思うけど…！！

「ダメったらダメ！！お兄ちゃんがいないと、私生きていけないもん！！」

お兄ちゃんの手を握って私が言った瞬間、何故かみんなの動きが固まる。

「待て。とりあえず待て。そしてその発言の意味をよく考え直せ。はい、スタート」

「え？……！？～～～っ！！」

お兄ちゃんに言われるまま考えた結果、私の頭は恥ずかしさのあま

りフリーズした。わ、私ったら気が動転してたとはいえなんてことを…！！ああでも確かに事実だから嘘だって言いたくないし…！！

「ねぇナツキ君？一体何を言ったらフェイトちゃんにここまで好かれるのかな？私気になるなぁ」

「待て。落ち着けなのは。俺は別に変なことは言ってないぞ」

「いきなり「兄になってやる」って言うのは変じゃないの！？」

「いやだからアレは…！！」

頭から煙を出す私を尻目に、何やら黒いオーラを出すなのはと冷や汗ダラダラのお兄ちゃんが言い合っている。うう、恥ずかしい…。

「…とりあえず、屋上行きましょ」

「「「「…さんせー」」」」

溜め息混じりのアリサの言葉に、全員の声がシンクロした。ちなみに教室は空っぽだった為、アリサ達以外には聞かれなかった。不幸中の幸い、かな？

「で、フェイト。どういうことかじっくり聞かせて貰おうじゃない」

訂正。泣きっ面に蜂でした。

「それじゃあ、はやてちゃんの病院の付き添い、よろしくね」

ベットに腰掛けたシャマルの声に、コートを取りに来ていた私は振り返る。

「ああ。ヴィータとザフィーラは？」

「出掛けたわ」

脳裏に二人の姿を思い描く私に答えながら、箱詰にされた大量の円柱を手に取るシャマル。赤い弾丸の型をしたそれは、

「カートリッジか」

「昼間の内に作り置きしておかなきゃ」

カートリッジに魔力を込めるのは、シャマルの担当になっていた。私達三人は基本的に前線に出る為、魔力の消費は最低限に抑える必要があるのだ。

「すまんな。お前一人に任せ切りで」

「バックアップが私の役目よ。気にしないで」

ニコニコと笑いながら、次々とカートリッジを精製していくシャマル。彼女がその役目を終える日が来るのだろうか…。

「なるべく早めに戻る。万が一があったら、素直に逃げろ」

「わかってるわ。いってらっしゃい」

私の諫言をサラリと流し手を振るシャマルに背を向け、私は主はやての待つ玄関へ向かった。

「よ。授業お疲れ様」

「あ…」

授業の終了を告げる鐘をＢＧＭに三度降り立つと同時、なのはが困ったように携帯を差し出す。

「クロノからのメールか。どした？」

「いや、それが…」

とりあえず見ろということか、と納得し画面に視線を落とす。

『捜査は順調に進んでいる。君とフェイトとナツキは、こちらから要請するまでは普通に過ごしていてくれ。なのははまだ魔力が戻っていないし、レイジングハートもバルディッシュも修理中だ。ナツキもいるしアクセルは今夜には返って来るらしいから大丈夫だろうけど、非常時は素直に避難するように』

「へー、アクセルは今夜か」

呟きと共に画面をスクロール。ん？追伸？

『追伸１、二機の修理は来週には終了するそうだ。追伸２、フェイトに寄り道は自由だが、夕食の時間には戻って来るようにと伝えて

欲しい。ナツキはどうせフェイトと一緒だろうから言わなくてもいい』

「おい」

思わずツッコミ。仮にも同居人に言うべきセリフではないだろうこれは。

「帰ったら一発チョップしてやる」

「ほ、程々にね…」

なのはに携帯を返すと同時、隣に来ていたフェイトが窘める。

「つー訳で寄り道は大丈夫みたいだし、アリサとすずかも呼んで五人でどっか行くか」

妹に免じて話題を変え、アリサとすずかに振り返る。

「オッケー」

「行こう行こう」

五人で固まって雑談しながら、俺達は教室を後にした。

「んー、やっぱりあんまり成果が出てないかなー」

上がって来た診察結果に、主はやての主治医である石田先生が頭を

掻く。

「でも今のところ副作用も出てないし、もう少しこの治療を続けましょうか」

「はい。えーと、お任せします」

前向きに言った石田先生に対し、主はやては曖昧に頷く。

「お任せって…、自分のことなんだから、もうちょっと真面目に取り組もうよ」

「あ、いやその…。私、先生を信じてますから」

主はやての微笑みながらの言葉に、私達は思わず息を呑む。自分の全てを任せ切っているにも関わらず、不安を感じさせない彼女の笑顔に私達は魅了されていた。

「…はやてちゃん、日常生活はどうです？」

主はやてを退出させ、しばらくして石田先生が私に質問を投げ掛けてきた。

「足の麻痺以外は健康そのものです」

「そうなんですよね…。お辛いと思いますが、私達も全力を尽くしてます」

素直に答えた私に、手元のカルテにさらさらと書き加える石田先生。

「今はなるべく、麻痺の進行を緩和させる方向で進めてます。これからだんだん、入院を含めた辛い治療になるかもしれません」

「はい。本人と相談してみます」

入院、か…。普通に考えれば悪いことなのだろうが、私達に関わらせずに済むことを考えると、逆に好都合かもしれないな…。

「では、また来週に」

「はい。ありがとうございました」

そんな思考と共に、私は診察室を後にした。

「お邪魔しましたー」

「じゃ、また明日ね」

アリサとすずかの二人が、挨拶と共に黒い高級車に乗り込む。

「うん、また明日」

「ばいばーい」

「またなー」

三人揃って手を振り、なのはの家に戻る。

「ねぇ、二人はあの人達のこと、どう思う？」

ふと思い立った私は、階段を上りながら先を行く二人に尋ねてみた。

「あの人達って、闇の書の？」

「うん、闇の書の守護騎士達のこと」

振り返ったお兄ちゃんの言葉に私は頷く。闇の書の蒐集を行っていた、四人の騎士達が気になっていたのだ。

「えと、私は急に襲い掛かられてすぐ倒されちゃったからよくわかんなかったんだけど…。フェイトちゃんはあの剣士の人と何か話してたよね」

「うん。少し不思議な感じだった。上手く言えないけど、悪意みたいなものを全然感じなかったんだ」

なのはの言葉に私は頷く。あのシグナムと言う守護騎士、私に対して敵意や殺気みたいな「倒す意志」はあったけど、殺す気はなかったように思える。抵抗しなければ命までは取らんって言ってたし。

「そっか。闇の書の完成を目指してる目的とか、教えて貰えたらいいんだけど…、話が出来そうな雰囲気じゃなかったもんね」

部屋に入り、ベットに座り込んだなのはが残念そうに呟く。

「強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉ってなかなか入って来ないから。私もそうだったしね…」

私は母さんの為、傷付けられても、間違ってるかもって思っても、疑っても、だけど信じてた。絶対に間違ってないって信じてた時は、信じようとしてた時は、誰の言葉も入って来なかった。固く固く心を閉ざして、全てを拒んでいた。

「俺も、なのはに止められるまで聞かなかったしな…」

「フェイトちゃん…、ナツキ君…」

なのはにさえ全てを隠してナナシとして生きて来たお兄ちゃんの言葉に、なのはがうなだれる。

「あ、でも!!言葉を掛けるのは、想いを伝えるのは、絶対無駄なんかじゃないよ!!」

母さんの為だとか、自分の為だとか、あんなに信じようとしてた私も、お兄ちゃんやなのはの言葉で何度も揺れたから。

「言葉を伝えるのに、戦って勝つことが必要なら、それなら、迷わずに戦える気がするんだ」

「要するに、話を聞かないならぶっ飛ばしてから無理矢理聞かせりゃいい。そうだろ?」

言い方こそ荒っぽいけど、お兄ちゃんの言う通りだ。私やお兄ちゃんだってそうしてわかり合えたんだから、あの人達とも、きっと。

「フェイトちゃん…、ナツキ君…」

「お兄ちゃんやなのはが、教えてくれたんだよ。そんな強い心を」

何度も私に手を伸ばして、支えようとしてくれた二人の強さがあるから、今私はここにいる。

「そんなことないと思うけど…。私はナツキ君を助けたくて必死だっただけだし、それにフェイトちゃんを助けたのはナツキ君だもん」

なのはは照れたように俯き、指をつんつんさせながら呟く。

「だとしても、なのはがいなきゃ俺はフェイトを救えなかった。つまりなのはは俺だけじゃなくてフェイトも救ったんだよ」

頭を撫でながらのお兄ちゃんの言葉に、なのはの顔が僅かに和らぐ。やっぱりなのはが頑張れたのも、お兄ちゃんのお陰なんだろう。

「だから、強くなろうぜ。想いを貫く為に」

お兄ちゃんが顔付きを変え、私達の前に握り拳を突き出す。

「そうだね。私ももっと強くなる。一緒に頑張ろう、ナツキ君、フェイトちゃん」

お兄ちゃんに合わせて、なのはが前に拳を突き出す。

「うん。頑張ろう、お兄ちゃん、なのは」

私も誓い、拳を差し出す。…なんだか勇気が湧いて来た。

「あ、これ結構気に入ったかも」

「実は俺も」

なのはの呟きに、お兄ちゃんが苦笑と共に答える。

「じゃあこれ、たまにやろうよ。困った時やくじけそうな時は、こうやって勇気を出すの」

「あ、いいねいいね」

私の提案に、なのはが賛同する。

「んじゃ、これからも三人で頑張ろうぜ。こうやって、な」

「「うん！！」」

再び拳を合わせ、三人で微笑む。私達ならきっと、どんなことだって乗り越えられる。そんな気がした。

「…さて、と」

フェイトを送り届けた俺は一人、風芽丘図書館に来ていた。受付の声を聞き流し、目的の棚へと向かう。

「あの二人ならお菓子とかの方が喜びそうだもんな…」

呟きながら料理本を数冊漁り、パラパラとページをめくる。プリン好きだったユキという前例もあった為、すずかが通っているというここに来てみたのだ。お、このスコーンとか言うのなら簡単に出来

そうだ。帰ったら早速試してみるか…。

「この分なら立ち読みでもよかったかな…、ん？」

用事を済ませ本を棚に戻そうとすると、車椅子に座った一人の少女が俺を、正確には俺の手に握られている本を見ていることに気が付いた。

「はい」

「あ…。す、すんません」

本を差し出すと少女は頭を下げ、怖ず怖ずと受けとった。

「気にすんなって」

そんな様子に苦笑しながら、俺は少女の頭をわしゃわしゃと撫でる。

「っ！？」

びくりと身を竦めた少女を見て、俺は我に返った。いかん、なのはやフェイトには普通にしてたから無意識にやっちまった…。

「ご、ゴメン…。つい…」

「あ、いえ、大丈夫です…」

謝りながら顔を背ける。怒らせちゃったよな…、顔真っ赤だし…。

何やってんだ俺は…。

「んじゃ俺はこれで」

「あ、あの！！」

振り向きざまダッシュしようとした瞬間少女に呼び止められ、恐る恐る振り返る。

「名前…、聞いてもいいですか？」

不安げな光を瞳に宿し、尋ねてくる少女。…怒ってない、のかな？

「ナツキ。天城ナツキだ」

とりあえず安心させようと、にこやかに微笑みながら名前を告げる。

「私ははやて…、八神はやていいます」

「はやて、か…。いい名前だな」

名乗り返した少女に、ぽつりと呟く。理由はない。ただ何となく、そう思えただけ。だがその言葉にはやては、嬉しそうに微笑んだ。

「んじゃなはやて。また機会があれば」

「うん。またな、ナツキ君」

こうして俺は奇妙な出会い方をした少女・はやてと別れ、帰宅の路についた。

「び、びっくりしたぁ…」

胸元を押さえながら、私は深呼吸して落ち着きを取り戻す。いきなり頭を撫でられれば、例え相手が見ず知らずの他人でなくとも驚くだろう。

（…誰かに頭撫でて貰ったの、何年ぶりやろな…）

今は遠い過去の記憶。お父さんとお母さんが亡くなってからは、一度もなかったかもしれない。

「…えへへ」

彼の手が触れた場所に触り、一人頬を緩める。なんだか心があったかくなった。

「主はやて、こちらでしたか」

「ひゃうっ!?」

と、背後からシグナムに声を掛けられ、思わず飛び上がりそうになる。気配もなく現れるのやめて欲しいわ…。

「…どうかしましたか？」

「な、なんでもあらへん」

不審げに首を傾げるシグナムを説得しながら、

（ナツキ君…、料理の本読んどったなぁ…）

彼も料理が好きなのかな、と一人考える。すずかちゃんと話せるようになったからか、割と人付き合いに積極的になってきた気がする。

（…また、会えるかなぁ？）

そんなことを考えながら、私は車椅子をテーブルの方へ向けた。

「…ちっ」

あたしはアイゼンを振るい、空になったカートリッジを排出した。
足元に倒れた巨大な亀から、鈍い輝きを放つ珠が宙に浮かぶ。

「闇の書、蒐集」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）》

宙でそれを待ち構えていたザフィーラが闇の書に命じ、リンカーコアを蒐集した。

「今の3ページか」

「くっそ、でっけえ図体して、リンカーコアの質は低いんだよな」

呟くザフィーラに毒づき、アイゼンにカートリッジをセットする。
一度に三発しか仕込めない為、こうして補充しないといけないのだ。

「ま、魔導師相手よりは気楽だし効率もいいけどな…。次行くよザフィーラ」

アイゼンを肩に担ぎ、あたしは踵を返す。

「ヴィータ、休まなくて大丈夫か」

「平気だよ、あたしだって騎士だ。この程度の戦闘で疲れる程柔じゃないよ」

休んでる暇なんかない。早く闇の書を完成させないと…。

「ありがとうございましたー」

そんなこんなで一週間。時空管理局の医務室から出て来た私を、壁に寄り掛かっていたナツキ君が出迎える。

「お疲れ様。検査結果どうだった？」

「無事、完治！！」

ピースをした私に笑い掛け、頭を撫でるナツキ君。

「なのはー」

「お兄ちゃーん」

と、向こうからユーノ君とフェイトちゃん、アルフさんが走って来

た。

「こっちも完治だって」

そう言いながら、赤い宝石と金色の三角形を私に見せるフェイトちゃん。

「これで三人共完全復活だな」

宙に放り投げたシルバーネックレスをキャッチし、ニヤリと笑うナツキ君。

「お誂え向きに、俺達の出番みたいだぜ？」

首を傾げる私達に不敵に笑った彼は、背後の転送ポートを指差した。

「ちいっ…」

「くっ…」

ようやく尻尾を掴んだ。闇の書の守護騎士である紅い少女と蒼い男を、武装した局員十数人が取り囲んでいる。

「管理局か…」

「でも、チャラいよこいつら。返り討ちだ…！！」

…好き勝手言ってくれるじゃないか。僕は周りを囲む局員達に指示

を出し待避を促す。

「！？」

「上だ！！」

男の方が気付いたようだ。だが、もう遅い！！

「スティンガーブレイド、エクスキューションシフト！！」

僕の声と同時、周囲に浮かぶ水色の刃が輝きを増し、一斉に矛先を二人に向ける。

「てえっ！！」

「せいっ！！」

僕が発射を命じると同時、男の方がバリアを張りながら少女の前に出た。無数の刃が降り注ぎ、滞留した魔力に反応、爆発を引き起こす。

「はぁっ…、はぁっ…、少しは…、通ったか…？」

全力を振り絞った為、疲労が激しい。肩で息をしながら、着弾点を油断なく見下ろす。

「ザフィーラ！！」

だが、煙が晴れた先にいたのは無傷の少女と、腕に数本の刃を突き立てた男の姿。

「気にするな。この程度でどうにかなる程、柔じゃないっ…！！」

「上等…！！」

刃を抜き捨てる男と戦意を漲らせる少女を見下ろし、歯噛みする。
今のが通らないとなると、少々キツいな…。

『武装局員、配置終了。オッケー、クロノ君！！』

「了解！！」

エイミィの声に頷き、Ｓ２Ｕを構え直す。これだけの戦力があれば
やれるはず。諦めるのはまだ早い。

『それから今、現場に助っ人を転送したよ！！』

「っ！？」

再びの声と同時に、三つの気配を感知。見下ろした先、ビルの上に
立っていたのは、

「ナツキ！？なのは！？フェイト！？」

「レイジングハート、バルディッシュ、再設定は終わってるな？」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ（いつでも行けます）》

《Ｇｅｔ　Ｓｅｔ（準備完了）》

俺の鋭い声に、二人の愛機が頼もしく答える。ＯＫ、問題ねぇな。

「なのは、フェイト」

俺は上空を見据えたまま、背後の二人に呼び掛ける。

「俺達のデバイスは、新しいシステムを積んである。主を守る力になる為、こいつらが自らの意志で決めたんだ」

主を守る為。主の力となる為。想いを、貫き通す為。自らへの負担も辞さず、こいつらは覚悟を決めた。

「だから呼んでやれ。そいつらの新しい名前を。常にお前らと共にある、生まれ変わったパートナーの名前を！！」

「「うんっ！！」」

頷く二人に微笑み掛け、手の中にある相棒に語り掛ける。

「お前も、決めたんだな？」

《Ｉｔ　ｉｓ　ｍｙ　ｓｉｇｎａｔｕｒｅ（それが我が銘だ）》

こいつは刀。その銘の下、使い手の命を全うするモノ。だから、名前は、変えない。

「上等…！！」

ニヤリと笑い、上空を見上げる。三人同時に手を掲げ、己の愛機の名を叫ぶ。

「レイジングハート・エクセリオン！！」

「バルディッシュ・アサルト！！」

「ガーディアン・オブ・アルカディア！！」

魔導師の杖、閃光の戦斧、災厄を切り裂く刃、主人の命を叶えるその名を高らかに呼ぶ。

「「「セット・アップ！！」」」

三人の声がシンクロした瞬間、

《《《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》》》

桜、金、銀の光が、弾けた。

今までと同じ、いや、それ以上の力の奔流。元来のバリアジャケットをベースに、各所を強化していく。なのは黒いインナーとグローブを纏い。フェイトは左手と両足を装甲化。ナツキはベルトをモチーフにした装飾をあしらい、グローブを装甲化している。

バリアジャケットだけではない。デバイスもその姿を変えていた。

レイジングハートは柄に金色のマガジンを、バルディッシュは柄に黒色のリボルバーを、アクセルは柄に銀色のマガジン、刀身にスライドパーツを追加。バリアジャケットを纏った三人の手に握られる。

「「「……」」」

三人は、ただ無言で。

《Ａｓｓａｕｌｔ　Ｆｏｒｍ，Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｓｅｔ》

《Ａｃｃｅｌｅ　Ｍｏｄｅ，Ｓｔａｎｄｂｙ，Ｒｅａｄｙ》

《Ｂｕｒｓｔ　Ｆｏｒｍ，Ｄｒｉｖｅ　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

己に応えるそれぞれのデバイスを構え。

宙に浮く敵を、見据えた。

第五話「新たな力」（後書き）

覚醒ｋｔｋｒ！

という訳で三人共、新デバイスと共に戻って参りました。

さて次回、三人が守護騎士をフルボッコ、

…すると、思いますか？

ああやめて石投げないで（ｒｙ

次回、遂に「彼女達」が動き始めます。

第六話「宿敵」（前書き）

はい六話です。
遂に彼女達が参戦します。
ではどーぞー

第六話「宿敵」

「…で、今日そんなことがあってな?変わってるけど優しい子だったんよ」

「そうなんですか」

私達は晩御飯の買い物をしながら、取り留めもない雑談をしている。今の話題は、はやてちゃんが今日図書館で出会ったという少年の話だ。初対面の女の子の頭を撫でるのはどうかと思うが、本を渡す優しい面もあるし、はやてちゃんは喜んでるみたいなのでひとまず置いておいた。

「そやけど、最近みんなあんまりお家におらんようになってしもうたな」

「っ!!ええ…、まあその…、なんでしょうね?」

まさか闇の書の蒐集の為に民間人を襲ってます、などと言う訳にもいかず、しどろもどろにはぐらかす。

「あ、別に私は全然ええよ?みんなが外でやりたいこととかあるんやったら、それは別に…」

はやてちゃんが慌てて付け足し、安心させようと笑顔を浮かべる。

「はやてちゃん…」

「私は、元々一人やったしな」

弱々しく笑うはやてちゃんの肩に手を置き、その瞳を真っ直ぐ見据える。

「はやてちゃん、大丈夫です。今はみんな忙しいですけど、その、すぐにまた、きっと」

そう。こんなことすぐに終わらせて、静かに暮らすんです。五人で、一緒に。

「そっか。シャマルがそう言うんならそうなんやね」

はやてちゃんは呆気に取られた様子で、でもとても嬉しそうに笑った。

「今夜はすずかちゃんも来てくれるし、お肉はこんなもんかなぁ？」

「はい」

今夜は図書館で知り合った少女、月村すずかちゃんと一緒にお家でご飯を食べることになっていた。料理大好きなはやてちゃんも気合いが入っていて、腕をぐっと握っている。

「外は寒いし、今夜はやっぱあったかお鍋やね」

「はい」

既にかごの中は鍋の具材でいっぱいだ。私も邪魔にならない程度にお手伝いしないとね。

「みんなも、外で寒ないかな…」

「強装型の捕獲結界…。ヴィータ達は閉じ込められたか」

私は眼下を覆う結界を見下ろし、一人呟く。あの二人なら問題ないだろうが、万が一ということもある。

《Ｗａｈｌｅｎ　Ｓｉｅ　Ａｋｔｉｏｎ（行動の選択を）》

突入か、撤退か。二者択一を迫ってくるレヴァンテイン。

「レヴァンテイン、お前の主はここで引くような騎士だったか？」

《Ｎｅｉｎ（否）》

尋ね返した私に、炎の魔剣はただ一言。

「そうだレヴァンテイン。私達は、今までずっとそうして来た」

カートリッジをロードし、眼下の強装結界を見遣る。捕獲結界とは元来外へ逃がさないモノ。ならば…！！

「私達は、あなた達と戦いに来た訳じゃない。まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を」

私となのは、上空に浮かぶ二人に呼び掛ける。話し合いで解決するに越したことはない。私達だって好き好んで戦いたい訳じゃない。

「あのさ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

対しハンマーの少女、ヴィータは不遜な態度のまま唐突に話題を変えた。

「和平の使者なら槍は持たない」

ぴくりとお兄ちゃんが反応したけど、私達は顔を見合わせる。

「話し合いをしようってのに武器を持ってやってくる奴がいるかバカって意味だよバーカ」

その意味を答えたヴィータはハンマー、グラーフアイゼンを私達に向け、拒絶の言葉を告げた。

「な!?い、いきなり有無を言わさずに襲い掛かって来た子がそれを言う!?」

「それにそれは諺ではなく、小話のオチだ」

思わず反論するなのはと、側にいた男性ザフィーラの言葉に、ヴィータの顔が赤く染まる。

「うっせ!!いんだよ細かいことは!!」

「…お前、バカだろ?」

あまりのやり取りにお兄ちゃんが呆れ、溜め息混じりにそんなことを呟く。

「んなっ！？てめぇ…！！」

が、反論しようとしたヴィータの言葉は、結界内に響き渡った轟音に掻き消された。

「「「「「！？」」」」」

音の発生源には、剣を握った一人の影。間違えるはずがない。バルディッシュを大破に、私を完敗に追い込んだその騎士は、

「シグナム…」

立ち上がった彼女はこちらを一瞥し、静かに剣を構えた。…やるしかなさそうだね。

『ユーノ君、クロノ君、手出さないでね。私、あの子と一対一だから』

『アルフ、私も』

後衛に控えるメンバーに念話を飛ばし、それぞれの相手を見据える。なのははヴィータと。私はシグナムと。

『ああ。あたしも野郎に、ちょいと話があるんだ』

『えー俺空気ー？ま、勝手にフォロー入るんだけどね』

ザフィーラを見据えるアルフを見て、溜め息混じりに苦笑するお兄ちゃん。…大丈夫だよ、危なくなったらちゃんと助けてくれるって、信じてるから。

『ユーノ、それならちょうどいい、僕と君で手分けして、闇の書の主を探すんだ』

『闇の書の…？』

クロノの唐突な言葉に、ユーノが首を傾げる。

『連中は持っていない。おそらくもう一人の仲間か、主がどこかにいる。僕は結界の外を探す。君は中を』

『わかった』

向こうも決まったようだ。なら後は私達も全力を尽くすだけ。

《Ｍａｓｔｅｒ（マスター）》

「ん？」

と、レイジングハートがなのはに呼び掛けた。

《Ｐｌｅａｓｅ　ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ（『カートリッジロード』を命じてください）》

「うん！！」

なのはがレイジングハートを構え、それを告げる。

「レイジングハート、カートリッジロード！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

柄の上部に付けられた弾倉が稼動。金色の弾丸がセットされ、カバーが閉じると同時に魔力が溢れ出す。

《Ｓｉｒ（主人）》

「うん。私もだね？」

私もバルディッシュを振りかぶり、それを命じる。

「バルディッシュ、カートリッジロード！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

バルディッシュが応え、カバーがスライド。リボルバーを回転させ、カートリッジをロードする。

「アクセル」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

お兄ちゃんもアクセルを握りしめ、カートリッジロードを命じる。

柄に仕込まれた機構が稼動し、弾丸が刀身の根本にセットされる。

「さぁ、リターンマッチと洒落込もうか！！」

瞬間、お兄ちゃんが消えた。

「「「「!?」」」」

ほぼ同時にお兄ちゃんの姿は二人の目前へ。月光を受けて輝くアクセルを、袈裟掛けに振り下ろす!!

「うおおおおっ!!」

が、間一髪のところでザフィーラがカット。ヴィータとお兄ちゃんの間に割って入る。

「デバイスも強化していたか…!!」

「ただのこのこやられに来る訳ねぇだろ?」

手甲でアクセルを受け止め呟くザフィーラに、ニヤリと笑うお兄ちゃん。そのまま刃を弾き、お兄ちゃんは後退した。

「気をつけろ、ヴィータ。前回のようにはいかんぞ」

「言われなくても!!」

威勢よく吠え、ヴィータが急上昇。私達も応えるように、空へと舞う。

銀、桜、金、緑、橙、水色、紅、紫、白。それぞれがそれぞれの役目を果たすべく、結界内の濁った空を駆け抜けた。

「はっ、結局やんじゃねぇかよ」

ハンマーを構えた少女、ヴィータちゃんに追い縋る私に、嘲るような笑みを浮かべる彼女。

「私が勝ったら、話を聞かせて貰うよ！！いいね！？」

「やれるもんなら…！！」

言った私に向き直ったヴィータちゃんは四つの鉄球を取り出し、

「やってみろよ！！」

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

宙に放り投げ、

「せっ！！」

砲丸サイズになったそれを打ち据えた！！

《Ａｘｅｌ　Ｆｉｎ》

が、それより速くレイジングハートが動いた。フライアーフィンよりも大きくなった羽、アクセルフィンを展開し、シュワルベフリーゲンをたやすくかわす。

「速っ…！！」

あまりのスピードに私は驚く。かつてのナツキ君のグラビティアク

セルと互角の素早さだ…！！

「アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

そんな私を尻目にヴィータちゃんは急上昇、グラーフアイゼンにカートリッジをロードさせる。

《Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ》

そして、それは現れた。前回私のシールドとバリアを粉砕し私を完敗に追い込んだ、先端を鋭く尖らせたジェット噴射付きハンマー。

「でえええええいっ！！」

「っ！？」

思わずあの時のことを思い出し身を竦ませた私に、

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ》

レイジングハートは、応えた。極厚のプロテクションを展開し、ハンマーを軽々と受け止める。

「かてぇ…！！」

「ホントだ…」

前回は全力でも数秒で破壊されてしまったのに、今回はそれ程力を

込めていなくても全く問題ない。

《Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ》

レイジングハートの声と共に、プロテクションが爆砕した。爆風に煽られて、ヴィータちゃんが吹き飛ばされる。

「ちぃっ…！！」

「ようこそ、断頭台へ」

そしてそれを予測していたかのように、鞘に収めた刀を構えたナツキ君がいた。

――――ヴィータちゃんの、背後に。

「！？」

《Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｚａｍｂｅｒ》

ヴィータちゃんがとっさに頭を下げると同時、そこを「何か」が通過した。

「いや速過ぎだろアクセル。腕痛いんだけど」

左手に鞘付きのアクセルを握ったまま右手をぶらぶら振るナツキ君を見て、その「何か」が「視認不可能な程高速で振るわれたアクセル」だと理解し、ヴィータちゃんの顔が青ざめる。あんなの当たったら死ぬんじゃ…。

「ま、これなら問題なさそうだな。なのは、頑張れよ」

そう言い残し、ナツキ君が宙を蹴った。銀色の光を纏い、ぶつかり合う金と紫目掛けて加速する。

「てめぇ！！」

ナメられたと感じたのか、ヴィータちゃんがナツキ君に追い縋る。

「よそ見してる暇あんのか？」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｌａｎｃｅｒ》

ナツキ君の周囲に黒色の槍が四発生成され、ヴィータちゃんに襲い掛かる！！

「はっ！！んな直線的なもん当たるかよ！！」

ヴィータちゃんが軽々とかわして距離を詰めると同時、ナツキ君が呟いた。

「シフト」

移行、と。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

瞬間、ヴィータちゃんによけられた槍が変質し、弾丸となって反転する！！

「っ！？」

とっさに障壁を展開し、弾丸を防ぐヴィータちゃん。

《Ｌｅｔ' ｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ，Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ（アクセルシューターを撃ってください）》

「うんっ！！アクセルシューター！！」

レイジングハートに応え、足元に魔法陣を展開する。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「シュートッ！！」

そしてレイジングハートの宝石部分から、砲撃クラスの桜色の弾丸が放れた。その数、十二発。

「「！？」」

あまりの魔力の奔流に、ヴィータちゃんだけでなく私も驚く。

《Ｃｏｎｔｒｏｌ，ｐｌｅａｓｅ（コントロールをお願いします）》

「…うん！！」

レイジングハートの声に我に返り、私は意識を集中させる。感動するのは後でいい。今することは、ヴィータちゃんを倒すこと。

「アホか。こんな大量の弾、全部制御出来る訳が…」

ヴィータちゃんが周囲を環状に回る弾丸を睨み、先程かわした砲丸を私目掛けて射出する。

《Ｉｔ　ｃａｎ　ｂｅ　ｄｏｎｅ，ａｓ　ｆｏｒ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（出来ます。私のマスターなら）》

「……」

私は目を閉じたまま、コントロールに集中する。自分の殻を脱ぎ捨てて、状況を冷静に分析する。

（敵弾数は四発。アクセルシューター全十二発中四発をこちらに回して、残り八発は現状維持。方針決定。シュート）

――瞬間、紅き鋼が桜色の弾丸に穿たれ、破砕した。

「…っ！！」

弾丸の完璧なコントロールに、ヴィータちゃんが思わず息を呑む。

「約束だよ。私達が勝ったら、事情を聞かせて貰うって。アクセルッ！！」

宣言と同時、弾丸が加速する。

「ちぃっ…！！」

《Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ》

全包囲型の障壁を展開するヴィータちゃんを尻目に、

「シュートッ！！」

私は、発射を告げた。八条の桜色が閃光となり、何度も連続でぶち当たる。

「っ！？この…！！」

亀裂を徐々に増やしていく結界を睨み、苦々しげに毒づくヴィータちゃん。

――――状況は、傾きつつあった。

「はあああああああっ！！」

「せあああああああっ！！」

ビルを足場に空を舞台に、幾度も得物をぶつけ合う。鍔迫り合いの後、ギィン！！と弾きシグナムが距離を取った。

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

バルディッシュの声と同時、八発のスフィアが生成され電気が渦巻く。

「プラズマランサー、ファイア！！」

命じた瞬間雷が変化。八本の槍となって、シグナムに襲い掛かる！！

「はあっ！！」

対しシグナムは腰溜めに構えたレヴァンテインを一閃。炎を纏った剣で、プラズマランサーを弾き飛ばした！！

「ターン！！」

が、まだ終わらない。弾かれたプラズマランサーが１８０。方向転換、環状魔法陣で加速。再びシグナムに襲い掛かる！！

「っ！？」

さすがに全包囲は無理があるのか、上空に飛び上がるシグナム。だが雷条は再び矛先を変え、どこまでもシグナムを追尾する！！

「レヴァンテイン」

《Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ》

シグナムに命じられたレヴァンテインが、カートリッジをロードし排出する。

《Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ》

「せえええええいっ！！」

シグナムが剣を振るうと同時、業火がプラズマランサーを焼き尽くす。

――でも私は、既にシグナムの背後に回り込んでいた。

「っ！？」

《Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ》

瞬間的な加速魔法、ブリッツラッシュで私は死角を取った。カートリッジをロードすると同時、バルディッシュが変形を開始する。斧の刃が直角に開き、光の刃を展開する。Ｔ字の部分に羽のような輝きも付加され、戦斧は大鎌へと姿を変えた。

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

バルディッシュを受け止めると同時、レヴァンテインが吠えた。その刀身に裂け目が走り、蛇腹剣とでも呼ぶべき連結刃へと姿を変える。雷光の大鎌を受けたまま業火を纏った蛇腹剣が器用に回り込み、私の眼前に迫る！！

「っ！？」

思わぬ出来事に固まった瞬間、

「蜃気一閃！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

私の体を抱き寄せたお兄ちゃんがアクセルを振るい、斬撃を飛ばした。

「くっ…！！」

黒と紫の爆風にシグナムが吹き飛ばされ、

「ぎりぎりセーフ、っと」

お兄ちゃんは私を抱えたまま後退する。

「さすがにあれは見過ごせなかったんでな。苦情は受け付けないぞ」

私を放し、頭を撫でながらそう言ったお兄ちゃんは視線をシグナムに戻す。助けてくれたことは嬉しいけど、もうちょっと信頼して欲しいので複雑。…かっこよかったけど。

「強いな…。やはりお前が、テスタロッサの師か」

《Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ》

蛇腹剣を元に戻しながら、シグナムがお兄ちゃんを鋭く見据える。

「へぇ。いい目してるじゃん。さすが騎士」

ガシュンッ！！と音を立ててカバーをスライドさせ、カートリッジを排出するアクセルをお兄ちゃんは構える。

「この身に成さねばならぬことがなければ、心躍る戦いだったはずだが…、仲間達と我が主の為、今はそうも言ってられん」

鞘にレヴァンテインを収めたシグナムが、腰溜めに構えつつ魔法陣を展開する。

「殺さずに済ませる自信はない…。この身の未熟を赦してくれ」

「構わねぇよ。勝つのは俺達だ」

対しお兄ちゃんは不敵に笑い、アクセルを中段に構えた。私もバルディッシュを構え直し、シグナムを見据える。

「お前には名乗っていなかったな。私はシグナム。ベルカの騎士、銘はレヴァンテイン」

「管理局嘱託魔導師兼フェイトの兄、天城ナツキ。なのはやフェイトに魔法を教えたりもしてる。最近気付いたが割と過保護。ちなみに銘はアクセル」

名乗りを上げたシグナムに、不敵に笑みを見せるお兄ちゃん。

「ふっ、兄妹愛か…。騎士とは本来一対一が本領なのだが…」

シグナムが全身に力を込めると同時、魔法陣の輝きが強まる。

「天城、そしてテスタロッサ。師弟と兄妹の絆…、その力、見せてみろ！！」

「…上等！！フェイト、やるぞ！！」

「うん！！」

私達は宙を蹴り、シグナム目掛けて加速した。

「うおあああああっ！！」

「ぐうっ…！！」

アルフと言ったか、橙色の髪をした少女の一撃を、辛うじてブロックする。

「デカブツ…、あんたも誰かの使い魔か！？」

拳を押し込みながら、アルフが尋ねてくる。

「ベルカでは…、主に使える獣を使い魔とは呼ばぬ…！！」

使えるだけではない。主を守る、気高き獣。

「主の牙、そして盾、守護獣だあああああっ！！」

「同じような…、もんじゃんかよおおおおおっ！！」

アルフの怒号と共に、吹き出す魔力の量が増した。

「くっ…！！」

吹き飛ばされながらも体勢を立て直し、思考を巡らせる。

（状況は…、あまりよくないな…）

シグナムとヴィータが負けるとは思わないが、ここは退くべきだ。

目の前の敵を倒したとしても、向こうは組織。長引けばそれだけこちらが不利になる。

『シャマル、なんとか出来るか？』

『なんとかしたいけど、局員が外から結界維持してるの…。私の魔力じゃ破れない…』

外のシャマルに念話を飛ばすが、補助特化の彼女には酷な話か。総魔力量で言えば、シャマルは我ら四人の中でも最底辺なのだ。

『シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ…』

やはりこの結界、強度が高い。シグナムやヴィータクラスの火力がなければ貫けない、か…。

『二人共手が放せん。やむを得ん、あれを使うしか…』

『わかってるけど、でも…、っ！？』

不意にシャマルの思考が止まる。念話の向こうの相手は、応えない。

『シャマル？どうした、シャマル！？』

「捜索指定ロストロギアの所持・使用の疑いで、あなたを逮捕します」

シャマルと呼ばれていた翠の騎士、彼女の頭にＳ２Ｕを突き付けながら宣告する。完全な王手。何かしようとする前に確実に潰せる距離。抵抗したら最後、捕縛も殺害も僕次第だ。彼女もそれを悟って

いるのか、微動だにしない。

「抵抗しなければ、弁護の機会があなたにはある。同意するなら武装の解除を」

――気配、感知。

「「!?」」

「ふっ!!」

シャマルと同時に振り返った瞬間、僕は重い蹴りを食らい吹き飛ばされていた。

「が、はっ…!!」

向かいのビルに激突し、苦痛に顔を歪めながら襲撃者を見遣る。

「……」

仮面を付けた、若い男だった。蒼い髪に、白いスーツのようなバリアジャケット。素顔を隠したその男からは、異様な気配が感じ取れた。

「…仲間、か?」

『エイミィ、今のは!?』

『わ、わかりません!!こっちのサーチャーには何の反応も…』

母さんとエイミィが動いているが、特定は出来ないようだ。なら自分がやるしかない。

「あなたは…？」

唐突に現れた謎の男性に、恐る恐る声を掛ける。闇の書を確保しようとしていた彼に攻撃したことを考えると、敵ではないと思うけど…。

「使え」

「！？」

私の迷いを見透かしたかのように、仮面の男が短く告げる。使えって…、この人、あのことを知っている！？

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

「でもあれは…」

闇の書に保存された魔法を使えば、この結界を破ることが出来る。だがその消費した魔力分、ページが白紙に戻ってしまう。

「使用して減ったページはまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かろう？」

「！！」

確かに消費したページは、リンカーコアを蒐集すれば補充が利く。
でも、シグナムは？ヴィータは？ザフィーラは？

「……」

閉じた目を、ゆっくりと開く。覚悟は、決まった。後は、私次第。

『みんな、今から結界破壊の砲撃を撃つわ！！うまくかわして、撤退を！！』

『『『おうっ！！』』』

「何者だ！！連中の仲間か！？」

僕は眼前に立ち塞がる、仮面の男を見据える。ほぼ一切の気配もなく現れたこの男、かなり出来る魔導師だ。

「……」

対し相手は沈黙を貫く。急襲されたこともあり、苛立ちが募っていくのを感じる。

「答えろ！！」

だが、その沈黙を切り裂いたのは、

「闇の書よ、守護者シャマルが命じます。眼下の敵を打ち砕く力を、今、ここに！！」

あの守護騎士の声だった。足元に翠色の魔法陣を展開し、大型魔法の発動に必要な詠唱を開始している。

「っ！？」

闇の書から弾けた黒い雷が上空へ昇り、黒雲と紫電が渦巻く。マズい、止めないと逃げられ、

「はあああああっ！！」

「があああああっ！？」

が、僕のそんな思考は再度の蹴りによって遮られた。凄まじい速度で放たれたそれは、衝撃と共に僕を地面すれすれにまで落下させる。

「今は動くな」

どうにか体勢を立て直した僕を見下ろし、男が命令する。

「時を待て。それが正しいとすぐにわかる」

「何…！？」

時を待て？すぐにわかる？一体どういう意味、

「撃って、破壊の雷！！」

《Ｇｅｓｃｈｒｉｅｂｅｎ》

シャマルの声と同時、上空に集束した雷が弾けた。紫色の魔力の奔流となったそれは、光と衝撃と共に結界にぶち当たる！！

「しまっ…！！」

僕が慌てて上昇しようとした瞬間、

――――結界が、砕けた。

「天城、テスタロッサ、済まん。この勝負、預ける」

「シグナム！？」

砕けた結界を見上げながら、シグナムが踵を返す。

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士、ヴィータ。あんたの名は？」

「なのは。高町なのは」

少し離れた所ではヴィータとなのはが名乗り合っている。そういやきちんと名前聞くのは初めてだな。

「高町なにょ…、にゃ…、ええい呼びにくい！！」

「逆ギレ！？」

ガキかっての。やっぱヴィータバカだろ、うん。

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すかんな、ぜってーだ！！」

「あ、えっと、ヴィータちゃん！？」

呼び掛けるなのはを尻目に、ヴィータは飛び去って行く。

「逃がさないっ！！」

が、フェイトが動いた。ハーケンフォームのバルディッシュを構え、シグナム目掛けて突っ込んでいく。

「！？」

シグナムが振り返るが時既に遅く、フェイトはバルディッシュを振り下ろす！！

ギィン！！

「「「「「！？」」」」」

が、その攻撃は止められた。

――バルディッシュによく似た、デバイスによって。

「な…」

フェイトが蒼白な顔で、バルディッシュを受け止めた少女を見遣る。

水色の髪に、ピンクの瞳。漆黒のバリアジャケットを纏ったその姿は、

――フェイトに、瓜二つだった。

「ブラスト、ファイアー！！」

「！？」

が、それだけでは終わらなかった。なのは目掛けて桜色の砲撃が、遠距離から叩き込まれた！！

「かわしましたか。さすがですね」

そう言いながら砲撃を放った少女が、俺達の前に姿を現す。

――――それは、第二のなのはだった。

なのはのものと同じ、ただし真っ黒なバリアジャケットを纏い、黒と紫でカラーリングされたレイジングハートを構えた、茶髪の少女。

髪型こそ違うが、間違いなくなのはだ。

「な…、んで…」

「守護騎士達、退きなさい。私達の用があるのは、あの三人だけです」

驚愕に固まるなのはを尻目に、なのはにそっくりな少女がシグナムに声を掛ける。三人…、俺達のことか！？

「…感謝する」

シグナムが呟きと共に飛翔し、フェイトにそっくりな少女がバルディッシュを弾く。

「別に、助けるつもりはなかったけどね」

その少女が口を開き、そんな言葉を口にする。こいつら、一体…！？

「さて、初めまして。私は星光の殲滅者、マテリアルSといいます」

「ボクは雷刃の襲撃者、マテリアルL」

呆気に取られる俺達を尻目に、二人が自己紹介を始めた。明らかに本名ではない。バルディッシュをいとも簡単に受け止めたこともあるし、警戒するに越したことはなさそうだ。

「ああ、覚えていただかなくても結構ですよ」

と、俺の思考を遮るように、星光の殲滅者が向き直る。

「何故ならあなた達は、高町なのはとフェイト・テスタロッサは」

そう言いながら彼女はデバイスの杖を構え、

「ここで死ぬのですから」

――――そう言った。

「「「!?」」」

ここで…、死ぬ…!?

「パイロシューター!!」

あまりにも衝撃的な発言に固まった瞬間、彼女が動いた。なのはのアクセルシューターに似た弾丸を、俺達目掛けて放ってくる。

――――違いを挙げるとするならば、弾数が倍近く多いことくらいか。

「くっ、散開！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのはとフェイトに指示を飛ばすと同時、カートリッジの魔力を起動。二十発の弾丸を生み出し、パイロシューターを相殺する。

「いいんですか？未知の敵を相手に戦力を分散させて」

星光の殲滅者がそんなことを聞いてくるが、

「俺の教え子達は…、そんなに柔じゃねぇよ！！」

俺はきっぱりと答え、爆煙で塞がれた周囲に視線を巡らせた。

「レイジングハート！！」

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

私はあまりの出来事に戸惑いながらも、レイジングハートに命じ弾丸を放つ。

「パイロシューター」

対し私にそっくりな少女は冷静に、桜色の弾丸を生成した。

「シュート」

アクセルシューターの倍近くの量を誇るパイロシューターが私の弾丸を打ち消し、視界いっぱいに広がる。

「くっ…！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ》

強化されたプロテクションで身を包むも、私のものと同じ色をした弾丸は容赦なく、バリアを刈っていく。

「なるほど、これは固い…」

と、少女が呟きながら、杖を私へと向ける。

「行きますよルシフェリオン。ブラスト…！！」

レイジングハートにそっくりなデバイス、ルシフェリオンの先端に魔力が集束していく。それはまさしく、私のディバインバスターと同じもので…、

「ファイアー！！」

放たれた砲撃が、プロテクションを粉々に砕いた。

「っ！？」

マズい、まずは距離を、

「遅い」

《Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ》

が、一瞬で距離を詰めた少女が、魔力を纏ったルシフェリオンを私目掛けて振り下ろす！！

《Ａｘｅｌ　Ｆｉｎ》

レイジングハートが翼を展開、間一髪のところで攻撃を避け、

「油断大敵、知ってます？」

「っ！？」

移動した先には、既に少女が待ち構えていて。

「ブラストファイアー！！」

私は、桜色の砲撃に呑み込まれた。

「くっ…！！」

なんなのだろう、この敵は。私と同じ姿、同じデバイス、同じ能力。どこまでもそっくりなそれは、かつての私を、プロジェクトＦを思い出させる。

「電刃衝！！」

が、眼前の少女はお構いなしに、プラズマランサーによく似た雷撃

を放ってきた。

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

バルディッシュの声と同時、向こうと同じ八発の雷条が空を駆ける。

まずは相殺して対策を考えないと、

「甘いよ」

が、電刃衝はプラズマランサーを貫通し、勢いを弱めることなく私へと襲い掛かって来た！！

「っ！？はあっ！！」

そのことに驚愕しながらも、私はハーケンフォームのバルディッシュを振るい、電刃衝を相殺する。

「まだまだぁ！！」

「っ！？」

背後からの声と同時、振り返りながらバルディッシュを両手で構えた。バルディッシュによく似たデバイスを受け止め、至急距離で睨み合う。

「まぁ確かに、潜在能力は申し分ないんだけど…。君には迷いがあり過ぎる」

そんなことを呟きながら、少女はぐいぐいと鎌を押し込んでくる。

「そんな刃じゃ、ボクとバルニフィカスは止められない！！」

均衡が崩れた瞬間、私は思いっ切り吹き飛ばされる。

「光翼斬！！」

更に追い撃ちとばかりに、アークセイバーによく似た斬撃を飛ばす少女。

「くっ！！」

とっさにバリアを張るも相殺しきれず、

「きゃあっ！！」

私は地面に落下した。

「くっそ…！！」

後続の新手を警戒し、戦闘に加わらなかった俺は歯噛みする。ああは言ったが結果はあの様。姿形だけでなく魔法も戦い方も同じあの少女達。それだけに一つ一つの技術の熟練度が技に出て、あそこまでの差が出ているのだ。

「早くフォローに…、っ！？」

飛び出そうとした瞬間、それを感じた俺は振り返る。

「ほう…。うぬは多少出来るようだな」

その先にいたのは、

「はや…、て…？」

黒と紫を基調とした甲冑のようなバリアジャケットを身に纏い、身の丈と同等の長さの巨大な杖と、紫色の魔導書を携え、肩までの銀髪を風に揺らすその少女は、

――――図書館で出会った、あの少女にそっくりだった。

「はやて？知らんな。我はそんな名前ではない」

「お前は…、誰だ」

首を傾げる少女に向けて、俺は呆然と尋ねる。

「我が名は闇統べる王。マテリアルDだ」

対し少女は傲慢に、不遜な態度で名前を名乗る。マテリアル。先程の少女達、なのはとフェイトに似た少女も言っていた言葉だ。

「…聞き方を変えようか。お前は…、お前達は、何者だ」

「我らは終焉を齎す者。高町なのはとフェイト・テスタロッサに、死と絶望を送る者だ」

低い声で聞き返した俺に、闇統べる王は悪意ある笑みを浮かべながら答えた。

「…死と絶望、だと？」

俺を救ってくれたあの少女を、俺を兄と慕ってくれるあの少女を、殺す？ふざけるな…。ふざけるな…！！

「絶対に、やらせない！！」

アクセルを構えながら、闇統べる王を鋭く見据える。こんな訳のわからない奴らに、二人を殺させる訳には絶対にいかない。

「威勢がいいな。だがもう決着のようだぞ？」

「だったら…！！」

あくまで余裕を崩さない彼女に対し、俺はカートリッジをロードしたアクセルを振りかぶる。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

「っ！？」

グラビティバースト。重力の衝撃波を発生させる攻守兼用、移動も出来る中級魔法。

「だったら俺がひっくり返してやる！！」

衝撃波を利用し加速した俺は、眼下の四人目掛けて加速した。

「くっ…、う…」

「けほっ…、こほっ…」

私達はふらふらと立ち上がり、上空に浮かぶ少女達を見上げる。

「やれやれ、呆気ないね二人して」

「まあ、私達は彼女達を元に作られていますからね。彼女達以上のスペックを持たなければ、それこそ生まれてきた意味がありません」

バルニフィカスを担いだ雷刃の襲撃者の落胆したような呟きに、ルシフェリオンを手にぶら下げただけの星光の殲滅者が答える。作られた…？一体どういう…、

「ま、そうだけどね」

ちらっと私達を見下ろし、嘲りの笑みを浮かべる雷刃の襲撃者。私と同じ顔なのに、全く違う表情を見せる少女。

「トドメは任せます。しっかりお願いしますね」

「え、ボクがやるの？」

私達を冷静に見下ろしていた星光の殲滅者の言葉に、雷刃の襲撃者は嫌そうに顔を歪める。

「私は弾幕を張るタイプの砲撃魔導師ですから。あなたの方が消耗も少ないでしょう」

「わかったよ…。でも、心配いらないと思うよ？」

溜め息混じりにバルニフィカスを掲げると同時、鎌が大剣へと姿を変える。雷の力が集まっていき、簡単に人を殺せるだけのエネルギーが漲る。

「だってこの技で、跡形もなく消滅するんだから！！」

雷刃の襲撃者は、巨大な大剣を振りかぶり、

「雷神滅殺！！極光斬！！」

掛け声と共に、振り下ろした。

（あ、私達、死ぬんだ）

スローモーションになっていく視界の中、そんなことを考える。脳裏を過ぎるのは、お兄ちゃんの顔。人間は死ぬ時に走馬灯を見るらしいけど、私の記憶はお兄ちゃんばっかりみたい。

「ナツキ君…」

隣のなのはも同じなのだろうか。お兄ちゃんの名を呼んで、ギュッと目を閉じる。

「お兄ちゃん…」

つられて呟いた私の目から、一滴だけ水滴がこぼれ落ちる。私もなのはも、まだこんなところで終わりたくない。

――――死にたく、ない。

「「助けて…っ！！」」

半年前と同じように、今度は二人で呟かれたその言葉に、

「蜃気一閃！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｚａｍｂｅｒ！！》

――楽園の守り手は、答えた。

「くっ…！！あと一歩だったところを…！！」

大剣を引き、忌ま忌ましげに顔を歪める雷刃の襲撃者をよそに、俺は二人に駆け寄る。

「なのは！！フェイト！！」

「ナツキ君…」

「お兄ちゃん…」

呼ばれた二人は呆然とした後、脱力したように笑みを浮かべる。

「あは…、やっぱりナツキ君、すごいや…」

「呼んだらホントに…、来てくれるんだもん…」

緊張の糸が切れたのか、倒れ込む二人を支え、そっと地面に寝かせる。コートを脱ぎ捨て枕代わりに二人の頭の下へと敷き、ゆっくりと立ち上がる。

「…アクセル」

俺は二人をここまで追い詰めた少女達を見据え、静かに呟く。

「やるぞ。守る為に。…超重力電磁砲を」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ガシュンガシュン！！と音を立て、カートリッジが三発ロードされる。今手元にあるカートリッジ全てを費やし、あの二人を、潰す。

「やれやれ、やはりこうなりましたか」

足元と正面に銀色の魔法陣を展開する俺を見て、星光の殲滅者が溜め息と共に一歩前に出る。

「仕方ありません。私も使いましょう。…ルシフェリオンブレイカーを」

彼女がルシフェリオンを振りかぶると同時、俺と同様足元と正面に魔法陣が展開される。

「星を束ねる二つの力よ、我が剣に宿り、災厄を終焉（おわ）らす光となれ！！！」

「集え、明星。全てを焼き消す焔となれ！！」

互いに詠唱を終えると同時、銀色のレールが展開され、桜色の魔力が渦巻く。ああ、そうだろうよ。なのはと同じなら、それを使う可能性だって予測出来てた。でも、今ここで退く訳にはいかない。半年前とは違う。今の俺には、守りたい人達がいる!!

「グラビティィィィィッ!!レールガンッ!!」

「ルシフェリオンッ!!ブレイカァァァァ!!」

そして切り札は、同時に放たれた。穿ち貫く白銀の球体と全てを打ち砕く桜色の砲撃がぶつかり合い、激しく火花を散らす。このままでは相殺するのがいいところだろう。が、

「ナ…、メるなあああああっ!!」

全ての魔力を加速に回し、グラビティレールガンが、ルシフェリオンブレイカーを、

――――貫いた。

「アクセルッ!!」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓａｂｅｒ》

刃を重力でコーティングし、全速力で駆け出す。相手はどちらも大技で消耗した状態、だがこちらはカートリッジを消費した分、まだ余力がある!!

「これで、最後…、っ!?」

瞬間、俺はそれを感じ取った。
――――感じ取って、しまった。

「ふん。詰めが甘いな」

恐る恐る上空を見上げた俺の目に映ったのは、
――――純白の、魔法陣。

「確かにうぬはよくやった。己が出せる全力を尽くし、その二人を守りきった」

その魔法陣を展開している彼女、闇統べる王は労るような、小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、俺を褒め讃える。

「だが、我はまだ何もしていない。この意味がわかるか？」

ああわかるさ。痛い程によくわかる。今この場を埋め尽くしている重厚な魔力こそが、その答えだ。

「行くぞ、エルシニアクロイツ」

杖に呼び掛けながら正面にベルカ式の魔法陣を展開し、三角形の頂点の三点に魔力を集束させていく。

「絶望に足掻け、塵芥」

ニヤリと笑った彼女は杖、エルシニアクロイツを振り下ろし、

「エクスカリバー！！」

――――砲撃を、放った。

「…やり過ぎでは？」

「ふむ、ちと加減を見誤ったか」

「これ三人共死んだんじゃないの？」

純白の砲撃が穿った地点を見遣り、私達は言葉をかわす。マズいですね…、二人はともかく天城ナツキに死なれると、かなり困ったことになります。

「誰が…、死んだって…？」

と、私の思考に答えるかのように彼、天城ナツキが姿を現した。デバイスを構えた右手は血で真っ赤に染まり、バリアジャケットもボロボロ。…まぁ、魔力がほとんど残っていない状態で、アレを喰らったにしてはまだマシな方、

「スティンガーブレイド！！」

瞬間、私の思考を遮るように、水色の刃が襲い掛かる。

「…ルシフェリオン」

私はデバイス、ルシフェリオンに命じ、三人分のプロテクションを張り防御。視線を向けると、天城ナツキの正面に管理局の少年が立っていた。…どうやら彼のようですね。

「フェイト！！なのは！！ナツキ！！大丈夫かい！？」

「待ってて！！今治癒魔法を…！！」

更に天城ナツキの周辺に、少年と少女が姿を現す。…そろそろ、引き際ですか。

「退きますよ二人共。これ以上は無駄骨です」

「ま、魔力も残ってないしね」

「妥当なところであろう」

私の指示に、二人はあっさりと従う。…確かに色々と噛み合いは悪いですが、公私混同をしない点はありがたいですね。私が苦労するので。

「それでは天城ナツキ、いずれまた」

「そっちの二人も、次は殺すからねー」

「精々足掻け、塵芥共」

三者三様の言葉を残しながらデバイスを振るい、私達は転移した。

「…ん」

私は頭を振り、起き上がって周囲を見回す。私…、なんでこんなところに…、

「…う」

と、隣で寝ていたフェイトちゃんも頭を押さえ、ゆっくりと起き上がる。一体なんで…、

「「……っ！？」」

顔を見合わせた瞬間思い出す。私達にそっくりな少女と、助けに入ったナツキ君。…じゃあ、その後は？

「…無事、みたいだな」

「「……っ！！」」

声の方に視線を向け、私達は絶句した。全身が傷だらけで、右手から大量に血を流しながらも、ナツキ君は微笑む。

「よかっ…、た…」

それだけを言い残したナツキ君は、

――――ドサリ、と。地面に崩れ落ちた。

――――地面に投げ出されたアクセルの金属音が、やけに耳に残った。

第六話「宿敵」（後書き）

…うわぁｗ
何これフルボッコｗ
強化後なのにボッコボコにされましたよ三人共。こんなだからチートだのなんだの言われるんｄ（ｒｙ

さて次回は…、ゴメンナサイ。
性懲りもなく糖分回ですｗ

第七話「主人」（前書き）

はい七話です。
性懲りもなく糖分回だよ！ｗ
誰か俺に「自重」をインストールしてくれよ！ｗ
…ごほん。すみません。取り乱しました。
ではどーぞー

第七話「主人」

「限界だったのよ。彼の体は」

自室のベットに横たわるお兄ちゃんを見遣りながら、リンディ提督が語り始めた。

「ＰＴ事件であれだけのことを成し遂げたにも関わらず、フェイトさんの面倒を見ながら裁判に出席、更にその資料制作に加えてクロノやフェイトさんと模擬戦。そんな生活を半年も続けていれば、誰だって倒れるわ」

「しかも裁判が終わった矢先に今回の闇の書事件。デバイスを壊されなのはも負傷。そんな一時も気が休まらなかった状態で、今日の戦闘と上級魔法たるレールガン。身体も精神（こころ）もボロボロだったんだよ」

リンディ提督の説明を引き継ぎ、ユーノがぎりぎりと歯を食いしばる。防御と補助が専門の結界魔導師だからこそ、悔しさも人一倍のはずだ。

「幸いユーノが最低限の治癒魔法を掛けたお陰で最悪の事態は免れたが…、こんな状態であれだけの魔法を使えば、身体が魔力に耐え切れず自壊してしまう。よく持ちこたえられたな…」

「使った後も砲撃魔法を防ぐ為に防御結界。あたしとユーノが間に合わなかったらと思うとぞっとするね…」

クロノが苦々しげに呟き、アルフも顔を歪める。アースラで寝食を

共にしながらも、お兄ちゃんの限界に気付けなかったことが悔しいのだろう。

「ナツキ君…」

なのはが心配げにお兄ちゃんの名を呼んで、そっと手を握る。闇の書事件の発端とも言える彼女だからこそ、罪悪感を感じているはずだ。…だけど、

――悪いのは、私だ。

PT事件も裁判も、資料制作も模擬戦も。元はと言えば私のせい。お兄ちゃんの性格を考えれば、自分を省みず他人の為に頑張るお兄ちゃんの性格を考えれば、予想出来たはずなのに。こんな状況でもお兄ちゃんなら「んな訳ねーよ」と笑いながら頭を撫でてくれるであろうことも予想出来るのに、どうして…。

「ダメージよりも疲労の方が激しいらしいから、しばらく安静にしていれば問題ないそうよ」

不幸中の幸いね、とリンディ提督が表情を緩め、クロノと共に部屋を後にする。

「それじゃ、あたし達も近くで待機してるから」

「容態が変わったりしたらすぐ呼んで」

アルフとユーノもそう言い残し、部屋から出て行った。残ったのは、三人だけ。

「なのは…」

「フェイトちゃん？」

振り返った彼女に、私は頭を下げる。

「ごめんね、私のせいで…。私がいなければ、こんなことには」

パンッ！！

謝る私の頬を張り飛ばし、なのはが呆然とする私を睨みつける。

「次そんなこと言ったら、本気で怒るよ」

そう呟きながらしゃがみ込み、倒れ込んだ私と目線を合わせる。

「ナツキ君は喜んでたんだよ。俺なんかでも誰かの支えになれた、って。フェイトちゃんを助けられて、本当によかった、って」

「っ！？」

お兄ちゃんは目の前でユキを亡くしたから、誰かの力になることに異常なまでの執念を見せる。そしてその対象が…、私…？

「それなのにフェイトちゃんは、そんなナツキ君の想いを無駄にするの？ナツキ君が命懸けで助けたフェイトちゃんを、自分勝手な思い込みで無価値にしちゃうの？」

「…ずるいよ」

ホントにずるい。そんな風に言われたら、お兄ちゃんが大好きな私は。

「…なのは、強くなろう」

――――頑張るしか、ないじゃないか。

「うん、私も強くなる。そして逆に、私達でナツキ君を守っちゃおう？」

「あはは、もしそんなことが出来たら…、素敵だね」

私達は拳をぶつけ合い、そんなことを呟く。一方的に寄り掛かるだけじゃ、ダメだから。私達が、この頼もしくも危なっかしい少年を支えないといけない。

「とりあえず、看病しよっか」

「うん。交代で寝ればずっとついていられるし」

看病の役割分担を決めながら、私達はその決意を固めた。

――――今度はきっと、私達で守る、と。

「あはは、おいでおいで」

私はニコニコ微笑みながら、寄って来た猫を抱き上げる。

「すずかちゃん家のにゃんこはみんなええ子やなぁ…」

「うふふ…」

気に入ってくれたことが嬉しいのか、ベットに腰掛けたすずかちゃんもニコニコ笑っている。あったかいなぁ…。

「せやけどごめんな。急にお邪魔してもうて」

「ううん、全然。来てくれて嬉しいよ」

そんな感じでおしゃべりを楽しんでいると、ポケットに入っていた携帯が震え出し、着信を知らせる。ディスプレイの表示は八神家。家からやな。誰やろ?

『もしもし私です、シャマルです』

出てみると相手はシャマルだった。今私が月村家にいるのは、シャマルが途中でみんなを探しに行ったから。一人帰宅し準備を終え、さてどうしようかと思ったらすずかちゃんが招待してくれたのだ。

『はやてちゃん、ホントに、ホントにごめんなさい!!すぐ済むと思ってたんですけど、みんなとなかなか落ち合えなくて…。携帯も置いてっちゃってて、それで時間掛かっちゃって…。みんな一緒に今帰って来たんですけど…。その…、なんて謝っていいか…』

あの後どうなったのか尋ねようとすると、シャマルはいきなり謝り始めた。ペコペコと頭を下げる様子が容易に想像出来て、思わず笑ってしまう。

「ふふっ、ほんならよかった。全然怒ってへんよ、平気や。謝らんでええって」

『ホントにすみません…』

尚も謝るシャマルを遮って、私は話を続ける。

「すずかちゃんと二人で鍋はちょお寂しかったし、すずかちゃんが誘ってくれて、招待された。それだけやから」

ちらっとすずかちゃんを見ると、相変わらず笑顔のままだった。ほんま優しい子やなぁ…。

「晩御飯はすずかちゃん家でご馳走になった。冷蔵庫に材料切って入れてあるし、お出汁も鍋に取ってあるから、すぐに食べられるよ。みんなで食べてな」

『はい、ホントにすみません…』

このままだとシャマルはずっと自分を責め続けそうだ。ここは自然に話題を変えるとしよう。

「あ、そや。他のみんなに代わってくれるか？」

『はい、じゃあヴィータに…』

「はやて…？もしもし…」

「寂しい思いを、させてしまったな」

ヴィータに受話器を渡し外に出た私に、近寄って来たシグナムが話

し掛けてくる。ただでさえ最近一緒にいることが少なくなってるのに…。悪いことをしちゃったわね…。

「それにしても、お前を助けた男は一体何者だ？」

「わからないわ…。少なくとも、当面の敵ではなさそうだけど」

管理局の少年クロノを蹴り飛ばし、私を窮地から救ったあの仮面の男。闇の書の完成を望んでいる？いや、まさか…。

「管理局の連中も、これでますます本腰を入れてくるだろうな」

「あの砲撃で、大分ページも減っちゃったし」

これからますます蒐集がしづらくなるであろうことは想像に難くない。だが、やらない訳にはいかないのだ。

「あまり時間もない。一刻も早く、主はやてを闇の書の真の所有者に」

シグナムも同じ考えのようで、空を見上げながらその言葉を口にする。

「そうね…」

「シグナムー、はやてが代わってって」

頷く私をよそに、ヴィータがシグナムに呼び掛ける。私も戻って、ご飯の支度でもしましょう。

「ああ。…もしもし、シグナムです」

シグナムの声をＢＧＭに、私は台所へと向かった。

「……ん」

体を起こし、ゆっくりと起き上がる。カーテンが引かれていてわかりにくいが、どうやら朝方のようだ。

「…何時だ？」

《Ｉｔ　ｉｓ　ｔｅｎ　ｏ'　ｃｌｏｃｋ（１０時だ）》

独り言だったはずの呟きは、枕元から返された声によって会話となる。聞くまでもない、アクセルの声だ。

「そうか１０時か…、１０時！？」

今日は平日。学校が始まるのはだいたい９時。それが指し示すことはつまり、遅刻。

《Ｑｕｉｅｔｉｎｇ　Ｍａｓｔｅｒ．Ｉｔ　ｉｓ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｔａｔｅ（落ち着け主人。その体では無理だ）》

「だからって…」

このまま寝ている訳にもいかず、俺は体に褐を入れ布団を跳ね退け

ようとする。

《Ｌｏｏｋ　ａｔ　ｔｈｅ　ｕｎｄｅｒ（下を見てみろ）》

「下？下に何が…」

言われて見下ろした先にいるのは、

――布団に潜り込んで熟睡しているなのはとフェイトだった。

「…は？」

二人はすやすやと寝息を立てて、気持ち良さそうに眠っている。あれ？何この状況。俺って確かエクスカリバー喰らって倒れたんじゃ…。

「起きたみたいだね」

「ユーノ？」

空気を読んだかのように扉が開き、お盆を持ったユーノが入って来る。

「ああ、大丈夫だよ。なのはの両親と学校には、リンディさんが連絡したから」

「いやまぁそれは助かるんだが。これどういう状況？」

寝起きということもあるが全くもって訳がわからないので、ユーノからスポーツドリンクが入ったコップを受け取りながら尋ねてみる。

「あの砲撃が撃たれた瞬間、僕とアルフでとっさにカットしたんだ。そしたらあの三人は転移しちゃって、なのはとフェイトの無事を見届けてから倒れたのは覚えてる？」

「…そういやそうだったな」

魔力を限界まで放出した為か、頭に靄が掛かって思い出すのに時間が掛かった。そうそう、一安心したら急に目の前真っ暗になったんだっけ。

「で、なのはとフェイトがナツキを担いで帰って来て、二人が看病することになったんだ」

「待て。途中でなんかおかしくなったぞ今」

空になったコップを返しながら突っ込む。なんか小学校卒業と同時に高校に入学くらいの違和感があったんだが。

「責任感じてたんだろうね。二人で頑張ってたんだけど、ついさっき寝ちゃったみたい」

「…通りで」

俺がユーノと喋ってても起きない訳だ。労るように頭を撫でてやると、無意識なのか二人がギュッと抱き着いて来た。…おい。

「ホント、凄く好かれてるよね」

「むしろなんでここまで懐かれてんの俺」

苦笑いするユーノに、溜め息混じりに言葉を投げる。二人揃って、見る目がないというか何と言うか…。

「…で、状況は？」

頭を撫でつつも思考を切り替え、ユーノに尋ねてみた。

「ナツキが寝てる間に、クロノやエイミィさんが纏めてくれた。デバイスの説明と合わせて、今夜話すって」

そんな俺に苦笑しながらも、顔付きを少し厳しくしたユーノが答える。なんだかんだでそのまま出撃してたけど、カートリッジ搭載後の説明とかほとんど全く聞いてなかったからなぁ…。

「それじゃ夜まではフリーか…。街の巡回か訓練でも…」

「ストップ」

方針を纏めつつぶつぶつと呟く俺を、唐突にユーノが遮った。

「ナツキにはリンディさんから直々に命令が来てるよ」

「なんだ？厄介なヤマか？」

アースラに乗っていた際Sランク魔導師である俺を頼ってか、ちょっとばかり厄介な依頼が回って来たことがある。嘱託試験で評価されるし、同行させたフェイトにもプラスになると思って引き受けたが、また何かあったのだろうか。

「天城ナツキは今日一日、何もしないこと。…だそうだよ」

「…は？」

何を言っているのかあの甘党は。遂に脳が糖分でダメになったか。

…いや、ある意味元からか。

「ただでさえ根詰め過ぎだったんだから、今日一日でゆっくり休養を取ること。だってさ」

ユーノが呆れたように笑い、その「命令」を告げる。…なんともまぁ、ふざけた命令だな…。

「…半日近く寝たんだ、別にもう大丈…」

「じゃあ聞くけどここ最近、睡眠時間はどれくらい？」

遮り質問して来たユーノから視線を逸らし、睡眠時間の計算を始める。

「…一日三～四時間？」

「どんな十歳児だよ…」

呆れるユーノに心の中で謝る。ゴメンサバ読んだ。実際はもっと少ない、と思われる。

「ともかく、今日は何もせず回復に徹すること。わかった？」

「いや、だけど…」

それでも居候の身で何もしないのは気が引ける。せめて家事くらいは…、

「じゃなきゃナツキがまた倒れて、なのはとフェイトが泣いちゃうかも…」

「全力で養生させていただきます」

考える前に即答しました。いや、だって…、ねぇ？二人の泣き顔に勝てる訳もなく。こうなっては選択肢は一つしかない。

「…ホント、二人には甘いよね…」

「わかってるから言わないでくれ…」

自覚はしてるんだ、一応。ただ歯止めが利かないってだけで。…俺、シスコンじゃなくてロリコンなのかなぁ…。どうもユキと暮らしていたせいか、年下の女の子に甘い気がする。

「…まぁそういう訳だから、ゆっくり休むといいよ。何かあったらクロノ達が動いてくれるし」

「…わかったよ」

部屋から立ち去るユーノを見送り、俺はゆっくりと身を横たえる。眠気もない為、ただ単に寝転がっただけだ。

「ん…」

「う…」

と、二人がほぼ同時に寝返りを打ち、俺を挟むようにピッタリとくっついて来た。ここまでくるともはや習性とか本能レベルで染み付いているんじゃないかと思えてくる。

「…グラビティフォール、やれるか？」

《Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ（当然）》

アクセルに頼み、本棚から適当に本を数冊取って貰う。睡眠は取れた訳だし、おとなしく読書でもしますかね。

「…そういや、こんなまったりしたの久しぶりだな」

下手するとユキが死んでから初めてかもしれない。過労死でもするつもりだったのか俺は。

「…人の事言えないな、こりゃ」

たまには休めとユキに説教していたくせに、自分自身はこの有様だ。笑い話にもならない。

「…まぁ、とりあえずくつろぐかな」

苦笑と共に本を開き、俺はページをめくり始めた。

「……」

「「……」」

壁を背に後ずさるナツキ君に、私達はじりじりと距離を詰める。扉は最も遠い対角線上、唯一脱出の可能性がある窓への距離も数ｍ。この距離なら、逃げられない。

「ふふふ…、もう逃げられないよ、ナツキ君…」

「お兄ちゃんが悪いんだからね？私達のこと、よくわかってたはずなのに…」

部屋の隅に追い詰められたナツキ君に、笑顔で最終宣告。ナツキ君は冷や汗を流しながらも、必死に抜け道を探している。

「くっそ…」

どんな状況でも諦めず、活路を開いて来たナツキ君が、その目を閉じた。自らの敗北を、認めるかのように。

「ふふふ…、覚悟はいい…？」

フェイトちゃんが目を妖しく輝かせながら、それを私に差し出す。

「さあ…、年貢の納め時なの！！」

受け取った私は、それをナツキ君に向けて差し出し、

「はい、あーん♪」

満面の笑顔でそう言った。

「……あーん」

ナツキ君は嫌そうに顔を歪めながらも、口を開きそれ、フォークに刺さった林檎を頬張る。

「えへへ、おいしい？」

「…おいしいです」

ニコニコ尋ねる私に、ナツキ君が溜め息混じりに答えた。

「なのは、今度は私の番だよ」

と、私の後ろで待機していたフェイトちゃんが前に出て、林檎が盛られたもう一つの皿からフォークで選別した林檎を差し出す。

「お兄ちゃん、あーん♪」

「……あーん」

渋々といった感じで林檎を食べたナツキ君を見て、フェイトちゃんが幸せそうな笑顔を浮かべる。わ、背景にお花畑が見えそう。

「…何故俺は部屋の隅に追い込まれた挙句、年下の少女達に林檎を差し出されているのだろう」

何か疲れたように溜め息をつき、ぶつぶつと呟くナツキ君。

「なんでって…」

「看病してるから…、だよ？」

私達はニコニコと答え、林檎にフォークを突き刺す。看病の最中なのに二人揃って寝てしまった為、今度は挽回しようと張り切っているのだ。手始めにさっき二人で剥いてきた林檎を、ナツキ君に食べさせてあげようと思ったんだけど…。

「林檎くらい自分で食えるっつーの…。衰弱した病人か俺は」

ナツキ君は尚も不満げに呟いています。おかしいなぁ…、お母さんにこうすれば喜ぶって聞いたのに…。

「私達が看病してるんだから、お兄ちゃんはゆっくり休む義務があるの」

フェイトちゃんが珍しく強い口調で言い切る。ホント好かれてるなぁ…。人の事言えないけど。

「いやだからといって休むことと看病はイコールじゃないだろ」

「甘いのナツキ君」

反論するナツキ君に、私はびしっと指を差す。

「私達は今までナツキ君に助けられて来たから、今日その恩を返す義務があるの」

半年前からずっと、私達はナツキ君に助けられてばっかりだった。だからこんな時くらいは、素直に私達を頼って欲しいと思う。

「…ダメ？」

私の言葉とフェイトちゃんの上目遣いに、ナツキ君は頭を掻きむしって、

「…好きにしてくれ」

――――そう答えました。

「…ちなみに、いつまで続くのこれ」

続けたナツキ君がベットを、正確にはベットに置かれたトレーに載せられた、大量の林檎を見ながら恐る恐る尋ねる。ちょっと気合いを入れ過ぎちゃって、二人合わせて十個程剥いてしまったのです。

「それはもちろん…」

「なくなるまで、だよ」

「…はぁ」

当然だと言わんばかりにニッコリ答えた私達に、ナツキ君はまたまた溜め息。

「せめてお前らも食え…。俺一人じゃ無理がある…」

諦めたように呟き、ひょいと皿から林檎を取りもぐもぐ食べるナツキ君。

「「はーい♪」」

まあそれなりに堪能出来たしいいかな、と二人で返事。フォークに刺さったままの林檎をパクッと頬張る。うん、おいしい。

「あ…」

と、私達を見たナツキ君が一瞬固まる。…何かあったのかな？

「どうしたの？」

「いや、なんでも…」

尋ねたフェイトちゃんにどもりながら答えるナツキ君。どうも腑に落ちなかった私達は、彼が視線を逸らす瞬間見ていた一点、私とフェイトちゃんの手元に視線を落とす。

「「あ」」

そこに握られているのはフォーク。さっきまでナツキ君に林檎を食べさせていた、私達が林檎を食べるのに使った、フォーク。

「こここここ、これって」

「か、かかかかかかん、かんっ」

――――間接キス！？

「「…きゅう」」

そこまで思い至ってしまった私達は、顔から湯気を出しながら倒れ

込む。

「…うおい」

ナツキ君が脱力してツッコミますが、私達にとっては一大事なのです。

『なななな、ナツキ君と、そんな、あわわわわわ…！！』

『おおおお、お兄ちゃんと、間接とはいえ、きききき、キス…！！』

あまりの動揺と衝撃に念話のリンクが開いてしまったことにも気付かず、私達の頭の中で訳のわからない思考が回り続ける。

「ふにゃ…」

「あうぅ…」

「…はぁ」

溜め息をついたナツキ君がぐるぐると目を回す私達を抱え上げ、ベットにそっと寝かせてくれました。

「なんで俺が看護する側に回ってるんだろうな…」

オーバーヒートした私達の額に、程よく冷えたスポーツドリンクをペチッと当てるナツキ君。

「え、嘘？一瞬で温くなったんだけど。…氷取って来るか。…ある

といいけど」

溜め息と共にナツキ君が、キッチンから袋に入れた氷を持って来た。氷水の入ったそれを、私達の額に軽く沿える。

「…なんなんやねん」

結局私達がマトモな会話が出来るようになったのは、お昼過ぎのこと。ちなみに剥き過ぎた林檎は、ナツキ君が全部食べてくれました。…ごめんなさい。

「よっ、と」

なんとかお兄ちゃんとの…、その…、か、間接キスのショックから立ち直った私達は、キッチンでフライパンから焼きそばを盛りつけるお兄ちゃんを眺めていた。

「ほい、手抜きで悪いけど昼飯な」

危なっかしいから俺がやる、とお昼ご飯の準備を買って出たお兄ちゃん。ソースの程よく絡まった麺や具材、香ばしい香りが食欲をそそる。これで手抜きと言われても全く説得力がない。

「んじゃ、いただきます」

「「いただきまーす」」

見た目から想像出来る通り、味も一級品だった。お兄ちゃんはきっ

といいお父さんになるんだろうなぁ…。
――お父さん？じゃあ、相手は…、

「ん？フェイト、顔赤いぞ？大丈夫か？」

「あ、う、ううん、なんでもない…」

ふと脳裏を過ぎったその想像を振り払い、焼きそばを味わうことに集中する。私はあんまり食べる方じゃないけど、これならいくらでも食べられそうだ。

「…焼きそばまで作れたのか君は」

と、端末を手元で操作しながら、クロノが姿を現した。なんかちらちらと焼きそばを見てるけど…。

「あ、腹減ってるなら食うか？少し残ってるんだけど」

「…そうだな。軽くいただこう」

心なしか表情を緩ませながら、ソファに座るクロノ。お兄ちゃんが焼きそばを盛りつけて、クロノの目の前に置く。

「……」

ゴクリと固唾を呑み、箸を手に取るクロノ。なんだろう、緊張してる？

「…いただきますっ」

覚悟を決めたのか、クロノがパクッとそれを頬張る。
――瞬間、クロノの背後に電流が走った。ような気がした。

「均一に火が通った野菜と豚肉、麺と絶妙に絡み合った濃口ソース。
…ヤバい、完璧だ」

クロノがらしくもなく瞳を輝かせ、焼きそばをアルフ並の勢いで掻き込んでいく。…えーと。

「…もしかしてクロノって」

「…焼きそばが好きなのかな？」

「…みたいだな」

クールなクロノの珍しい一面に苦笑しながら、四人で仲良く焼きそばを食べる。

「ナツキ！！お代わり！！」

「半日前にぶっ倒れた子供相手に何要求してんだお前は」

そんな感じの穏やかな空気で、私達のお昼は過ぎて行きました。

「さて、それじゃ説明するよ」

そんなこんなを経た夜。俺達三人はソファに腰掛け、エイミィと向かい合っていた。

「カートリッジシステムは、扱いが難しいの。本来なら、その子達みたいに繊細なインテリジェントデバイスに組み込むようなものじゃないんだけどね」

カートリッジシステムとは、言わばデバイスにとっての劇薬だ。主人に合わせて性能を変質させるインテリジェントデバイスと魔力の塊であるカートリッジシステムは、相性が悪過ぎるのだ。

「本体破損の危険も大きいし、危ないって言ったんだけど、その子達がどうしても、って」

アクセルやレイジングハートは元より、バルディッシュもかなり頑固な性格だ。カートリッジシステムを組み込まない限り、一生再起動するつもりはなかっただろう。

「よっぽど悔しかったんだろうね。自分がご主人様を守ってあげられなかったこととか、ご主人様の信頼に答えきれなかったことが」

レイジングハートはヴィータのグラーフアイゼンに破られ、バルディッシュはシグナムのレヴァンテインに断ち切られた。アクセルもヴィータの攻撃を受け続け、その刀身を砕けさせてしまった。

「…ありがとう、レイジングハート」

「バルディッシュ…」

自らの相棒の覚悟に感動し、二人は手の中の愛機に声を掛ける。

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（問題ありません）》

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（同じく）》

対し二機は短く、しかし頼もしく答えた。

「…礼はいらない、よな。相棒」

《Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ（当然）》

今まで共に戦って来た、元より口数の少ない相棒の答えに頷き、俺は視線をエイミィに戻す。

「モードはそれぞれ三つずつ。レイジングハートは、中距離射撃のアクセルと、砲撃のバスター。フルドライブのエクセリオンモード」

エクセリオン、か。なのはの戦法的に考えて、シーリングモードと同様大量の魔力放出に特化したモードだろう。

「バルディッシュは、汎用のアサルト、鎌のハーケン。フルドライブはザンバーフォーム」

ザンバー、ね。斬馬刀のもじりだろうか。斧や鎌であるバルディッシュが、剣になるところなんて想像出来ないけど。

「アクセルは一刀流のバースト、二刀流のツヴァイ、フルドライブがザンバーフォーム」

俺もザンバー、か。刀のアクセルにはある意味妥当なフォームだ。いずれにせよ、強力な力を秘めているであろうことに変わりはない。

「破損の危険があるから、フルドライブはなるべく使わないように。特になのはちゃん」

「は、はい？」

エイミィに名を呼ばれ、思わず声を上擦らせるなのは。

「フレーム強化をするまで、エクセリオンモードは起動させないでね。ＤＲＭと同時使用したら、最悪レイジングハートが壊れちゃうかもしれないから」

ＤＲＭ。理を狂わすモノ。周囲の全ての魔力をかき集め術者に捧げる、天城ユキの、遺産。それだけに負担も大きく、一度使用すればしばらくデバイスが使い物にならなくなる程の、両刃の剣。

「はい…」

なのはが固唾を呑んで頷く。正直俺もあまりアレは使って欲しくないので、エイミィの忠告はありがたかった。

『またね、お兄ちゃん』

なのはの中には、ユキという名の爆弾が眠っている。ユキが残したＤＲＭを使ったら最後、なのはの身に何が起きるかわかったものではない。

「問題は、彼らの目的よね」

と、俺の思考を遮るように、リンディ艦長が頬に手を当て呟く。

「ええ…、どうも腑に落ちません」

クロノも思うところがあるのか、顎に手を沿え話し始める。

「彼らはまるで、自分の意志で闇の書の完成を目指しているようにも、感じますし…」

「え？それって何かおかしいの？」

クロノの呟きに疑問を抱いたのか、窓際に立っていたアルフが口を挟んだ。

「闇の書ってのも、要はジュエルシードみたくすっごい力が欲しい人が集めるもんなんでしょ？だったら、その力が欲しい人の為にあの子達が頑張るってのも、おかしくないと思うんだけど」

「「……」」

アルフの言葉に沈黙した後、二人が根拠を列挙し始めた。

「第一に、闇の書の力は、ジュエルシードみたいに自由な制御の利くものじゃないんだ」

「完成前も完成後も、純粋な破壊にしか使えない。少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度もないわ」

クロノとリンディ艦長の言葉に、俺は前に見た資料の内容を思い返す。確かにどのケースでも、破壊以外に使われた形跡はなかった。

「そうか…」

「それからもう一つ、あの騎士達、闇の書の守護者の性質だ」

納得したアルフを尻目に、クロノはもう一つの疑問点を挙げる。

「彼らは人間でも使い魔でもない」

「「「!?」」」

クロノの衝撃的な発言に、俺達三人は固まる。思わずと言った感じで握ってきたフェイトの手を、優しくしっかりと握り返す。

「闇の書に合わせて、魔法技術で作られた擬似人格。主の命令を受けて行動する、ただそれだけの為のプログラムに過ぎないはずなんだ」

どういう…、ことだ…?

第七話「主人」（後書き）

…うわぁｗ
何これ甘いｗ主成分がサッカリンなんじゃ（ｒｙ
ていうか完全に誰得な気がしてならないｗ
読者の皆様はこの誰得糖分をどう思っているのだろうかｗ
その辺も感想で聞かせて貰えるとありがたいです。

さて次回は、闇の書の過去話回です。

第八話「願い」（前書き）

はい八話です。
消化回の上おっそろしくｇｄｇｄです。
ＢＧＭ聞きながらか某手乗り怪獣をやりながらの視聴をオススメします（ぇ
ではどーぞー

第八話「願い」

「あの…、使い魔でも、人間でもない擬似生命っていうと、私みたいな…」

母さんと、プロジェクトF。ふと脳裏を過ぎったその考えを、口に出して問い掛けようとした瞬間、

「ていっ」

「あうっ」

お兄ちゃんのデコピンを貰った。ううう…、ちょっぴり痛い…。

「バカ言ってんな。前にも言っただろ。フェイトは作り物なんかじゃない、れっきとした普通の、一人の女の子だって」

私をギュウッと抱きしめながらそう言ってくれるお兄ちゃんに、思わず半年前を思い出す。私を普通の少女として、一人の女の子として接してくれたお兄ちゃん。お兄ちゃんの温もりに包まれるだけで、こんなにも心が安らぐ。

「フェイトさんは、生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を受けて生み出された人間でしょう」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろう。変なことを言うものじゃない」

リンディ提督が補足し、クロノも私に鋭い視線を送ってくる。

「はい…、ごめんなさい…」

「謝られるより礼を言われた方が、みんな嬉しいと思うけど？」

思わず謝る私の頭を撫でながら、お兄ちゃんが苦笑する。

「うん…、ありがとう…」

「いいのいいの、妹なんだから甘えとけ。それと…」

私の頭をぽふぽふと叩きながら、お兄ちゃんがバーストフォームになったアクセルの峰で、クロノの頭を軽く叩く。

「痛っ！？いきなり何を…！！」

「お前の言葉にも、原因がないとは言い切れないと思うんだが？」

言い返すクロノを一睨みで黙らせ、お兄ちゃんは怒りを見せた。

「フェイトがその手の単語に反応するのは、お前もよくわかってたはずだろ。もう少し言い方を考えろ」

お兄ちゃんが私の為に怒ってくれたことが凄く嬉しくて、だけどちょっぴり恥ずかしくて。私は顔を俯かせながらも、お兄ちゃんにそっと抱き着く。

「…確かにその通りだ。すまないフェイト。少し言い過ぎた」

「ううん、私こそ…」

クロノが私の為を思って言ってくれたのはわかってたから。感謝こそすれ、怒ったりなんかしない。

「…むー」

ちなみになのははというと反対側でむくれている。き、兄妹なんだからくっついててもおかしくないよね、うん。

「…まぁ、口で言ってもわかりにくいかな。エイミィ、モニターを頼む」

「はいはーい、っと」

アクセルをネックレスに戻したお兄ちゃんを見遣ったクロノの言葉に、エイミィがリモコンを操作し始めた。

「守護者達は闇の書に内蔵されたプログラムが、人の形を取ったもの。闇の書は、転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと闇の書と共に、様々な主の元を渡り歩いている」

画面に映し出された四人の守護騎士を見据え、クロノが説明を始めた。

「意志疎通の為の対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだけどね。感情を見せたって例は、今までにないの」

「闇の書の蒐集と主の護衛、彼らの役目はそれだけですものね」

エイミィとリンディ提督も補足し、疑問点に首を傾げている。

「でもあの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたし…」

「シグナムからも、はっきり人格を感じました。成すべきことがある、って」

実際に戦って、至近距離で触れ合った私達にはわかる。あの二人は感情があって、自らの意志で動いていると断言出来る。

「仲間と主の為だ、とか言ってたな…。それは深層意識の命令だとしても、ヴィータの激情はプログラムと言えるレベルのものじゃないと思うぞ」

お兄ちゃんも理論的に自らの意見を述べ、頭を掻きながら考え込む。守護騎士達を変えるような何かが、今回の主にはあったのだろうか。

「確かに、謎だらけだな…」

「まぁ、それについては捜査に当たっている局員からの情報を待ちましょうか」

尚も訝しげなクロノに、リンディ提督が妥協案を示す。実際情報が足りないから、それしか方法はないのだが。

「転移頻度から見ても、主はこの付近にいるのは確実ですし。案外、主が先に捕まるかもしれません」

被害はなのはの世界とその近辺なのは周知の事実だし、私達は既に二回も遭遇している。そう考えた方が自然だ。

「ああ、そりゃわかりやすくていいね」

「だね。闇の書の完成前なら、持ち主も普通の魔導師だろうし」

アルフが満足そうに、エイミィがニコニコと肯定する。相手が強力な力を持っているなら、使われる前に決着を付ければいい。つまりはそういうことだ。

「それにしても、闇の書についてもう少し詳しいデータが欲しいな…」

と、お兄ちゃんの呟きに反応したクロノが、ソファに座るユーノを見遣る。

「ユーノ、明日から少し頼みたいことがある」

「え？いいけど…」

戸惑いながらも承諾するユーノに、クロノが頷く。

「じゃあ今日はここまでだ。解散」

クロノの声を最後に、会議は終わりを告げた。

「…で、何がどうしてこうなった」

ナツキ君がドライヤーを私の髪に当て、髪をくしけずりながら呆れ

たようにぼやく。

「私だって、ナツキ君にやって貰いたかったんだもん」

対し私はニコニコ笑いながら答える。結局今日も泊まることにして、フェイトちゃんと一緒にお風呂に入りました。そしたらフェイトちゃんが風呂上がりにナツキ君に乾かして貰ってるのを見て、私もお願いしてみたという訳なのです。

「いやそれは別にいいけどさ…、家族が心配してるんじゃないのか？」

「お母さんに話したら遠慮なく甘えて来なさい、って」

どうやらお母さんはナツキ君が気に入ったみたいで、その辺は全部フリーパス状態でした。記憶がなくなっても、一緒に暮らしてた時のことをどこかで覚えているのかもしれません。

「ふにゃー、気持ちいー♪」

「あったかい…」

「…何この状況」

ちなみに今の状態を説明すると、あぐらをかいてベットに座るナツキ君、そこにすっぽり収まるように座る私、更に背後からナツキ君にひっつくフェイトちゃん、という状況です。フェイトちゃんはナツキ君に甘えられて嬉しいのか、ものすごく幸せそうな顔をしています。…私も人の事言えないけどね。

「ねぇナツキ君。闇の書の主って、どんな人かな？」

諦めたように再開したナツキ君に、ふと思い立ち尋ねてみる。

「闇の書は自分を扱う資質を持つ者を、ランダムで転生先に選ぶみたいだからなんとも言えないな…。それこそ老若男女様々だから」

「そっか…」

ナツキ君の答えに頷きながら、まだ見ぬ闇の書の主に思いを馳せる。ヴィータちゃんやシグナムさんがあそこまで必死になるような人。一体どんな人なんだろう…。

「案外、私達と同い年くらいの子だったりしてね」

「んー、さすがにそれは…。だったらやだなぁ…」

笑いながらの私の言葉に、ナツキ君が嫌そうに答える。ユキさんのせいか何なのか、ナツキ君は年下の女の子に甘いところがあって、それを自覚しているからこその言葉。そう考えると、ユキさんがどれだけナツキ君の中のウェイトを占めているのかがわかってしまって、ちょっと悔しい。

「あ、メールだ」

着信を告げるメロディを響かせる携帯を開き、メールをチェック。

「へぇー。すずかちゃん、今日は友達がお泊りに来てるんだって」

私達みたいに楽しんでるみたいだね。

「そうなの？」

「うん、ほら」

聞き返して来たフェイトちゃんに、添付されていた写真を見せる。

「八神はやてちゃん。今度紹介してくれるって」

「へぇー」

画面に映った茶髪のショートカットの少女に、フェイトちゃんが頷く。

「え？なんですずかがはやてと？」

が、逆にナツキ君は目を丸くし、ぽかんとした表情を見せた。

「お兄ちゃん、知ってるの？」

「前に図書館で会った子だ…。なるほど、確かにあの図書館で出会ったんだから、常連のすずかが知ってても不思議じゃない、か」

聞き返したフェイトちゃんに答えながら、ぶつぶつと呟くナツキ君。

…まさか。

「ナツキ君、はやてちゃんに変なことしてないよね？」

私の問いで、場に沈黙が横たわる。

「…は？」

「「じーっ」」

訳がわからないと言った感じで呟くナツキ君を、フェイトちゃんと二人でじーっと見据える。

「いや別に何も…。ただ本を渡してあげただけで…」

『フェイトちゃん、どう思う？』

そう答えるナツキ君を尻目に、私はフェイトちゃんに念話を飛ばす。

『嘘は言ってないと思うけど…。お兄ちゃんは優しいしカッコイイから、用心しておいてもいいと思う』

『だね』

私やフェイトちゃんでさえ無意識に魅了するナツキ君だ。普通の子であろうはやてちゃんも、もしかしたら或いは…。

「…ま、とりあえず寝ようぜ。髪の手入れも終わったしな」

なんだかんだ言いつつも手を休めていなかったナツキ君が呟き、ドライヤーを片付け私の頭をぽふぽふ叩く。

「え、一緒でいいの？」

「言ってもどうせ聞かないだろ？」

暖房と加湿器の設定を弄りながら、苦笑するナツキ君。

「え、じゃあ私も…？」

「何を今更。いつも引っ付いてんのはお前だろ？」

恐る恐る尋ねたフェイトちゃんの頭を撫で、ナツキ君はドサッとベットに寝そべった。

「明日は学校行かないとだしな。二人もちゃんと寝とけ」

「「…うんっ！！」」

そのまま二人でナツキ君に引っ付き、三人仲良く布団を被る。寒さなんて気にならない程の温かさが、ここにはあった。

「ほんなら、ありがとうなすずかちゃん」

車椅子を操り外に出ながら、振り返ってすずかちゃんにお礼を言う。

「うん、またね」

「ぜひぜひ、またお越しくださいね。はやてちゃん」

すずかちゃんだけでなく、お付きのメイドのファリンさんまでニコニコと微笑みながら言ってくれた。

「ありがとうございます」

また、泊まりに来れたらええなぁ。

「シグナム、はやてちゃんがもうじき帰って来るそうよ」

カーテンの閉め切られた八神家のリビング。ソファに座っている私に、部屋へと入って来たシャマルが声を掛けて来た。

「そうか」

やむを得ずご友人の家に泊まることになってしまい、少しの罪悪感を覚える。不幸中の幸いは主はやてがご友人と楽しく過ごせたことか。

「ヴィータちゃんは、まだ？」

「かなり遠出らしい。夕方には戻るそうだ」

立ち上がり、冷蔵庫へと向かいながら答える。今までも遠出することはあったが、管理局が絡んで来てからは特にそれが顕著だ。

「あなたは？シグナム」

「何が」

冷蔵庫を覗き込みながら、振り返らずに短く尋ね返す。

「大丈夫？って。大分魔力が消耗してるみたいだから」

…さすがシャマル。よく見ている。だが、

「お前達の将は、そう軟弱には出来ていない。大丈夫だ」

ミネラルウォーターのボトルを取り出しながら、きっぱりと答える。
この程度で倒れる程、烈火の将は柔ではない。

「あなたも、ずいぶん変わったわよね。昔は、そんな風には笑わなかったわ」

ソファに腰掛けた私に、シャマルがニコニコと微笑む。

「そうだったか」

「あなただけじゃない。私達全員、ずいぶん変わったわ」

穏やかな笑みを浮かべ、自らの体を抱きしめながらシャマルが呟く。

「みんな、はやてちゃんが私達のマスターになった日からよね」

そう、全てが変わったのはあの日。闇の書が起動し、八神はやてがマスターになった時からだ。

「そうですか。ご親戚の皆さんと一緒だと、賑やかでいいですね」

「はい。なんやこう…、毎日無闇に楽しいです」

運転席のノエルさんの言葉に、私は頷き笑顔を浮かべる。

「…素敵ですね」

「…えへっ」

窓の外を眺めながら、ふとあることに気付く。

（そうか…。みんなが来てからもう半年以上になるんやな）

半年。突然現れた四人との暮らしが当たり前になってしまう程の時間を過ごしていたことに今更気付き。全てが変わったあの日のことを思い返した。

「っ！？」

その身を縛る鎖を弾き飛ばし、ばらばらと白紙のページをめくる闇の書。当時の私は何もわからず、ただ怯えて見守ることしか出来なかった。

「あ…、あ…」

くるくると回りながら、後ずさる私の目の前に闇の書が降り立つ。

《Ａｎｆａｎｇ（起動）》

「っ！？あ…、あ…っ！？」

闇の書の声と同時、闇の書の紫がかった黒い輝きと私の中に眠る純白の輝きが呼応した。

「っ！？」

純白の珠が力強い輝きを発し、部屋中を飲み込む。

「……っ！？」

そして、光が収まって恐る恐る目を開けた私の前には、

「闇の書の起動を確認しました」

見ず知らずの四人の姿があった。

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし駒」

「ヴォルゲンリッター。何なりと命令を」

そこまでが限界だった。あまりにも現実離れした光景を見せられた私は、そのまま気を失った。

「…？」

最初に異変に気付いたのはヴィータだった。膝を着いた状態から立ち上がり、主の少女の元へと歩み寄る。

『ねぇ、ちょっとちょっと』

『ヴィータちゃん、しーっ』

念話で話し掛けてくるヴィータを、シャマルが制止する。

『でもさー』

『黙っていろ。主の前での無礼は赦されん』

私も呼び掛け、ヴィータに戻るように促す。が、

『無礼ってかさ、こいつ…』

仕方なく目を開け食い下がるヴィータの方を見遣ると。

『気絶してるように見えんだけど?』

目を回して倒れる主の姿があった。

『!?』

『嘘っ!?』

ザフィーラとシャマルの声を背に駆け寄ると、

「…きゅう」

主はそんな声と共に倒れた。

「ふふっ…。あの時はホントびっくりしたわよね」

「まぁな」

まさか気絶されるとは思わなくて、少し焦ったのを思い出す。

「はやてちゃん…。よかったわ、なんともなくて」

「えっと…、すんません」

白衣の女性に頭を下げながら、主が頭を掻く。

「…で、誰なの？あの人達は」

「…？あ…！！」

女性の視線の先、私達四人の姿を見て主の顔が驚愕に彩られる。大方、夢か幻だとでも思っていたのだろう。

「どういう人達なの？春先とはいえまだ寒いのに、はやてちゃんに上着も掛けず運び込んで来て…。変な格好してるし、言ってることは訳わかんないし、どうも怪しいわ…」

「あー、えっと…、その、なんと言いましょうか…」

訝しげな視線を向ける女性と私達の間で視線を彷徨わせ、しどろもどろに呟く主。

『ご命令をいただければお力になれますが。いかがいたしましょう』

見兼ねた私は念話を飛ばし、主に指示を促した。

「え…、え…！？」

『思念通話です。心で、ご命令を念じていただければ』

『……』

主が驚愕し黙り込む。初めて会った時の反応からまさかとは思ったが、ここは魔法が発展していない世界のようだ。こんな超常現象を目にすれば無理もないか。

『ほんなら命令というかお願いや』

『？』

覚悟を決めたのか主が私を見据え、念話で話し掛けてきた。

『ちょう私に話合わせてな』

「…はい」

あまりに突飛なその言葉に、思わず返事を口にしてしまう。

「えっと…。石田先生、実はあの人達、親戚で…」

「親戚？」

…親戚、か。まぁ確かに、ある意味最もやりやすいごまかし方と言えばそうだが…。

「遠くの祖国から、私のお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ。そんで、びっくりさせようと仮装までしてくれてたのに、私がそれにびっくりし過ぎてもうたと言うか、その、そんな感じで…。な？」

どんどんと自信を無くしていく口調のまま、主がこちらに硬い笑みを送る。

「あ、そうなんですよ」

「その通りです」

即座に意図を察したシャマルと共にフォローに入り、その場はどうにか事なきを得た。

「あ、あはは…」

主は苦笑いを浮かべながら、私達を見守っていた。

我々の新しい主、主はやては、歳の若さもそうだったが、これまでの主とは、ずいぶん違っていた。

「そうかー、この子が闇の書ってもんなんやね」

「はい」

どうにかこうにか帰宅した主の質問に、代表して私が答える。

「物心付いた時には棚にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど」

車椅子を移動させ、主は机の棚をごそごそと弄り始めた。

「覚醒の時と眠っている間に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「うーん、私魔法使いとちゃうから漠然とやったけど…。あ、あった」

シャマルの問いに答えながらメジャーを取り出し、主が我々の前に戻る。

「わかったことが一つある。闇の書の主として、守護騎士みんなの衣食住。きっちり面倒見なあかんということや。幸い住むとこはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服買うて来るから、サイズ計らせてな？」

「「「「……」」」」

そう、本当に。今までの主とは、なにもかもが違っていた。主はやての我々への対応は、これまでの主のように高圧的であったり、道具のように扱うものでなく、まるで家族にするようなものだった。

「さぁ出来た、食べようか。いただきます」

四人と一匹で食卓を囲み、主はやてがニコニコと微笑む。テーブルの上には、主が作った美味しそうな料理の数々。

「「「いただきます」」」

我々は戸惑いながらも、しかし、新たな主の望むままに。静かな日々を、暮らし始めていた。

「…お代わり」

「はーい」

「騎士甲冑？」

「ええ。我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

聞き返してきた主はやてに答え、ベルカ式の魔導師の特徴である騎士甲冑について説明する。

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてくだされば」

「そっか…。そやけど、私はみんなを戦わせたりせぇへんから…」

図書館の棚をザッと眺めながら、主はやてが顎に手を当て考え込む。

「あ、服でええか？騎士らしい服。な？」

「ええ、構いません」

私達としても戦うつもりはない。ただ、万が一の際に身を守る為の騎士服が欲しかったのだ。

「ほんなら資料探して、かっこええの考えてあげなな」

そう言って主はやては、行き先を告げた。

「ここは…」

そうして移動した先は、おもちゃ屋でした。…何故おもちゃ屋なんでしょう？

「ええからええから。こういうとこにこそ、それっぽい材料が…」

はやてちゃんがニコニコ微笑みながら、棚に展示されたゲームのキャラクターのポスターを見て回っている。なるほど、それを参考にする訳ですね。

「……」

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

と、ある棚の前でヴィータちゃんが立ち止まり、ジーッと何かを見ている。それを見たはやてちゃんは店員さんを呼び寄せ、何やら耳打ちし始めた。

「いい風ですね」

「ほんまや…」

一通りの用を終えたのか、はやてがシャマルと一緒に店を出る。その少し後ろを歩くあたしの手には、一つの紙袋。

「お天気もいいですし」

「絶好のお散歩日和やな」

夕暮れの道を歩く二人を尻目に、あたしは茶色い紙袋を眺め続ける。急に渡されたけど、中身は一体…。

「ヴィータ」

「あ…」

と、前を行くはやてが振り返って、ニコニコしながらあたしを見る。

「もう袋から出してもええで？」

「……。あ…！！」

言われるままに取り出してみると、そこにいたのはあたしが眺めていた品物、のろいウサギのぬいぐるみだった。可愛らしく独特なデザインに、思わず顔がほころぶ。

「はやて、ありが…」

お礼を言おうと顔を上げると、既に二人は歩き出していた。まるで、お礼はいらないと言わんばかりに。

「……あははっ」

時はゆっくりと過ぎて行って、あたし達はただはやてと一緒に、何事もない日々を過ごしていった。

「わぁ…、綺麗…」

私に抱き抱えられ外に出た主はやては、満天の星空を見上げ感嘆の溜め息を漏らす。

「…主はやて。本当によいのですか？」

そんな主はやてを見下ろしながら、私は思わず尋ねてしまう。

「何が？」

「闇の書のことです。あなたの命あらば、我々はすぐにでも闇の書のページを蒐集し、あなたは大いなる力を得ることが出来ます。この足も、治るはずですよ」

闇の書の絶大な魔力を以ってすれば、動かない足の治療など朝飯前だ。そうすれば主はやても年相応の子供として、自由に走り回るこ

とが出来る。

「あかんて。闇の書のページを集めるには、いろんな人にご迷惑をお掛けせなあかんねやろ？」

「！？」

――だが彼女は、あくまでも自分より他人を優先した。

「そんなんはあかん。自分の身勝手で、人に迷惑掛けるんはよくない」

「……」

心優しき主の正論に、口を噤まざるを得なくなる。

「私は、今のままでも十分幸せや」

主はやては柔らかく微笑み、星空を見上げ独白する。その横顔には、人を惹き付ける不思議な魅力があった。

「父さん母さんはもうお星様やけど、遺産の管理とかはおじさんがちゃんとしてくれてる」

「お父上のご友人、でしたか」

なんでも遺産の管理だけでなく、仕送りなどの援助もしてくれているとか。

「うん。お陰で生活に困ることもないし、それに何より、今はみん

ながおるからな」

「……！！」

抱き着きながら満面の笑顔を浮かべる主はやてに、私は思わず絶句する。怖ず怖ずと抱き返しながら、私も笑顔を浮かべた。

「はやてー！！」

「おお、どないしたヴィータ」

と、タイミングが良いのか悪いのか、ヴィータが声を掛けて来た。

「はやて、冷凍庫のアイス食べていい？」

「お前、夕食をあれだけ食べてまだ食うのか？」

ご飯を三杯もお代わりした挙句、おかずもほとんどヴィータの腹に収まってしまった。その上でアイスを食べる？この小さな体のどこに消えて行ったんだ。

「うるせぇな育ち盛りなんだよ。はやてのご飯はギガウマだしな」

「しゃあないな、ちょっとだけやで？」

反論し胸を張って答えるヴィータに苦笑し、主はやてが許可を出す。

「おー！！」

「ふふっ…」

嬉しそうに駆け出すヴィータを見守り、柔らかく笑う主はやて。

「シグナム」

「はい？」

と、主はやてはその瞳に真剣な光を宿し、私を見詰めてきた。私も気を引き締め尋ね返す。

「シグナムはみんなのリーダーやから、約束してな」

「…はい？」

…何をだろうか。

「現マスター八神はやては、闇の書にはなぁんも望みない。私がマスターでいる間は、闇の書のことは忘れてて。みんなのお仕事は、家で一緒に仲良く暮らすこと。それだけや」

「……」

今までのどの主よりもちっぽけな、それでも温かな望みを願う主はやて。…本当に、無欲な方だ。

「約束出来る？」

「誓います。騎士の剣に懸けて」

真っ直ぐに答えた私に、主はやてが微笑む。私だけではない。守護

騎士の誰もがこのままずっと、この温かな場所で暮らしたいと思い始めていた。
――だが、理不尽で非情な現実はまるで不気味な影のように、じりじりと私達に這い寄って来ていたのだ。それを思い知らされたのは、１０月のあの日…。

「命の…、危険…？」

「はやてちゃんが！？」

石田先生の唐突な言葉に、私とシャマルは思わず聞き返す。

「ええ…。はやてちゃんの足は、原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で、麻痺が少しずつ、上に進んでいるんです」

上に！？しかも、この半年！？それは…、まさか…！？

「この二ヶ月は、特に顕著で…。このままでは、内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

人間が生きる上で内臓が重要な役割を持っていることは周知の事実だ。内臓器官の麻痺。それが指し示すことはつまり、
――主、八神はやての、死。

「何故…、何故気付かなかった…！！」

主はやてのそれは、病気ではなかった。闇の書の呪い、主はやてが産まれた時から共にあった闇の書は、主の身体と密接に繋がっていた。抑圧された強大な魔力は、リンカーコアが未成熟な主の身体を蝕み、健全な肉体機能どころか、生命活動さえ阻害していたのだ。

「ごめっ…、ごめんなさい…！！私…！！」

「お前にじゃない…。自分に言っている…！！」

涙ながらに謝るシャマルに言い返し、壁を殴りながら自らの迂闊さを呪う。

半年前にあったことはなんだ？闇の書の覚醒だ。

その時に起こったことはなんだ？私達守護騎士の目覚めだ。

私達が活動するのに必要なものはなんだ？主の魔力だ。

そして、主が第一の覚醒を迎えたことで、それは加速した。

「それは、私達四人の活動を維持する為。ごく僅かとは言え、主の魔力を使用していることも、無関係とは言えないはずだった」

深夜、主はやてが寝たことを確認した私達は家を抜け出し、その事実を伝えた。自らの存在そのものが大切な人を傷付けている。それはどれだけ辛いことだろう。

「っ！？」

「助けなきゃ…」

息を呑み歯を食い縛るザフィーラをよそに、ヴィータがぽつりと一

言だけ呟く。

「はやてを…！！助けなきゃ！！」

ヴィータが涙を零しながら絶叫する。今まで悠久の時を共に歩んで来たが、ここまでの感情を見せたのは初めてだ。

「シャマル！！シャマルは治療系得意なんだろ！？そんな病気くらい、治してよぉっ！！」

シャマルに詰め寄り襟首を掴み、懇願するように泣き叫ぶヴィータ。その姿は年相応の子供のようで、見る者の心を締め付ける。

「ごめんなさい…。私の力じゃ、どうにも…」

闇の書の呪いとは、魔力による身体の汚染。シャマルも闇の書に生み出された存在であるからには、闇の書以上の魔力で呪いを打ち消すことは不可能だ。

「なんでだ…、なんでなんだよぉっ！！」

泣き叫ぶヴィータは気付いていないが、シャマルは唇を裂けんばかりに噛み締めている。癒しと補助が本領の彼女だからこそ、無力な自分が悔しいのだろう。

「シグナム」

二人を尻目に声を掛けて来たザフィーラに頷き、手元の剣をあしらったネックレスを見遣る。

「我等に出来ることは、あまりに少ない」

だが…、方法はある。たった一つだけ、最低で最悪の打開策が。

主の身体を蝕んでいるのは、闇の書の呪い。

はやてちゃんが、闇の書の主として、真の覚醒を得れば。

我等が主の病は消える。少なくとも、進みは止まる。

はやての未来を血で汚したくないから、人殺しはしない。だけど、それ以外なら。なんだってする。

申し訳ありません、我等が主。ただ一度だけ、あなたとの誓いを破ります。

――――我等の不義理を、お許し下さい。

「ぐ…、くそ…」

リンカーコアを蒐集しもはや用済みと化した原生生物の死骸を後に、あたしはアイゼンをズルズルと引きずりながら砂丘を登り始める。

「はやてに貰った騎士服を、こんなぐちゃぼろにしやがって…」

休まず動いて疲労が溜まっているのか、体の動きが非常に鈍い。全身には浅くない傷が刻まれ、紅い騎士甲冑とアイゼンは別の朱に染まり始めている。

「ま、騎士服は直るし…、そこそこページを稼げたから、いいけどよ…」

ぶつぶつ呟きながら一歩を踏み出すと同時、ガクンと足から力が抜けた。

「あ…！！」

受け身を取ることもままならず、斜面に顔面から倒れ込む。

「いっ…」

痛い、と言い掛けて踏み止まる。

「たく…」

痛む身体を無理矢理起こし、

「ない…！！」

アイゼンを支えにふらふらと立ち上がる。

「痛くない…。こんなのちっとも痛くない…！！昔とはもう、違うんだ…」

主に冷たくあしらわれるような昔とは、道具として扱われるような昔とは、もう違うんだ。

「帰ったらきっと…、あったかいお風呂と…、はやてのご飯が待ってんだ…。優しいはやてが…、ニコニコ待っててくれるんだ…」

この半年で、たくさんのものを得られた。安らぎを。温もりを。幸

せを。はやてはたくさんのものをくれた。

「そうだよ…。あたしは…、すっげぇ幸せなんだ…」

その幸せを守る為ならば、騎士の誇りと名に懸けて、限界を越えてでも戦ってみせる。

「だから…！！」

砂丘から現れた、巨大な原生生物を見上げる。ワームのようなそれは口を蠢かせ、牙を小刻みに動かしている。

「こんなの…！！全然…、痛くねぇぇぇぇぇっ！！」

絶叫と同時にカートリッジをロード。奴の突進をかわし上空に飛び上がる。

「らあああああああっ！！」

頭を上げた奴に向けてアイゼンを振りかぶりながら、あたしは全速力で突っ込んだ。

「三人掛かりで出て来たけど、大丈夫かな」

「まぁ、モニタリングはアレックスに頼んで来たし」

先頭を歩くクロノの言葉に、エイミィさんが気楽に答える。今僕達三人は、本局に来ているのだ。

「闇の書について調査すればいいんだよね？」

「ああ。これから会う二人はその辺に顔が利くから」

僕の質問に答えながら呟くクロノが、とある一室に入った。

「「ん？」」

「リーゼ、久しぶり。クロノだ」

ソファに腰掛けていた猫耳を生やした二人の女性が、目を丸くしてクロノを見る。

「わあお♪」

と、短い茶髪の方の女性が飛んで来て、クロノを思いっ切り抱きしめた。

「なっ！？」

「クロスケ、お久しぶりぶり～♪」

唖然とする僕達をよそに、女性がクロノを撫で回し始めた。

「ロッテ、ちょっ、離せこら！！」

「何だとこら？久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよぅ♪うりうり～♪」

クロノが反論し引きはがそうとするが、ロッテと呼ばれた女性は逆にエスカレートしていきクロノを絞め殺さんばかりに抱きしめる。

「うわあああ！！アリア、これをなんとかしてくれ！！」

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、まぁなんだ。満更でもなかろう？」

クロノが慌ててもう一人、長い方の茶髪の女性に助けを求めるが、アリアと呼ばれた彼女は冷静にばっさりと切り捨てた。

「そんな訳が…」

「にゃあー♪」

言い返そうとしたクロノを遮り、ロッテさんがクロノを押し倒す。

…僕は何も見ていない、うん。

「リーゼアリア、お久し」

「ん、お久し」

エイミィさんがアリア、リーゼアリアさんとタッチを交わし、クロノの悲鳴をＢＧＭに呑気に雑談をし始めた。

「リーゼロッテも相変わらずだねぇ」

「まぁ我が双子ながら、時々計り知れんところはあるね」

二人でソファを眺めると同時、陰からひょっこりとロッテ、リーゼ

ロッテさんが顔を出した。

「ごちそうさま♪」

「リーゼロッテ、お久し」

満足げにニコニコ笑うリーゼロッテさんに、エイミィさんが手を振る。

「おおー♪」

フワッとソファを飛び越え、エイミィさんとタッチを交わす。

「エイミィ、お久しだ。ん？なんか美味しそうなネズミっ子がいる…。どなた？」

「う…」

ニコニコと邪気のない笑顔を浮かべるリーゼロッテさんに、思わず顔を歪ませ後ずさる。

「…なんで、あんなのが僕の師匠なんだ」

クロノ、それはこっちのセリフだ。

「あー、なるほど。闇の書の捜索ねぇ」

「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

ソファに腰掛け仕切り直し、クロノから話を聞いた二人が頷いた。

「よろしく頼む」

「エイミィさん、この人達って…」

会話を続ける三人を尻目に、僕は隣に座るエイミィさんに尋ねる。

「ん、クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様達。魔法教育担当のリーゼアリアと、近接戦闘教育担当のリーゼロッテ。グレアム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫ね」

「…な、なるほど」

こちらに手を振るリーゼロッテさんに手を振り返し、苦々しげに呟く。月村家での経験か、若干猫が苦手になりつつあるようだ。

「二人に駐屯地方面に来て貰えると心強いんだが…。今は仕事なんだろう？」

「んー、武装局員の新人教育メニューが残っててねー」

「そっちに出ずっぱりにはなれないのよ。悪いね」

クロノの溜め息混じりの声に、リーゼ姉妹が気まずげに答える。提督の使い魔ともなれば、重要なポジションに就くこともありえない話ではない。

「いや。実は今回の頼みは…、彼なんだ」

そう言って視線を向けてきたクロノに頷くと同時、リーゼロッテさんの目が輝いた。

「食っていいの!?」

「いっ…!?」

何を言っているんだこの人は!?

「ああ…、作業が終わったら好きにしてくれ」

「な、おい!!ちょっと待て!!」

クロノの言葉に立ち上がって突っ込むと同時、全員から笑いが漏れる。緊張している僕を和ませる為のジョークだと遅れて気付き、溜め息混じりに座り直す。

「それで、頼みって?」

「彼の無限書庫での調べ物に、協力してやって欲しいんだ」

リーゼアリアさんの質問にクロノが答えると同時、二人の視線が僕に集中する。

「……」

僕はただ、二人を静かに見据えることで答えた。

第八話「願い」（後書き）

やりにくかった…。
視点変わりすぎてホントやりにくかった…。
二期でこれじゃあ三期はオワタだね！ｗ
文才のなさが恨めしい…、ヴォルケンの苦悩なんて書けませんｏｒｚ

さて次回は…、次回、は…。
フェイトオオオオオオ（お察しください

第九話「記憶」（前書き）

はい九話です。
前半は後半の鬱分補給の為甘めです。
ではどーぞー

第九話「記憶」

「こっちのデータは以上よ。お役に立ってる？」

炬燵の上に置いたコンソールを高速で操作する私に、宙に浮かぶ画面に映ったレティが尋ねてくる。

「ええ。ありがとう。助かるわ」

答えと共に多重展開していたウィンドウを閉じる。一通りのチェックは済んだし後は今夜にでもすればいいわね。

「ねぇ、今日はこっちに顔出すんでしょう？」

「うん。アースラの件でね」

アースラの改修作業に終わりの目処がついたらしく、その件で本局に赴くことになっているのだ。

「時間合わせて、食事でもしようか。あの子達の話とか聞きたいし」

「あの子達って？」

コンソールのＯＳを停止させ、横に退かしながら聞き返す。一体誰のことかしら。

「ほら、あなたが預かってる…、養子にしたいって言ってた兄妹」

「ああ、ナツキ君とフェイトさんね」

そういえばレティは二人と面識あったものね。嘱託試験ではお世話になったわ…。

「そう、ナツキ君にフェイトちゃん。元気でやってる？」

「うん。事件に付き合わせちゃってて、ちょっと申し訳ないんだけど、仲良しの友達と一緒だし、なんだか楽しそうにやってるわ」

みかんを頬張りながらニッコリと断言し、私達は取るに足らない雑談を始めた。

「な、なんだか、いっぱいあるね…」

フェイトが手元のそれ、携帯電話のカタログに視線を落としながら呟く。俺やなのは達はみんな持っているし、ちょうどいい機会だから買おうということになったのだ。

「まぁ、最近はどれも同じような性能だし、見た目で選んでいいんじゃない？」

「でもやっぱ、メール性能のいいやつがいいよね」

「カメラが綺麗だと、色々楽しいんだよ」

「むー…」

アリサ、なのは、すずか。三者三様の意見に唸りながら、フェイト

がパラパラとページをめくる。

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょ」

「操作性も大事だよー」

悩むフェイトをよそにアリサとすずかは意見を言い合っている。フェイトの為を思っているのはわかるんだがもうちょっと意見を纏めようよ少しは。

「外部メモリ付いてると、色々便利でいいんだけど…」

「そうなの？」

そんな二人を尻目にすずかがカタログを差し出し、興味を持ったのかフェイトが聞き返す。

「うん。写真とか音楽とか、たくさん入れておけるし。そうそう、メールに添付して、お友達に送ることも出来るの」

「あー、そうだよねー」

すずかの説明になのはが首を突っ込み、更に場が賑やかになる。

「んー…」

しかしフェイトはカタログを睨んだまま。

「おい待ておまえら」

さすがにそろそろほっとけないので、窓から降り立ちながら三人に軽くチョップを入れる。

「そんないっぺんに言われても最初はわからないだろ…。フェイト、大丈…」

「…ぷしゅう」

振り返ると我が妹は、頭から煙を出してダウンしていた。…大丈夫か？

「…おーい」

「…はっ！！お、お兄ちゃん、どうかしたの？」

声を掛けてから反応まで数秒ラグがあった。いつもなら間髪入れずに反応するというのに…。重症だな…。

「…あんま考えなくていいと思うぞ？」

フェイトの頭をぽふぽふと叩き、個人的な意見を言わせて貰う。

「え？でも…」

「今回ダメだったら、それを踏まえて次に活かせばいいんだよ。最初なんてそんなもんさ」

不安そうに見上げるフェイトの頭を撫でながら笑顔で言ってやる。試行錯誤するのが人間だ。失敗したら、次はその分頑張ればいい。成功以上に失敗の多い魔法の研究に携わっていたユキも、よくそう

言ってたしな。

「…じゃあ、お兄ちゃんが選んで」

「…は？」

唐突に何を言いやがりますかこの妹は。

「やっぱり私じゃわからないし…、お兄ちゃんが選んでくれたものなら、なんでも好きになれると思う」

対しフェイトは柔らかく笑いながら、俺に全幅の信頼を寄せたあの表情を見せる。兄になると俺が言ったあの日から、しょっちゅう見せるようになったあの笑顔。幼い子供が親を無条件に信じるような、一点の曇りもないあの笑顔。

「…またお前はそーいうセリフをサラっと」

そんな顔されてもなぁ…。俺は別に聖人君子じゃないっつーに。

「相変わらず仲良いね」

「ホント、凄まじい懐かれっぷりよねー」

すずかと笑顔とアリサのからかいの声を背に、俺はカタログをめくり始めた。

「ありがとうございましたー」

「はいどうもー」

店員とのやり取りを済ませた私は、ナツキ君にそれ、携帯の入った紙袋を渡す。

「いやそれフェイトのだって知ってますよね？」

ええ知ってるわよ。でもね？

「ナツキ君が選んであげたんだから、ナツキ君から渡してあげないと」

「…ですよねー」

私の笑顔を見て反論しても無駄だと悟ったのか、ナツキ君がおとなしく紙袋を受け取る。

「フェイト、ほら」

「あ、ありがとう…」

ナツキ君の差し出した紙袋を、フェイトさんが怖ず怖ずと受け取る。

「開けてみろよ」

「うん…」

促されたフェイトさんが、ごそごそと中を漁る。

「あ…」

そうして出て来たのは、黒い携帯電話だった。背面には黄色い装飾があしらわれていて、フェイトさんのイメージにピッタリの一品だった。

「お前黒好きだし、何となくバルディッシュに似てたから、これかなー、って」

「……！！」

頭を掻きながら言うナツキ君に、フェイトさんが飛び込むようにして抱き着いた。

「ちょっ、フェイト！？」

「ありがとう、お兄ちゃん！！」

狼狽えるナツキ君に満面の笑顔を見せるフェイトさん。あらら、真っ先にナツキ君にお礼か。負けちゃったわね。

「俺じゃなくてリンディさんに言えよ！！」

「でも、私のことを考えてお兄ちゃんが選んでくれたことが、嬉しかったから…」

ナツキ君をぎゅうっと抱きしめながら、フェイトさんは嬉しそうにニコニコ笑う。…ホント、何と言うか。

「ふふっ、好かれてるわね、本当に」

「っ！？」

私の言葉に今の状況を理解したのか、フェイトさんが顔を真っ赤にしてナツキ君から離れる。

「あ、あの、りりりリンディ提督、あ、あああありがとうございましたっ」

「あ、おい…」

呼び止めようとするナツキ君を背に、フェイトさんはなのはさん達の方へと走っていってしまった。ホント、可愛らしい妹さんね。

「やれやれ、養母予定の身としては、嬉しいやら悲しいやら」

「…なんつーか、すみません」

ナツキ君が溜め息をつき、私にペコリと頭を下げる。

「でもフェイトさん、本当に幸せそうね」

「なのはのお陰ですよ。俺は何もしてません」

アリサさんにからかわれ顔を赤くしながらも、なのはさん達と番号を交換するフェイトさんを眺め、ナツキ君が呟く。…って、

「本気で言ってる？」

思わず聞き返した私に彼は苦笑し、

「ええ。俺はほんのちょっとだけ、あいつを支えてやっただけですよ」

そう答えた。

「ちょっと、ね…」

その「ちょっと」が、彼女にとってどれだけの支えになっているのか、彼はきちんと理解しているのだろうか。彼女にとって彼がどれだけ大切な存在か、彼は本当に理解しているのだろうか。

「…なんですか？」

「なんでもないわ。ふふっ」

ぽかんとした顔で尋ねてくるナツキ君に微笑み、私達は仲良く騒ぐ四人の様子を見守った。

「管理局の管理を受けている、世界の書籍やデータが全て収められた、超巨大データベース」

「いくつもの歴史がまるごと詰まった、言うなれば、世界の記憶を収めた場所」

管理局の片隅にひっそりと存在する巨大な空間。どこまでも続く棚と、そこに収められた無限の本。

「それがここ、無限書庫。とは言え、中身のほとんど全てが未整理のまま…、でしたっけ」

「ここでの探し物は大変だよー？」

「本来なら、チームを組んで年単位で調査する場所なんだしね」

ユーノの言葉にロッテとあたしが頷き、果ての見えない空間を見遣る。確かにこれだけ広いと、目的の物を探すだけでもかなりの重労働だ。

「過去の歴史の調査は、僕らの一族の本業ですから。検索魔法も用意して来ましたし、大丈夫です」

「そっか。君はスクライアの子だっけね」

魔法陣を展開するユーノとロッテの言葉にあたしは納得する。スクライアと言えば発掘や調査を主とする一族だ。確かに彼以上の適任者はいないだろう。

「あたしもロッテも仕事があるし、ずっとっていう訳にはいかないけど、なるべく手伝うよ」

「可愛い愛弟子、クロスケの頼みだしね♪」

次の仕事まではまだ少し余裕がある。あたし達は頷きと共に書庫の奥へと飛び立った。

「そっか。アリサとすずかはバイオリンやってるんだね」

あの後解散した私とフェイトちゃんはフェイトちゃんの部屋でお話をしていました。ナツキ君は調べ物の為に図書館に行ってしまい、部屋には私達二人だけです。

「うん。メールでよく、お稽古の話とか教えてくれるんだよ」

「そうなんだ…」

穏やかな空気の中、他愛もない雑談を続ける。こうして魔法のことを忘れて普通に過ごす時間も、大切なことだと思います。

「ただいまー」

と、エイミィさんが買い物から帰って来たようです。お出迎えをしながら買って来た物の片付けを手伝います。

「艦長、もう本局に出掛けちゃった？」

「うん。アースラの武装追加が済んだから、試験航行だって。アレックス達と」

エイミィさんの質問に、南瓜を受け取ったフェイトちゃんが答える。携帯を買った後すぐに向かったそうです。

「そーってぇと…、アルカンシェルか…。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

アルカンシェル、というワードを口にしながら、溜め息をつくエイ

ミィさん。なんだろう、アルカンシェルって…。

「クロノ君もいないですし、戻るまでは、エイミィさんが指揮代行だそうですよ？」

『責任重大だね』

私の言葉に子犬のアルフさんが茶化すようにして笑う。

「それもまた物騒な…」

フェイトちゃんの抱えた南瓜にびしびしとチョップを叩き込みながら、エイミィさんが苦笑い。

「まぁ、とは言えそうそう非常事態なんて起こる訳が…」

そう言いながらエイミィさんが南瓜を受け取り、冷蔵庫目掛けて歩き出した瞬間、

――――響き渡る警告音と、モニターに映る緊急事態（エマージェンシー）の文字。

「…え」

エイミィさんの手から転がり落ちた南瓜が、ぱっくりと不吉に割れた。

「文化レベルゼロ。人間は住んでない、砂漠の世界だね」

モニタールームに移動した私達の視線の先には、宙に佇むシグナム

とザフィーラが映し出されていた。何もこんな時に現れなくても…！！

「結界を張れる局員の集合まで、最速で４５分…。マズいなぁ…」

「……」

コンソールを高速で叩くエイミィをよそに、私はアルフと視線を合わせ、頷いた。

「エイミィ、私が行く」

『あたしもだ』

「……お願い」

私達の言葉に多少逡巡した後、エイミィが一言だけ呟いた。

「うん」

『おう』

答えと共に私は踵を返し、自分の部屋へと向かい始める。

「なのはちゃんはバックス、ここで待機して」

「はい」

なのはは有事に備えて待機。妥当な判断だろう。

「ナツキ君、今どこ？」

『今現地に向かってる。念の為俺はその世界周辺の空間の洗い出しに当たるよ。空間制御で逃走経路をたどる』

お兄ちゃんもちゃんと来てくれるみたい。それだけで安堵している私に少し苦笑する。

「了解。頼りにしてるよ」

『当然』

会話が終了すると同時、机の上のリボルバー式カートリッジをポーチに入れる。

「行くよ、バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

手の中の相棒はいつも通り一言だけ、だけど頼もしく答えた。

「悪い、急用が入った」

携帯をパチンと閉じながら、隣に座る車椅子の少女に視線を送る。

「そっか。なら今日はここまでやな」

俺の言葉に彼女、八神はやてが残念そうに頷く。彼女も料理が好き

なようで、その手の話題で意気投合したのだ。今日も新たなレパートリーを増やすべく図書館に来た俺と鉢合わせし、軽く雑談をしていたのだ。

「いや、少しだけど話せて楽しかったよ。サンキュ」

ここに来た目的の半分は、実は彼女だ。あの闇統べる王という少女と、八神はやてはあまりにも似過ぎている。それが気になった為会ってはみたものの。

（…無駄足だったか）

彼女からは魔力を感じない。つまりハズレ。だが、どうも何かが引っ掛かるのも事実で。

「それじゃまたな、はやて」

「うん、またな」

手早く本を纏めながら、挨拶もそこそこに図書館を出た。

――今優先すべきことは、フェイトのフォロー。闇の書事件の解決だ。それ以外は後でいい。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

カートリッジを排出し眼前の敵、ワームのようなそれを見据えながら私は荒い息をつく。

「ヴィータが、てこずる訳だな…。少々厄介な相手だ…」

手の中のカートリッジを装填しようとした瞬間、奴が動いた。

「っ！？」

背後から奴の長い胴体が現れ、先端に爪のついたワイヤーのような触手が私を束縛する。

「しまっ…！！」

敵前で警戒心を緩めることは死を意味する。私もヴィータ同様疲労が溜まっていたことは否めない。

「ゴアアアアア！！」

動きを封じられた私目掛け、鋭い刺を生やした尻尾が迫る。マズい、避けられな…、

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｂｌａｄｅ》

瞬間、雷の剣が突き刺さり、尻尾は地に縫い付けられた。

「！？」

雷で束縛から解放された私が視線を上げると、ワームの体に雷の剣が突き刺さり、バチバチと放電していた。

「ブレイク！！」

聞き覚えのある少女の一声に剣が爆散し、ワームの胴体を刈っていく。

「…テスタロッサ？」

空中に展開された金色の魔法陣。その上に、一人の少女が佇んでいた。

「ご主人様が気になるかい？」

「…お前か」

背後から掛けられた声に振り向くと、そこにいたのはアルフ。金髪の少女に使える、橙色の少女だった。

「ご主人様は一対一。こっちも同じだ」

「シグナムは我等の将だ。主ではない」

アルフに向けて拳を構えながら、静かに訂正する。そう。我等が主はただ一人、あのお方だけ。

「あんたの主は、闇の書の主。っていう訳ね」

アルフも応じるように拳を構え、我等は同時に加速した。

「「……」」

逃げ出すワームを眼下に、私とシグナムは睨み合う。

『フェイトちゃん！！助けてどうすんの！！捕まえるんだよ！！』

「あ…、ごめんなさい、つい」

頭の中に響いたエイミィの声に、思わず謝る。お兄ちゃんがどこかで苦笑いしたような、そんな気がした。

「礼は言わんぞ。テスタロッサ」

シグナムがレヴァンテインの柄を伸ばしながら、一言だけ呟いた。

「お邪魔でしたか？」

「蒐集対象を潰されてしまった」

問い掛けた私に答え、カートリッジを装填するシグナム。…そっか。

「まぁ…、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」

結果オーライ、だよね。

「…そうか。悪人だったな、私は」

シグナムの声と同時、レヴァンテインの柄が元に戻る。そして私達は、緊迫した空気の中で対峙した。

モニタールームに、再度の警告音が響き渡った。

「なっ、もう一カ所!?」

モニターに映し出された紅い少女、ヴィータちゃんを見てエイミィさんが絶句する。その手に握られているのは、闇の書。

「本命はこっち…、なのはちゃん!!」

「はい!!」

エイミィさんの言葉に頷き、私はモニタールームから飛び出した。

「久しぶりだね、リンディ提督」

「ええ」

テーブルを挟んだ反対側、そこに座るグレアム提督と挨拶を交わす。

「闇の書の事件、進展はどうだい?」

「なかなか難しいですが、上手くやります」

答えと同時、紅茶を口に運ぶ。あら、なかなか美味しいわね。

「君は優秀だ。私の時のような失態はしないと信じているよ」

グレアム提督の目に、後悔の光が宿る。…まだ、引きずっているのね。

「夫の葬儀の時、申し上げましたが…。あれは提督の失態ではありません」

紅茶をソーサーに戻し、提督の目を真っ直ぐ見据える。

「あんな事態を予測出来る指揮官なんて、いませんから」

そう。あれは、本当に突発的な事態だったのだから。

魔法陣の上に座り込み、周囲に開いた本を浮かせながら目を閉じる。

「へぇー。器用なもんだねぇ。それで中がわかるんだ」

「ええ…、その…、まあ」

どうも苦手意識が拭いきれず、声がやや硬くなる。…ナツキみたいな、無気力系脱力猫なら平気なんだけど。

「あの…、リーゼロッテさん達は、前回の闇の書の事件を見てるんですよね」

「うん…。ほんの十一年前のことだからね」

十一年前…、僕やなのはが生まれる二年前。当時クロノは…、三歳。

「その…、ホントなんですか？その時に、クロノのお父さんが亡くなった、って」

僕のその不躾とも言えるその質問に、

「……ホントだよ。あたしとアリアは父様と一緒だったからね。すぐ近くで見てた」

リーゼロッテさんは、僅かな間を置いて答えた。

「封印したはずの闇の書を護送中のクライド君が、あ、クロノのお父さんね」

「はい」

注釈に頷きを返した僕に、

「…クライド君が、護送艦と一緒に沈んでくとこ」

リーゼロッテさんは暗い顔で、事の顛末を語った。

「封印手段はやっぱり、アルカンシェルになっちゃったな」

「他にないもんね…。あんな大出力の出せる武装」

無機質な廊下を歩きながら、アリアとぽつぽつと言葉を交わす。

「あれは周辺への被害が大き過ぎる。撃たずに済めばいいんだが…」

「主が見付かるといいんだけどね…」

闇の書を葬るだけの出力を出せる武装、アルカンシェル。当然、周囲への被害もひどいものになる。

「…まぁ、例え主を押さえたところで、闇の書には転生機能があるから、新しい主に渡るまで、ほんの数年ばかり問題を先送りに出来るだけだけど」

「…それでも、その場で大規模な被害が出るよりは、ずっといい」

あんな光景を生み出すよりは、ずっとずっとマシだ。

「まぁね…」

アリアも消極的に同意を返し、僕達は歩みを再開した。

「「……」」

砂漠に降り立った私達は、幾許の間を置いて睨み合う。

「預けた決着は、出来れば今しばらく先にしたいが…、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私も、そのつもりで来ました」

互いのデバイスを構え、静止。微動だにせず、ただひたすらに機を見計らう。

「「……っ！！」」

同時に地を蹴り、一瞬で距離をゼロに縮める。バルディッシュとレヴァンテインがぶつかり合い、激しく火花を散らす。

「ふっ！！」

「はっ！！」

弾きながら僅かに後退、脊力を殺さず回転、再び斬撃を叩き込む！！

バヂィッ！！

互いの顔面を狙った攻撃はバリアによって防がれ、一瞬視線が交錯する。

「っ！！」

地に降り立った瞬間私は地を蹴る。残像さえ見える速度でシグナムの背後に回り、バルディッシュを振りかぶる！！

「っ！？はぁっ！！」

とっさに鞘に収めたレヴァンテインを両手で構え、私の一撃を防ぐシグナム。完全に不意を突いたのに、一瞬で合わせてきた…！！

「せあっ！！」

そのまま抜刀したレヴァンテインをバルディッシュに叩き付けられ、体重差も相俟ってか私は一気に吹き飛ばされる。

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

カートリッジをロード、排出。レヴァンテインが変形を告げる。

「ふっ！！」

蛇腹剣と化したそれは地面を刈り、複雑な軌道を描きながら私に迫る。

「…っ」

私に向かって来た刺突をかわし、地に手を着きながら体勢を立て直す。

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ》

カートリッジロードと共にバルディッシュが宣言。刃の部分が展開し金色の刃が現れる。

「ハーケン、セイバー！！」

「はあああああっ！！」

大鎌を振りかぶり叫ぶと同時、シグナムが私を囲うように連結刃を展開する。

「っ…、はっ！！」

全身の力を乗せバルディッシュを振るい、三日月型の斬撃を飛ばす！！

「せぇっ！！」

《Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ》

シグナムがレヴァンテインを叩き込む寸前、バルディッシュの声と共に私は動いた。ブリッツラッシュで加速、レヴァンテインをかわしながら上空へ舞い上がる。

「はあああああっ！！」

《Ｈａｋｅｎ　Ｓｌａｓｈ》

そしてハーケンセイバーをかわし上空に飛び上がったシグナムに、全力で大鎌を叩き込む！！

ギィンッ！！

「鞘っ…！？」

が、シグナムはあろうことか、レヴァンテインの鞘でハーケンスラッシュを受け止めた！！

「おあああっ！！」

「くっ…！！」

シグナムの蹴りをバリアで防ぎ、勢いそのままに後退する。

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

が、それでは終わらない。バルディッシュに命じ、単発だがプラズマランサーを飛ばす。

「っ！？」

直線的だが素早さはある。蹴りの余韻で硬直しているシグナム相手なら十分！！

《Ａｓｓａｕｌｔ　Ｆｏｒｍ》

爆風の煽りを受けながらも地面に降り立ち、アサルトフォームに切り換え様子を見守る。あの程度で仕留められるとは思えない…。

「……」

《Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ》

地面に降り立ったシグナムが無言で蛇腹剣を解除。やっぱり、焼け石に水だったみたい…。

「っ…」

カートリッジロード、魔法陣展開、左手に雷の力を集束。私の意志に応えるように、正面に魔法陣が展開される。

「プラズマ…」

対しシグナムもカートリッジをロード。足元に魔法陣を展開し、鞘に収めたレヴァンテインを大上段に振りかぶる。

「飛竜…」

――今！！

「スマッシャアアアアッ！！」

環状魔法陣により加速した雷の奔流がシグナム目掛けて突っ走り、

「一閃ッ！！」

蛇腹剣に宿った荒れ狂う魔力の奔流が、地を這う龍のように加速する！！

ズドオオオオン！！

金と紫が混じり合い、爆風を上げ砂丘を崩す。そんな光景には目もくれず、私達は翔け上がる！！

「「はあああああっ！！」」

カートリッジをロードしながら、私達は再び得物をぶつけ合った。

「ぐっ…！！」

「ちっ…！！」

拳を交えながら交錯し、距離を取って睨み合う。

「「はぁっ…、はぁっ…」」

互いに荒い息をつき、じりじりとタイミングを計る。

「あんたも使い魔…、守護獣ならさぁ！！ご主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ！？」

「闇の書の蒐集は、我等が意志。我等が主は…、我等の蒐集については何もご存じない」

主が…、蒐集のことを知らない…！？

「何だって…、そりゃ一体…！！」

「主の為であれば血に染まることを厭わず。我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか」

ああそうさ。あたしはフェイトの為ならなんだってする。例えどんなことであろうと、あたしはきっとやり遂げてみせる。

「そうだよ…。でも…！！だけどさ！！」

でも、だからといって言いなりになるだけじゃダメなんだ。もしフェイトが間違えたら、あたしはひっぱたいてでも正してやる。ナツキも、なのはも、フェイトも。それがわかっているから、何度だっ

てこいつらに立ち向かうんだ。だから、あたしも…！！

『シグナム達が？』

あたしはとある世界の上空を飛びながら念話の相手、シャマルに聞き返す。

『うん。砂漠で交戦してるの。テスタロッサちゃんと、その守護獣の子と』

『長引くとマズいな…。助けに行くか…、っ！？』

シグナム達が負けるとは思わないが、蒐集で疲労が溜まっているのも事実。加勢しても損はないはずだ。だが、

『ヴィータちゃん？』

『くそ…、こっちにも来た。例の白服』

視界に映ったあの少女を認識した瞬間急ブレーキ、距離を睨み合う。

「高町なんとか！！」

「！？なのはだってば！！な！！の！！は！！」

名前が発音出来ない為の変な呼び方に、ぷんすか怒りながら訂正する高町なんとか。

「ヴィータちゃん、やっぱり、お話聞かせて貰う訳にはいかない？もしかしたらだけど…」

デバイスの杖も起動させず、無防備にも両手を広げ、そいつは、

「手伝えることとか…、あるかもしれないよ？」

――――笑った。

「っ！？」

柔らかな笑顔に、思わずはやてを思い出す。…ダメだ、迷うな。考えるな。

「うるせぇ！！管理局の人間の言うことなんざ信用出来るか！！」

「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者」

突っぱねるあたしに尚も呼び掛けるそいつを無視し、あたしは思考を巡らせる。

（闇の書の蒐集は魔導師一人につき一回…。つまり、こいつを倒してもページにはなんねぇんだよな…。カートリッジの無駄遣いも避けたいし…）

「ヴィータちゃん…」

それでも呼び掛ける少女を見据え、

「ぶっ倒すのは…、また今度だ！！」

拒絶の答えを返し、魔法陣を展開した。

「っ！？」

「吠えろ！！グラーフアイゼン！！」

《Ｅｉｓｅｎｇｅｈｅｕｌ》

手の平大に圧縮した魔力球にアイゼンを叩き付けた瞬間、紅い閃光と爆音が周囲に広がる。

「きゃっ！？」

アイゼンゲホイル。範囲内の対象の視覚と聴覚を奪う空間攻撃の魔法だ。

「脱出…！！」

奴が耳を塞いで目を閉じているのを確認し、あたしは高速で離脱した。

「ううっ…。あっ！！」

閃光と爆音が収まりようやく目を開くと、ヴィータちゃんは既にもう遠い位置だった。フェイトちゃんやナツキ君ならまだしも、私が今から追い掛けても追い付くのは無理だろう。

《Ｍａｓｔｅｒ（マスター）》

レイジングハートが促すように、私に声を掛けて来る。

「うんっ」

私は頷き、レイジングハートを起動した。

「よし、ここまで離せば攻撃も来ねぇ…」

肉眼での視認が不可能な程の距離を取り、ようやくあたしは一息つく。

「次元転送…、っ！？」

足元に魔法陣を展開した瞬間、それを認識したあたしは絶句した。

《Ｂｕｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ，Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

翼を展開したデバイスを構えた少女が、寸分違わずこちらに狙いを定めていたのだ。

「行くよっ、久しぶりの長距離砲撃！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

カートリッジを二発ロード、足元に円形、杖に環状の魔法陣を展開する。その数、計五つ。

「まさか…！！撃つのか！？あんな遠くから！？」

無理だ。いくらカートリッジを消費したところで、こんな長距離の相手に当てられる訳、

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

「ディバィィィィイン！！」

だが、少女は躊躇わなかった。デバイスの先端に集束させた魔力を環状魔法陣でブーストし、

「バスタアアアアアア！！」

――――長距離砲撃を、撃った。

「っ！？」

桜色の閃光に飲み込まれ、あたしは思わず目を閉じた。

《Ｉｔ'ｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ（直撃ですね）》

爆煙を上げる着弾点を見て、レイジングハートが呟いた。

「ちょっと、やり過ぎた…？」

《Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ（いいんじゃないでしょうか）》

心配げな私に対し、レイジングハートは涼しげに答える。…なんか、敵にはドライだなぁ…。

「っ！？」

が、そんな呑気な感想は、ヴィータちゃんを守るようにして立ち塞がる人影を見た瞬間吹き飛んだ。

「あ、あんたは…」

クロノ君を襲ったという、仮面の男。気配を感じさせず接近した上、ディバインバスターエクステンションを防ぎきった！？

「行け。闇の書を、完成させるんだろ？」

「っ！！」

仮面の男の言葉に、ヴィータちゃんが転位魔法陣を展開し始めた。

…させないっ！！

「ディバイィィィイン！！」

再び放とうとした瞬間、彼が動いた。カードのようなものを取り出し、宙に放る。

《Ｍａｓｔｅｒ！！（マスター！！）》

「っ！？」

気が付いた時には既に遅く、私の体は濁った青紫色のバインドで搦め捕られていた。

「うっ…！！バインド…！？そんな…！？あんな距離から、一瞬で…！？」

バインドの解除を試みるが構成がしっかりしていて、なかなか破れない。もうちょっと…、

「くっ…、ううっ…！！」

どうにかバインドを弾き飛ばし、気配を探るが無人。ヴィータちゃんも仮面の男も、影も形もなかった。

《Ｓｏｒｒｙ，Ｍａｓｔｅｒ（すみません、マスター）》

「ううん…。私の油断だよ…」

これ以上ここにいる意味はない。急いでフェイトちゃんやナツキ君のフォローに入らないと…！！

ギィン！！

「「っ！！」」

互いの得物を弾き、距離を取って対峙する。腕には傷があり、少しずつ血を流し始めていた。

（ここに来て、尚速い…。目で追えない攻撃が出て来た…。早めに決めないとマズいな…）

膂力や体格では勝っているが、こちらは疲労が溜まっている。状況はまさに五分だ。

（シュツルムファルケン…、当てられるか？）

鞘とレヴァンテインを二刀流の如く構え、私はテスタロッサの出方を伺った。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

私はバルディッシュをどうにか構えながら、荒い息を整える。足には傷が数ヶ所。黒いニーソックスも、血で朱く染まり始めている。

（強い…。クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ…。今はスピードでごまかしてるだけ…、マトモに食らったら、叩き潰される…！！）

体格差も相俟って、シグナムのパワーは凄まじい。私のバリアジャケットは高速機動に重点を置いている為薄く脆い。一撃でも貰ったら終わりだ…。

（ソニックフォーム…、やるしかないかな…）

ピリピリと緊張が高まる中、テスタロッサが身を沈め、地を蹴った。
応じるように私も疾走し、

――――ズプッ。

「あ…」

「っ！？」

テスタロッサの後ろにいたのは、音もなく彼女の背後を取った仮面の男。

――――そしてテスタロッサの胸を貫通した、左腕。

「テスタロッサ！！」

「あ…、ああ…」

いかに集中していたとはいえ、どちらにも悟られずに現れるのは不可能だ。そんな得体の知れない相手に胸を貫かれたテスタロッサの顔が、恐怖によって青ざめていく。

「あああああああっ！！」

男の手が不気味に輝いた瞬間、テスタロッサが悲鳴と共に脱力し気を失う。

「貴様ぁっ！！…っ！？」

怒りのままに飛び掛かろうとした私に、男が手に握ったそれを見せびらかした。

――――テスタロッサの、金色のリンカーコア。ＡＡＡ相当の魔力を

秘めた、輝く珠。

「さぁ…、奪え」

動揺する私に男はただ、それだけを告げた。

第九話「記憶」（後書き）

フェイトオオオ

第十話「兄妹」（前書き）

はい十話です。
ブチ切れ回もとい微妙な過去回です。
糖分が下から来るぞ！気をつけろ！（ぇ
ではどーぞー

第十話「兄妹」

胸を貫かれた瞬間、私は自分の迂闊さを呪った。いかに目の前に強敵がいるぎりぎりの状況とはいえ、周囲への警戒を怠ってはいけなかったのだ。

「さぁ…、奪え」

私のリンカーコアをシグナムに差し出して、そんなことを言う仮面の男。リンカーコアを抜かれたせいか全身が寒い。自分を構成する大切なモノを抜き取られたような感覚に、死そのものに体が侵食されるような恐怖に、私は一人ただ震える。

（…嫌だ）

怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖いこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ！！！！！

（お兄ちゃん…、助け…）

薄れゆく意識の中、思い浮かべたのは兄の顔。何度も私を助けてくれた、大好きな人の顔。

「おっと」

と、何かに気付いた仮面の男が腕を抜き、私の体を放り捨てる。力の入らない私の体は、受け身も取れずに地面に投げ出され、

「……」

なかった。漆黒のロングコートを纏った少年が、私を優しく抱き留めてくれたのだ。

（お兄ちゃん…）

見間違えるはずがない。お兄ちゃんが泣きそうな顔をしながら、私をそっと抱きしめてくる。

（…あったかい）

半年前と同じ。母さんがいなくなって、凍えそうになっていた私の心を、お兄ちゃんの優しさが暖めてくれた。

（やっぱり…、お兄ちゃんはすごいな…）

いつでも私の支えになってくれて。私が一番傍にいて欲しい時には必ず来てくれて。

（大好きだよ…）

そんなことを思いながら、私は意識を失った。

それを見た瞬間、何かが壊れた。天城ナツキを構成していた大切な要素である何かが、一瞬で砕け散った。

「……」

俺は無言で、腕の中の少女を見下ろす。全身に傷を負い、リンカーコアを抜かれた少女。俺の生きる目的、その半分を担っていると言っても過言ではない少女。俺なんかを素直に慕ってくれる、大事な可愛い妹。

――なのに、なんだ？この様は。

守ってみせると大見え切って見せたくせに、なのははヴィータの襲撃を受けてボロボロだった。ユキがいなければ、下手すれば死んでいたかもしれない。

――そして今、フェイトが同じ様に倒れている。あの時と同じか、それ以上にひどい状態で。

「…っ！！」

何が兄だ。何が守るだ。俺は全く成長していない。

――何も、守れない。

『あたしは、幸せだったよ』

「……っ！！」

脳裏を過ぎる、ユキの最期の言葉。それにつられて、あるものが俺の中で渦巻き始めた。

『殺せ』

精神を染め上げる忌まわしくも懐かしい感覚。半年前、プレシアに対して抱いていたものと同じそれは、

――殺意。

『何を躊躇う必要がある?仮面の男は、目の前の存在は、フェイトを傷付けたのだ。優しくも儚いこの少女のリンカーコアを、何の躊躇もなく刈り取ったのだ』

俺のものと同じ、だが似ても似つかない声で、それは俺に囁き始めた。

『殺せ。殺せ殺せ殺せ

フェイトをそっと地面に寝かせ、右手にアクセルを握りしめる。

「…ごめんな」

礼儀として謝りながらフェイトの胸、正確にはその間の鳩尾辺りに左手で触れる。

「……」

目を閉じ、意識を集中させる。症状はなのはの時と同じ。リンカーコアを構成する魔力を抜き取られ、激しく衰弱した状態だ。

――ここで重要なのは、魔力が足りないということ。

リンカーコアが衰弱して、魔力が生み出せないというのなら。

「受け取れっ…！！」

――外部から魔力を与えてやればいい。

「お…、おお…」

魔力の形質は人によって違う為、本来なら不可能なその所業。だが、俺は磁力、彼女は電気。ほんの僅かにだが、接点という名の互換性はある。

《――――！！》

アクセルが立て続けにカートリッジを三発ロード。異常な速度で消費される俺の魔力を補っていく。

「あああああああっ！！」

僅か３０秒でほぼ全ての魔力を使い果たし、荒い息と共にアクセルを手放す。互換性があるとはいえ、この程度では焼け石に水。フェイト自身の魔力として機能するのは、僅か数％程度だろう。自身の消耗と比べてあまりにもリスキーな手段。

――だが、何もしないよりは遥かにマシだ。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

微かにぼやける視界の中、フェイトの様子を見遣る。心なしか顔に血色が戻り、か細かった呼吸も少しだけ安定したように思える。

「…やってやったぞ、ちくしょうが」

誰にともなく呟きロングコートを脱ぎ捨て、フェイトに被せながら立ち上がる。

「「……」」

状況は、フェイトを背にして立つ俺、少し離れたところに立つ仮面の男、

――そして、フェイトのリンカーコアを握ったシグナム。

「…返せ」

「…言い訳はしない。だが、すまん」

俺の呟きにシグナムが俯き、謝罪と共に転位で姿を消す。今更追っても無駄だろう。問題は…、

「……」

無言のままこちらを見詰める、仮面の男。こいつを捕縛して連れて帰れば、状況は進むはず。

「……」

俺は無言のままアクセルを構え、

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ａｃｃｅｌ》

跳んだ。

「ほぅ…」

何か仕込んでいるのか、俺の振り下ろしたアクセルを手首で受け止め、感心したように仮面の男が呟く。が、俺はニヤリと笑みを浮かべた。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

カートリッジロードと同時、黒色の衝撃波が刀身から溢れ出す。

「っ！？」

仮面の男が驚きと共に吹き飛ばされるが、俺は凄絶な笑みを浮かべる。

「口が利ければいいよな…。別に手足の一本くらい」

自身も衝撃波に吹き飛ばされながらも、ゆらりと立ち上がり加速する。

「あ、拷問用に残しといた方がいいか」

なのはやフェイトが聞けば耳を疑うであろう言葉を呟きながら、再びアクセルを振り下ろす。

「はあっ！！」

が、仮面の男はそれを器用に受け流し、腹に掌底を叩き込む。

「がっ！！」

防ぐこともせず弾き飛ばされながら、俺は僅かに焦りを感じていた。

――今、俺が口走ったことはなんだ？

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

（マズいな…）

目の前の仮面の男を倒すという目的が一致した為か、どす黒い感情が無意識に俺の中へと入り込んで来る。しばらく放置すれば収まるだろうが、その敵と戦っている以上抑え切れる自信はない。

「ふっ！！」

「ちっ！！」

仮面の男の拳をアクセルで受けながら、俺は思考を巡らせ続ける。

普段ならば問題ないが、今は魔力の大量消費でやや意識がふらついている。この状態で感情を押さえ込み、尚且つ全力を出さずフェイトを一撃で仕留めた仮面の男を倒す。何という無理難題か。かぐや姫の難題でももう少し易しいだろう。

「甘いな」

「なっ！？」

思考に気を取られた瞬間、仮面の男が距離を詰めて来た。マズい、避けられ…、

「ブラストファイアー！！」

「「！？」」

が、桜色の砲撃が二人の間に叩き込まれ、仮面の男が後退する。

「はい残念」

そして男が下がった先には、大鎌を振りかぶる少女の姿があった。

「っ！？」

仮面の男が頭を下げて辛うじてかわすが、

「ルベライト」

「ぐっ！？」

桜色のバインドに捕獲された。

「全く、あなたの実力はその程度ではないでしょう？」

ふわりと俺の目の前に、黒衣の少女が降り立つ。

「お前は…」

「お久しぶりですね。天城ナツキ」

呆然と呟く俺に彼女、星光の殲滅者はご丁寧に頭を下げてきた。

「なんともまぁ、ふざけた状況だな」

ふわりと宙に腰掛けた闇統べる王が、辺りを見回しながら呟いた。
そんな彼女を尻目に、雷刃の襲撃者がフェイトに近付く。

「星光、いい？」

「ええ、構いません」

星光の殲滅者に頷きを返した雷刃の襲撃者が、左手に膨大な魔力を集束させ足元のフェイトを見下ろす。

「なっ、待て…」

彼女達の言葉、なのはとフェイトを殺すと言ったこいつらの言葉を、俺は忘れていなかった。あれだけの魔力を今のフェイトに叩き込ま

れたら…！！

「はあああっ！！」

が、予想に反し雷刃の襲撃者はフェイトの胸元に手を当て、フェイトと全く同じ形質の魔力を流し込み始めた。

「ま、これだけあれば十分保つでしょ」

僅か数秒だけだったがそこそこの魔力、しかも自分のものと同じ魔力を供給され、フェイトの顔色が目に見えてよくなった。この様子なら本局で治療を受ければ三日と掛からずに治るだろう。

「お前…」

「勘違いするな。この子を殺すのはこのボクだ。勝手に死なれちゃ困るんだよ」

思わずまじまじと見詰めてしまう俺に、なんとも子供染みた理由を答える彼女。…良い奴なんだか悪い奴なんだか。

「まぁ、話は後にしましょう。とりあえずは…」

そう口にして場を仕切った星光の殲滅者が、鋭い視線で仮面の男を見据える。

「あなたですね。闇の書事件の裏でこそこそ動いているのは」

「不確定要素は潰せとの命令でな…。消えて貰うぞ、塵芥」

星光の殲滅者が自らのデバイス、ルシフェリオンを構え一歩を踏み出し、闇統べる王は俺とフェイトを守るように立ち塞がり、雷刃の襲撃者はデバイスのバルニフィカスをぶら下げながらも油断なく視線を送っている。

「……ふっ」

対し仮面の男は余裕げな声を上げる。状況は四対一、しかもバインドの拘束付き。この後に及んでまだ何か策があるのか…？

「はあっ！！」

仮面の男が叫ぶと同時、彼を束縛していた桜色のバインドが弾け飛んだ。

「なっ！？」

星光の殲滅者が一瞬顔を歪めるが即座に魔法陣を展開、数十発のパイロシューターを叩き込む！！

「甘い」

だがその隙間を縫って来た仮面の男が、星光の殲滅者目掛けて蹴りを叩き込む！！

「ちぃっ！！」

が、間一髪雷刃の襲撃者がカットに入り、バルニフィカスで蹴りを受け止める。

「光翼斬！！」

大鎌へと姿を変えたデバイスを振るい、仮面の男を弾き飛ばした。

「アロンダイト！！」

その機を逃さず、闇統べる王がエルシニアクロイツを振った。杖の先端から純白の閃光が、レーザーの如く突っ走る！！

「ふっ」

だが仮面の男は宙を蹴り、アロンダイトを危なげなくかわす。そしてそのまま魔法陣を展開し、転移してしまった。

「なっ！？アクセル…」

「無理でしょう。隠蔽撹乱のジャマー結界を多重展開しています。いくら空間に干渉出来るとしても、今のあなたでは不可能です」

アクセルに追尾を命じようとした俺を遮り、星光の殲滅者が溜め息をつく。確かに今のふらふらな状態じゃ、不可能に近い所業だ。だが、

「…お前ら、一体何者だ」

俺は視線を鋭くしながら、目の前の三人に問い掛ける。なのはやフェイトを殺すと言っておきながら、今は俺達を助けた。空間制御のことも知っているし、どうも何かが引っ掛かる。

「私達が言えることはありません。時が来れば、マスターが話して

くれるでしょう」

「マスター…？」

こいつらを束ねる存在が、どこかで糸を引いている？まだまだ裏がありそうだな…。

「今回の行動はあの仮面の男を殺すという命令と、あなたを守るという命令によるものです。二度目はないと思って下さい」

「俺を…、守る…？」

余計に訳がわからない。前回俺達をあれだけたたきのめしたくせに、守る？何を言っているんだこいつらは…。

「…とりあえず俺から言えることは一つだけだ」

なんだかんだと言っているが、結局俺の結論は一つだけ。

「なのはとフェイトに手を出すっていうんなら、お前らは俺の敵だ」

そう。天城ナツキの判断基準はその一点だけ。二人に害を及ぼすなら、俺は躊躇わずに叩き潰す。

「…いい目をしていますね。マスターが気に掛けるのもわかります」

俺の鋭い視線を受け、星光の殲滅者が頷きと共に飛び上がる。

「では私達はこれにて」

「次はそいつを殺すからねー」

「精々死なないように足掻けよ、塵芥」

三者三様の言葉を残しながら、彼女達は転移魔法で姿を消した。

「…戻るか」

ふらつく体を叱咤して、フェイトを背負う。アクセルはネックレスに戻して首に掛け、バルディッシュも宝石に戻してポケットに突っ込む。

「…帰るまでは、保ってくれよ…」

地を蹴りグラビティアクセルで加速し、俺は一路海鳴市へと向かった。

「フェイトさんは、リンカーコアにひどいダメージを受けてるけど、命に別状はないそうよ」

ミーティングルームに集まった面々を見回し、リンディさんがフェイトちゃんの容態について告げる。

「私の時と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね」

リンカーコアを構成する魔力はシグナムさんに持っていかれちゃったから、おそらく間違いないだろう。

「アースラの稼動中でよかった。なのはの時以上に、救援が速かったから」

「だね…」

顔を歪めながら呟くクロノに、リーゼロッテさんが同意する。用事があったとはいえ駐屯所を開けてしまったことを後悔しているのだろう。

「三人が出動してしばらくして、駐屯所の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって、それで指揮や連絡がとれなくて…。ごめんね…、あたしの責任だ…」

指揮代行を務めていたエイミィさんが悔やむように顔を俯かせ、誰にともなく謝る。やっぱり、責任感じちゃってるのかな…。

「んなこたないよ、エイミィがすぐシステムを復帰させたから、アースラと連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だってちゃんと残せた」

リーゼロッテさんがフォローするようにコンソールを操作し、フェイトちゃんの胸を貫く仮面の男の映像を映し出す。大切な人を傷付けた相手を前にして、ナツキ君はよく堪えてくれたと思う。半年前のプレシアさんの時とは違うと知って、何となく安心した。

「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っているものと同じシステムなのに…。それを外部からクラッキング出来る人間なんて…、いるものなのかしら」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステム

をダウンさせるなんて…」

クラッキング、つまりこちらのデータベースへの侵入をする以上、データに異常が発生するはずだし、素通り出来るとは思えない。言うなれば、昼日中に泥棒がトラックで突っ込んで盗みに来るようなもの。誰にも目撃されないのはおかしいを通り越して異常だ。

「ちょっと、ありえないですよね…」

「ユニットの組み替えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ…」

それだけのことをやってみせる人が、私達の敵…。ちょっと不安だな…。

「それだけ、すごい技術者がいるってことですか？」

「…もしかして、組織立ってやってんのかもね」

私の質問にリーゼロッテさんが、厳しい表情で答える。あの仮面の男以外にも、何人かグループのように固まっているとしたら厄介だ。

「ナツキから聞いた話も、状況や関係がよくわからないな」

クロノ君がコンソールを操作し、三人の少女を映し出す。私そっくりな星光の殲滅者、フェイトちゃんそっくりな雷刃の襲撃者、そしてピントがぼやけてよく見えない三人目の少女、闇統べる王だ。

「仮面の男とほぼ同じタイミングで現れ、前回はナツキ達を完敗に追い込んだにも関わらず、今回はナツキとフェイトを守っている…。

行動パターンに法則性がないな」

「しかも仮面の男を不確定要素と呼んでいた上、謎のマスターってことは…、別の組織が絡んでいる可能性もあるね」

つまり最悪私達管理局、ヴィータちゃん達守護騎士、仮面の男とそのグループ、マスターを筆頭とした三人の少女達のグループ、計四組がこの事件に絡んでいることになる。

「アレックス、アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

リンディさんの問いに観測スタッフ、アレックスさんが短く答える。

「では予定より少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に」

「「「はい」」」

頷きと共にリンディさんが宣言し、メンバーは三々五々散り始めた。

そんな中、リンディさんが私に向き直る。

「なのはさんは一旦お家に戻らないとね」

「で、でも…」

フェイトちゃんはもとより、ナツキ君も心配だ。ナツキ君はフェイトちゃんを救う為魔力のほとんどを使い果たし、ふらふらになって戻って来たのだ。雷刃の襲撃者から貰った魔力のおかげもあってか

フェイトちゃんの回復はかなり早いけど、それでナツキ君が倒れたりしたら…！！

「いい加減親御さんに顔を見せた方がいいし、フェイトさんのことなら大丈夫。ナツキ君も付いてるし心配いらないわ」

確かに最近、ほとんど毎日駐屯所に泊まっていることは事実だ。お母さんは笑って許してくれそうだけど、いい加減戻らないとお父さんやお兄ちゃんが心配してしまう。

「…はい」

私は諦めて、一旦家に帰ることにした。

「助けて貰った、ってことで…、いいのよね？」

夜が明けて、あたし達はリビングに集まった。シグナムの話を聞き終えたシャマルが、恐々と確認するように呟く。

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれんが…」

シグナムとザフィーラが自分の見解を述べて考え込んでるけど、あたしは納得がいかない。

「ありえねぇ！！だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん！！」

闇の書は転生した瞬間にマスターを定めるのだ。横取りしたところでそれ以外の人間には扱えない。

「完成した時点で、主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずもないしな」

「まぁ、家の周りには厳重なセキュリティを張ってるし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶことはないと思うけど…」

シグナム達もそこは引っ掛かっているのか、首を傾げながら思考を巡らせる。

「念の為だ。シャマルはなるべく、主の傍を離れん方がいいな」

「うん」

ザフィーラの言葉にシャマルが頷く。もともと補助が本領だから蒐集のペースには問題ないはず。

「ねぇ、闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになってさ、それではやては幸せになれるんだよね…？」

あたしの唐突な疑問の言葉に、周囲の空気が凍った。

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私達は、それを誰より知ってるはずでしょ？」

シグナムとシャマルが首を傾げ、訝しげな視線を向けてくる。訳のわからないことを言ってるのはわかってるけど。

「そうなんだよ…。そうなんだけどさ…」

何なんだろう。この言いようのないもやもやと不安は。あたしはなんか、なんか大事なことを忘れてる気がする。

「どしたん？みんな揃って辛気臭い顔して」

「「「「っ！？」」」」

と、部屋の入口を見ると、車椅子に座ったはやてがこちらに来るところだった。マズい、聞かれた…？

「なんか悩みがあるなら相談…、っ！？」

心配そうな表情で近寄って来たはやてが、急に顔色を変えた。

「あっ…、ぐっ…」

そのまま胸を押さえ込み、ズルズルと車椅子からずり落ちる。

「はやて！！」

「はやてちゃん！！」

とっさに飛び出してはやてを抱き留め、シャマルが病院に電話を始める。

――――嫌な予感が、現実になりつつあった。

『ユキ!!ユキぃっ!!』

胸を貫かれ、大量の血を流す少女に駆け寄った少年が彼女を抱き起こす。

『あはは…、お兄ちゃん、すごいぐしゃぐしゃな顔してるよ…』

『バカ言ってんな!!』

黄昏の小高い丘を背景に、二人がそんな言葉を交わす。少女の体も地面もあっという間に朱く染まり、一目見ただけで致命傷だとわかった。

『ね、お兄ちゃん』

必死に傷を押さえ血を止めようとする少年に、少女は静かに語り始める。

『確かにあたしは壊れた子で、何も出来ないただの狂人だった。ジュエルシードなんてものを生み出して、みんなが死ぬ原因を作っちゃった』

『しゃべるな!!今、何とかしてやるから…!!』

制止する少年を遮って、少女は口の端から血を流しながらも独白を続ける。

『だけど、お兄ちゃんのおかげで、人並みに暮らせた。一緒に仲良く暮らせた。お兄ちゃんがあたしを助けてくれた』

そう言って少女は、幸せそうな笑顔を浮かべて、

『あたしは、幸せだったよ』

――――最期の言葉を、告げた。

『っ！！』

瞬間彼女の体が弛緩し、がくんと首が下がった。

『おいユキ…、冗談キツいぞ…。こんな状況で死んだふりなんて…』

死んだ。その一言で彼は、彼女がもうどこにもいないことを悟った。

悟ってしまった。

――――彼のたった一人の妹が、帰らぬ人となってしまったことを。

『あ…、ああ…、あああああああっ！！』

紅い空、朱い血溜まり、赤い瞳の少女の亡骸。その全てに押し潰された少年はただ一人、慟哭の叫びを上げた。

「ん…、う…」

ゆっくりとまぶたを開くと、初めに飛び込んで来た色は白だった。

ここ…、どこだろ…。

「フェイトさん、目、覚めた？」

ぼやけた視界の中に一人の女性の顔が映り、意識が徐々にクリアになっていく。

「リンディ…、提督…？」

ふらつく体を起こそうとすると、リンディ提督が手伝ってくれた。

あ、あれ…？私…、

「ここはアースラの艦内。あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて、気を失ってたの」

「あ…」

言われてシグナムとの戦闘中、背後からリンカーコアを抜かれた記憶が蘇ってきた。

「リンカーコアを吸収されてるけど、明日には治るそうよ。心配ないわ」

明日に回復という異常な速さに驚く以前に、失敗してしまったという罪悪感に囚われてしまう。

「私…、やられちゃったんですね…」

「管理局のサーチャーでも確認出来なかった不意打ちよ。仕方ないわ」

慰めようと私の顔を見たリンディ提督が、ふと気付いたように疑問を口にする。

「フェイトさん、泣いてたの…？」

「え…？」

言われて目元を拭ってみると、手には数滴の涙。…ああ、そっか。

「夢を、見てたんです」

「夢？」

唐突な私の言葉に、リンディ提督が首を傾げながら聞き返す。

「はい。多分お兄ちゃんの…、一番悲しい時の記憶を」

夢の中の少女は髪が銀色だった上髪を結んでいなかったものの、確かに私にそっくりだった。そして、ユキと呼ばれていた彼女を抱き抱えていたのは、間違いなく…。

「お兄ちゃんの腕の中で、たくさん血を流しながら、それでも笑顔で死んでいった子…。それが、今のお兄ちゃんの始まりなんだと思います」

目の前で大切な、たった一人の家族を失って。だからこそ何よりも、私やなのはを守ろうとする。己の身を、省みることすらせずに。

「…フェイトさん」

不意に真剣な顔になったリンディ提督が、私の顔を見据える。

「なのはさんと一緒に、ナツキ君を支えてあげて欲しいの」

「え…？」

いきなりなんだろう…？

「ナツキ君は今でもユキさんのことを引きずってるから、なのはさんやフェイトさんの為ならどんな無茶でもしてしまう。だから二人で、ナツキ君の心の支えになってあげて欲しいの。私達は絶対にいなくならないから、無茶しなくていいんだよ、って」

「…はい。もちろんです」

いきなりの言葉に反応が遅れたけど、言われなくたってそのつもりだ。お兄ちゃんに助けて貰ったから、今私はここにいる。だから今度は、私が。

「…ふふっ、頼もしいわね」

「あの、ところでお兄ちゃんは…」

質問した私に微笑み、リンディ提督が黙って私の左手を指差す。

「あ…」

いまさら気が付いたが、隣にくっつけられたベットの上で、お兄ちゃんがぐっすりと眠っていた。右手で私の手を握ったまま、穏やかな寝息を立てている。

「起こさないであげてね。かなり魔力を消耗してふらふらな状態だから」

「え…？」

まさか、お兄ちゃんもリンカーコアを…！？

「フェイトさんに魔力を分け与えたから、本人自身の魔力がすっからかんな状態なの。ほんの数％しか還元されないのに、無茶するわ…」

「え、でも…」

数％にしては、私の体は至って健康だ。下手すれば明日には全快しそうな程に。なんで…？

「あなたによく似た子…、雷刃の襲撃者だったかしら？あの子が魔力を分け与えてくれたそうよ」

「えっ！？」

雷刃の襲撃者。私を殺すと言った、私にそっくりな少女。あの子が、私に？

「自分が殺すまでは死なれたら困る、だそうよ？変わった子だけどおかげで治りも早いわ」

ナツキ君の記憶を見たのも彼から魔力を貰ったからかしらね、と笑うリンディ提督。まぁ、今は深く考えなくてもいいかな…。

「学校には家の用事でお休みって連絡してあるから、もう少し休んでるといいわ」

「はい…」

思考を放棄した私に、リンディ提督が説明してくれた。念の為アリサ達にメール送っとかないと…。

「お腹減ってるでしょう？何か軽い食事と飲み物を持ってくるわ。何がいい？」

「あ、いえ。そんな…」

立ち上がったリンディ提督の言葉に、私は反射的に遠慮してしまう。確かにお腹は空いてるけど、お兄ちゃんが心配だしあまり食べる気になれない。

「いいから」

「えっと…、お任せします」

が、結局押し切られてしまい、了解と笑いながらリンディ提督が部屋を後にした。それを見届けた私はごそごそと動いて、お兄ちゃんの隣に寝そべる。

「お兄ちゃん…」

お兄ちゃんにそっと抱き着き、私はその名を呼ぶ。危険も省みず私を助けてくれて、心配だけどやっぱり嬉しくて。そんな想いで、胸

がいっぱいになる。

「あ…」

ふと気が付く。少し上には、無防備に眠るお兄ちゃんの顔。ちょっと首を伸ばせば届く距離に、大好きな人の顔。

「……」

意を決して少しずつ、お兄ちゃんに顔を近付けていく。私達への優しい言葉を紡ぐ唇まで、僅か数ｃｍの距離。

「…っ」

まさにそれに触れようとして、ギュッと目を閉じた瞬間、

「フェイト!!大丈夫!?」

「ひゃあああああっ!!??」

バーン!!と音を立てて開いた扉とアルフの声に、思わず私は飛び上がらんばかりに叫ぶ。なななななんでこのタイミングで!?

「うる…、さい…」

と、追い撃ちを掛けるようにお兄ちゃんが呟き、寝ぼけているのかそのまま私を抱き寄せる。

「〜〜〜っ!!」

あまりの恥ずかしさに心臓がバクバクいって、今にも口から飛び出しそうだ。私ったらなんてことを…！！

「あー…、お邪魔しましたー」

「ちょっ、アルフ！？」

アルフの気まずそうな言葉と共に扉が閉まる音が響き、私は焦った。こんな状況にしておいて無視！？と頭がパニックを起こすが、

「ごめんな…」

頭上から聞こえてきたお兄ちゃんの声に思わずフリーズした。

「また…、俺は…、守れなくて…」

悪い夢を見ているのか、涙を流しながら謝るお兄ちゃん。…ああ、やっぱり、お兄ちゃんも苦しんでるんだ。

「…大丈夫だよ」

私はそっとお兄ちゃんを抱きしめて、その頭を撫でる。

「私は、ここにいるよ」

お兄ちゃんが助けてくれた私は、守ってくれた私はここにいるから。そのことを伝えたくて、私は思いっ切りお兄ちゃんを抱きしめる。

「……」

お兄ちゃんの苦しげな表情が和らぎ、怖ず怖ずと私を抱きしめる。
そのことに安心すると同時、私を強烈な睡魔が包み込み始めた。

（ちょっとだけ…、寝ようかな…）

休んでていいって言ってたし、大丈夫だよね。

（おやすみ…、お兄ちゃん…）

お兄ちゃんの胸に顔を埋めながら、私は目を閉じた。

「うん、大丈夫みたいね。よかったわ」

「はい。ありがとうございます」

石田先生の言葉に、主はやてがニコニコと笑いながら答える。

「はぁ…。ホッとしました…」

「せやから、ちょう眩暈がして、胸と手ぇが攣っただけやて言うたやん。もう、みんなして大事にするんやから」

ホッと安堵の息をつくシャマルに笑い掛け、明るく笑う主はやて。
だが…、

「でも…、あんなに苦しそうでしたし…」

「何かあっては大変ですから」

あれは尋常な苦しみ方ではなかった。痛みや辛さを押し込みがちな主はやてがあそこまでの状態だったのだ。大事にするなと言う方が無理だ。

「はやて、よかった…」

主はやてに抱き着きながら、ヴィータが安堵の声を漏らす。主はやては安心させるようにヴィータの頭を撫で、穏やかな笑みを浮かべている。

「まぁ、来て貰ったついでにちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしていってね」

「はい」

石田先生の言葉に頷いた主はやてが、気が抜けたようにぽふっとベットに倒れ込む。

「さて、シグナムさんシャマルさん、ちょっと」

「…？はい」

急に石田先生に呼び出され、私とシャマルは廊下に出た。

「今回の検査では何の反応も出てないですが、攣っただけ、ということはないと思います」

「はい。かなりの痛がりようでしたから」

鋭い視線と共に言葉を発する石田先生に頷き、私はあの時のことを思い返す。胸を押さえ苦悶の声を漏らす主の姿など、今まで一度も見たことがない。

「麻痺が広がり始めてるのかもしれません。今まで、こういう兆候はなかったんですよね？」

「と、思うんですが…。はやてちゃん、痛いのとか辛いのとか隠しちゃいますから…」

私達に心配を掛けまいとの行動だろうが、今回に限っては悪い方向に働いてしまう。病状が悪化しても、周りがそれに気付かないのだ。

「発作がまた起きないとも限りません。用心の為にも、少し入院して貰った方がいいですね。大丈夫でしょうか？」

さすがに管理局も、民間の医療機関内で表立って動くことはないだろう。主はやての病状を考えても、このまま連れて帰るのは論外だ。

「…はい」シャマルの視線を受けながら私は石田先生に頷きを返した。

「入院？」

「ええ…、そうなんです」

はやてちゃんとヴィータちゃんの不安げな視線に、答えた私は思わず視線を逸らしてしまう。二人は心配そうに、互いの顔を見合わせ

ている。

「あ、でも、検査とか念の為ーとかですから、心配ないですよ。ね？」

「はい」

慌てて二人に説明しながら、花瓶に水を入れて来たシグナムに視線を送る。さすが将、私の意図を即座に察してくれた。

「それはええねんけど…、私が入院しとったら、みんなのご飯は誰が作るんや？」

「うっ」

はやてちゃんのご飯を人一倍気に入っているヴィータちゃんが、はやてちゃんの言葉に顔を歪める。

「そ、それはまぁ、何とかしますから」

「そうですよ。大丈夫です、多分…」

花瓶を置いたシグナムの言葉を引き継ぎ、グッと両手を握ってみせる。…いえまぁ、お料理あんまり得意じゃないんですけどね。

「毎日会いに来るよ！！だから、大丈夫…」

そんな私達を尻目にヴィータちゃんが、はやてちゃんを元気付けようと彼女の両手を握って言葉を紡ぐ。ホント、真っ直ぐでいい子よね…。

「ふふっ、ヴィータはええ子やなぁ…。せやけど毎日やのうてもええよ。やることないし、ヴィータ退屈やん」

「うう…」

確かに子供、しかも短気なヴィータには、何もない病室は退屈だろう。自分でもわかっているのか、ヴィータが小さく縮こまる。

「ほんなら私は、三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

部屋の中を見回したはやてちゃんは、私達を安心させるように微笑んだ。

「あ、あかん!!すずかちゃんがメールくれたりするかも!!」

見る者を魅了するその笑顔がころっと外れ、オロオロし始めるはやてちゃん。…不思議な魅力を持った子ですよね、本当に。

「ああ、私が連絡しておきますよ」

「…お願い」

ニコニコ笑って答えた私に、弱々しく笑うはやてちゃん。

「では、戻って着替えと本を持って来ます。ご希望がありましたら」

「何にしようかなぁ…。えーと…」

リクエストを聞き終えた私達ははやてちゃんに挨拶を済ませ、病室

を後にした。

「今回の現象も、闇の書が原因か？」

「わからない…。断定は出来ないけど、可能性は高いわ…」

前を歩くシグナムとシャマルが、沈痛な面持ちで言葉を交わす。はやての病状が加速した一因は闇の書の呪いだから、今回もそのせいかも…。

「今まで手を抜いていた訳ではないが…、なるべく迅速に蒐集を行わねば」

「はやてちゃんが家を空けたのは幸いね…。こっちに戻らなくて済む分、ページを集めるには好都合だわ」

今後の方針が決まったようだ。考えるのはあたしの役目じゃない。あたしの役目は、ぶち抜き、倒し、守ること。それだけ。

「…はやて」

外に出てはやてがいるであろう病室を眺めているあたしの中に、またあの嫌な予感が渦巻き始める。このもやもやは、一体何を意味しているのか。

「ヴィータ？」

「あ、ああ」

シグナムの声に我に返り、二人に追い付くべく歩くスピードを上げる。

――――杞憂で、ありますように。

「っく…、う…」

無人の病室の中、私は胸を押さえ込みながら体を丸める。みんなの前では平気そうに振る舞ってはいたが、実際かなり辛い。

「大丈夫…、大丈夫…」

昔の一人で過ごしていた空虚な日々とは違う。今はみんなが、家族がいる。みんなの前では、弱い姿を見せる訳にはいかない。

「みんながおるから…、私は平気や…」

私の呻きと呟きは、夕暮れの病室へと溶けていった。

第十話「兄妹」（後書き）

後味悪過ぎｗ
ええ、ナツキは殺さず、乗り越えました。半年で多少は強くなれたのでしょうね。
もっとも、なのはとフェイトのお陰がほとんどですがｗ
てか後半ｗ懲りもせずに糖分だよｗやっちゃったね！ｗ

さて、次回はオリジナル回。
強敵を前に、あのお方が目覚めます。

第十一話「黒龍」（前書き）

はい十一話です。
前半糖分後半シリアス（笑）の完全オリジナル回です。
とりあえず前半でドロップアウトしないように頑張ってくださいｗ
ではどーぞー

第十一話「黒龍」

「…おい」

あたしは目の前にそびえ立つ、巨大な影を見上げてぼやく。こんなもんを相手にするなんて聞いてねぇぞあたしは。

「確かに迅速に蒐集しなければならない以上、少しでも質のいいリンカーコアが欲しいのは事実だが…。これは些か無理があるのでは？」

ザフィーラも冷静に状況を分析し、今の状態を酷評する。それもそうだろう、なんせ今あたし達の目の前にいるのは、

――漆黒の、巨大な龍。

爬虫類のようなフォルムをベースにした、西洋のものに近いドラゴン、とでも言うのだろうか。体はびっしりと極厚の鱗で覆われ、広げられた巨大な翼は優に十数mを越えている。手足の指の先には鋭く尖った鉤爪が生えていて、口元にはそれと同等の牙がズラリと。胴体と同じくらいの長さを誇る尻尾には、あたしと同程度の大きさの棘がびっしりと生え、紅く燃え滾る瞳はあたし達を見下ろし、彫像の如く静止している。

「いくらなんでも無理だろ、これ。あの黒服の刀男探して潰した方が早いと思うぞ」

「だがこいつを倒せば、一気に５０ページは埋められる。その後で３０ページ相当の天城を探して倒せば、それだけで闇の書は完成間近だ」

あたしの言葉をシグナムが遮り、レヴァンテインを抜刀した。…まぁ、やるしかねぇんだけどよ。

「手持ちのカートリッジ全弾使えば、さすがにぶっ倒れんだろ」

「二人共、無理だけはするなよ」

あたし達も肯定の答えを返しながら、それぞれの武器であるグラーフアイゼンと拳を構える。

「我等が主を救う為、守護騎士、参る！！」

威勢よくシグナムが吠えた瞬間、龍の目付きが鋭くなった。

「ゴギャアアアアア！！」

天をつんざく雄叫びと同時、巨大な火球が襲い掛かる！！

「させん！！」

が、割って入ったザフィーラが障壁を展開。火球を防ぎきった。

「レヴァンテイン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！》

ザフィーラと障壁の陰からシグナムが飛び出し、レヴァンテインにそれを命じた。カートリッジがロードされ、その刀身に業火を纏わせる！！

「アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！》

負けじとあたしも飛び上がり、カートリッジをロード。先端に突起、後部にジェットを搭載したラケーテンフォルムに切り替える。

「ラケーテン！！」

《Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ！！》

あたしは宙から頭を、シグナムは地上から腹目掛けて、それぞれのデバイスを振りかぶる。

「ハンマアアアア！！」

「はあああああっ！！」

紅と紫の爆発が、黒龍の体を飲み込んだ。

「……ん」

ぱちりと目を開け、周囲を見回す。まず真っ先に視界に入ったのは、

「すぅ…、すぅ…」

俺に抱き着き穏やかな寝息を立てる、フェイトの寝顔だった。

「…待て」

何このデシャヴュ。なんか半年前にもこんなことがあった気がする。魔力を使い果たしてぶっ倒れたという状況までそっくりだ。…まぁ、あの時目の前にいたのはなのはだったが。

「……アホくさ」

寝起き特有の訳のわからない思考を断ち切り、ゆっくりと体を起こす。体に疲れや魔力不足特有のけだるさはない。ユーノに教わった回復促進魔法をこんなところで使うことになるとは。人生何が起きるかわかったもんじゃない。

「…腹減った」

《Ｂｅｃａｕｓｅ　ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｍｏｒｎｉｎｇ（昼前だからな）》

ぽつりと呟かれた言葉に、胸元の相棒が言葉を返す。シグナム達を発見して出動したのが午後だったから…。

「あれからだいたい一昼夜ってとこか？」

《Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ（その通りだ）》

俺の言葉に同意したアクセルに頷きを返し、今後の行動を考える。

「まぁ学校は論外として…、フェイトに付いててやるかな」

午後の授業だけに、しかもこんな状況で行くつもりにはなれない。

何が起きるかわからないし、そうした方がいいだろう。

「とりあえず飯の調達を…」

腹が減っては戦は出来ぬ。まずは腹を満たそうとベットから降り立とうとすると、僅かに抵抗を感じた。

「ん…」

寝ぼけているのか無意識なのか、フェイトが俺の服の裾をきゅっと捕まえていた。

「…おい」

さすがに困るのでそっと手を引きはがそうとするが、

「お、にい…、ちゃん…」

フェイトの寝言に思わず手を止める。

「……」

これってあれだよな、ここでフェイトを置いていったら泣かれる気しかしないんだが。弱り切った状態なのにしがみついてまで一緒に寝てたんだから絶対泣くよね、うん。

「……はぁ」

どうしたものかと考えて、三秒で諦めた。どう考えたところで答えは一つしかない訳で。

「俺も甘いな…」

溜め息をつきながら、俺は覚悟を決めた。

「で、何をしているんだ君は？」

フェイトを背負った状態で食堂に現れた俺に、クロノが呆れた顔で尋ねてくる。

「聞くな察しろ頼むから」

対し俺は3ワードで答え、ソファ状の椅子にフェイトを座らせその隣に座り込む。さっきから周りの視線が痛いこと痛いこと。

「要はあれだよ、いつものことさ」

「ああ…、そういうことか」

クロノの隣に腰掛けたアルフがニヤニヤと笑いながら答え、納得したクロノが俺に哀れみの視線を向ける。…何このイジメ。

「というかアルフに頼んで持って来て貰えばよかったんじゃないのか？」

「…この量を一人で？」

テーブルの上には俺が重力制御で運んで来た大盛りカレーとナポリ

タン、アルフの分である大盛り生姜焼き定食と牛丼特盛、加えてコンソメスープが置かれていた。あはは…、重力制御万歳。

「…苦労してるな」

「…言うな」

コテンと俺に寄り掛かって来たフェイトを見遣り、二人同時に溜め息。誰か…、俺に胃薬を…。

「でも実際回復は早いんだろ？何で半日も寝ちゃってるのさ？」

既に牛丼を掻き込み始めていたアルフが、不思議そうに尋ねてくる。マイペースだなちくしょう。

「リンカーコア自体はほぼ修復されてるんだが、魔力が体に馴染んでないんだよ」

いかに自分のものと形質が似通っているとはいえ、他人から渡された魔力が馴染むには時間が掛かる。言うなればとあるプログラムで圧縮されたファイルを、別種のプログラムで復元するようなものだ。魔力面では万全でも体力は消費している、という訳だ。

「ただでさえシグナムとの戦闘で疲弊してたからな…。まぁ、その内目を覚ますと思う」

カレーを口に運びながら説明する。丸一日ぶりのご飯はやたら美味かった。

「ん…」

と、目が覚めたのか、フェイトがゆっくりと目を開けた。

「あ、悪い。起こしちまったか？」

「ううん…、大丈…」

尋ねた俺に答えながら、フェイトが俺の顔を見上げる。

「……っ！！」

瞬間、フェイトの顔が真っ赤になった。

「…フェイト？」

思わず訝しげな声を上げてしまうが、

「なななななんでもないなんでもないよ！？」

めちゃくちゃ挙動不審な答えが返って来た。なんでもなくないって全力で叫んでるだろその態度。

「あーもう落ち着けって」

とりあえずフェイトを抱き寄せ、頭をぽふぽふと叩く。

「あぅ…」

が、逆効果だったのかフェイトはフリーズしてしまった。…離れた方がいいのか？

「あ…」

そう思い距離を取ってみるも、今度は飼い主に捨てられた子犬のような表情を見せるフェイト。…どうしろと？

「…まぁ、とりあえず。落ち着いたか？」

「…うん」

ひとまずフェイトの隣に戻り、頭を撫でながら聞いてみる。僅かに顔を赤くしながらも、フェイトはこくりと頷いた。

「ほら」

これ以上聞いても徒労に終わりそうなので、フェイトの前にナポリタンを差し出す。

「さすがに丸一日何も食ってないとキツいだろ？軽めがいいかと思ってナポリタンにしといたけど、嫌いか？」

「ううん、平気…」

フェイトは答えながらフォークを受け取り、黙々とナポリタンを食べ始めた。

「君が食うんじゃなかったのか…？」

カレー攻略を再開した俺に、クロノがジト目で尋ねてくる。

「いや、そろそろ起きるんじゃないかなーと思って。念の為注文しといた」

「…未来でも見えるのか君は」

サラリと答えた俺にクロノが呆れ、野菜サラダを口に運ぶ。ちなみにがっつくあまり空気になっているアルフは既に定食に取り掛かっていた。はえーよ。

「それで、今日はどうするんだ？」

「とりあえず今日はフェイトとまったり過ごすつもり。他にやることもないしな」

答えると同時カレーを食べ終え、ミネラルウォーターを口に含む。そういや最近カレー作ってないな…。その内作るか。

「まぁまずは海鳴市に戻るよ。なのはも心配してるだろうし顔見せないと」

「そうだ、なのはは？」

アルフにトレーと食器をパスしながらの言葉に、フェイトが心配そうに顔を上げた。…頬にケチャップ付いてるけど。

「あの後ヴィータのところに向かったんだが逃げられた。幸い怪我はないよ」

「あぅ…、よかった…」

俺に頬を拭われ顔を赤くしながらも、フェイトが安堵の息を漏らす。
不躾な言い方になるが一度リンカーコアを抜かれた以上、後は星光の殲滅者達にだけ気をつけていればいい。最悪フルドライブを使ってでも、二人が逃げる時間を稼げばいいだけだ。

「クロノはアースラに？」

「ああ、出動待ちだ。ナツキ達も有事に備えて待機しておいてくれ」

さりげなくアルフのトレーを持って立ち上がり、クロノが言葉と共に場を後にする。

「了解」

「うん」

「あいよ」

三人の声に頬を緩め頷き、クロノは立ち去った。…さて、

「んじゃ、俺らも帰るか」

「うん。……あっ」

俺の言葉に頷いたフェイトが立ち上がるも、力が入らないのか急にふらついた。

「危ねっ」

とっさに支え、倒れるのだけは阻止した。ユキの介護生活で得たス

キルがこんなところで役に立つとは…。

「ご、ごめん」

「病み上がりなんだから無茶すんなって、のっ」

謝るフェイトを遮りながら、彼女を背負って立ち上がる。…うわ、軽。飛んでくんじゃないかと思うくらい軽いぞこの子。

「お、お兄ちゃん!?」

「んなふらつかれたらこっちの心臓が保たんわ。おとなしく背負われてなさい」

慌てるフェイトに兄らしくビシッと言ってやる。うん、今回ばかりは兄貴権限を使ってでもフェイトを歩かせない。

「……ありがとう」

「普通だ普通」

肩に頭を乗せるフェイトに言い返し、すたすたと歩き出す。

「おーおー、熱いこと熱いこと」

「っ!?」

が、アルフの茶化しを受け、フェイトの顔が真っ赤に染まった。

「……いっぺんレールガン食らってみるか?」

「ごめんなさい」

さっきから視線とひそひそのダブル攻撃でいい加減いらついていた俺の口から漏れた、感情のない氷点下の声にアルフが土下座した。さすが動物、素直でよろしい。

「…さて、帰るか」

仕切り直すように呟き、アルフを伴って俺は歩き出した。

「ちくしょうがあああああっ！！」

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

痺れを切らしたヴィータが鉄球を取り出し、黒龍向かって叩き付ける。複雑な軌道を描きながら飛翔する四個のそれは、しかし龍の爪によって切り裂かれた。

「飛竜一閃！！」

その隙を見た私はカートリッジをロード。蛇腹剣と化したレヴァンテインに乗せた、大量の魔力を斬撃と共に叩き込む！！

「ゴギャアアアアア！！」

だが龍は尻尾で防ぎ、もう一方の爪を私目掛けて薙ぎ払って来た！！

「おおおおおおっ！！」

ザフィーラが私を抱えて離脱した瞬間、剛爪が大地を刈り取った。
一撃受けたら終わりだな…！！

「シグナム、ヴィータ、ファルケンとギガントをやれるか！？」

「「なっ！？」」

ザフィーラの言葉に私達は絶句する。ファルケンとギガント。私とヴィータが誇る最強魔法。確かにそれを使えばさすがの黒龍にもダメージは通るが…、

「バカ言ってんな！！あれは時間が掛かるんだぞ！？準備中は恰好の的じゃねぇか！！」

そう。強力な魔法を発動するには、それに見合うだけの準備が必要。ファルケンやギガントを撃つには最低でも一分、疲弊しきった今の状態では最短でも三分は掛かる。その間この龍が、何もせずに見守ってくれるはずもなく。

「案ずるな。足止めは任せておけ」

私を離したザフィーラが両の拳を打ち付け、静かに断言する。既に三人共満身創痍。…やるしかない、か。

「ヴィータ！！聞いての通りだ、一撃で決めるぞ！！」

「わあってらぁ！！」

ガシュンガシュン！！と音を立て、互いに三発ずつカートリッジをロードする。次の一撃で決める為、魔法陣を展開し魔力を練り上げ始める。

「ゴギャアアアアアア！！」

「おおおおおおっ！！」

龍の剛爪を受け止めながら、ザフィーラが怒号のごとき雄叫びを上げる。保ってくれよ…！！

「ぶち抜くぞ、グラーフアイゼン！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）》

ヴィータがグラーフアイゼンを大上段に振りかぶると同時、勇ましい声が答えた。

「行くぞ、レヴァンテイン！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）》

私も鞘とレヴァンテインを構えると同時に叫び、頼もしい一言に頷く。

「打ち砕け、巨人の鉄槌！！」

「射抜け、疾風の隼！！」

紅と紫、それぞれの魔力が激しく渦巻き、場を圧倒し埋め尽くす。

…準備は、整った！！

「ギガント…」

「っ！？」

ヴィータが放とうとした瞬間、私はそれに気付いた。こちらに顔を向けた龍がその巨大な顎を開き、

――――膨大な魔力を、集束させていた。

「ヴィータ！！」

「っ！？」

私の声でそれに気付いたのか、ヴィータが一瞬硬直した。ザフィーラは爪を止めるのに精一杯で、龍の挙動に気付いていない。

「おおおおおおっ！！」

ヴィータに向けて必死に手を伸ばすが、時は既に遅過ぎて。

――――私達は、業火にその身を飲み込まれた。

ピンポーン。

「はいはーい」

チャイムを押すと間髪入れずナツキ君の声が響き、扉から顔を覗かせました。

「よ、学校お疲れ様。入った入った」

「お邪魔しまーす」

事前に連絡していたこともあって私はすんなり通されました。リビングでは、ソファに腰掛けたフェイトちゃんがホールから切り分けられたケーキを頬張っています。

「あ、なのは。いらっしゃい」

「フェイトちゃん、起きてて大丈夫なの？」

昨日は意識を失ってた状態だったのに、もう動き回ったりして大丈夫なのかな？

「うん。魔力の方は完全に回復してるし、問題ないと思う」

「リハビリ代わりに軽くトレーニングしたからな。完全復活って言っていいと思う」

フェイトちゃんが微笑みながら切り分けたケーキを差し出し、ナツキ君も補足しながらキッチンに戻る。

「そっか…、よかった…」

安堵の溜め息と共に、何とは無しにケーキを頬張る。

――瞬間、電流が走った。気がした。

「お、美味しい…」

ふんわりとしたスポンジに、みずみずしい果物、甘味を引き立てつつしつこさを感じさせないクリーム、すっぱさで味にアクセントを加えるストロベリーソース。翠屋のクリスマスケーキと同じか、それ以上の美味しさだった。

「お兄ちゃん、なのはも気に入ってくれたみたい」

「お、そりゃ嬉しいな。作ってよかった」

キッチンに振り返って微笑むフェイトちゃんに、ナツキ君が頬を緩める。って、え!?

「もしかしてこれ、ナツキ君が!?」

「まぁね。暇だったし材料あったし」

驚いたように尋ねる私に、がちゃがちゃと食器や計器を片付けながらナツキ君が答える。いくら暇だったからって、ホールケーキ作る男の子はいないよ普通…。

「お店で売れるよね、これ…」

「嬉しいんだけど複雑だよね…」

美味しい手作り料理を食べて貰いたい女の子としては、ハードルが高くてちょっと冷や汗。思わず呟いた私にフェイトちゃんも苦笑い。その内教わろうかな…。

「まぁなんだ。お祝いだお祝い」

「「お祝い？」」

余った材料なのか、フルーツカットを盛り付けた皿を持って来たナツキ君に二人揃って聞き返す。

「フェイト復活兼なのはと再会兼フェイト入学記念その他諸々。ごたごたしてて時間なかったしな」

でなきゃこんな気合い入れたもん作らねぇよ、と苦笑するナツキ君。…もう、相変わらずなんだから。

「やっぱり優しいよね、ナツキ君」

「うん、お兄ちゃん優しいよね」

笑顔で頷きを交わす私達に、ナツキ君が溜め息をつく。

「またおまえらはそうやって俺を持ち上げて…。普通だ普通」

呆れたように苦笑して、ソファに腰掛けるナツキ君。もちろん私が右で、フェイトちゃんが左。すっかりお馴染みのポジションになっています。

「あ、そうそう。フェイトも手伝ったんだぞそれ。果物切ったりして」

「た、大したことしてないよ」

「そっか、すごいねフェイトちゃん。あ、ナツキ君、よかったら今

度作る時私も混ぜて」

「お、いいね。翠屋後継ぎ候補の本気、見せて貰おうじゃん」

「あはは、そんな大したことじゃないよ」

「楽しみ…、だな…」

ほのぼのとした空気の中、三人仲良くケーキを食べる。いつまでもこんな生活が続けばいいな、と、そんなことを願いながら。

――だけど、現実は非情で。

『ナツキ、なのは、フェイト。リラックスしているところ悪いが、緊急事態だ』

私達の平穏な一時は、クロノ君からの通信で終わりを告げた。

「う…」

あたしはふらつく頭を振り、ゆっくりと体を起こす。幸いにもダメージはあまりなかった為、戦闘行動に支障は…、

――ダメージが、ない？

「なっ…！？」

周囲の光景が視界に入った瞬間、あたしは絶句した。何故ならそこにあったのは、

――数ｋｍにも渡って刈られた、大地。

衝撃によって周囲の砂丘が崩れ地形は完全に変化、業火で焼かれた砂は尚も熱気を吹き上げていて、その攻撃の凄まじさを物語っている。あの火球には相当の量の魔力が込められていたが、まさかここまでとは…！！

――――そんなものを食らっておいて、ダメージがない？

「シグナム！！ザフィーラ！！」

遅れて視界に入った力無く横たわる人影、二人に駆け寄り必死に呼び掛ける。ひどい状態だった。ファルケンの魔力を全て防御に回したのか幸い重傷は負っていないが、激しい熱風に煽られたのか騎士甲冑の一部が溶け、熱量に気を失ってしまったようだ。

――――なら、何故防御もしていないあたしにダメージがない？答えは簡単。二人が、守ってくれたからだ。

「……んのやろおおおおおおっ！！」

怒りのままに飛び上がり、最後のカートリッジをロードする。

《Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ》

後部のジェットから激しく魔力が噴射され、勢いそのままに眼前の敵、黒龍の頭部目掛けて加速していく。

「うおらあああああああっ！！」

あたしは大きく振りかぶり、グラーフアイゼンを思いっ切り叩き付ける！！

「あ…」

が、あたしの全力の一撃は、異常な固さを誇る外殻に弾かれた。防御すらせずに一撃を受けた黒龍は、あたしを一度だけどうでもよさそうに見た。

「があっ！？」

あまりのショックに呆然としているあたしに黒龍の頭突きが叩き込まれ、地面目掛けて吹っ飛ばされる。今ので何本かいったな…、このまま落ちたら死ぬかも…。

（はやて…、ごめん…）

闇の書の呪いに蝕まれている、大好きな主のことを想う。至らない守護騎士で、助けてあげられなくて、ごめん…。

「っと」

だが、地面に叩き付けられるはずだったあたしの体は、誰かに優しく抱き留められた。

「え…？」

呆然と視線を上げた先にいたのは、あいつ。黒い服の刀使いの少年だった。

「ったく、ホントバカだなお前ら。手に負えないなら相手すんなっての」

呆れたように呟きながら、あたしの頭をわしゃわしゃと撫でる。何

故か少しだけ、はやてのことを思い出した。

「俺達が何とかしてやるから…、後は安心して休んどけ」

本来なら敵であるはずの彼の言葉は、何故かすんなりとあたしの心に入って来て。奇妙な安堵感に包まれながら、あたしは気を失った。

「とは言ったものの…、どうすっかなー…」

ヴィータを背負い直しながら、目の前の敵について考える。彼女のデバイス、グラーフアイゼンは俺の意図を察してくれたのか、ネックレスに戻りヴィータの首に架かってくれた。これでまあ片手は使える訳だが。

「…五十歩百歩か」

相手は生物というカテゴリー内なら間違いなく最強の存在、龍だ。並の魔導師ごときが太刀打ち出来るような存在ではない。本来なら逃げるのがベストな選択肢だが、

「…無理だよなぁ」

既にヴィータ達は奴に攻撃を叩き込んでいる。そして龍はプライドの高い生き物だ。いくら逃げたところで殺すまで追って来るだろう。

「…やるしかないか」

《Ｏｎｌｙ　ｉｔ　ｍｕｓｔ　ｂｅ（それしかないな）》

溜め息と共にグラビティフォールを発動、異相空間に守護騎士達を避難させる。相手は龍、被害がどこまで及ぶかわからない以上、離れた所に避難させるよりはいいと判断したからだ。

《Ｄａｎｋｅ（感謝）》

「普通だ普通」

グラーフアイゼンの礼を流しながらしばし思考、方針を決定し精神リンク。

『つー訳で管理局からの応援が来るか、こいつを倒すか、もしくはこいつが気を沈めるまで。ゴールの見えない持久戦になるんだが大丈夫か？』

『うん、大丈夫！！』

『お兄ちゃんがいればきっと出来るよ』

脳内に間髪入れず響いた二人の声に苦笑と共に頷き、俺はアクセルを構える。

「さあて…。ほんじゃ、やりますか！！」

その言葉と共に、俺は重力制御で加速した。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

「はっ！！」

手始めにカートリッジを一発ロード。ダンッ！！と地を蹴って飛び上がり、漆黒の衝撃波を黒龍の顔面に叩き込む！！

「ちょっ、マジかよ…！？」

が、攻撃は龍の外殻に弾かれ霧散した。あの程度では文字通り蚊に刺された程のダメージもないだろう。

「レールガンやブレイカークラスなら通りそうだが…、なるほどな」

大方守護騎士の連中も、大技を放とうとしてやられたのだろう。そうなると…、

（状況的に考えたらカートリッジの全弾高速ロードによるレールガンか…、不意打ちでのスターライトブレイカーくらいしか通らないだろうな…）

仮に通ったとしてもどの程度のダメージになるかはわからない。消耗度合いを考えればリスクの方が高い上、フェイトは病み上がり。長引かせるのも短期決着も不可能って…、

「無理ゲーだろこれ！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ａｃｃｅｌ》

高速で振り抜かれた右の剛爪をかわしつつ、理不尽さに思わず叫ぶ。レベル１のキャラクターがラスボスに時間制限付きで挑むようなも

のだ。八方塞がりなんてレベルじゃない。

『なのは、フェイト、カートリッジは何発ある？』

『私はセットされてるのを含めて、六発入りマガジンが五個』

『私も六発入りリボルバーが計五つ。合わせて六十発だね』

俺の飛ばした念話に二人が間髪入れず答える。俺もなのは同様六発入りマガジンが五個だから…、

『俺のと合わせて九十発か…。互換性がないのが痛いな…』

互換性があればフェイトのカートリッジを俺達に回して、レールガンとブレイカーの集中砲火も可能だったのだが…。

「たられば話にゃキリがない、なっ！！」

《Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｚａｍｂｅｒ》

鞘に収めたアクセルを高速抜刀、比較的外殻や鱗の薄い足の付け根を狙うが、僅かに傷が付いただけだった。

《Ｉｔ　ｉｓ　ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　ｗｈｅｎ　ｍｕｌｔｉｕｓｉｎｇ　ｉｔ（多用するとマズいぞ）》

「みたいだな」

手に残る僅かな痺れ。連発したら俺の手首が砕けそうだ。それほど固い。

「っ！？」

全力で飛翔すると同時、先程まで俺のいた空間を刺だらけの尻尾が薙いでいた。気を抜いたら一瞬で終わるな…！！

「なら…！！」

カートリッジを三発ロード、重力の弾丸を三百発近く生み出す。

「物量押しだ！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

アクセルを振るうと同時に弾丸が宙を翔け、黒龍を囲むかのように環状に回り始める。さながらそれは、龍を捕らえる檻のようにも見える。

「シフト！！」

さすがの龍も追いきれないのか、ほんの一瞬動きを止めた。その機を逃さず、俺は弾丸を槍に変質させる。

「ファイア！！」

三百を越える漆黒の槍の一斉放射に、さすがの黒龍も唸り声を上げる。…よし、

「なのは！！」

「うん！！」

俺の声に応え、なのはがバスターモードのレイジングハートを構える。既にその先端には、渦巻く魔力と展開された環状魔法陣。準備万端、やっちまえ！！

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

「ディバインバスター、エクステンション！！シュート！！」

カートリッジ排出と共に、龍の背後から桜色の砲撃が放たれる。直撃コースな上相手は図体がデカい。あれだけの魔力なら通るか…！？

「……」

対し龍はちらりと背後を見遣り、その長大な尻尾を振るう。
――それだけで、なのはの砲撃は霧散した。

「っ！？」

「んな…！？」

バケモンかこいつは！？

「っ！？なのは！！」

一緒の硬直、それは奴にとって好機以外の何者でもない。振りかぶられた両の剛爪が、挟み込むようになのはに迫る！！

「っ！？」

《Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ》

なのはが身を竦めた瞬間フェイトがカバーに入った。なのはの体を抱きしめ、高速で離脱する。

「フェイトナイスフォロー！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

俺は叫びながらカートリッジを二発ロード。刃に黒い力を纏わせ大上段に振りかぶる。

「蜃気一閃！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｚａｍｂｅｒ》

極大の剣と化したアクセルを、悪魔を思わせる龍の羽、その継ぎ目に叩き込む！！

「ゴギャアアアアア！！」

さすがに通ったのか、龍が苦悶の叫びを上げる。…やるなら、今！！

「なのは！！全弾使ってもいい！！ブレイカーを叩き込め！！」

マガジンを差し替えながらなのはに叫び、カートリッジを全弾ロードする。千載一遇のチャンス、逃したら次はいつかわからない！！

「うん！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

レイジングハートが四発弾丸を排出し、極大の魔法陣を描く。周囲の魔力がかき集められるその光景は、桜色の流星だ。

「レールガンじゃ時間食い過ぎるからな…！！見せてやるよ、俺のブレイカーを！！」

アクセルを掲げると同時、巨大な魔法陣に白銀の光が集束していく。なのはと同じ流星を生み出すそれは、紛れも無く殲滅者（ブレイカー）の名を冠する魔法！！

「穿ち貫け！！アースライト…！！」

「っ！？お兄ちゃん！！」

その名を叫ぼうとした瞬間、フェイトの絶叫によって遮られた。瞬間的に嫌なものを感じ取った俺がアクセルを左に立てて構えると同時、

「がああああっ！？」

俺の体は黒龍の尻尾に弾き飛ばされた。

――まるでスーパーボールのように、あっさりと。

「お兄ちゃんっ！！」

それを見た瞬間、フェイトちゃんが飛んだ。弾き飛ばされたナツキ

君を抱きしめ、砂丘に背中から突っ込む。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｆａｌｌ！！》

「がっ、げほっ、ごほっ」

幸いアクセルが重力を操作したおかげで衝撃はなかったみたいだけど、ナツキ君が思い出したように激しく咳込み、口の端から血が流れ出す。

「お兄ちゃん、大丈…っ！！」

ナツキ君を抱き起こしたフェイトちゃんが絶句する。それは当然だろう、何故ならそこにあったのは、

――――原形を留めない程ぐちゃぐちゃになった、ナツキ君の左腕。

関節がありえない方向に捩曲がり、刺で切り裂かれたのか大きな裂傷が走っている。そこからは大量に血が流れ、地面に赤黒い染みを作っていた。

「っ…！！アクセル！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ！！（了解！！）》

ナツキ君が無理矢理関節を戻すと同時、アクセルが治癒魔法を展開。血の流れが少しずつ弱まっていく。

「あ…、ああ…！！」

スカートの裾をギュッと握りしめながら、悲しみと戸惑いの声を上げるフェイトちゃん。そんな彼女に苦笑しながら、ナツキ君が頭を

撫でる。

「心配すんな…、このくらい、なんてことない」

「でも、血がたくさん…！！」

尚も泣き叫ぶフェイトちゃんを、ナツキ君が優しく抱きしめる。

「大丈夫だって、絶対に」

「…うん」

ようやく落ち着いたのか、フェイトちゃんが頷きながら答える。

「……」

《……》

だけど、私とレイジングハートはそんなことを気に掛ける余裕もない。ただ私の内に渦巻くのは、たった一言。

――守れなかった。

気付けたはずなのに、もう少し早くブレイカーを撃っていれば防げたかもしれないのに、出来なかった。

（これが…、ナツキ君の背負ってたもの…？）

ユキさんを守れなくて、目の前で殺されて。私やフェイトちゃんを守れなくて、嘆いて、悲しんで。その度にナツキ君は、一人でこんな思いを抱え込んで来たの？

「ゴギャアアアアアア！！」

龍が天に吠えると同時、魔力が集束していく。トドメを刺すつもりなのは、考えなくてもわかること。

「……レイジングハート」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（お任せを）》

私の声に応え、レイジングハートがそれを起動する。同時、周囲の魔力が集束し、私の背中に桜色の翼を形成し始める。

「待てなのは！！そいつはダメだ！！」

ナツキ君が口から血を吐きながらも絶叫する。確かに多用するのは危険なモノだってことくらいわかってる。だけど、

「私は…、守りたい」

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）》

私達の声がシンクロした瞬間、桜色の光が爆発した。

「あはっ」

その笑い声が響いた瞬間、世界が凍った。その声に秘められたモノに、俺どころか龍さえ気圧されていた。フェイトに至っては気絶し

ていて、それの凄まじさを物語っている。

ドゴオッ！！

それを察したのか漆黒の流星が龍にぶち当たり、一撃で地に沈めた。

――守護騎士や俺達が手こずった相手をただの蹴り、その一撃で。

「あははっ」

地に伏せた龍を見下ろし、桜色から漆黒へと変貌した翼を広げた彼女は笑う。世界全てを見下すように、自分こそが頂点だとでも言うように。

「あはははははははっ！！」

漆黒のレイジングハートを構えた、銀髪赤眼の魔導師。なのはの体を乗っ取った、俺の実妹。

「久しぶり。お兄ちゃん」

――理操る狂気の魔女。

天城ユキが、そこにいた。

第十一話「黒龍」（後書き）

ユキ様降臨キタアアアアアア！
ええ、自重なんて投げ捨てました。ユキは現時点で間違いなくアナザー中最強です。
まさにこれが妹様クオリティ（ぇ

さて次回、愛しの兄を傷付けた龍がどうなることやら…（遠い目
…え？結果は見え見え？…ワタシナニモシリマセン（ぇ

第十二話「力の差」（前書き）

はい十二話です。
狂気の妹様が大暴れします。
何やら核心が語られたりしますが、ユキの前にはそんなことどうでも（ｒｙ
ではどーぞー

第十二話「力の差」

「やっほ、お兄ちゃん。二週間ぶりくらいかな？」

ふわりとお兄ちゃんの前に降り立ったあたしは、ニコニコと笑みを浮かべる。久々に実の兄に会えたのだ、嬉しくない訳がない。

「…久しぶりだな、ユキ」

僅かな警戒を抱きながらも、律儀に挨拶を返すお兄ちゃん。うんうん、やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんだ。

「それにしてもボロボロだねー。ダメだよ？気抜いちゃ」

あたしはそっと左腕に触れ、治癒魔法を発動させる。普段なら一瞬で回復させられるんだけど…。

「うーん、目覚めたてだしあんまり使う機会なかったから、ちょっと時間掛かるかなー？」

周囲を気にせず行動するあたしに、お兄ちゃんがぽかんとした表情を向ける。

「ゴ…、オオ…」

背後から何やら聞こえたが無視。今重要なのはお兄ちゃんの怪我を治すことだけ。

「…おい、ユキ」

「ん？なあに？」

お兄ちゃんから掛けられた声に、あたしはニコニコと問い返す。一体何のお話だろ。

「確かに会えて嬉しいし、心配して貰えるのはありがたいんだけど…」

「うんうん」

頭を掻きながら話すお兄ちゃんに、あたしはこくこくと頷く。

「…お前は」

「ゴギャアアアアアア！！」

が、お兄ちゃんの言葉は、背後からの叫びによって掻き消された。

……かっちーん。

「うるさいなぁ」

振り返りもせずあたしは適当に、レイジングハートを持ったままの右手を振るう。

ズドンッ！！

衝撃音と共に声が止む。下からアッパーカット気味に放った魔力弾が効いたのだろう。

「爬虫類ごときが、お兄ちゃんの言葉を遮るな」

二度、三度と振るう度、打撲音と衝撃音が響き渡る。そんな音をＢＧＭに、あたしは左手でお兄ちゃんの左腕に触れる。うーん、よっぽどひどいみたい。ぐちゃぐちゃになってる上外れた関節を無理矢理戻したから傷んでるし…、やっぱあれかなぁ。

「Ｓ、Ｌ、Ｄ、出て来なさい」

あたしの呼び掛けの声と同時、お兄ちゃんの背後の空間が歪む。そしてそこから出て来たのは、三人の少女。

「お呼びでしょうか、マスター」

「うわ、なんかドラゴンがいる」

「なんだ？あの蜥蜴をやるのか？」

三者三様の言葉を発しながら、地に降り立つ漆黒の少女達。私の作った、最高のマテリアル。

「ちょっとお兄ちゃんの怪我治してるから、終わるまで適当にやっといてー」

脳内の記憶を漁り、お兄ちゃんを治す為に新しく魔法を組み上げていく。ちょっと時間掛かっちゃうけど、リハビリリハビリ。

「龍相手に喧嘩を売った守護騎士を庇った、と。何と言っていいのやら…」

「要するに敵を庇ったバカなんだね？」

「阿呆、せめてお人よしと言え」

状況はあらかた理解しているのか、星光の殲滅者ことSが呟き、雷刃の襲撃者と闇統べる王、LとDが漫才染みたやり取りを繰り広げている。

「L、D、口が過ぎる様なら消すわよ」

冷徹な視線を向け、LとDを脅迫する。あたしの前でお兄ちゃんをバカにする者は、例え神だって殺してみせる。

「ご、ごめんなさい」

「我はフォローしたつもりだったのだが…」

途端にしおらしく謝る二人に、私は嗜虐的な笑みを浮かべる。理解出来ればいいのよ、所詮あなた達は人形なんだから。

「マスター、適当にということは殺さないのですか？曲がりなりにもあなたの兄を傷付けた相手ですよ？」

さすが理のマテリアル、あたしの発言の違和感をすぐに拾い上げて尋ねて来た。ブレイカーを習得させたのは正解だったわね。

「何言ってるの？もちろん殺すわよ」

お兄ちゃんをここまで傷付けたのだ。怒っていない訳がない。

「お兄ちゃんを治してから、ね」

――ただ、その前に一お兄ちゃんの治療をする《やるべきことがある》だけだ。

「「「「「っ！？」」」」」

「だからあたしがそっちに加わるまでブレイカークラスは禁止。適当に気を引いてくれればいいわ」

殺気に身を震わせる四人と一匹を気にも留めず、指示を出したあたしは背を向ける。言うべきことは言った。後は知らない。

「了解しました」

「オッケー」

「承知した」

三人が返事と共に地を蹴った。さて、それじゃ。

「頑張ろっと」脳内で魔法公式を演算しながら、あたしは静かに目を閉じた。

「さて、一体どうするつもりだ？」

「ブレイカーなしのボク達じゃ、あんな外殻撃ち抜けないよ？」

闇統べる王と雷刃の襲撃者の言葉に、私はルシフェリオンを構えながら考える。まあ、答えは一つしかないんですが。

「いかに堅固な鎧でも、守れない場所は存在します。例えば…」

パイロシューターを数十発生成しながら、黒龍を見据えた私は、

「目、とか」

黒龍の目に照準を合わせ、桜色の弾丸の雨を叩き込んだ。

「ゴギャアアアアア！！」

たまらず苦悶の声を上げた龍の口に、闇統べる王がエルシニアクロイツを突き付ける。

「なるほどな。つまり…」

そのまま純白の魔力をかき集めた、闇統べる王がニヤリと笑い、

「こういうことだろう？」

龍の口内目掛けて、容赦なく砲撃魔法を叩き込んだ。

「っ！！」

口を膨大な純白の魔力の塊で塞がれて、龍は声を上げることすら許されず悶絶する。

「んじゃ、サクッとやっちゃう？」

雷刃の襲撃者が大剣に姿を変えたバルニフィカスを振りかぶり、龍の左目に突き刺しながら尋ねてくる。

「まあ殺すなとは言われましたが、息さえしてれば別にいいでしょう」

私もブラストファイアーで潰れた左目を穿ちながら答え、闇統べる王に視線をやる。

「あなたの魔法は威力が大きいので、加減を誤らないようにして下さい」

「わかっておる」

抵抗も許されない黒龍を足止め、もとい痛め付けながら、私達は時間を稼ぐことにした。

「……エグい戦い方するなぁ」

たった三人の少女に手玉に取られる龍、という凄まじい光景を見ながら、俺はぽつりと呟く。なるほど確かに、目や口の中には甲殻も鱗もないからダメージは通るが…。

「ちょっとジッとしててね」

と、準備を終えたのか、俺のぐちゃぐちゃな腕に触れながら、ユキが漆黒の光を解き放つ。環状魔法陣に囲まれた左腕が、十秒足らず

で元通りの姿になる。

「はい、出来たよ」

「…相変わらずすげぇな、お前は」

感触を確かめるように腕を動かし、ユキの頭を優しく撫でてやる。

ユキはされるがまま、気持ち良さそうに目を細めていた。

「だってあたしだもん♪」

そう言ったユキがニコニコ笑いながら、高く空へと舞い上がる。

「さあ…。終焉の時間よ、愚かな龍」

そのまま一瞬で龍の目の前に現れたユキは、強烈な殺気とプレッシャーを掛ける。

「見せてあげるわ。生き地獄ってものを、ね」

狂ったように、壊れたように、もういないはずの存在である天城ユキは、

――――歪んだ笑みを、浮かべた。

「ま、ブレイカーなしじゃ貫けないし、甲殻のない部分を狙ったのは正解ね」

レイジングハートをくるくるとバトンのように回しながら、あたし

は三人を評価する。あたしが作ったんだから、その程度は出来なきゃ困る。

「それじゃ、ブレイカーの許可をあげる。あたしが時間稼いであげるから三分…、いや、一分あれば十分ね？」

切り札の解放を命じ、背後に浮かぶ三人に視線を送る。

「問題ありません」

「了解」

「余裕だな」

龍を三角形に囲み、その頂点で三人がデバイスを構える。

「オッケー、それじゃ」

龍に向き直ったあたしがレイジングハートを構えると同時、

「血祭りにしてあげる」

先端に膨大な量の魔力が集束する。

「シュート」

ＤＲＭによってかき集められた馬鹿げた量の魔力は、漆黒のエネルギーへと変わりレーザーの如く宙を翔け、

――龍の胸を、貫通した。

「ブレイク」

そのまま飛び去るはずだった魔力に命じた瞬間、レーザーがバラけた。千や万では利かない、億単位の弾丸へと変貌したそれは、龍の鱗や甲殻を穿ち削っていく。

「シフト」

そのまま弾丸を槍へと変換。龍の黒い体にそれ以上に深い漆黒の槍が突き刺さる。

「コネクト」

そのまま貫通した槍が連結し、巨大な剣へと姿を変え、

「フォール」

私の一声と共に落下した。龍と同等の大きさを誇る刃は龍の尻尾を切り落とし、大地へと突き刺さる。

「フライ」

手を振り上げると同時に剣が宙へと舞い上がり、

「リフレイン」

龍の胴体に突き刺さり、その巨体を大地に縫い留めた。

「あはっ、伝説や神格って謳われた龍も、所詮この程度なんだ?」

嘲りの笑みを顔に浮かべ、龍の目の前に舞い降りる。龍は憤怒と憎悪に燃えた隻眼をこちらに向け、機会を窺っている。…ふーん。

「まだやる気なんだ？頭悪いね」

あたしはそのまま天を仰ぎ、準備を終えた三人に手を振る。

「あんまり長引かせたくないし、ここらで死んでね」

あたしが飛び上がると同時、三人が桜、金、白の極大魔法陣を描く。

「見せてあげなさい。全てを打ち砕く魔の三角形、トライアングルブレイカーを！！」

「二人共、準備はいいですね？」

足元に極大の桜色の魔法陣を描きながら、二人に確認の声を投げ掛ける。

「当然」

「無論」

金、白の魔法陣を描きながら、二人が当然とばかりに答える。…いいでしょう。

「行きますよ、二人共！！」

「「了解っ！！」」

私達の声が重なった瞬間、魔法陣が変化した。互いの足元の魔法陣から伸びたラインが繋がり、私達三人を頂点とした超巨大な三角形の魔法陣へと姿を変える。その中を魔力が循環し、膨大な量の魔力が渦巻き始める。

「集え、明星！！全てを焼き消す焔となれ！！ルシフェリオンッッッ！！」

天にルシフェリオンを構え、その名を叫ぶ。桜色の魔力が流星の如く集束し、発現の時を待ち侘びるかのように輝きを増す。

「砕け散れ！！雷神滅殺！！オーロラザンバアアアアア！！」

極光斬、つまりオーロラの大剣を振りかぶり、雷刃の襲撃者が金色の魔力を、その極大の刀身に集束させる。

「絶望に足掻け、塵芥！！エクスカリバアアアアア！！」

私達ミッド式のものとは違う、ベルカ式の三角形の魔法陣を展開した闇統べる王が、三つの頂点に純白の魔力を集束させる。
そして、三つの魔力が限界まで膨れ上がった瞬間、

「「「ブレイカアアアアア！！！」」」

――――破壊の力が、解き放たれた。
三人の声がシンクロした瞬間、桜色、金色、純白の砲撃が一点目掛けて一斉放射された。下手すれば街一つ滅ぼせる程の魔力を孕んだそれは、龍の硬い甲殻を、鱗を、その膨大な熱量によって一瞬で蒸

発させた。
――――トライアングルブレイカー。
僅か三人の魔導師によって発動された究極の砲撃魔法は、幾多の戦場を生き抜いて来た最強の生物、龍の心さえも破壊した。

絶望と敗北に怯え、身を埋めた龍が体を震わせる。あれだけの攻撃を食らっても生きている辺り、さすがと言うべきか。でも、

「あなたは一つだけ間違えた」

レイジングハートを天に掲げると同時、足元と正面に漆黒の魔法陣が描かれる。

「あたしの目の前でお兄ちゃんを、あたしの一番大事な人を傷付けた」

龍はその光景を震えて見守りながらも、何もすることが出来ない。何故なら何をしたところで、この先の結末を変えることなど出来ないのだから。

「だから…、死んで償え」

ゾッとする程の殺意と憎悪、狂気を秘めた凄絶な笑みを浮かべ、

「スターライト！！ブレイカアアアアア！！」

あたしはレイジングハートを振り下ろし、漆黒の砲撃を叩き込んだ。

漆黒の魔力、その奔流を受けた龍の体がグラリと揺らぐ。スローモーションを掛けられたかのように、その巨体が倒れていく。
シグナム達守護騎士を完敗に追い込んだ龍が、俺の左腕を完全に破壊した龍が、最強の生物と謳われた龍が。
――僅か三分で、たった四人の少女によって殲滅された。

「ま、久々にしては悪くないかな？」

その終止符を打った少女が、漆黒の翼を羽ばたかせながら舞い降りる。レイジングハートも色が戻り、ペンダントとして彼女の首に架けられる。

「マスター…。マスターのブレイカーだけで十分足りたのでは？」

「使えるモノは使う。あたしがわざわざ消耗する意味なんてないもの」

トドメだけはきっちり刺したけどね、と星光の殲滅者の言葉に答えるユキ。その考え方も、間違いなく生前の彼女のもの。

「……ユキ、なんだよな？」

「何言ってるのお兄ちゃん？あたしは天城ユキだよ？」

俺の口から漏れた言葉に、ユキは首を傾げながら両手を広げて見せる。だが、

「ユキは…、あの時俺の目の前で死んだ…。なら、お前はなんなん

だ？」

ユキは俺の腕の中で、確かに息絶えた。ならば目の前にいるユキ、その存在に説明がつかない。

「ジュエルシードと一緒にレイジングハートを封印した時、あたしはこの子に二つの仕掛けを施したの。一つ目は封印用形態であるシーリングモードの追加」

ユキは赤い宝石に触れながら、この異常な現象の種明かしを語り始めた。魔力放出に特化したシーリングモード。確かにジュエルシードを封印するには必要不可欠だ。

「そして二つ目は…、天城ユキの精神の避難」

「！？」

精神の…、避難…！？

「私の精神をコピーして、メイン人格をこの子の中に避難させたの。コピーは私の肉体に残して、精神リンクを繋げてね。だからあたしには死ぬまでの記憶もあるし、この子が目覚めてからの光景も全て見ている。お兄ちゃんがあの子を助けに入ったり、あたしそっくりな子を見て動揺するところもね」

つまり、俺の目の前で死んだユキは良く出来た偽物で、今目の前にいるのが本物のユキ。本来なら馬鹿げているの一言で切り捨てられるそれは、天城ユキという悪魔染みた天才の理論と技術で可能となってしまう。

「…それが、何故今更？」

「邪魔だったのよ。二人が」

なら出会った時に目覚めてもよかったはず。そう思い問い掛けた俺に、ユキは端的に答えた。

「お兄ちゃんがあたしの死を乗り越えるきっかけになればと思ってＤＲＭを解放したけど、あの子達はどんどんお兄ちゃんの心に踏み込んでいった。お兄ちゃんの中であの子達の存在が大きくなればなるほど、別れた時にお兄ちゃんは心の闇に囚われて、ナナシへと戻ってしまう」

ユキの的確過ぎる言葉に、俺は口を噤まざるを得なくなる。フェイトが仮面の男に襲撃された際、どす黒い感情に囚われそうになったこと。それを忘れていられるほど、俺は楽天的ではなかった。

「そしてお兄ちゃんは自分を省みず二人を守ろうとする。その先に待っているのは破滅だけ。だから…」

そう言ってユキは慈母のようにも見える優しい笑顔を浮かべ、

「そうなる前に、あたしの作ったマテリアル達で二人を殺してあげるの」

――――狂った答えを、告げた。

「っ！？」

前々からユキの思考回路は常軌を逸していたが、今回は相当ひどい。

戦争がなくならないのなら、人類を皆殺しにすればいいと言うようなものだ。

「もうお兄ちゃんを悲しませない。お兄ちゃんはあたしが守る。だからあたしは、あの子達を殺してあげるの」

「ふざけんなっ！！」

優しく囁く悪魔の声を遮り、フェイトを庇うように立ち塞がりながら俺は叫んだ。

「ああそうさ！！確かに俺はとても弱い！！妹の死を乗り越えるのにも年下の女の子の力を借りなきゃいけないくらい弱い！！でもな…！！」

だが、その時のなのはの言葉は、間接的にユキのものでもある想いは、今も俺の中に残っている。

「だからって、誰とも関わらなければいいなんて訳じゃない！！現実は優しくない、だから支え合って、乗り越えなきゃいけないんだよ！！そんなことを見失うほど、俺は落ちぶれちゃいない！！」

関わらなければ、確かにマイナスはない。悲しみを背負うことはない。だがそれは同時に、何も得られないことも意味する。何もない人生は、空虚さに食われただ存在することと同じ。なら俺は、マイナスから逃げない。大切なプラスを得る為、何度でも立ち向かって見せる。

「…可哀相に」

対しユキは悲しげに微笑み、一言だけ答えた。

「今のお兄ちゃんは、二人を助けられたことに酔ってるだけ。いずれその先で、二人はあたしと同じ運命を辿る」

その言葉が楔のように突き刺さるが、尚も俺は首を振って否定する。

「いいや違う!!もう二度と俺達は、あんな結末を迎えない!!」

「わかるよ…。失意と絶望の底に沈んだ天城ユキを、救い出してくれたお兄ちゃん、その妹のあたしだから」

事故で両親と魔法を失い、一時は精神的に死んでいたユキが、薄く笑いながら答える。

「いずれわかる時が来るよ。お兄ちゃんは頭がいいからすぐわかる。その時はきっと、あたしに賛成してくれるって信じてるよ」

そこまで言い終えたユキが目を閉じると同時、漆黒の翼が消失し髪の色が戻った。意識を失い倒れるなのはの体を、慌てて抱き留める。

「天城ユキ…、マスターの言ったことは事実です。ここまで高度な人工生命三体を、僅か半年で作り上げたことこそがその証左です」

俺達を一瞥した星光の殲滅者が、呟きと共に空間を歪ませる。役目を果たす時が来るまで、どこかで待機しているのだろう。

「マスターの悲願、私達の目的が変わらない限り、いずれまた相見えることになるでしょう」

最後にそう漏らした星光の殲滅者が、二人を伴って消える。残されたのは、俺となのはとフェイトだけ。

「……っ！！」

無言でグラビティフォールを発動、異相空間に避難させた守護騎士達を引っ張り出すと同時、異変に気付いた。

――――傷が、ない。

黒龍の攻撃を受けてボロボロだったはずの三人の体、しかしそのどこにも傷が見当たらない。

「な…、んで…」

考えるまでもない。ユキだ。作った本人にしか干渉出来ないはずの異相空間に干渉し、三人の傷を治すなど、彼女以外には出来るはずがない。

「…やってくれたな」

どうにか回復した体を起こし、フェイトを背負い、なのはを抱き抱える。ブレイカーを撃とうとした際に魔力をかなり消費した為、守護騎士まで連れていく余裕はない。

「…帰ったら寝よう」

二日連続でここまでやることになるとは思ってなかった。早く休まないと明日に響く。

「ユキ…」

ぐちゃぐちゃな思考が渦巻く中、妹の顔が脳裏を過ぎる。生きていたことを素直に喜びたかったが、彼女がマテリアル達を率いている以上そうも言っていられない。

「なんでだよ…」

現実の理不尽さに顔を歪めながら、俺はその世界を後にした。

『とりあえず、ここまででわかったことを報告しとく』

無限書庫内で大量の本を展開しながら、ユーノが報告を開始した。

『まず、闇の書ってのは本来の名前じゃない。古い資料によれば、正式名称は夜天の魔導書。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して、研究する為に作られた、主と共に旅する魔導書。破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かが、プログラムを改変したからだと思う』

『ロストロギアを使って、無闇やたらに莫大な力を得ようとする輩は、今も昔もいるってことね』

ユーノをサポートしながらアリアが呟き、数冊の本をパラパラとめくる。

『その改変のせいで、旅をする機能と、破損したデータを自動修復する機能が暴走してるんだ』

「転生と無限再生は、それが原因か…」

まさか闇の書の根源（ルーツ）がそんなところにあったとは…。ユーノに依頼して正解だったな。

「古代魔法ならそれくらいはアリかもね」

『一番ひどいのが、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと、持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら、持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊の為に。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに…』

ロッテの頷きに、ユーノが顔を歪ませる。ホント、厄介極まりないブラックボックスだ…。

「…停止や封印方法についての資料は？」

『それは今調べてる。だけど、完成前の停止は多分難しい』

苦々しげに呟いた僕の言葉を、ユーノが新しく本を抜き取りながら答える。

「何故？」

『闇の書が真の主と認識した人間でないと、システムへの管理者権限を使用出来ない。つまり、プログラムの停止や改変が出来ないんだ』

更に本を展開し、緑色の光で包みながら答えるユーノ。

『無理に外部からの操作をしようとすれば、主を吸収して転生しち

ゃうシステムも入ってる』

『そうなんだよねぇ…。だから、闇の書の永久封印は不可能、って言われてる』

無理に手を出せば主ごとどこかへ消える、か。面倒な…。

「元は健全な資料本が、何と言うかまぁ…」

「闇の書…、夜天の魔導書も可哀相にね…」

闇の書自体に罪はない。いつだって力の使い方を誤るのは、僕達人間だ。

「調査は以上か？」

『現時点では。まだ色々調べてる。でもさすが夢幻書庫、探せばちゃんと出て来るのがすごいよ』

『というか、あたし的には君がすごい。すっごい捜索能力』

調べ終えた本を収納しながら答えるユーノに、追加の本を運んで来たアリアが言葉を掛ける。あの厳しいアリアが手放しで褒めるほどだ、よっぽど才能があるのだろう。

「じゃあ、スマンがもう少し頼む」

『うん』

快諾したユーノは魔法陣を展開し、暗い穴に緑色に輝く文字を放り

込んでいく。…まぁ、気にしなくてもいいか。

「アリアも頼む」

『はいよ。ロッテ、後で交代ね』

「オッケーアリア、頑張ってね」

アリアとロッテの声を最後に通信が途切れ、画面がブラックアウトした。

「ユーノ君すごいねぇ」

「うん、あたしも正直驚いた」

二人がユーノに好評価を下す横で、僕は思考を巡らせる。

「…エイミィ、仮面の男の映像を」

「はいな」

答えたエイミィがコンソールを操作し、画面に仮面の男を映し出す。

「何か考え事？」

「まぁね」

ナツキには見せられないな、と苦笑いしながらロッテに答え、画面に視線を移す。

「この人の能力もすごいというか、結構有り得ない気がするんだよねぇ」

エイミィがコンソールを操作すると同時、画面に二つの世界と計算式が表示される。

「この二つの世界、最速で転位しても二十分は掛かりそうな距離なんだけど…、なのはちゃんの新型バスターの直撃を防御。長距離バインドをあっさり決めて、それから僅か九分後には、フェイトちゃんに気付かれずに後ろから忍び寄って一撃」

「かなりの使い手ってことになるねぇ。空間制御が可能なナツキの感知にも引っ掛からなかった上、激昂した彼の攻撃を凌いでマテリアル達からも逃げ切ってる訳だし」

フェイトが胸を貫かれた映像を見て、顔を歪めながら二人が述べる。

…この映像、闇の書事件が終わったら早めに消さないとな。

「ナツキは殺そうとするかもしれないからパスって言ってたし、僕でも無理そうだ…。ロッテはどうだ？」

師であり相当な実力者である彼女なら或いはと考え、ロッテに視線を送ってみるが、

「あー、無理無理。あたし、長距離魔法とか苦手だし」

「アリアは魔法担当、ロッテはフィジカル担当で、きっちり役割分担してるもんね」

手を振って否定するロッテに、エイミィが笑い掛ける。確かにロッ

テでも、接近する前にバインドを掛けられたら終わりだろう。

「そうそう♪」

「昔もそれで、ひどい目に遭わされたもんだ」

こっちはボロボロのくたくたなのに、向こうは二人。休む時間も修業に当てて、必死で頑張ったものだ。

「その分強くなったろ？感謝しろっつーの」

溜め息混じりの僕に発破を掛けながら、ロッテは調子のいい笑顔を浮かべた。

「フェイトちゃん、体調大丈夫？」

「うん。魔力も馴染んだし、完全復活」

気温が肌寒い朝、私達三人は仲良く並んでバス停に向かって歩いていました。

「無理だけはすんなよ？絶対だぞ？」

そんな中、ナツキ君はしつこいくらいに私達を注意して来ます。心配してくれるのは嬉しいんだけど…。

「もう…、ナツキ君は心配し過ぎ」

「心配もするだろ。回復したとはいえ、片方は強大な魔力を使い過ぎて気絶して、もう片方はリンカーコアを抜かれた上病み上がりなんだから」

あの後アースラで目覚めた私達は、ナツキ君から事の顛末を聞きました。私がＤＲＭ発動直後にスターライトブレイカーで龍を倒して、同時に魔力の使い過ぎで気絶。余力がなかった為ヴィータちゃん達守護騎士を残して、私とフェイトちゃんを抱えて帰って来たそうです。

「それを言うならお兄ちゃんだって、左腕ボロボロだったじゃない」

「あれはいいんだよ、大したことないからすぐ治ったし」

龍にやられて原形を留めていなかったナツキ君の左腕は、その面影すら見せないくらい綺麗に治っています。管理局の人達に治して貰った結果、完治したみたい。

「とにかく、少しでも気分悪くなったらすぐ言うこと。二人共、いいな？」

「「はーい」」

バス停が近付いて来た為話を締めるナツキ君に、頷きながら二人で手を握る。溜め息をつきながらも、ナツキ君は握り返してくれた。

『当面、私達は呼び出しがあるまで静かにこっちで暮らしてて、って』

『出動待ち、みたいな感じかな？』

念話で今後の方針を教えてくれたフェイトちゃんに、私は首を傾げながら聞き返す。

『うん。武装局員を増員して、追跡調査の方をメインにするみたい』

『まあシグナム達もあそこまでやられた以上、しばらく表立って動くことはないと思うけどな』

フェイトちゃんの答えに、龍の攻撃でボロボロになった三人もしばらく慎重に動くだろうと踏んだナツキ君が呟く。

『そっか』

小さな作戦会議を終えた私達は、バスに乗り込んだ。

「入院？」

「はやてちゃんが？」

休み時間。急なすずかの言葉に私達は首を傾げる。

「うん…。昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうなんだけど、検査とか色々あってしばらく掛かるって…」

すずかが俯いて心配そうに話す。はやて、大丈夫かな…？

「そっか…。じゃあ、放課後みんなでお見舞いとか行く？」

「え、いいの？」

そんな様子を見守っていたアリサがパンと手を打ちながら提案し、すずかが驚いたように聞き返す。

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれる、って話だったしさ。お見舞いも、どうせなら賑やかな方がいいんじゃない？」

「うーん、それはちょっとどうかと思うけど…」

アリサがどうだと言わんばかりに提案するけど、騒がしくなると悪いと思っているのか、なのははちょっと渋っている。

「でも、いいと思うよ。ねっ？」

「同意見だな。こういう時こそ、気を紛らわすべく雑談するのが一番だし」

みんなに求めた同意の答えは、背後から返って来た。それも、頭に何やら温かい感触付きで。

「お、お兄ちゃん！？」

「何やら楽しそうな話してるじゃないの。はやて絡みなら俺も協力するぜ？」

驚きの声を上げる私の頭をわしゃわしゃと撫で、ニヤリと笑うお兄ちゃん。相変わらず神出鬼没だなぁ…。

「うん！！ありがとう！！」

笑顔で頷いたすずかは、ニコニコと今後の方針を話し始めた。

「……あら？」

はやてちゃんへ持って行く弁当箱に中身を詰め込んでいると、携帯が鳴り始める。

「あ、すずかちゃんね」

ディスプレイに映った「月村すずか」の表示に顔を緩め、メールを開く。

『シャマルさんへ。こんにちは、月村すずかです。今日の放課後、友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いに行きたいんですが、行っても大丈夫でしょうか？』

「すずかちゃん…」

いい子だなぁ、と素直に思う。こんな優しい友達に恵まれて、はやてちゃんも幸せだろうなぁ、とも。

『もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せて上げて下さい』

と、何やら添付されているようだ。画面をスクロールして写真を見てみると、

「え…？」

画面に映っていたのは、四人の少女と一人の少年。「早く良くなってね」と掛かれた段幕を持ったすずかちゃん。その隣で笑う金髪の少女、アリサちゃん。そして、段幕を支えて笑顔を浮かべているのは、

――――なのはちゃん、テスタロッサちゃん、そして、天城君。

「っ！？」

力の抜けた私の手から、携帯電話が滑り落ちた。

「何？テスタロッサ達がどうしたって？」

慌てたように念話を繋いで来たシャマルに、私は探索魔法を解除しながら聞き返す。

『だから、テスタロッサちゃんとなのはちゃんに天城君、管理局魔導師の三人が今日、はやてちゃんに会いに来ちゃうの！！すずかちゃんのお友達だから！！』

「落ち着けシャマル。大丈夫だ」

衝撃を受けなかった訳ではないが、そう悲観することもない。何故なら、

「幸い、主はやての魔法資質は、ほとんど闇の書の中だ。詳しく検

査されない限りばれはしない」

『そ、それはそうかもしれないけど…』

つまり主はやては普通の少女。気付かれるとしたら私達が一緒にいた場合。

「つまり、私達と鉢合わせることがなければいいだけだ」

『顔を見られちゃったのは失敗だったわ…。出撃した時変身魔法でも使ってればよかった…』

結論を述べる私に、シャマルが悔やむようにぼやく。

「今更悔いても仕方ない。ご友人のお見舞いの時は、私達は外そう」

『うん…』

現状、それ以外に手立てはない。後出来ることと言えば…、

「後は主はやて、それから石田先生に我等の名を出さぬようにお願いを」

『はやてちゃん、変に思わないかしら…』

変に思わないはずがない。主はやては聡い方だ。違和感を抱かない方がおかしい。だが、

「仕方あるまい。頼んだぞ」

『うん…』

シャマルとの念話を打ち切り、私は蒐集作業を再開すべく飛び立った。

コンコン。

「はーい、どうぞー？」

ノックの音に振り返り、扉の前の誰かを促す。

「「「「こんにちはー」」」」

「え？」

挨拶と共に入って来たのは、すずかちゃんと見知らぬ三人の女の子。

そして、

「よ。元気そう…、って言うのもおかしいかな」

図書館で数回会ったことのある、ナツキ君だった。

「こんにちは、いらっしゃい」

思わぬ光景に呆然としてしまうが、嬉しくて笑顔を浮かべてしまう。

「お邪魔します。はやてちゃん、大丈夫？」

「うん、平気や。あ、みんな座って座って」

すずかちゃんの声に答えながら、私はみんなに座るよう促す。立ちっぱは悪いしな。

「ありがとう」

「ほい。手抜きで悪いけどスコーン作って来たから食べようぜ」

金髪のツインテールの子が頭を下げながら座り、ナツキ君がお菓子の入った袋を私にパスして、みんなのコートを架け始める。開けてみると、完璧としか言いようのないきつね色に焼けたスコーンが入っていた。

「え、これナツキが作ったの!?」

「お店で売ってるみたい…」

その出来栄えに愕然としたのか、すずかちゃんともう一人の金髪の少女が驚きの声を上げてナツキ君を見遣る。

「まぁ、お兄ちゃんだし…」

「翠屋のケーキも、どこまで太刀打ち出来るやら…」

ツインテールの子とオレンジの髪の子が苦笑しながら、私に翠屋のケーキを差し出す。

「んな大したもんじゃないって。とりあえず、食べながら自己紹介しちまおうぜ」

「「「「「うんっ！！」」」」」

みんなで仲良くナツキ君特製スコーンと翠屋のケーキを頬張りながら、楽しく雑談して過ごした。

――――胸の痛みは、いつの間にか消えていた。

「…大丈夫そうね」

こっそりと中の様子を窺いながら、私は安堵の溜め息をつく。まさかはやてちゃんが話していた少年が天城君のことだとは思わなかったけど、彼は身内には優しいようだし心配ないだろう。

「シャマルさん？何やってんですか？」

と、そんな私に背後から声が掛けられる。恐る恐る振り返った先にいたのは、はやてちゃんの主治医である石田先生だった。

「あ、その、ちょっと気になりまして…」

「中に入ればいいじゃないですか、というのは禁句なんですかね」

しどろもどろに言い訳する私に苦笑し、ベンチに座るよう促す石田先生。

「変な言い方かもしれないですが…、はやてちゃんの主治医として、シャマルさん達には感謝してるんです。皆さんと暮らすようになってから、はやてちゃんホントに嬉しそうですから」

尚もちらちらと病室に視線をやる私に、石田先生は唐突に語り始めた。

「はやてちゃんの病気は正直難しい病気ですが、私達も全力で戦ってます」

「はい…」

石田先生が頑張っているのは知っているが、はやてちゃんのそれは病気ではなく闇の書の呪い。医学で治るものではないことを知っている私としては、罪悪感が込み上げてくる。

「一番辛いのははやてちゃんです。でも、皆さんやお友達が支えてあげることで、勇気や元気が出て来ると思うんです。だから支えてあげて下さい、はやてちゃんが病気と戦えるように」

――だけど、この人は諦めていない。

例えどんなに絶望的でも、最後のその瞬間まで絶対諦めない。そう信じさせる強い意志を秘めた瞳で、私を真っ直ぐに見据えている。

「……はい」

思わず涙ぐみながら頷く。石田先生が諦めていないのに、私が諦めてどうするの?私達守護騎士の想いは、その程度じゃない。

「頑張って…、はやてちゃんの病気を治しましょう」

「…もちろんです」

いきなり力強く宣言した私に驚きながらも、ニッコリと微笑む石田先生。はやてちゃんを死なせたりなんか、絶対にしない。

「お友達のお見舞い、どうでした？」

すずかちゃんやナツキ君達と入れ違いで、病室に戻って来たシャマルが聞いてくる。そんな気になるんなら一緒におればええのに…。

「うん、みんなええ子やったよ。楽しかった。また時々来てくれるて」

「それはよかったですね」

料理が縁で知り合ったナツキ君やけど、まさかあそこまで上手だとは思わなかった。あの美味しさで初めて作ったというのだから信じられない。一つしか変わらんのになぁ…。

「せやけど、もうすぐクリスマスやな。みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院してパーッと楽しく出来たらええねんけど」

すずかちゃんやナツキ君達や、守護騎士のみんなと。全員で集まって騒げたらどれだけ楽しいだろう、と思う。

「そうですね…。出来たらいいですね…」

シャマルの声に笑いながら、私はカレンダーを眺めた。

――クリスマス・イヴまで、あと十一日。

『闇の書のはやてちゃんを侵食する速度が、だんだん上がってきてるみたいなの。このままじゃ保って一月、ううん、もしかしてもっと短いかも…』

荒れ狂う雷雨の中、高速で飛翔する。シャマルの深刻な声が、あたしに焦りと恐怖を運んでくる。

「何かがおかしいんだ…」

こんなはずじゃないって、あたしの記憶が訴えてる。何なのかはわからないけど、それがあたしの中で警鐘を鳴らしてるんだ。

「でも…、今はこうするしかないんだよな…」

魔力反応のある地点の真上で、アイゼンを構え魔法陣を描く。どう足掻いたって闇の書の配下であるあたし達には、こうする以外道はないんだ。

「はやてが笑わなくなったり、死んじゃったりしたら、やだもんなぁっ！！」

《Ｊａ（当然）》

アイゼンが答えると同時、海面が渦巻きそれが姿を現した。そこそこの魔力を秘めた巨大な八眼の蛸が触手をうねらせ、あたしを睨みつけている。

「やるよっ！！アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！》

あたしの絶叫に静かな、しかし頼もしい声でアイゼンが答えた。カートリッジを三発ロードし、あたしは切り札を使う。

「ギガントォッ！！」

アイゼンの頭部が巨大化し、あたしの胴体程の大きさになる。その様はまさにギガント、巨人の名に相応しいフォルムだ。

「ぶっ潰せえええええええっ！！」

ギガントフォルムのアイゼンを振りかぶり、あたしは蛸目掛けて突っ込んだ。

「……」

「父様」

スクリーンに映された闇の書のデータを眺めていると、アリアが声を掛けて来た。

「あんまり根を詰めると、体に毒ですよ？」

「そうだよ？」

対面に腰掛けながら、私を気遣ってくれる二人。よい使い魔を持てて幸せだな、私は。

「リーゼか…、どうだい様子は」

「まぁぼちぼちですね」

私の問いに片手を上げ、ぶらぶらと振りながらロッテが答える。

「クロノ達も頑張ってますけど、闇の書が相手ですから一筋縄では…」

「そうか…」

補足したアリアの言葉に頷き、私は全てが始まった十一年前に想いを馳せる。

「すまんな…。お前達まで付き合わせてしまって」

「何言ってんの父様」

思わず謝る私の言葉は、テーブルを叩くロッテの声に遮られた。

「あたし達は父様の使い魔、父様の願いはあたし達の願い」

スクリーンに移された映像を消しながら、アリアも頷き笑顔を見せる。

「大丈夫だよ父様。デュランダルももう完成してるし」

「闇の書の封印、今度こそきっと大丈夫ですよ」

「ああ…」

二人の言葉に頷き、私は目を閉じる。前とは違う。私には力がある。

今度こそ闇の書を封印して、

「全てを、終わらせよう」

第十二話「力の差」（後書き）

…うんまあ、ツッコミどころが多いのは否めないｗ
ユキが生きてた理由とかもうどう見てもこじつけにしか（ｒｙ
てかユキとマテ子強過ぎだろｗ勝てんのかこれｗ

次回、いよいよ守護騎士達と鉢合わせします。

第十三話「邂逅」（前書き）

はい十三話です。
遂に皆様鉢合わせします。
前半が性懲りもなく糖分ですのでご注意くださいｗ
ではどーぞー

第十三話「邂逅」

『ええ、ここまでは上手く行ってるわ』

「ああ。そっちに戻らなくなったが、管理局もこちらを追いきれていないようだ」

シャマルと念話を交わしながら、私達は近況を報告し合う。主はやての目を盗む必要がなくなり、蒐集のスピードは格段に上がっていた。

「主はやては…、寂しがっていないか？」

唯一気に掛かるのは、主はやてのこと。あれ以降シャマルしか残っていない為、もう一週間以上会っていないことになる。

『私には一言も。でも、お友達はよく来てくれてるみたいなの。すずかちゃん達』

「そうか」

私達の存在さえ悟られなければ、テスタロッサも天城も主はやてに危害を加えることはない。むしろ、支えてくれていることに感謝したいくらいだ。

「だが心配させてはいけない。数日中に一度戻る」

しかし、一週間以上も会わないとさすがに怪しまれるだろう。蒐集が一区切り着いたら一度戻らなければ。

『うん。気をつけて』

「ああ」

シャマルとの念話を打ち切り、私は脇に抱えた闇の書のページをめくる。

「残り…、あと６０ページ」

長かった蒐集も、残すところ十分の一。早く完成させて、主はやてを救わなければ。

「もう少しだけ…、お待ち下さい」

闇の書を抱え直し、私は空へと舞い上がった。

「はい、どうぞ」

「「「「「「いただきまーす」」」」」」

桃子さんの声に全員が答え、豪勢な夕食に手を付け始める。今日は１２月２３日。いずれ呼ぶつもりだったらしいが色々とあった為都合が付かず、半月以上経ってようやく高町家にお呼ばれしたのだ。

「フェイトちゃんもナツキ君も、たくさん食べてね」

「はい」

「ありがとうございます」

二人揃って頭を下げ、桃子さんから取り皿を受け取る。七人という大人数の為、バイキング形式になっているのだ。

「フェイトちゃんは？今年のクリスマス・イヴは、やっぱりご家族とご一緒なのかい？」

「は、はい、えと、一応は…」

士郎さんに急に話題を振られ、フェイトがオロオロしながらも答える。

「まぁリンディさんも今予定を空けようと頑張ってるんで、きっとそうなりますね」

俺のフォローにフェイトがこくこくと頷く。小動物か。可愛いけど。

「そう」

「家は今年も、イヴは地獄の忙しさだな」

微笑ましげに答える桃子さんに、士郎さんがやれやれと片手を上げる。え、もしかして。

「私、今夜の内に値札とポップ作っておくから」

「お願いね。私達が今夜しっかり寝とかなきゃ」

俺の予想を裏付けるかのように、なのはと美由希さんが何やら話している。

「まさか翠屋って…、クリスマス・イヴも休まず営業？」

「うん。翠屋のクリスマスケーキ、人気商品だからイヴの日はお客さんいっぱいなの」

頭に疑問符を浮かべるフェイトをよそになのはに尋ねると、予想した通りの答えが返って来た。個人営業なのに気合い入ってるなぁ…。

「それにね、イヴを過ごす恋人同士とか友達同士の為に、深夜まで営業してるんだよ」

「そうなんですか…」

美由希さんの補足説明に、フェイトが納得したように頷く。だからイヴ前日にこうして集まった訳か…。

「恭ちゃんはいいよねぇ、店の中で忍さんとずーっと一緒だし」

「それは別に関係ないだろう」

美由希さんが酔っ払いみたいなテンションで恭也さんに絡むが、当の本人はあっさりと切り捨てた。あしらうの慣れてるなぁ…。

「恋人といえばナツキ君、なのはとフェイトちゃんどっちが本命なの？」

「ぶっ！？」

サラダをぱくついているところに桃子さんの唐突にも程がある質問を受け、思わず吹き出しそうになる。

「な、なんですかいきなり!?」

「えー?こんな可愛い子二人も侍らせといて、そういうこと言っちゃうのー?」

慌てて聞き返すが美由希さんが乗っかり、ニヤニヤと楽しそうにこちらを見ている。ああもうホント厄介だなこの人!!

「ナツキ君…」

「……」

右隣はのなのははじーっとこっちを見てるし、左隣のフェイトは顔を赤くしながらも俺の顔をちらちら。なんだこれ。厄日か今日は。

「別に本命とか考えてませんよ…。まだ早過ぎますって」

「うにゃ…」

「ほっ…」

俺の答えになのはが落胆したように呟き、フェイトが安心したように息をつく。

「「えー」」

ちなみに元凶二人は大層ご不満だった。主婦の井戸端会議かっての。

「バカなこと言ってないで、冷めない内に食べましょうよ」

「「ちぇー」」

俺の溜め息と言葉に二人が口を尖らせながらも、すごすごと乗り出した身を戻す。

「…お兄ちゃん」

と、左手をくいくいと引っ張られる感触。振り返るとフェイトがこちらをジッと見据え、

「例えお兄ちゃんがなのはを選んでも、私はずっとお兄ちゃんのこと好きだよ」

――衝撃的な爆弾発言を投下した。

「っ！？」

「わ、私もだよ！？ナツキ君がフェイトちゃんや他の子を好きになっても、私はナツキ君一筋だから！！」

思わずフリーズしてしまう俺をよそに、追随して宣言したなのはが俺の右手を握る。

「あらあら、お熱いことで」

「母さーん、冷房付けなーい？」

それを見た桃子さんと美由希さんが、間髪入れず合いの手を入れる。
何と言う最悪なコンビネーション…！！

「「〜〜〜っ！！」」

羞恥心のメーターが振り切れたのか、顔を真っ赤にして二人が俯く。

「お前ら…」

人前では自重してくれ、頼むから…。

「…若いっていいなぁ」

「…父さんも人の事言えないんじゃないか？」

そんなやり取りを繰り広げながら、高町家での賑やかな夜は更けていった。

「……おい」

その後。お泊りすることになっていた二人と部屋に集まった私は、ベットに寄り掛かって座るナツキ君にもたれ掛かっていました。

「あったかいなぁ…」

「……♪」

フェイトちゃんもナツキ君の膝の上に座って、ぎゅうっと抱き着いています。お風呂上がりなのであったかさも倍増です。…今度私もお願いしてみようかな？

「あれだけからかわれた後なのによくもまぁ…」

ナツキ君が呆れたように呟きますが、私達は気にしません。今が幸せなのでそれでいいのです。

「っと、なのは」

不意に着信音を響かせ始めた私の携帯を重力制御で引き寄せ、私に渡すナツキ君。受け取って開いてみると、すずかちゃんからのメールだった。

「明日の終業式の帰りの件、みんな大丈夫ですか？だって」

「お、俺んとこにも同じの来てる」

「私も…」

ナツキ君がシルバーの、フェイトちゃんが黒の携帯を弄りながら、文面を読み上げた私に頷く。

「はやてにプレゼントを渡しに行くんだよね？」

「でも、内緒で行って大丈夫か？検査とかと被ってたら最悪だぞ？」

ナツキ君に寄り掛かるフェイトちゃんと、その頭を撫でるナツキ君が疑問の声を上げる。とりあえず聞いてみよっと。

「あ、アリサちゃんから」

「早いな相変わらず。で、なんて？」

送って一分弱で帰って来たメールに、ナツキ君が半目になりながら内容を尋ねてくる。

「ま、もし都合が悪かったら、石田先生に渡して貰えばいいし、大丈夫大丈夫、だって」

「…行き当たりばったりかよ」

「あはは…」

ガクッと首を落としたナツキ君に、フェイトちゃんが苦笑する。…まぁ、多分大丈夫だよね。

「それじゃ、そういうことでまた明日ね、っと」

私がメールを送信し終わると同時、フェイトちゃんを降ろしたナツキ君が体を起こす。

「さて、さっさと値札とポップ作っちまおうぜ。寝不足のまま顔出したらはやてに心配されるしな」

私達に毛布を被せながら、材料の詰まったビニール袋を手に取りナツキ君が笑う。…こういうさりげない小さな気遣いが、とても嬉しくて。

「うんっ」

「頑張ろ…」

ナツキ君の両横に陣取りながら、私達は作業を始める。

「…やれやれ」

ナツキ君も苦笑しながら頭を撫でただけで、何も言わずに作業を始めた。

「……」

カタカタとコンソールを弄りながら、画面に目を走らせる。物証は揃いつつある、後は決定的な証拠さえ掴めれば…。

「あれ？どしたのクロノ君」

「う、うん。ちょっと調べ物」

モニターを消すと同時エイミィが入って来た。危ない危ない、間一髪だった。

「なんだ、言ってくれればやるのに」

「いや、いいんだ。個人的なことだから…」

これは僕がやらなきゃいけないことだから、他の人達は知らなくて

いい。少なくとも、今はまだ。

「ああ、闇の書についてのユーノのレポート、なのは達にも送っておいてくれたか？」

部屋を出ようとして振り返り、エイミィに尋ねる。闇の書事件に当たる以上、あれらの知識は知っておいた方がいい。

「なのはちゃん達も、闇の書の過去については複雑な気持ちみたい」

「……そうか」

ただ、それで迷ったりして三人の切っ先が鈍れば…。

（ナツキ…、大丈夫だよな…？）

「はやて…。ごめんね、あんまり会いに来れなくて」

ヴィータちゃんがはやてちゃんに抱き着き、ぎゅうっと抱きしめる。一週間も会っていないのだから、仕方ないかしらね。

「ううん、元気やったか？」

「めちゃめちゃ元気！！」

穏やかな空気が流れ、思わず頬を緩める。今日はクリスマス・イヴ。来客の予定もないし、久しぶりにみんな揃ってはやてちゃんとゆっくり過ごせそう。

コンコン。

「こんにちはー」

――だが、そのささやかな願いは脆くも崩れ去った。

「「っ！？」」

「あれ？すずかちゃんや。どうぞー？」

この声…、すずかちゃん！？

「「「「こんにちはー」」」」

「っ！！」

入って来た五人の顔を見て、ヴィータちゃんがフリーズする。しまった、ヴィータちゃんはこのことを知らない…！！

「あ、今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは、初めまして」

入って来たのはすずかちゃんとアリサちゃん。そして、

「「「っ！？」」」

――なのはちゃん、テスタロッサちゃん、天城君達管理局魔導師。

「あ、すみません。お邪魔でした？」

「あ、いえ…」

「いらっしゃい、皆さん」

心配そうに尋ねるアリサちゃんになんとか答え、三人とシグナムの間で視線を彷徨わせる。一体なんで…！？

「なんだ、よかったぁ…」

「ところで、みんな今日はどないしたん？」

安堵の息をつくすずかちゃんに、はやてちゃんが首を傾げる。はやてちゃんにも連絡していなかった…？本当になんでこのタイミングで…？

「ふふふ…」

「えへへ…」

聞かれたすずかちゃんとアリサちゃんが、悪巧みをするかのように微笑む。

「？」

「「せーのっ」」

掛け声と共に、手元を隠していたコートを剥ぎ取る。そこにあったのは、プレゼントの箱。

「「サプライズプレゼント！！」」

「……！！」

差し出されたはやてちゃんの顔が、呆然から喜色へと移り変わっていく。そうか、クリスマス・イヴだからこそ来たのか…。

「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「わぁ…、ホンマか…？ありがとうな」

受け取ったはやてちゃんが満面の笑顔を浮かべるけど、事情を知っている六人の間では痛い程の沈黙が横たわっている。どうすれば…。

「みんなで選んで来たんだよ」

「後で開けてみてね」

「うん！！」

「「……」」

なのはちゃんとテスタロッサちゃんが困ったように顔を見合わせる中、ヴィータちゃんと天城君が今にも飛び掛からんばかりに睨み合っている。一触即発、とはまさにこのことだろう。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ナツキ君もどないしたん？」

さすがに変に思ったのか、はやてちゃんが首を傾げる。

「あ、ううん。なんでも…」

「お兄ちゃん、ちょっと初対面の年上の人を警戒しちゃうの…。ね？」

なのはちゃんがブンブンと手を振って否定し、テスタロッサちゃんが天城君を落ち着かせようと手を握りながら同意を求める。

「…ああ、悪い。急で驚いただけだ。皆さんも、すみません」

「いえ…」

幾分か表情を和らげて、しかし尚も鋭い視線のまま、天城君が頭を下げた。

「ああ…。皆さん、コート預かるわ」

「「「「はーい」」」」

…とりあえず、やることは山積みみたいね。

「念話が使えない…、通信妨害を？」

「シャマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら造作もない」

壁際でコートを掛けながら、フェイトとシグナムが小声で話し合う。

さっきから俺もグラビティフォールでクラッキングを試みてはいるが…。

「全神経費やして俺の空間干渉防いでやがる…。よほど俺達を出したくないらしいな…」

一言も喋らないシャマルを見遣り、舌打ちしそうになるのを慌てて抑える。あの様子だとはやては俺達の裏については何も知らないだろう。悟られるのはマズい。

「むしろ会話と両立させている天城の方が異常だ。一体どんな頭をしている？」

シグナムが呆れたように俺のコートを預かり、ハンガーに架けながらぼやく。確かに本来なら会話と両立するのは不可能だろう。目の前のシャマルが無言なように。

――だが、俺にはリライトプラズマがある。

磁力、引いては電気を操作することで脳に干渉する魔法を俺は常用していて、反射神経や並列処理機能を強化しているのだ。デバイスが使えない以上そこまで引き上げることは出来ないが、それでも日常活動には十分以上なレベル。

「言うと思ったか？」

「まさか」

黙って答えるつもりはないという俺の挑発を、シグナムは軽く受け流す。…まぁ、一応冷静みたいだな。

「……」

ヴィータの方はそうでもなさそうだけど。

「えと、あの、そんなに睨まなくても…」

「睨んでねーです。こーいう目付きなんです」

ヴィータに殺気と共に鋭い視線を向けられ、なのははたじたじになっている。ガキっぽいとは思っていたが、まさかここまで露骨とは…。

「ヴィータ、嘘はあかん。悪い子はこうやで？」

「んー！？」

はやてが叱りながらヴィータの鼻をつまみ、本人はわたわたと抵抗している。はやてナイスフォロー。

「お見舞い、してもいいですか？」

「…ああ」

シグナムにぺこりと頭を下げ、フェイトがはやての方へと向かう。

…まぁ、はやてがいれば大丈夫だろう。多分。

「…安心しろ。はやてに危害を加える気はないし、お前達とやり合うつもりもない」

「…そうか」

シグナムから視線を外し、俺もはやての元へ向かう。考えるのは後でいい。今は、はやてのお見舞いだ。

「…まさか、はやてが闇の書の主だったとはな」

お見舞いを終えて、夜。とあるビルの屋上で、私達五人は向かい合っていた。先頭に立ったナツキ君が、シグナムさんに確認するように呟く。

「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするなら…、はやてちゃんのお友達でも…！！」

「待って！！ちょっと待って！！話を聞いて下さい！！」

いきり立つ二人を遮って、私は一歩前に出る。

「ダメなんです！！闇の書が完成したらはやてちゃんは…！！」

「はあっ！！」

告げようとした瞬間ヴィータちゃんがグラーフアイゼンを振りかぶり、私目掛けて殴り掛かって来た！！

「っ！？きゃあっ！！」

「ちぃっ！！」

辛うじてプロテクションを展開するが、弾き飛ばされた私は金網に激突し、間に入ったナツキ君は隣のビルまで吹き飛ばされる。

「なのは！！お兄ちゃん！！」

「うおおおおっ！！」

視線を逸らした瞬間シグナムさんがレヴァンテインを抜刀、フェイトちゃんに振り下ろした！！

「っ！？」

間一髪かわしたけど、床は大きく刈れていた。向こうは本気だ…！！

「管理局に我等が主のことを伝えられては…、困るんだ」

「私の通信防御範囲から…、出す訳にはいかない」

二人が静かに呟く中、ゆらりとヴィータちゃんが私の前に立つ。

「ヴィータ…、ちゃん…」

「邪魔…、すんなよ…」

騎士甲冑を纏いながら、ヴィータちゃんが低い声を発する。

「もうあとちょっとで助けられるんだ…。はやてが元気になって…、あたし達のところに帰ってくるんだ…」

涙を流して、体を震わせて。それでもヴィータちゃんは鉄槌を構え

る。

「必死に頑張って来たんだ…。もうあとちょっとなんだから…」

カートリッジがロードされ、爆発的な魔力がグラーフアイゼンを覆う。

「邪魔すんなあああああああっ！！」

振り下ろされた魔力の塊は爆発を引き起こし、周囲を業火で染め上げた。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

カートリッジを排出しながら、あたしはアイゼンが穿った地点を見遣る。全力を込めた一撃、しかも直撃だ。さすがの奴も…。

「……」

だが、ぎりぎりのところでバリアジャケットを纏ったのか、奴は無傷で現れた。その光景はまるで、業火の中から生まれ落ちた純白の、

「悪魔め…！！」

「悪魔で…、いいよ」

杖へと姿を変えた宝石を握りしめ、カートリッジをロードする。

《Ａｃｃｅｌ　Ｍｏｄｅ．Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

杖を構えた奴はこちらを真っ直ぐに見据え、

「悪魔らしいやり方で…、話を聞いて貰うから…！！」

きっぱりと断言した。

「くそ、アホヴィータめ…。死ぬぞ普通…」

瓦礫を押し退けながら立ち上がり、アクセルをバーストフォームで起動する。言っても聞かないならぶっ飛ばす、シンプル故に効果的な方法を取るしかなさそうだが…。

「このタイミングで、かよ。お前ら実はストーカーか？」

「正確にはあの二人の、ですけどね」

天を見上げた俺の視界に映るのは、黒衣を纏った三人の少女。なのはとフェイトを殺す為に、ユキの作り上げたマテリアル達。

「何故私達がこの姿なのか、まだ説明していませんでしたね」

星光の殲滅者が、胸元に手を当てながら語り始めた。彼女らを見た者全員が思うであろう、その疑問の答えを。

「マスターは私達三人を作る上で、この街で最も強力な魔力を持つ者の姿を模倣したのです」

本人の姿を借りてあやかるつもりだったのだろうか、あの妹は。

「強力な砲撃魔導師である高町なのは、英才教育を受けた天才フェイト・テスタロッサ、そして」

「闇の書に選ばれる程の資質を持つ八神はやて、か…。さすがに俺を作る気にはならなかった訳だ」

はやての資質についてはわからないが、少なくとも俺になのはやフェイト以上の力があるのは事実。俺のマテリアルを作らなかったのは、心情的な問題もあるのだろう。

「私達自身にあなた達への敵意はありません。あなたがマスターを受け入れれば、あの二人に興味をなくすことも十分考えられます」

「…なら、なのははどうなる？」

説得に掛かる星光の殲滅者を遮り、俺はその疑問を発する。

「あいつが現れる時は、いつもなのはの体を乗っ取ってた。あいつがもし完全に目覚めたら、依代であるなのははどうなる？」

ユキの性格からして、そのまま眠っているとは考えられない。なんらかの手段を用いて蘇ろうとするだろう。そしてその際おそらく、なのはは…。

「……」

「要はそういうことだ。お前らがなんであろうが、俺の意志は変わ

らない。重要なのはその一点だけだ」

押し黙る星光の殲滅者に肩を竦め、俺はバリアジャケットを纏う。
漆黒と白銀を携えた守り手の、天城ナツキの結論は一つだけ。

「二人に手を出すって言うんなら…、例え相手が神様だろうと俺が叩き潰してやる」

――――それが俺の、存在意義（レゾンテートル）。

「二人を殺す上での障害は…、全部始末するんだっけ？」

「素直に下がればいいものを…、所詮塵芥か」

「ならば仕方ありません。私達の邪魔をするのなら…」

三人がデバイスを構え、俺を見下ろす。その表情にあるのは、燃え盛る戦意だけ。

「先にあなたを、叩かせていただきます」

「上等。やってみろよ、簒奪者共！！」

挑発するように叫んだ俺はアクセルを振りかぶり、地を蹴って高速で飛翔した。

「シャマル、お前は離れて通信妨害に集中していろ」

「うん」

シグナムの背後に控えていたシャマルが更に下がり、騎士甲冑を身に纏い魔法陣を描く。

「闇の書は、悪意ある改変を受けて壊れてしまってる。今の状態で完成させたら、はやては…」

「我々はある意味で、闇の書の一部だ」

尚も説得しようとする私にレヴァンテインを突き付け、シグナムが鋭い視線を向ける。上空ではヴィータの一撃を、なのはがプロテクションで防いでいるところだった。

「だから当たり前だ!!あたし達が一番闇の書のことを知ってんだ!!」

絶叫しながらヴィータが力を込め、グラーフアイゼンを押し込んでいく。

「じゃあっ!!どうしてっ!?」

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのはも叫びと共に魔法陣を展開、八発の弾丸を生成し叩き込む。

「ちっ!!」

ヴィータが障壁を展開し、距離を取りながら舌打ちするが、

「どうして、闇の書なんて呼ぶの！？」

「！？」

なのはの言葉にその動きを止めた。

「なんで、本当の名前で呼ばないの！？」

「ホントの…、名前…？」

なのはの言葉に動揺したように、ヴィータが瞳を彷徨わせる。闇の書なんて名前じゃない、本当の名前があったはず。

「……」

そこまで見届けた私は、バルディッシュを構えシグナムを見据えた。なのはやお兄ちゃんも気になるけど、私には私のやるべきことがある。

《Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ．Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ》

バルディッシュの声と共に、私の体が金色の光に包まれる。手足のアーマーはそのままに、マントやスカート部分を排除。ノースリーブのシャツにスパッツを一体化させたような、一見すればレオタードにも見えるバリアジャケットを身に纏う。

《Ｈａｋｅｎ》

カートリッジがロードされ、戦斧が光鎌へと姿を変えた。手首や足首にはなのはのアクセルフィンに似たそれより小型の羽、ソニック

セイルが生える。

「薄い装甲を更に薄くしたか」

「その分、速く動けます」

目を眇めながらのシグナムの言葉に、私は端的に答える。

「緩い攻撃でも当たれば死ぬぞ。正気か？テスタロッサ」

確かに普段から私のバリアジャケットは薄いし、それを更に削った今の状態では、加速と攻撃の反動に耐える程度、最低限の耐久度しか持ち合わせていない。

「あなたに勝つ為です。強いあなたに立ち向かうには、これしかないと思ったから」

だけど、それぐらいの覚悟がないとシグナムは止められない。半年前はお兄ちゃんが、私を命懸けで助けてくれた。

――だから今度は、私の番。

「……」

シグナムが空を見上げると同時、体が紫炎に包まれる。騎士甲冑を纏った剣の騎士は、ただ理不尽さを嘆くように両手を広げる。

「こんな出会いをしていなければ私とお前は…、一体どれほどの友になれただろうな…」

「まだ…、間に合いますっ…！！」

私の必死な呼び掛けにシグナムの返した答えは、

「止まれん…」

――――中段の、構え。

「我等守護騎士、主の笑顔の為ならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた」

ベルカ式の魔法陣を描きながら、シグナムは身を裂かれているかのような悲痛な声をこぼす。

「もう…、止まれんのだっ…！！」

涙を流しながら、後戻りは出来ないと絶叫するシグナム。そこにいるのは、半年前の私。迷い、戸惑い、苦しみながらも、自らの意志を投げ出してしまった、フェイト（自分）・テスタロッサ（自身）。

「止めます…！！私と、バルディッシュが…！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

足元にミッド式魔法陣を描き、体に魔力を漲らせながら。

――――私は、地を蹴った。

「ドゥームブリンガー！！」

「パイロシューター！！」

規則正しく発射された純白の羽のような弾丸に動きを制限され、それを狙い澄ましたかのように桜色の誘導弾が飛来してくる。

「アクセル！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

避けるのは不可能と判断し、白銀の刃を横に薙ぎ払う。刀身を覆う漆黒のエネルギーが宙を翔け、三色が混じり爆発。どうにか相殺出来た、か？

「天破・雷神槌！！」

「ルベライト！！」

が、手を休める程相手は甘くなかった。桜色と金色の環状魔法陣が、俺を拘束しようと狭まってくる！！

「ちっ…！！」

上空に飛び上がってどうにかかわすが、

「アロンダイト！！」

「うおっ！？っ！！」

目の前をレーザーが掠めて静止すると同時にそれを察知。磁力制御の加速付きで、左手のアクセルを真下に投擲した。

「なっ！？」

下から迫っていた雷刃の襲撃者が慌ててバルニフィカスで弾くのを確認し、魔力を練り上げ重力槍に変換、射出。狙いは厄介な後衛の二人だ。

「くっ！！」

「ちぃっ！！」

星光の殲滅者と闇統べる王が動きを止めたのを確認し、重力制御で下へと加速。

「神速抜刀…！！」

《Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｚａｍｂｅｒ》

弾かれた刀が宙に溶けると同時、左手の鞘に収まったアクセルを抜刀。狙うは閃光の戦斧、その模倣。

《Ｂｕｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ》

が、バルニフィカスの声と共に斬撃の軌跡から水色の少女が消失する。かわしたか…！！

「ブラストファイアー！！」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

そしてその隙を突いて桜色の砲撃が放たれた。アクセルの展開したシールドで辛うじて防御、牽制に弾丸をばらまく。

「くっそ…、アクセル！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ガシュンガシュン！！とカートリッジを二発ロード。銀色の弾丸が排出されると同時に刃の黒色が肥大化する。

「グラビティ！！」

《Ｚａｍｂｅｒ》

巨大な黒い刃が宙を薙ぎ払うが、三人はそれをぎりぎりのところでかわして追撃の弾幕を放って来た。

「ジリ貧だな…！！」

《Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｍｅｔｈｏｄ（仕方あるまい）》

ただでさえ三対一、しかも向こうの実力は俺とほぼ互角。俺の体力が尽きるのが先か、魔力が尽きるのが先か、と言った状況だ。

（せめて雷刃さえ落とせれば…！！）

戦闘スタイルをソートすると、俺と雷刃の襲撃者が近接型、星光の殲滅者と闇統べる王が遠距離型だ。遠距離型の定石は詰めて叩く。いかに威力の高い砲撃でも、接近されてしまえば真価は発揮出来ない。だから雷刃さえ叩ければ後はどうとでもなるのだが…、

「シュート！！」

「エルシニアダガー！！」

「くっ…！！」

向こうもそれがわかっているのか、俺が雷刃に近付くだけで一斉に砲撃が飛んでくる。パイロシューターは誘導性が高い為高速戦闘による流れ弾を狙うのも難しい。かといって砲台に距離を詰めようとすると、

「光翼斬！！」

「グラビティセイバー！！」

させまいとばかりに雷刃が突っ込んで来るという訳だ。せめて後衛が一人だけならやりようもあるんだが…！！

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｌａｎｃｅｒ》

「ファイア！！」

再度重力を練り上げ射出。十発の黒槍が直線的に、しかし高速で二人を狙う。

「この程度…！！」

「かわせます！！」

だがその軌道故に二人は回避を選択した。魔力の無駄遣いを避けるのは、魔導師として当然の行動だろう。
――普通ならば。

「シフト！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

俺のワードに応え鋭角的な弾丸が丸みを帯び、複雑な軌道を描き二人を追尾する。ランサーとシューターは、シフトで自由に切替られる。故にこそあえて直線的なランサーを放ったのだ。
――防御を捨てて、回避させる為に。

「なっ！？」

「くっ！！」

二人が慌てて障壁を展開し防がれるが、一瞬だけ動きが止まる。
――それで、十分だ。

「蜃気一閃！！」

再度グラビティザンバーを振りかぶり、硬直している二人目掛けて薙ぎ払う！！

「させないっ！！」

が、黒色の刀身は金色の大剣によって弾かれた。ホント厄介だなこいつ…！！

「さっさとやられてくれないかねぇ！？」

「お断りしますっ！！」

再び距離を詰める俺の言葉に、星光の返した答えは弾丸だった。それらを全て切り裂きながら、俺は尚も前に進む。

「アクセル、やるぞ！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ！！（了解！！）》

アクセルが俺の声に答え、カートリッジが装填される。見せてやるよ…、俺の切り札！！

「ガーディアン・オブ・アルカディアの第三形態…、ザンバーフォームを！！」

第十三話「邂逅」（後書き）

はい、中途半端ですが今回はここまでです。
何やらきな臭くなってきましたね。マテリアル参入してるし。
さて、この後一体どうなるやら…（棒

次回、あのお方達が覚醒します。

第十四話「覚醒」（前書き）

はい十四話です。
遂にあのお方達が覚醒します。
若干ｇｄってる気がしなくもないですがご了承ください。
ではどーぞー

第十四話「覚醒」

「くっ…」

心中で焦りと苛立ちを募らせながら、夜の帳が落ちた海鳴市を高速で飛翔する。

（誰にも通信が通らん…、一体何があった…！？）

先程からシグナム達に通信を試みているが、全く反応がない。通信妨害をしているのだとしても、シャマルさえ何のアクションも起こさないとなると…。

（嫌な予感がする…！！）

どうか、杞憂であってくれ…！！

「本当の名前が、あったでしょう？」

「闇の書の…、ホントの名前…」

なのはの言葉にヴィータが腕を下ろし、呆然と呟く。例え改変を受けていたとしても、記憶のどこかに眠っているはず…。

「……っ！？」

と、なのはを取り囲むように環状の、鈍い輝きを放つ青い魔法陣が

姿を現す。

「っ！？」

回避しようとするが間に合わず、なのはの体を多重のリングが締め上げた。

「バインドっ…、また…！？」

「なっ…！？」

…また？まさか…！？

「なのは！！」

あのバインド…、仮面の男が近くにいる！！

「っ！！」

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

シグナムのレヴァンテインを弾きながら後退、ハーケンを構成する魔力で一本の雷槍を生成する。

「……」

目を閉じて、周囲の気配を探る。視認出来ないということは透化魔法か超遠距離、どこかに揺らぎがあるはず…！！

――見付けた！！

「そこっ！！」

バルディッシュを向けると同時、一条の雷撃が放たれた。金色の雷槍は宙を疾走し、

――――何もない空間に、ぶち当たった。

「はあああああっ！！」

微かに揺らいだ空間目掛けて飛翔、バルディッシュを三連続で振り下ろす！！

「ぐっ…」

「この間みたいには…、いかない！！」

透化が解け傷を負った仮面の男に、バルディッシュを構えながら宣言する。今回は先手を取れたんだ、負けるはずがない。

「ふっ！！」

が、突如現れたもう一人の仮面の男が、凄まじい速度で飛び蹴りを放ってくる！！

「なっ！？」

二人目の敵という異様な状況に体が硬直し、動くことが出来ない。回避？ダメ、間に合わな…！！

「させるかっ！！」

しかしその足は、銀色の刃によって弾かれた。私を庇うようにして、お兄ちゃんが突っ込んで来たのだ。

「もう二度と…、こいつに手は出させない！！」

アクセルを構えながらのお兄ちゃんの言葉に、場違いだとわかっていても胸が高鳴る。向こうで三人もの敵を相手にしていたはずなのに、僅か数秒で戻って来てくれた。

「出おったな、仮面の男！！」

「抜かるなよ、闇統べる王！！」

と、遅れて追い縋って来たはやて似の少女と雷刃の襲撃者が、仮面の男を取り囲む。え、なんではやてが…！？

「天城ナツキ、ひとまず休戦です！！今は仮面の男を！！」

お兄ちゃんをカバーするように前に出ながら、星光の殲滅者がルシフェリオンを構える。さっきまで戦ってたはずなのに、一体どういう…？

「上等！！フェイト、話は後だ！！まずはこいつらを叩く！！」

「う、うん！！」

お兄ちゃんの声に答えながらカートリッジをロード。三人も協力してくれるんだ、きっと大丈夫…！！

「ドゥームブリンガー！！」

「ファイア！！」

はやて似の少女、闇統べる王が羽の弾丸を放ち、雷刃の襲撃者が雷条でサポートする。

「…ふっ」

対しバインドを使った方、傷を負った仮面の男がシールドで防ぐ。全包囲からの弾丸を軽々と…！！

「バースト！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

お兄ちゃんが追い撃ちに衝撃波を飛ばすけど、蹴りを放った方の仮面の男はかわして距離を詰めてくる。

「はっ！！」

私はバルディッシュを振りかぶり、仮面の男の胴体目掛け一閃する。だが、

「甘い！！」

片手で止められ、カウンターで蹴りを放たれた！！

「くっ！！」

辛うじてバルディッシュで受けたものの、体重差も相俟って思いっ

切り吹き飛ばされる。

「……」

それを見た傷の方の男がカードを放った。それが宙に溶けた瞬間、私はバインドに拘束される。

「フェイトちゃん！！」

「ルベライト！！」

心配げな声を上げるなのはとは対照的に、同じ姿をした少女はバインドを発動。動きが止まった傷の男を拘束すべく、桜色の環状魔法陣が現れる。

「甘いな」

男の呟きと共に姿が掻き消え、対象を見失ったバインドが霧散する。

「空間転移！？」

「バカな！？一瞬で！？」

雷刃の襲撃者と闇統べる王が驚愕の叫びを上げる中、お兄ちゃんはもう一人の仮面の男と鍔迫り合っていた。

「この間の借り…、きっちり倍返ししてやるよ！！」

「やってみろ」

鋭い視線で見据えるお兄ちゃんとは対照的に、仮面の男は不敵に笑う。同時、周囲に魔力が巡り始めた。

「お兄ちゃんっ！！」

「っ！？」

私の上げた声に、お兄ちゃんが仮面の男を蹴り飛ばして離脱する。瞬間、二人のいた地点をバインドが締め上げた。危なかった…！！

「んなっ！？」

「嘘っ！？」

が、更に離れた場所にいたはずの、闇統べる王と雷刃の襲撃者が捕縛されていた。

「三点同時に！？」

「手癖の悪い奴だな…！！」

思わず漏らした私の声にお兄ちゃんが顔を歪め、重力の弾丸を牽制にばらまく。

「遅い！！」

それを器用にかわしながら突っ込んでくる男に、お兄ちゃんは不敵に笑う。

「シフト」

「があっ！？」

反転し鋭角的になった弾丸が、男の背中にぶち当たる。お兄ちゃんの十八番、トリッキーな弾幕シフトだ。

「ルベライト！！」

その隙を狙い星光の殲滅者がバインドで捕縛しようとするが、

「っ！？」

お兄ちゃんが突如放った蹴りを受け止めることで霧散する。

「何を…、っ！？」

反論しようとした瞬間、それを見た私は彼女と共に絶句する。お兄ちゃんの体には、執拗なまでに掛けられたバインドがあったのだ。

「星光！！決めろ！！」

そんな状況でありながらもグラビティフォールで仮面の男を押さえ付け、お兄ちゃんが叫ぶ。

「な…、んで…」

でも星光の殲滅者は助けられたことに動揺しているのか、その場から動くことが出来ない。そして、

「っ！？しまっ…」

唯一戦える最後の一人が、捕縛された。

「ふん」

姿を消していた傷の男が、鼻を鳴らしながら大量のカードを手に取る。足元に青い魔法陣が描かれカードが消えた瞬間、

「えっ!?」

「なっ!?」

「ぐっ!?」

あまりの出来事に呆然としていたシャマルとシグナム、更にヴィータもバインドに捕縛された。

「これって、一体…!?」

この場の全員が抱いているであろう疑問をなのはが声にするが、それに答えるはずもなく。

「この人数だと、バインドも通信防御もあまり保たん。早く頼む」

「ああ」

魔法陣を展開した傷の男の言葉に頷き、もう一人が宙に手を翳す。

――その手に現れる、茶色い表紙の一冊の本。

「なっ!? いつの間に!?」

シャマルの声を黙殺した男が闇の書を開くと同時、それが妖しく輝き始める。

「ぐぅっ！？あっ、あああああっ！！」

「ヴィータちゃん！？」

ヴィータが苦しみ始めると同時、胸元から紅く輝く珠が現れる。あれは…、リンカーコア！？

「うっ、ぐっ…、うああっ！！」

「あっ、あ…、あああ…！！」

シグナムとシャマルも、紫と翠色のリンカーコアを抜き取られ、抵抗も出来ずに苦悶の声を上げる。

「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す。これまでも幾度か、そうだったはずだ」

男の言葉と共に闇の書から黒い帯が伸び、リンカーコアに絡み付く。そして、闇の書はそれを告げた。

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）》

――――自らの一部である守護騎士を、仲間を喰らう、と。

「壊れもののロストロギア…」

「あ、あ、あああ、あああああああっ！！」

翠色の珠が爆発的に輝きを増し、シャマルが絶叫しながら姿を薄れさせていく。これって、まさか…！？

「こんなもので誰も救えるはずがない」

「ぐっ、うあ、あああああああっ！！」

同様に紫色の閃光が弾け、シグナムも宙に溶けていった。なのはも何が起きているのか理解したのか、顔が青ざめている。

「シャマル！！シグナム！！なんなんだ…、なんなんだよてめぇらぁっ！？」

「リンカーコアを根こそぎ…、一片の欠片も残さず蒐集したというのか！？」

仲間を喰われたヴィータと、彼女達同様作られた存在である闇統べる王が、絶叫と共に仮面の男を睨む。が、

「プログラム風情に、知る必要はない」

「ぐあああっ！！うあああああ…！！」

顔を隠した悪魔はそれをばっさりと切り捨て、ヴィータを蒐集し始めた。

「でえええええっ、らあああああああっ！！」

と、この場にいなかった最後の守護獣、ザフィーラが雄叫びと共に仮面の男目掛けて殴り掛かる！！

「温い」

「ぐっ、うおお…！！」

が、拳は青い障壁に阻まれて、逆にザフィーラの腕から血が流れ始める。

「そうか、もう一匹いたな」

思い出したかのように仮面の男が呟くと同時、ザフィーラの胸元が輝いた。

「ぐおっ、うっ、あああああっ！！」

青白いリンカーコアを抜かれ苦悶の声を上げながらも、ザフィーラは拳になけなしの魔力をかき集めていく。

「奪え」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ（蒐集）》

非情な宣告を下した悪魔を、尚もザフィーラは睨み付け、

「でえりゃあああああああっ！！」

――渾身の一撃を、放った。

「……落ちろ」

が、その拳は再度障壁に阻まれ届くことはなく、仮面の男が静かに呟いた。

「がっ!?」

カウンターの右アッパーがザフィーラの顎を捉え、猛き獣の意識は刈り取られた。

「っ!?」

得も言われぬ悪寒を覚え、私は布団を跳ね退け身を起こす。

「……」

思わず周囲を見回すが、そこにあるのはいつもの病室。なら、今のは一体…?

――瞬間、世界が暗転した。

「っ!?」

純白の何もない空間、その奥に蠢く黒い闇。何故か脳裏を過ぎったその映像に、凄まじいまでの恐怖を覚える。

「あ、っ!?」

誰か…、誰でもいいから…、お願い…、助け…。

全ての力を使い果たした守護獣が、ゆっくりと地に落ちていく。逞しい体付きをしていたはずなのに、ザフィーラが床にぶつかった音はやけに軽かった。

「こ、のっ…！！」

「あなた達には、情というものがないのですかっ…！？」

自分達も作られた存在だからだろう、雷刃の襲撃者と星光の殲滅者が絶叫する。目の前で自分と似たような存在が消されれば、さすがに激昂もするようだ。

（…なんでこんなに落ち着いてんだろうな、俺）

人間、どうやら感情がキャパを突破すると機械のように冷静になるらしい。守るという点では俺も守護騎士達も目的は同じ。同志とも言える存在を目の前で消されたことで、俺も大分キレているようだ。

「ついでだ。貴様らも消えろ」

だが、そんな俺達を歯牙にも掛けず、仮面の男は更に絶望を作り出す。

「なっ！？」

「えっ！？」

「ぐっ！？」

三人がそれぞれの魔力光、桜、金、純白の激しい光に包まれると同時、その姿を薄れさせ始める。

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ（吸収）》

闇の書の声が響き渡った瞬間、まるで分解されるかのように三人の姿が消えていく。

「やだやだ、やだあああああっ！！」

「こ、の…！！塵芥あああああっ！！」

泣き叫びながら雷刃の襲撃者が消え、仮面の男を呪いながら闇統べる王が消失する。

「天城ナツキ！！逃げて下さい！！闇の書が完成したら、あなたも…！！」

俺に向かって絶叫しながら、星光の殲滅者もその姿を徐々に宙へと溶かしていく。なんで、この後に及んで俺の心配なんか…！！

「私達は人形に過ぎませんが、あなたは人です！！マスターが命を懸けて守った、それ程の存在です！！だから、絶対に生き延びて…！！」

それが、彼女の最後の言葉となった。俺達を散々手こずらせた敵の最後にしてはあまりに呆気なく、

――――悲しい結末だった。

「てめぇら…！！」

「よくも…！！」

俺の呪詛のような呟きと、フェイトの怒りに震える声は、

「…おい、下種共」

ゾッとする程冷たい、殺意と憎悪を凝り固めたような声によって遮られた。

「なの、は…？」

「まさか…」

俺達の視界の先、オレンジ色の髪を輝く銀に染めながら、なのはが仮面の男を見上げる。

「ヴィータちゃんを…」

「星光の殲滅者を…」

ブチブチとバインドを引きちぎりながら、二人の声がシンクロする。

「シグナムさんを…」

「雷刃の襲撃者を…」

わかり合いたかった相手を、自らの手駒を消された怒りを力に変え。

「シャマルさんを…」

「闇統べる王を…」

背中から巨大な、漆黒の翼を生やしながら。

「守護騎士のみんなを…」

「あたしのマテリアルを…」

レイジングハートを、黒く黒く染め上げながら。

「「返せえええええええっ！！」」

高町（天城ユキ）なのはが、絶叫と共に地を蹴った。

地を蹴った瞬間、それだけで床が爆砕した。爆発的に加速した私（あたし）は仮面の男目掛けて突撃する。一秒？一瞬？瞬く間？生温い。もっと、もっと、もっと、速く。

「っ！？」

「くっ！！」

私（あたし）がかき集めた大量の魔力を纏ったレイジングハートを振り下ろすと同時、間一髪反応した傷の男が障壁を展開し防ぐ。が、

「理を狂わすモノを…！！」

「あたしの全てを…！！」

「「ナメるなあああああああっ！！」」

私（あたし）の絶叫と共に障壁は一瞬で砕けた。まるでそこに障壁などなかったと言うかのように、速度を微塵も殺さずレイジングハートが二人の首を刈る！！

「はあっ！！」

が、無傷な方が弾いて逸らし、逆に私を捕らえようと掴み掛かってきた！！

「ちぃっ！！」

慌てて後退しながら舌打ち一つ。いかにＤＲＭで無限の魔力を得ようとも、私（あたし）の体は九歳の少女のものに過ぎない。膂力差から考えても、捕まったらそこで終わりだ。

「アクセルシューター！！」

「インフィニティシフト！！」

私（あたし）の叫びに呼応して、漆黒の弾丸が天を埋め尽くす程に生成される。その物量は、まさに無限（インフィニティ）。

「「シュート！！」」

一発の威力は低くとも、この弾数を受けて生き残ることは不可能。
しかも、アクセルシューターは誘導弾。どう出る、下種共！？

「ふっ！！」

「っ！？」

「透化か…！！」

傷の方が一声上げると同時、二人の姿が消失する。手癖の悪い下種共だこと…！！

「エリアサーチ！！」

「ディバインバスター！！」

即座にアクセルシューターをエリアサーチャーに変質させ周囲を洗い出し、反応地点にディバインバスターを叩き込む！！

「ぐっ！！」

傷の方がどうにかブロックしたようだが、服の袖部分が焼け焦げている。よし、多少は通っ…、
――――もう一人は？

「はあっ！！」

「ぐっ！！」

反射的にレイジングハートを構えた瞬間、無傷な方の仮面の男に蹴

り飛ばされ、ビルにのめり込む。

「なのは！！」

「ユキ！！」

邪魔な女
フェイトちゃんとナツキ君の声に答えどうにか起き上がろうとするが、

「やれやれ、とんだ猛獣だな」

「しまっ！！」

体をがんじがらめにバインドで拘束され、身動きが取れなくなってしまう。迂闊だった…、感情に囚われて状況を見失うなんて…！！

『くっ…、魔力を使い過ぎた…。少し眠るわ…』

頭の中に声が響くと同時、漆黒の翼が消えレイジングハートが元の色に戻る。視界に入った髪の色も、元のオレンジに戻っている。

「くぅ…」

私もちょっと魔法を乱発し過ぎた。体に力が入らない…。

「っと」

倒れ込みそうになる私の下にナツキ君が滑り込み、二人縺れ合って倒れ込む。ナツキ君の上に横たわる形になり、嬉しさと気恥ずかしさを覚えた。

「さて…、始めようか」

仮面の男のその言葉を最後に、私は意識を失った。

「あの三人は…、なのはとフェイト、ナツキの三人は大丈夫か？」

宙に拘束されたヴィータと、地に横たわるザフィーラを挟んで、隣の無傷な仮面の男が聞いてくる。…おっと、今はあたしも仮面の男だったか。

「フェイトは五重でナツキは七重、なのはに至っては十重二十重の限界まで、更に三人纏めてクリスタルケージだ。抜け出すまで数分は掛かる」

「十分だ」

今頃三人は必死で、青い四角錐から抜け出そうともがいているだろう。いかにＤＲＭなんて化け物染みたものを持っていようと所詮子供は子供。力は正しく使えなければ意味がない。

「闇の書の主の…、目覚めの時だな」

青い輝きに包まれると同時、仮面の男だったあたしの体はなのはのものへ姿を変える。

「いいや。因縁の…、終焉の時だ」

隣も同様にフェイトに化ける。準備は整った。
――――さあ、始めよう。終わりの始まりを。

「くっ…！！」

どうにかバインドを解除しようともがくが、逆に締め付けがきつくなり苦悶の声を上げる。いくら戦闘中だったとはいえ、まさかたった二人に私達全員がやられるなんて…！！

「……」

お兄ちゃんはさっきから目を閉じ微動だにしない。信じていない訳じゃないけど、あまりに泰然とした態度に私の方が焦ってしまう。早く脱出しないとあの二人が何をしでかすかわからない…！！

「う…」

「なのは？」

と、気を失っていたなのはが目を覚まし、ふらふらと体を起こす。

「なのは、ストップ！！」

「ふぇ…？うにゃっ！？」

警告するが時既に遅く、私達を閉じ込める青い壁に頭をぶつけるなのは。うわぁ、痛そう…。

「うう…、痛い…」

バインドのせいで額をさすることも出来ず、涙目で呟くなのは。

「…ふぇ？」

と、そんななのはの額に手が乗せられる。その手の先に視線をやると、苦笑しながらなのはを撫でるお兄ちゃん。

「…ナツキ君？」

「…お兄ちゃん？」

バインドを掛けられている故に動けない、そんな状況で起きたその出来事に私達が首を傾げた瞬間。

「……ビンゴ」

――お兄ちゃんを拘束していたバインドが、弾け飛んだ。

「デバイス使えない上久々だから、ちょっと時間掛かっちまったが…」

片手をぶらぶらと振りながら、呆然とする私達にお兄ちゃんがニヤリと笑い。

「ユキの作った天城式に比べれば、この程度の魔法簡単に解析出来る」

天城ユキが生み出した魔法術式、天城式。ミッド式やベルカ式、そ

の他ありとあらゆる魔法術式をごちゃまぜにして改良した、天城ユキだけが扱える歪んだ術式。なのはのＤＲＭやスターライトブレイカーはもちろん、お兄ちゃんのレールガンにも応用されている複雑極まりない術式を、お兄ちゃんはずっと間近で見てきている。
――つまり、術式の解析も可能。

「つー訳であと三分くれ。それだけあればこいつも破れる」

私達のバインドを引きちぎりながら、壁をコンコンと叩くお兄ちゃん。

「うん、お願い」

「頼りにしてるよ」

「任せとけ」

拳をぶつけ合いながら、お兄ちゃんは壁に触れ解析を始め、なのは目を閉じ回復に努めている。攻撃寄りの私には手伝えない為、眼下の二人に視線を向ける。

「え…？」

が、そこにいたのは仮面の男ではなく、色違いのバリアジャケットを身に纏った私達。まさか、変身魔法…！？

「な…！？」

更に、二人が魔法陣を展開した瞬間、そこに一人の少女が現れる。
見間違えるはずがない。地にへたりこんだ茶髪のその少女は、

「はやて！？」

「え…」

足元に冷たさを覚え顔を上げると、そこに広がっていたのは見慣れた病室ではなかった。いずことも知れぬビルの屋上、輝く青い魔法陣の上に私は座り込んでいた。そして、見上げた視界に映るのは、――宙に磔にされうなだれるヴィータと、地に倒れ伏すザフィーラ。そして、

「なのはちゃん…？フェイトちゃん…？」

ヴィータを挟むようにして浮かぶ、さっき別れたはずの二人の少女だった。

「なんなん…、なんなんこれ…？」

「君は病気なんだよ。闇の書の呪い、って病気」

訳のわからない状況に戸惑いの声を上げる中、なのはちゃんがゾッとする程冷たい声で語り始める。

「もうね…、治らないんだ」

「え…」

フェイトちゃんの冷酷な言葉に、私の思考がフリーズする。もう…、

治らない…？

「闇の書が完成しても、助からない」

「君が救われることは…、ないんだ」

助からない。救われない。つまり、私はこのまま、
――死ぬしかない。

「っ！？……うう」

二人の言葉が胸を刈るが、別に私のことはいい。問題は、みんなだ。

「そんなん…、ええねん…。ヴィータを放して…。ザフィーラに、何したん…？」

「この子達ね、もう壊れちゃってるの。私達がこうする前から」

「とっくの昔に壊された闇の書の機能を、まだ使えると思い込んで、無駄な努力を続けてた」

詰まりそうになりながらも必死に言葉を紡ぐ私を見下ろし、二人は残酷な言葉の刃を突き刺し続ける。

「無駄ってなんや…！？シグナムは…？シャマルは…？」

「……」

遮り尋ねた私に対し、フェイトちゃんは後ろを指差す。振り向いたその先にあったのは、

「――――っ！！」

――――着る人のいない、空っぽになった二人の衣服。

「壊れた機械は、役に立たないよね」

「だから、壊しちゃおう」

青い輝きを纏わせながら、二人が利き手を振りかぶる。なんら知識のない私でも、それが振り下ろされたら一瞬で終わってしまうことが理解出来た。

「やっ、ダメ！！やめてぇっ！！」

動かない体を無理矢理引きずりながら、二人に向かって必死に手を伸ばす。それだけは、絶対に止めないと…！！

「やめて欲しかったら…」

「力ずくで、どうぞ？」

が、私の絶叫に二人は顔色一つ変えず、更に手の輝きを強めていく。

「なんで…、なんでやねん…！！なんでそんな…！！」

必死に這いずり進みながら、二人にひたすら問い掛ける。みんなが何をした？ただ闇の書の守護者として生まれてしまっただけ。なのに、こんな終わりって…、こんな理不尽って…！！

「ねぇ、はやてちゃん」

「運命って、残酷なんだよ」

二人の薄ら笑いと共に諦観したような答えが返され、四人の姿が輝きに呑まれて消えていく。もう…、間に合わない…？

「ダメっ！！やめて…！！」

これ以上…、私から家族を奪わないでっ！！

「やめてえええええっ！！」

そして四人は爆発的に光度を増した青に呑まれ、

――消えた。

「あ…、ああ…」

――ドクン。

純白の無の世界、その奥に蠢く黒い闇。フラッシュバックするかのように、脳裏がその光景で埋め尽くされていく。

「あ、あああ、あ…」

頂点に円を抱く、純白の三角形の魔法陣が足元に広がる。私に答えるかのように、完成した闇の書が姿を現す。

《Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ，Ｍｅｉｓｔｅｒ（おはようございます、ご主人様）》

闇の書の声が響いた瞬間、魔法陣の色が変貌する。清廉で透き通った純白から、
――マイナスのエネルギーへと染まった、紫掛かった黒へと。

「はやてちゃん！！」

「はやてぇっ！！」

「くっそ…！！」

何やら聞き覚えのある三人の声が響くが、私の耳には届かない。ただ今の私が欲しいのは、
――絶対的な、力。

「あ…、あああああああああああああああああああああああああああっ！！！」

私の絶叫と共に、周囲が爆煙に包まれる。そしてその中心から立ち上る、一条の黒い光。

「我は闇の書の主の…、この手に、力を」

闇のエネルギーの奔流の中、一糸纏わぬ姿となった私は、闇の書を手に取る。憤怒と憎悪と絶望で、瞳を赤く染めた私は、

「封印…、解放」

――覚醒を、告げた。

《Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ（解放）》

闇の書の言葉と同時、私の体が成長し始めた。九歳の少女のものだった私の体は、瞬く間に十歳半ばのものへと姿を変える。髪が白銀に染まり腰まで伸び、右手と両足にベルトが巻き付く。足元を甲冑で包み、両手は黒いグローブに覆われる。左腕と頬に赤いラインが走り、身を黒い衣服で包み込む。漆黒のコートを身に纏い、側頭部と背中、腰から漆黒の翼を生やしたその姿は、

――堕天使の名を、想起させた。

「また…、全てが終わってしまった…。一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい…？」

両手を広げ宙を仰ぎながら私、管制人格たる闇の書の意思はただ運命を嘆く。今度こそ目覚めずに済むかと思ったが、闇の書の呪いからは誰も逃れられない。

「はやてちゃん…」

「はやて…」

宙に浮かぶ二人の少女が不安げな声を上げる中、私は一人独白を続ける。

「我は闇の書。我が力の全ては…」

とめどなく溢れる涙を拭いもせず、私は右手を宙に翳す。

《Ｄｉａｂｏｌｉｃ　Ｅｍｉｓｓｉｏｎ》

闇の書の声と輝きがシンクロした瞬間、私の右手に漆黒の球体が生成される。圧倒的な魔力を秘めたそれは、その大きさを爆発的に膨らませていく。

「「っ！？」」

「あれは、ヤバい…！！」

二人の少女が硬直する中、少年が庇うように前に出て刀を構えた。その姿は烈火の将を思わせ、主の胸が苦しみで悲鳴を上げる。

「主の願いを、そのままに」

放電現象のように闇をうねらせ、球体が輝きを増する。巨大な闇の塊が、大気を食らい削り膨張していく。

「ディアボリックエミッション」

私の声と共に球体が浮き上がり、力の楔を解き放つかのように一瞬だけ収縮する。

「っ！？」

「空間攻撃！？」

二人も遅れて身構えるが、もう遅い。

「闇に、染まれ」

詠唱と同時、闇が弾けた。

「ちぃっ！！アクセル！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ×１０！！》

少年がカートリッジをロードし、十段重ねのプロテクションを張った瞬間。

――――三人は、闇に呑まれた。

「対象空域の通信妨害、消滅！！」

軌道上、青い地球を眼下に臨む次元空間航行艦船、アースラ。そのブリッジ内は、俄かに騒がしくなっていた。なのはさん達の反応をロストしてから数十分、ようやく尻尾を掴んだのだ。

「映像、来ます！！」

「なっ…！？」

正面のディスプレイに移された光景に、私は思わず息を呑む。何故ならそこにあったのは、

――――深淵なる、昏き闇。

「っ！！クロノは！？」

その危うさに魅了されていた私は、思い出したように尋ねる。街を覆う漆黒の球体に見取れていられる程、状況は甘くない。

「既に現地に飛んでいます！！」

さすがクロノ、行動が早い。だけど、あの中にはなのはさんやフェイトさん、ナツキ君が取り残されている。状況がわからないし、何が起きてもおかしくはない。

（クロノ…。お願い、間に合って…！！）

私は息子に祈りながら、注意深くモニターを見据えた。

第十四話「覚醒」（後書き）

はい、目覚めちゃいましたね。彼女。
てかユキさん落ち着こうよ。仮面如きにあしらわれちゃダメでしょ
現アナザー最強。
さて、これからどうなるやら…。

次回、怒涛の急展開です。

第十五話「融合」（前書き）

静かで優しいクリスマス・イヴ。偶然の出会いが、悲しい戦いを導いて。
霞みかけた真実、舞い踊る影。消えていく人達、届かない願い。
運命の鍵を握った子の涙が、深い闇を呼び覚まして。
長く冷たい夜が、今、静かに幕を開ける。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

第十五話「融合」

艦内を覆うのは、緊急事態を告げる赤い文字。味方の悲壮感を煽るのは、耳障りな警告音。人々を絶望に叩き落とすのは、

――――艦内を侵食する、無数の蔦。

『早く！！こっちに避難を！！』

『くそっ！！待避ぃっ！！』

モニタールームから艦内の状況を洗い出しながら、私はひたすら打開策を探すが…、

「ぐっ！！」

爆発の煽りをマトモに受けて、額から血が流れ出す。長くは、保たないな…。

「こちら…、二番艦エスティア…！！闇の書の暴走…、止まりません…！！駆動炉も、ブリッジも奪われました…。ぐっ…！！」

グレアム提督に通信回線を開きながらこちらの被害や状況を送信するが、そう言う間にも再び爆発。画面の向こうの提督の顔が歪み、自らの判断ミスを呪っているのが窺える。

「操舵システムと、アルカンシェルのコントロールも…！！」

『『っ！？』』

続けて放った私の言葉に、提督とその使い魔であるロッテの顔が驚愕に彩られる。無理もないだろう。闇の書を滅ぼす為の切り札であるアルカンシェルが、その闇の書に乗っ取られているのだから。

『エスティア…、アルカンシェルのチャージ反応！！』

『発射軌道上に、本艦隊！！』

アリアやオペレーターの声が、私の言葉を裏付ける。今エスティアがアルカンシェルを撃ったら、その先に待つのは全滅だけ。

（提督…、お願いします…！！）

「…クライド提督、脱出を急げ。エスティアは…、破棄する」

こうなってしまった以上、他に選択肢はない。闇の書をエスティアごと沈める以外、この状況を乗り切る手立てはない。

『…先程、全クルーの避難を確認しました。こちらのアルカンシェルのチャージは、あと一分程度で、完了してしまいます』

頷きを返したクライド・ハラオウン提督が、状況報告を続ける。後はクライド提督さえ脱出すれば、エスティアに総攻撃を掛けられる。

『こちらのチャージタイムのカウントを出します。発射前に、落として下さい』

「っ！？」

その言葉を最後に、敬礼したクライド提督の姿を最後に、通信が途絶する。通信回線まで侵食されたのか…！？

「通信が…っ！？」

「エスティア艦、チャージ終了まで、残り６８秒。こちらは、チャージ完了してます。いつでも撃てます」

ロッテの声を遮って、アリアが判断を促してくる。撃たねば、やられる。だが、そうすればクライド提督は…。

「父様っ！！」

…考えるまでもない。何故なら私は、管理局なのだから。

「…アルカンシェル、バレル展開。カウントゼロの前に、エスティアを落とす」

彼の犠牲を、その想いを、無駄にする訳にはいかない。なんとしてもここで、闇の書を沈めなければ。

「アルカンシェル、バレル展開」

アリアの声と同時、艦船の先端に魔力が渦巻き始めた。三重の環状魔法陣が展開され、中央に白い光が渦巻く。

「発射」

私の声と同時、それは解き放たれた。圧倒的な質量を持つその白球

は一直線にエスティアを穿ち、
――その身を、爆散させた。

「…よかった」

エスティアに向けて迫る白球を見据えながら、柔らかな笑みを浮かべる。結果として私は死んでしまうが、闇の書はエスティアと共に消える。再生に時間が掛かるとは言え、しばらくは平和が訪れるはずだ。

「約束…、守れなかったな…」

胸元のロケットの中、そこに収められた写真を見遣る。緑色の髪をポニーテールにした女性と、黒い髪の少年。妻と、息子だ。

「一緒にピクニック…、行きたかったな…」

一時とは言え世界を救えるのだから悔いはない。ただ、二人のことだけが心残りだった。

「早く忘れて…、幸せになってくれ…」

傲慢とも取れる呟きを、心の底から漏らしながら。
――私は、白い光に呑み込まれた。

私のミスだった。闇の書の暴走が、艦船のコントロールを乗っ取る

程のものだとは、予想出来なかった。

「……」

手元の資料から視線を外し、テーブルに飾られた写真立てを見遣る。
在りし日のクライド提督、ハラオウン一家の平和な一時の写真。

「もう少しだけ…、待っていてくれ…」

あと少しで、全て終わらせてみせる。もう二度と、あんなことを起こさない為に。

「よし、結界は張れた。デュランダルの準備は？」

仮面の男が足元の魔法陣を消し、もう一方に振り返る。

「出来ている」

問われた方が手を翳すと同時、そこに銀色のカードが現れた。青い魔力光、そしてデュランダル。後は、決定的な証拠を掴めばいい。
問題は、タイミング。

「保つかな、あの三人は」

「暴走開始の瞬間までは、保って欲しいな」

二人の視線が黒色の球体に注がれ、注意が僅かに逸れた。
――今。

「「っ！？」」

二人の足元に展開した水色の魔法陣からロープが伸び、仮面の男達を拘束する。

「ぐっ…！！」

「うっ…！！」

二人がもがき振り切ろうとするが、無駄な抵抗に過ぎない。

「ストラグルバインド…」

「「っ！？」」

その姿を現した僕に、二人が息を呑む。

「相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する。あまり使い所のない魔法だけど…」

二人を追い詰めるように呟きながら、くるくるとＳ２Ｕを回し、

「こういう時には、役に立つ」

地に突いた瞬間、二人の様子が変わる。

「「ぐっ、あっ、あああっ！…！」」

二人の体から粒子状の輝きが、宙へと舞い上がっていく。それはあ

る意味当然の光景とも言える。何故なら、

「変身魔法を…、強制的に解除するからね」

――この二人は、本当の姿を隠しているから。

「「ぐあああああああっ！！」」

二人の体が水色の輝きに包まれた瞬間、変身魔法が解除される。そこにいたのは管理局の黒い制服を纏い、猫の耳と尻尾を生やした、茶髪の少女達。

「クロノ…！！このっ…！！」

「こんな魔法…、教えてなかったんだけどなぁ…」

結界が消えると同時、乾いた音を立てながら仮面が地に転がる。違って欲しいと思っていたが、現実はやはり非情だった。

「一人でも精進しろと教えたのは…、君達だろう…」

悔しげに毒づく二人に、鋭い視線を送りながら、

「アリア…！！ロッテ…！！」

僕はその名を、フェイトのリンカーコアを抜き取り、闇の書を完成に導いた犯人の名を、呼んだ。

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

とあるビルの陰に隠れ、お兄ちゃんは荒い息を整える。防御はなのはの方が得意だけど、消耗しているからとお兄ちゃんが出張った為、疲労が激しいのだ。

「ナツキ君、ごめん…」

「ありがとう…、大丈夫？」

ふらつくお兄ちゃんを二人で支えながら、心配げに顔を覗き込む。マテリアル三体を相手にした直後に仮面の男と戦闘、更にバインドとクリスタルケージを破った上で強力な空間攻撃を防御。いくらカートリッジで補ったとしても、あれは体への負担が大きい。お兄ちゃんの今の状態は、当然の帰結とも言える。

「余裕だ余裕」

私達を安心させようと微笑み、危なげなく宙に浮かぶお兄ちゃん。とりあえずは大丈夫かな…。

「あの子、広域攻撃型だね…。避けるのは難しいかな…。バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ，Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｆｏｒｍ》

私の声に答えて、バルディッシュが光を放った。金色の輝きに包まれると同時、ソニックフォームだった私のバリアジャケットが普段のもの、ライトニングフォームへと姿を変える。ソニックフォーム

は防御より回避に重点を置いた形態。避けられないのなら五十歩百歩でも、少しでも装甲の厚いライトニングフォームの方がいいと判断したのだ。

「おー、かっけぇなそれ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？」

ふざけたように言うお兄ちゃんに、私は頬を膨らませる。私達を安心させたいのはわかるけど、こんな状況なんだからもうちょっと緊張感持とうよ…。

「ま、その判断は正解だ。ちゃんと訓練が生きてるな、偉いぞフェイト」

「…もう」

わしゃわしゃとお兄ちゃんに頭を撫でられて、私は思わず表情を緩めてしまう。なんだかんだ言っても、やっぱりこうして好きな人に触れて貰えるのは嬉しい。

「で、なのははどうだ？」

「うん、少しは良くなったよ。スターライトブレイカーやＤＲＭは無理だけど、普通に動く分には大丈夫かな」

振り返ったお兄ちゃんの質問に、なのはがこくりと頷く。実際こうしてアクセルフィンで飛べているし、多分問題はないと思う。

「そっか。無理だけはすんなよ？」

「わ、わっ」

安心したように笑いながら、頭を撫でるお兄ちゃん。なのはも口では言いながら、気持ち良さそうに表情を和らげている。…やっぱり、なのはも私と同じで嬉しいのかな。

「なのは！！」

「フェイト！！ナツキ！！」

と、私達の方へ飛んで来る二つの影。声だけでわかる。二人共、助けに来てくれたんだ！！

「ユーノ君！！アルフさん！！」

「来るのが遅いぞ？」

お兄ちゃんの苦笑しながらの言葉に二人も苦笑を返し、私達は五人でハイタッチを交わした。

（…隠れたか）

キラキラと闇の残滓が舞い散る中、私は周囲の気配を探る。少し離れたビルの陰、五人分の魔力を感じ取った。

「主よ…、あなたの望みを叶えます」

頬を流れる涙を拭い、胸元に手を当て呟く。

「愛おしき守護者達を…、傷付けた者達を…」

足元に昏い魔法陣を描き、自らの内に眠る主へと呼び掛ける。

「今…、破壊します」

《Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ》

私の声に応え、闇の書が封鎖領域を展開する。私を中心に紫掛かった、黒く輝く球体が広まり、街を鈍い灰色で包み込んだ。

「スレイプニール…、羽ばたいて」

《Ｓｌｅｉｐｎｉｒ》

私と闇の書の声がシンクロした瞬間、背に生えた二対の翼がその身を膨らませる。

「…行こう」

闇の書を携えて、漆黒の翼を羽ばたかせながら。私は昏い空へと舞い上がった。

「「「「「っ！？」」」」」

それを感じ取った瞬間、私達は顔を上げる。空や街が鈍い灰色に染

まっていき、私達以外の人の反応が完全に消失する。

「前と同じ、閉じ込める結界だ！！」

「やっぱり…、私達を狙ってるんだ…」

最初にヴィータちゃん達と出会った時と同じ結界。それをわざわざ展開したということは、私達を逃がさないという意志表示に他ならない。

「あの二人がなのはとフェイトに化けてたのは、これが狙いだったのか…。面倒なことを…！！」

「今、クロノが解決法を探してる。援護も向かっているんだけど、まだ時間が…」

ユーノ君の回復魔法を受けながら、私達は方針を固めはじめる。逃げられないなら、道は一つしかない。

「それまで、私達でなんとかするしかないか…」

「仮に結界を抜いても闇の書の暴走は止まらない…。戦って時間を稼ぐしかないな…」

（はやてちゃん…）

思うのは、優しい少女のこと。理不尽で残酷な運命に巻き込まれてしまった、絶望で心を閉ざしてしまった少女。

「なのは…」

「あ…、うん。大丈夫」

フェイトちゃんの言葉に我に返り、頷きを返した私はレイジングハートに視線を落とす。

（もしもの時は…、私に力を貸してくれる？）

そこに眠る一人の少女に問い掛けてみるけど、答えはなくて。レイジングハートはただ、いつもの輝きを返すだけだった。

「リーゼ達の行動はあなたの指示ですね？…グレアム提督」

ソファに腰掛けた僕は、目の前に座るグレアム提督に視線を送る。数々の証拠に加え、リーゼ達の捕縛。どう足掻いても言い逃れは出来ない。

「違う、クロノ！！」

「あたし達の独断だ、父様には関係ない！！」

「ロッテ、アリア。いいんだよ」

必死に弁護する二人を遮り、グレアム提督が頷く。その人の良さそうな顔を見ていると、本当に彼が一連の事件の黒幕とはとても思えない。

「クロノもあらかたのことを掴んでる。違うかい？」

「…十一年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね？そして、発見した。闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

諦観したように笑い掛ける提督に確認するように尋ねながら、ディスプレイに闇の書とはやてを映し出す。本来なら数百年に一度会うか会わないかという確率なのに…、凄まじい執念だ。

「しかし、完成前の闇の書と主を押さえても、あまり意味がない。主を捕らえようと、闇の書を破壊しようと、すぐに転生してしまうから」

「……」

それは、闇の書について調べればすぐにわかる事実。完成前に干渉すれば転生で逃げられ、完成したら破壊を振り撒く災厄のような存在。それが、闇の書。

「だから干渉しながら、闇の書の完成を待った。…見付けたんですね。闇の書の、永久封印の方法を」

「…両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが…」

そんな闇の書の完成を早めた以上、提督は見付けたのだろう。闇の書の封印法を。ディスプレイに映った少女を見て、提督が僅かに顔を歪める。

「運命だと思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なく

なる」

「あの子の父の友人を騙って、生活の援助をしていたのも提督ですね？」

提督宛ての手紙と写真を差し出し、問いを重ねる。手紙の差出人は言うまでもなく、八神はやてだった。

「永遠の眠りに就く前くらい…、せめて幸せにしてやりたかった…。偽善だな…」

幸せそうに笑う少女と守護騎士達を眺め、一瞬だけ頬を緩めた提督は自らを嘲る。偽善。その一言で片付けるのは簡単だが、これも提督なりの誠意だったのだろうと思う。

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間か、氷結世界に閉じ込める。…そんなところですね？」

「そう。それならば、闇の書の転生機能は働かない」

凍結魔法。扱いが難しいが、強力なものは時を止める程の力を持つという。闇の書を主ごと凍結させれば、中に封じられた闇の書と主も永遠の眠りに就く。確かに不可能ではないが…。

「これまでの闇の書の主だって、アルカンシェルで蒸発させたりしてんだ！！それと何にも変わんない！！」

「クロノ、今からでも遅くない。あたし達を解放して。凍結が掛けられるのは、暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ」

だが、その方法には穴がある。どうしようもなく致命的な、巨大な問題点が。

「その時点ではまだ、闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない。…違法だ」

「何が法だっ！！」

無罪な普通の人間を、謂れなく永遠の眠りに就かせる。どう考えても違法なそれに言い返すと同時、激昂したロッテが僕の襟首を掴み上げる。

「そのせいでっ！！そんな決まりのせいで、悲劇が繰り返されてんだ…！！クライド君だって…、あんたの父さんだって、それで！！」

「黙れぇっ！！」

久しぶりにキレた。逆にロッテの襟首を掴み寄せ、至近距離で睨みつける。闇の書を見た時から燻っていた黒い感情が、父さんの記憶と共に頭を埋め尽くす。

「ああそうさ！！僕だって本当はそうしたい！！たった一人の犠牲でこの終わらない悲劇を止められるんなら、とっくにそうしてる！！」

怯えたように身を竦めるロッテに、洗いざらい本心をぶちまける。事実何度も悩んだ。今までだって何人も餌食になっているのだ、無数の数字にたった一人分上乗せするだけで全てが終わるなら、それでもいいのではないかと思った。けれど、

「だけど、それでも僕は執務官だ!!次元世界の法なんだ!!ただの私怨で無関係な、何も知らない一人の少女に過酷な運命を強いる程、僕は落ちぶれちゃいない!!」

父さんは常々言っていた。自分が正しいと思うなら、迷わず貫けと。迷った挙句の他人に委ねた結論で闇の書を葬っても、父さんはきっと僕を叱る。僕はもう、あれのせいで犠牲者を出さないと誓ったのに、犠牲を増やして終わらせても何の意味もない。

「…法以外にも、提督のプランには問題があります」

ロッテをソファに押し戻し、提督に背を向けながら否定材料を並べる。

「まず、凍結の解除はそう難しくないはずです。どこに隠そうと、どんなに守ろうと、いつかは誰かが手にして使おうとする」

「……」

凍結魔法はその特性故に、扱いが難しく理論が最適化されている。だから調べれば、解除は案外あっさりと出来るのだ。その点は理解していたのか、提督が押し黙る。

「怒りや悲しみ、欲望や絶望、そんな願いが導いてしまう…。封じられた力へと…」

プレシア・テスタロッサが、天城ユキのジュエルシードを求め天城一族を皆殺しにしたように、マイナスの感情に囚われた人間は力を求めてしまう。損失を埋めるかのように、世界を壊そうとするかのように。

「…現場が心配なので、すみません。一旦失礼します」

今ここで提督と話していても現実は変わらない。早くナツキ達と合流して、事態の鎮圧に回らなければ。

「…クロノ」

「…はい？」

出口に向かおうとした僕を、提督が呼び止める。早めに済めばいいのだが…。

「アリア、デュランダルを彼に」

「父様！？」

「そんな…！？」

提督の言葉に、リーゼ達が信じられないと言うように絶句するが、

「私達に、もうチャンスはないよ。持っていたって役に立たん」

「「……」」

厳然たる事実を突き付けられ、二人が俯く。やがてアリアが、一枚の銀色のカードを提督に手渡す。

「どう使うかは、君に任せる」

受け取った提督は、それを僕に向けて差し出す。待機状態を一目見ただけでも、かなり強力なデバイスだとわかった。

「氷結の杖、デュランダルだ」

提督から差し出された、照明を受けて輝く切り札を、――僕は、しっかりと受け取った。

「っ！！」

「……」

アクセルを片手で受け止め、主の願いに反応した闇の書の管制人格、暫定名称闇の書の意思は、俺を静かに見据える。その赤い瞳にあるのは、空虚と絶望だけ。かつて両親と魔法を失い、絶望に染まり生ける屍と化していた、――妹（ユキ）と、同じ瞳。

「っ！！ユーノ！！アルフ！！」

アクセルを弾き距離を取りながら、タイミングを計っていた二人を促す。

「ふっ！！」

「はっ！！」

ユーノの正面に展開された魔法陣から、鎖が飛び出し闇の書の意思

を縛る。更にアルフがバインドを発動、重ねて四肢を拘束した！！

「…砕け」

《Ｂｒｅａｋｕｐ》

しかし、その戒めは一瞬で砕かれた。さすが闇の書、魔法の種類が半端なく多い。だが、

《Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ》

「ファイア！！」

上空からフェイトが雷の奔流を放ち、

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

「シュート！！」

地上からなのはが桜色の砲撃を放つ！！

時間を掛けて練り上げた二条の閃光は、大気を切り裂きながら対象目掛けて真っ直ぐ突っ走る！！

「…盾」

《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

だが、闇の書（ロストロギア）の名は伊達ではなかった。翳した手から障壁を展開し、プラズマスマッシャーとディバインバスターエクステンションを軽々と受け止める。

「くっ…！！」

「うっ…！！」

魔法を維持しながら二人が顔を歪めるが、お陰でチャンスが生まれた。今彼女は両手を塞がれ、他の魔法の行使は難しい。

「切り裂けっ！！」

《Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｚａｍｂｅｒ》

闇の書の意思の正面へと翔け上がり、磁力の反発を利用して高速抜刀。銀色の軌跡が、災厄を断つべく振るわれる！！

「…甘い」

「なっ！？」

だが、彼女は三枚目の障壁を展開しアクセルを危なげなく受け止めた。まさかあの状態から防がれるとは…！！

「刃を以って、血に染めよ」

《Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ》

しかも、それだけでは終わらなかった。詠唱を開始した彼女の周囲に、赤いクナイのような弾丸が浮かぶ。

「っ！？」

「四つ同時！？」

この状況で出すからには、射程範囲は相当広いはず。二人は今、魔法発動中で防御出来ない。なら…、

「穿て、ブラッティダガー」

「フェイト！！」

叫ぶと同時全力で加速。グラビティランサーでフェイト目掛けて走る赤い閃光を穿ちながら、なのはの元へと急ぐ。

「っ！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

思惑を察したフェイトが魔法解除と同時に攻撃を回避し、機動性に難のあるなのはは俺のプロテクションで防御。爆煙が周囲を包むが、どうにか事なきを得る。

「咎人達に、滅びの光を」

そんな光景を気にも留めず、闇の書の意思は手を翳した。足元と正面に魔法陣が展開し、桜色の魔力が集い始める。

――その光景は、紛れも無くあの魔法。

「まさか…！？」

「あれは…！！」

目の前に広がった思わぬ光景に、アルフとユーノが絶句する。そりゃ驚くだろう、慣れ親しんだ強力な魔法を、いきなり相手が発動したのだから。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト…、ブレイカー…？」

尚も詠唱を続ける彼女に、なのはが呆然とそれの名を呟く。本来の使用者である、彼女の驚きは人一倍大きいだろう。

「アルフ、ユーノを！！」

「あいよっ！！」

俺の指示に答えたアルフが、ユーノを抱えて離脱したのを確認。俺もなのはとフェイトを抱き抱え、全速力で離脱する。

「貫け、閃光」

「くそ…、間に合えっ…！！」

後先のことは考えなくていい、今はとにかく距離を取る！！

「なのはの魔法を使うなんて…！！」

「なのはは一度蒐集されてる。その時にコピーされたんだ…！！」

信じられないように呟くフェイトの言葉に、歯噛みしながら推測す

る。もし俺が蒐集されていたら、最悪レールガンを敵に回していたと思うとゾッとする。不謹慎だが、蒐集されなくて本当に助かった…！！

「ちょ、ナツキ君…、こんなに離れなくても…」

「バカ言ってんな！！至近距離で食らったら、防御の上から落とされる！！距離を取るしか方法はない！！」

アレを過去に一度食らっている俺の言葉に、なのはが口を噤む。膨大な魔力の奔流たるあの魔法は、防御出来るような代物ではない。

「アクセル！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

カートリッジを一発ロードし更に加速。銀色の軌跡を描きながら、俺達は無人の街を駆け抜ける。

《Ｓｉｒ，ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｎｏｎｃｏｍｂａｔａｎｔｓ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｌｅｆｔ　ａｔ　ｔｈｒｅｅ　ｈｕｎｄｒｅｄ　ｙａｒｄｓ（左方向３００ヤード、一般市民がいます）》

だが、静寂はバルディッシュの衝撃的な発言によって破られた。

「「「っ！？」」」

一般…、市民…？

「やっぱり誰もいないよ…！！急に人がいなくなっちゃった…！！」

辺りを見回っていたアリサちゃんが戻って来て、端的に事実を告げる。さっきから急に人気が途絶え、街は廃墟のようになっていた。

「辺りは暗くなるし…、何か光ってるし…、一体何が起きてるの…！？」

「うん…」

同じ頃から上空で黒と銀、桜と金が煌めくようになり、まるで異世界に迷い込んだかのように錯覚してしまう。ここが私達の知らないどこかなんじゃないか、そんな恐怖に体が震える。

「とりあえず逃げよう、なるべく遠くへ！！」

「う、うん！！」

アリサちゃんに手を引かれながら、私達は駆け出した。この訳のわからない世界から、逃げ出す為に。

《Ｄｉｓｔａｎｃｅ：ｓｅｖｅｎｔｙ，ｓｉｘｔｙ，ｆｉｆｔｙ…》

「お兄ちゃん、この辺」

バルディッシュの指示に従って飛んでいたナツキ君に、フェイトちゃんが反応地点に近いことを告げる。

「ああ、俺達は地上から。フェイトは空を」

「うん」

フェイトちゃんを手放し、ナツキ君が私を俗に言うお姫様だっこの格好で抱き抱える。…って、

「な、ナツキ君!?」

「しっかり掴まっとけ」

そのままナツキ君は地上に降り立ち、足元から火花を散らしながら道路をスライド。徐々に速度を殺していく。

「よっ、と。平気か？」

「う、うん…。大丈夫…」

ぽふぽふと頭を叩くナツキ君に答え、赤い頬を隠すように周囲を見回す。

《Ｔｗｅｎｔｙ，ｅｉｇｈｔｅｅｎ》

「えっ！？」

バルディッシュの声に、フェイトちゃんが驚愕する。こっちに…、近付いて来てる！？

「……いた！！」

ナツキ君の視線の先、ビルの陰から飛び出した二人が私達とは逆の方向に駆け出す。

「あのっ、すみません!!危ないですから、そこでジッとしてて下さい!!」

「え…?」

「今の声って…」

私の声に、小さな呟きが返される。あれ?この声、どこかで…。

「…なぁ、アクセル。ものすごく聞き覚えがある声なんだが」

《Ｔｈｅ　ｒｅｃｏｇｎｉｔｉｏｎ　ｉｓ　ａ　ｃｏｒｒｅｃｔ　ａｎｓｗｅｒ（その認識は正解だ）》

ナツキ君の溜め息と言葉を、アクセルが肯定する。着地の衝撃による煙が晴れた先にいたのは…、

「なのはちゃん…?フェイトちゃん…?」

「ナツキまで…?」

聖祥附属の制服の上に、茶色いダッフルコートを着込んだ二人の少女だった。見間違えるはずもない、私達の名前を呼ぶその二人は、

「アリサちゃん…」

「すずか…？」

アリサちゃんと、すずかちゃんだった。

「…現実って、理不尽だよな…」

《Ｉｔ　ｉｓ　ｎａｔｕｒａｌ　ｎｏｗ（今更だな）》

ナツキ君の諦めたような言葉が、やけに耳に残った。

「スターライト、ブレイカー」

そして、現実は更に過酷な運命を強いた。桜色の砲撃が放たれ、放射状に爆発が広がり始める。

「「なっ！？」」

「「っ！？」」

「マジかよ…、こんな時に！！」

桜色の爆発は、勢いを弱めることなくこちら目掛けて襲い掛かってくる。今から回避しても間に合わない、二人を守らないと…！！

「フェイト！！」

「うん！！」

ナツキ君の声に応えてバルディッシュとアクセルがカートリッジを二発ロードする。

「二人共、そこでジッとして！！」

《Ｄｅｆｅｎｓｅｒ　Ｐｌｕｓ》

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

フェイトちゃんの声と共に金と銀が煌めき、アリサちゃんとすずかちゃんを囲むようにバリアが張られる。

「どこまでやれるかわからないけど…！！」

更に二人を庇うように、フェイトちゃんがシールドを展開する。

「レイジングハート」

《Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

私の声に応えカートリッジを二発ロードしたレイジングハートが、三人を守るようにバリアを展開する。

「…守るより抜いた方が速そうだな、俺は」

柄からシルバーのマガジンを抜き、新たなマガジンを装填しながら私の前に立ったナツキ君が呟く。

「アクセル、やるぞ。ブレイカーを」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．Ｆｕｌｌ　Ｒｅｌｏａｄ》

ガシュンガシュン！！と音を立て、装填した六発全てのカートリッジをロードされる。ナツキ君、何を…？

「負担はデカいが矯めはなし、しかも威力は一級品。今度こそ見せてやるよ、俺のブレイカーを」

白銀が煌めき、魔法陣が展開される。正面に膨大な魔力が、白銀の流星の如く集束する。

「穿ち貫け、アースライト…！！」

《Ｅａｒｔｈｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

アクセルが振るわれると同時、一本のラインが正面へと伸びた。導線にも見えるそれに沿って、膨大な魔力が流れ始める。

「ブレイカアアアアッ！！」

瞬間、白銀の奔流が桜色の波動とぶつかり合った。

「……」

桜色を貫通した白銀の光線を見ながら、私は感嘆の溜め息をつく。まさかあれを撃ち抜くとは…。

「防ぐのではなく抜きに来たか…。いい判断だ」

あの魔法は防ぐことがとても難しい。だが、だからと言って生半可

な攻撃では貫けない。それを成し遂げた少年の実力は、素直に称賛に値する。

「…そういえば」

あの少年は、殲滅対象には含まれていない。あくまで私の狙いは、守護騎士達を葬った二人の少女だ。

「…無用な殺生は、したくないな」

出来れば素直に二人を差し出して欲しいが、あの少年の性格からしてそれはないだろう。何が何でも二人の盾になろうとするはずだ。シグナムやザフィーラのように。

「…偽善か」

思考を打ち切って、私は三人の元へ飛んだ。

『なのは!!フェイト!!ナツキ!!』

『みんな、大丈夫!?』

アースライトブレイカーの維持に全力を注ぐ俺の脳裏に、ユーノとアルフの声が響く。どうやら無事離脱出来たみたいだな…。

『っ…、大丈夫では…、あるんだけど…!!』

『アリサとすずかが…、結界内に取り残されてるんだ…!!』

必死に防御魔法を展開しながら、なのはとフェイトが状況を説明する。いかにアースライトブレイカーでエネルギーの大部分を相殺しても、衝撃まではさすがに打ち消せない。四重で守っているから大丈夫だとは思うが、だからといって手を抜くつもりもない。

『エイミィさん！！』

『余波が収まり次第、すぐ避難させる！！なんとか堪えて！！』

『『はいっ！！』』

ユーノの声に、エイミィがコンソールの操作音を響かせながら答える。どうやら転送の準備を開始したようだ。なのはとフェイトの声にも覇気が戻っている。

「アクセル…！！バースト！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！》

アクセルの声と同時、白銀の煌めきが強まる。こちらを押していた桜色を食い止め、徐々に均衡状態に持っていく。

「止まれってんだ…！！んのやろおおおおおっ！！」

カートリッジから費やした魔力を全て使い切った瞬間、桜色の爆発が収まった。間一髪、まさに紙一重。どうにか堪えきれたようだ。

「「……」」

抱き合って固く目を閉じていたアリサとすずかが、恐る恐る俺達を見る。訳もわからず巻き込まれて、怖かっただろうな…。

「もう大丈夫だよ」

「すぐ安全な場所に運んで貰うから、もう少しジッとしててね」

二人に微笑み掛けながら、なのはとフェイトが背を向ける。いつか、真実を語ることにだろう。交わらないはずの線が交わってしまったから。

――でも、今はまだその時ではない。

「なのはちゃん…、フェイトちゃん…、ナツキ君…」

「ねぇ、ちょっと…」

問い掛けようとする二人が、魔法陣の輝きに包まれ姿を消す。どうにかエイミィが上手くやってくれたようだ。

「見られちゃった、ね…」

「うん…」

やはりショックなのだろう、二人が顔を歪める。他人と違うということは、どうしても自分の中に重くのしかかる。なのはもフェイトも、俺やユキも、かつてそうだったように。

「闇の書の中にははやてがいる。無意識に友人を取り込んでも無理はないが…、っ！！」

「ナツキ君!?」

「お兄ちゃん!?」

ふらつく俺を、駆け寄って来た二人が支える。六発分費やしてのブレイカーだからな…、消耗も段違いだ…。

「ふらふらだよ!?アリサやすずか達と避難した方が…!!」

「まだやれる…、平気だ…」

心配のあまり泣きそうになっているフェイトを抱き寄せ、優しく頭を撫でてやる。やや不満そうな表情をしながらも、フェイトは小さく頷いた。

『ユーノ、アルフ、二人の方を守ってやってくれ』

アクセルを支えにして立ち上がり、念話の回線を開く。いくら転送で逃がしたとはいえ、また巻き込まれては敵わない。

『でも、フェイト達が…』

『…行こう、アルフ』

『でもさぁっ…!!』

心配げにぐずるアルフを遮り、ユーノが決断した。当然フェイトの使い魔たるアルフは反論しようとするが、

『気掛かりがあると、三人共全力で戦えないから』

『う…』

さすがユーノ、俺達のことを良く見ている。辛い選択だろうけど、頼むぞ、二人共…！！

『ナツキ君、なのはちゃん、フェイトちゃん、クロノ君から連絡！！闇の書の主に…、はやてちゃんに、投降と停止を呼び掛けて、って！！』

「「「……」」」

突如入ったエイミィからの通信に、俺達は顔を見合わせる。話して止まってくれるに越したことはない。やってみる価値はある…！！

『『はい…！！』』

（止まってくれよ…！！）

俺は心中で祈りながら、闇の書の意思の念話回線を探り始めた。

『はやてちゃん！！それに闇の書さん！！止まって下さい！！ヴィータちゃん達を傷付けたの、私達じゃないんです！！』

街を見下ろしていた私の脳裏に、あの白い少女の声が響く。どうやら、私の説得に掛かったようだ。

『シグナム達と…、私達は…！！』

「我が主は…、この世界が…、自分の愛する者達を奪った世界が…、悪い夢であって欲しいと願った…」

だが、道具（私）にとって持ち主（主人）の言葉は絶対だ。ならば私に、選択の余地はない。

「我はただ…、それを叶えるのみ…」

――それが、闇（私）の書の存在意義（在り方）。

「主には…、穏やかな夢の内で…、永久の眠りを…」

『『『っ！？』』』

永久の眠り、という言葉に反応したのか、三人が息を呑む。

「そして…、愛する騎士達を奪った者には…」

だが、気にする必要はない。主の大切な者達を葬り去った者へ訪れる末路は、

「永久の闇を」

――永遠の闇だけなのだから。

「闇の書さんっ！！」

足元に魔法陣を展開した闇の書さんに呼び掛けるけど、

「お前も…、その名で、私を呼ぶのだな…」

「っ！！」

彼女は悲しげに、それだけを呟いた。悪意ある改変を受けてしまった今の彼女を、本当の名前で呼んでくれる人は、今ここにはいない。

「「っ！！」」

と、周囲の地面に亀裂が走り、いつか見たワームのような生物のワイヤーのような触手が現れた。

「あっ、ああっ！！」

「フェイトちゃん！！うあっ！！」

私達を取り囲むように現れたそれにフェイトちゃんが捕まり、気を取られた私も体を縛り上げられてしまう。マズい、動けない…！！

「くっ、そ…！！があっ！！」

《Ｍａｓｔｅｒ！！（主人！！）》

ナツキ君が余力を振り絞ってアクセルを振るうけど、切られた触手は即座に再生し、逆にナツキ君を弾き飛ばした。

「ナツキ君！！」

「お兄ちゃん！！」

ビルに突っ込み瓦礫に埋もれていくナツキ君を見て、私達は悲鳴を上げる。今の状態であんなのに押し潰されたらナツキ君が…！！

「それでもいい…」

「くっ…！！」

「うっ…！！」

どうにか逃れようともがくけど、闇の書さんの声と同時に締め上げる力が強まる。一体、どうすれば…！！

「私は…、主の願いを叶えるだけだ…」

こんなところで…、終わっちゃうの…？

「願いを…、叶えるだけ…、だと？」

だけど、彼は諦めていなかった。瓦礫を漆黒の衝撃波で吹き飛ばし、よろめきながらもこちら目掛けて歩き出す。

「そんな願いを叶えて…、それでっ！！はやては本当に喜ぶのかよっ！？」

体中から血を流して、荒い息を吐いて。ボロボロのはずなのに、立つのも辛いはずなのに、それでもナツキ君は叫ぶ。だって、目の前にいるのは半年前のナツキ君だから。形や方向性こそ違えど、復讐に囚われて全てを捨てた、ナナシ君と同じだから。

「心を閉ざして…、何も考えずに主の願いを叶える為の道具でいて…、お前はっ！！それでいいのかよっ！？」

だからナツキ君は、絶対に諦めない。ここで諦めたら、彼の全てだけでなく私の言葉さえ、意味のないただの戯言になってしまうから。

「我は魔導書…。ただの道具だ…」

「だけどっ！！言葉を使えるでしょうっ！？心があるでしょうっ！？」

尚も否定する闇の書さんを遮り、私も声を張り上げる。ナツキ君が諦めていないなら、そのナツキ君を助けた私が諦める訳にはいかない。

「そうでなきゃおかしいよ…！！ホントに心がないんなら…、泣いたりなんかっ、しないよぉっ！！」

自分自身も泣きそうになりながら、涙を流す闇の書さんに必死に呼び掛ける。本当に心がないんなら、はやてちゃんの為に頑張ったり、はやてちゃんを想って泣いたりなんかしない。闇の書さんにだって、きっと心はある。

「この涙は…、主の涙…。私は道具だ…。悲しみなど…、ない」

「…バリアジャケット、パージ」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ》

闇の書さんのその言葉に、今まで沈黙を貫いていたフェイトちゃんが口を開いた。カートリッジをロードすると同時、雷の奔流で触手を消し飛ばす。

「悲しみなどない…？そんな言葉を…、そんな、悲しい顔で言って…、誰が信じるもんかっ…！！」

「あなたにも心があるんだよ！！悲しいって言っていいんだよ！？あなたのマスターは…、はやてちゃんは…、きっとそれに答えてくれる、優しい子だよ！？」

ソニックフォームに姿を変えたフェイトちゃんと一緒に、私は必死に呼び掛ける。きっとまだ間に合うから、だからお願い、手を伸ばして…！！

「だから、はやてを解放して…！！武装を解いて…！！お願いっ…！！」

「……」

フェイトちゃんの悲痛な声に、返されたのは無言だけだった。

――瞬間、地響きと共に街中に火柱が噴き上がる。

「「っ！？」」

「早いな…。もう崩壊が始まったか…。私もじき、意識をなくす…。そうなれば、すぐに暴走が始まる…」

暴走って…、まさか！？

「意識のある内に…、主の望みを…、叶えたい…」

《Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ》

二人の声がシンクロした瞬間、私達を赤いクナイのような弾丸が取り囲む。

「「っ！？」」

「闇に…、沈め…」

防御も回避も間に合わず、諦めと共に目を閉じた瞬間浮遊感。フェイトちゃんが私を抱き抱え、あの攻撃を避けきったようだ。音速（ソニック）の名は伊達ではない。

「お兄ちゃ…、っ！！」

下に視線を落とした瞬間、フェイトちゃんが絶句する。ナツキ君は攻撃をかわさず、体中にクナイを突き刺していた。…いや、かわすだけの力も残っていないのかもしれない。

「この…、我が儘なクソガキが…！！」

それでも瞳に宿した意志は揺るぎなく、上空の闇の書さんを見据える。

「現実は甘くない…！！我が儘を言って駄々をこねたって、何も変わらないんだよ…！！」

魔法陣を展開し、刃と足元に魔力を展開する。カートリッジの装填

すら出来ない程に、彼の体は悲鳴を上げていた。

「現実を見ろよ…！！前に進めよ…！！いい加減…！！」

ダンッ！！と異常な爆音を響かせ、ナツキ君が一瞬で闇の書さんの前に移動する。大上段に振りかぶったアクセルを、

「目ぇ覚ませえええええっ！！」

絶叫と共に全力で振り下ろす！！

「お前も…、我が内で…、眠るといい…」

「なっ…！？」

でも、その一撃は障壁に阻まれ届くことはなく、ナツキ君の体を銀色の光が包み始める。

「まさか…！？」

「そんな…！？」

マテリアルの三人が吸収された時と同じ現象に、私達はフリーズする。そんな、これって…！！

「なのは！！フェイト！！逃げろっ！！」

私達への絶叫を最後に残して、

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ（吸収）》

――ナツキ君は、闇の書に吸収された。

「ナ…、ツキ…、君…」

隣のなのはが呆然と、信じられないようにお兄ちゃんの名前を呟く。だけど私は、それどころじゃなかった。

「返せ…」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ》

バルディッシュを構えると同時、手首と足首に生えた羽が輝きを増す。いつでも最高速度を出せるように、その身に魔力を集束させていく。

「フェイトちゃん…？」

私を見たなのはが、表情を強張らせた。鏡を見なくてもわかる。きっと今の私は、相当ひどい顔をしているのだろう。

「お兄ちゃんを…！！」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

お兄ちゃん。私を絶望の淵から救い上げてくれたお兄ちゃん。私の頭を優しく撫でてくれたお兄ちゃん。私の大好きなお兄ちゃん。

――私の、全て。

そのお兄ちゃんさえもなくしたら私は…！！私はっ…！！

「返せえええええっ！！」

絶叫と共に翔け上がり、闇の書目掛けて加速する。今は他に何もいらない。ただ、一撃を届かせられれば…！！

「ならばお前も…、我が内で眠るといい…」

「はあああああああっ！！」

闇の書を広げた彼女に向けて、全力でバルディッシュを振り下ろす！！

「っ…！！あっ…」

障壁に防がれ顔を歪ませた瞬間、私の体が金色の光に包まれる。これって…！！

「兄妹仲良く…、穏やかな夢を見るといい…」

「あ…、ああ…」

私はバカだ。お兄ちゃんを吸収されて動揺していたとはいえ、ついさっき同じ方法でお兄ちゃんが吸収されたことを忘れるなんて…！！

「フェイトちゃんっ！！」

なのはの絶叫を聞きながら、己の迂闊さと無力を呪いながら、お兄ちゃんの顔を脳裏に描きながら、

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ（吸収）》

――私は、闇の書に吸収された。

「全ては…、安らかな…、眠りの内に…」

重々しい音を響かせながら、闇の書がそのページを閉じる。彼女が何かを言っているけど、私の耳には入らない。

（また…、私は…）

私には二人を守れるだけの力があった。なのに守れなかった。黒龍と戦った時と同じ。私は全然成長していない。

「……ねぇ」

私は静かに呼び掛ける。私の中に、レイジングハートの中に、眠っている一人の少女に。

「見えた？この光景が。聞こえた？二人の叫びが。届いた？ナツキ君の想いが」

私の中に彼女がいることは、初めて目覚めた時からわかってた。ナツキ君は心配させまいと黙っていてくれたみたいけど、自分のことくらいすぐにわかる。

「力を貸して…。後先なんて考えなくていい…。ただ私は…」

だから私はあの時ＤＲＭを迷わず発動した。例え私自身の力じゃなくても、二人を守れるならそれでいいと思ったから。

――――でも、それじゃダメなんだ。

「目の前の闇（悲しみ）の書を、打ち破りたい」

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）》

レイジングハートがそれを起動すると同時、背中に巨大な桜色の翼が広がる。それをトリガーにしたかのように、彼女の意識がゆっくりと鎌首をもたげる。

「いいわ…。力を貸してあげる…」

私の口から呟かれる、私のものとは違う声。無邪気さと狂気を孕んだ、彼にとっての始まりとなった人の声。

「お兄ちゃんを取り戻す為…、目の前の大馬鹿を倒す為…、あたしが力を貸してあげる」

右翼を漆黒に染め上げながら。髪を白銀に染め上げながら。彼女は静かに呟き続ける。

――――だけど、左翼と瞳だけは染まらずに、桜色と紫のままだった。

「行こう、ユキちゃん」

「行きましょう、なのは」

互いを認めるかのように名を呼び合い、上空を見据える。今だけは、対等な仲間として、共に戦わなければならない。

「全力全開…！！」

「全てを懸けて…！！」

私の想いだけじゃ届かない。彼女の力だけじゃ足りない。だから、二人の力を合わせて。

「「あなた（あんた）を、倒すっ！！」」

――――悲しみを、終わらせる。

第十五話「融合」（後書き）

はい、今回はここまでです。
前書きと言い中身と言い、今回から中二が加速し始めます。
それにしてもフェイト…、吸収されちゃったなぁ…ｏｒｚ
もう一人？知らんよそんなん（ぇｗ

そんな訳でなのはとユキ、二人の力が合わさります。
闇の書の意志に、果たして二人は勝てるのか。吸収された二人はどうなるのか。そして、はやては。

次回、五人がそれぞれ動き始めます。

第十六話「幻想」（前書き）

それはきっと、心を繋いだ確かな絆。
強く確かなはずの主従の絆は、だけど今は二人を縛る悲しい鎖。
遠い過去から、近い過去から続いている痛みに覆われた冷たい現実。
この手の魔法は、悲しみを撃ちぬく為の力。
だからもう、泣かないで。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

第十六話「幻想」

「…ユキちゃん、状況は？」

眼前の闇の書の意思を見据えながら、なのはがあたしに問い掛けてくる。ついさっきまで自分を殺そうとしていた相手だってのに、よくもまぁ信用出来るわね…。

「…二人共生命反応（バイタル）は消えてない。闇の書の内部空間に閉じ込められてるみたいね。やりようはあるわ」

「そっか」

すぐに魔力を巡らせ解析、状況をなのはに報告する。空間ならお兄ちゃんの力があれば一番速いんだけど…。

「我が主もあの兄妹も…、覚めることない眠りの内に、終わりなき夢を見る…。生と死の…、狭間の夢…。それは…、永遠だ…」

覚めない夢は現実と変わらない。何故なら夢だと理解出来ないのだから。温かな夢の中でまどろみ続ける。確かにそれはとても魅力的で、抗い難い誘惑がある。だけど、

「…永遠なんて、ないよ」

なのはは彼女の言葉を、バッサリと切り捨てる。

「みんな変わってく…。フェイトちゃんが…、プレシアさんのことを乗り越えられたように…。ナツキ君が…、復讐と過去を乗り越え

られたように…」

永遠とは不変。即ち過去も未来もないただのモノ。この世界に生きている以上、不変なものなんてない。だって、お兄ちゃんはあたしのことを…。

「変わらないものなんてない。だから、私達は前を向いて、変わって行かなきゃいけないんだ…。あなたも…、私達も…！！」

レイジングハートを構えたなのはは静かに、だけど力強い声でそう告げる。変わらなきゃ人は先に進めないと、彼女は知っているから。

――――でも、あたしは、変われない。

「ん…、う…」

柔らかな日差しを浴びて、私は目を覚ました。体には微かな重み。どうやら布団が掛けられていたようだ。

――――誰に？

「っ！！」

直前までの記憶が蘇り、思わず身を起こす。そうだ…、お兄ちゃんが吸収されて我を失って、突っ込んで行った挙句吸収されたんだった…！！

「え…」

周囲を警戒すべく辺りを見回した私は、思わず言葉を失った。何故

ならそこに広がっていた光景は、
――――かつての、私の部屋。
そこは時の庭園で暮らしていた頃に私が使っていた、やたらと広い寝室だった。あの時と同じままの光景が広がっていることに、私の脳はフリーズしてしまう。

「……っ！！」

ふと左手に温かな感触を覚え、視線を移した私は絶句する。ベットの中にはもう二人、正確には一人と一匹が寝ていたのだ。

「ふにゃ…、お肉…」

幸せそうな表情で、寝言を呟いているアルフ。そこはまだいい。そこまではまだ許容範囲だった。

「すぅ…、すぅ…」

でも、その隣に寝ている少女の姿が、私を激しく動揺させる。ここにいるはずのない人物、虚数空間に落ちて行ったはずの少女。彼女の名は…、

コンコン。

「フェイト、アリシア、アルフ、朝ですよー」

「っ！？」

ノックと共に響いた声に、私は更に混乱する。忘れるはずがない。かつて私に魔法を教えてくれた、あの人の使い魔の声。その言葉の

中に、隣で寝ている彼女の名が含まれていることに、私の頭はもうオーバーヒート寸前だ。

「ん…。おはよ、フェイト」

「……」

起き上がり挨拶をしてくる少女を、私は思わずまじまじと見詰めてしまう。

――アリシア・テスタロッサ。

数年前に亡くなった、私のオリジナル。私が生まれるきっかけになった、私と全く同じ姿をした少女。

「みんな、ちゃんと起きてますか？」

「はーい」

「んー、眠いー」

室内に入って来た女性の声に、二人が欠伸混じりに答える。だけど、私はその姿を呆然と眺めることしか出来ない。

「二人共、また夜更かししてたんでしょう？」

「ちょっとだけだよ？」

「ねー」

その女性の溜め息混じりの声に、アリシアとアルフは顔を見合わせて口を合わせる。私と話している時より楽しそうなアルフの声に、

胸の奥がキリキリと痛む。

「早寝早起きのフェイトを見習って欲しいですね。アリシアはお姉さんなんですから」

「むぅ…」

カーテンを開けてこちらを向く彼女を見て、ぐるぐると回っていた訳のわからない思考が少しだけ静まる。意を決して、私は口を開いてみた。

「あ、あの…、リニス…？」

「はい、なんですか？フェイト」

聞かれた彼女、リニスは首を傾げながら至って自然に聞き返してくる。まるで、驚いている私の方がおかしいと言わんばかりに。

「…アリシア？」

「ん？」

続けて隣の少女へと、恐る恐る確認するように尋ねる。アリシアはニコニコ笑いながら、優しく聞き返して来た。

「…前言を撤回します。今朝はフェイトも寝ぼけ屋さんのようです」

「あはは、みたいだね」

もはや脳がパンク状態で放心してしまった私を見て、リニスとアリ

シアが笑っている。だけど、私の意識はそれを理解するだけの余力も残っていない。

「さ、着替えて。朝ご飯です。プレシアはもう食堂ですよ」

「っ！！」

リニスの言葉に、我に返った私は絶句する。プレシアってまさか…？いや、そんな…。

「「はーい」」

二人の呑気な答えを聞きながら、

「……母さん？」

私は、その人の名前を呟いた。

「ディバイン、バスター！！」

私はユキちゃんの指示に従い、闇の書さん目掛けて砲撃を放つ。理(DRM)を狂わすモノによってかき集められた魔力が集束し、極太のレーザーとなって突っ走る！！

「盾」

《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

が、闇の書さんの展開した障壁によって、桜色の奔流は防がれた。けど、それを見たユキちゃんがニヤリと、ナツキ君に似た不敵な笑みを浮かべる。

「ブレイク！！」

ユキちゃんが右手を振るった瞬間、桜色の奔流が逆流した。そのまま漆黒へと変わった魔力の塊は、数万の弾丸に別れ闇の書さんを取り囲む。

「「シュート！！」」

二人の声がシンクロした瞬間、漆黒の弾丸を中心に桜色の環状魔法陣が展開、加速の効果が付加されたそれらが、縦横無尽複雑な軌道で、闇の書さんに襲い掛かる！！

《Ｓｌｅｉｐｎｉｒ》

だけど、背中の翼が膨れ上がった瞬間、闇の書さんが消えた。対象を見失った誘導弾が、ふらふらと所在なさ気に宙に停滞する。

「速っ…！！」

「言う前に動く！！」

呆然と呟く私をユキちゃんが叱咤し、桜と漆黒という異形の翼を折り畳む。

《Ｓｃｈｗａｒｚｅ　Ｗｉｒｋｕｎｇ》

瞬間、私の前に現れた闇の書さんが、黒いエネルギーを纏った右拳で殴り掛かって来た！！

「あたしの最高傑作を…、ナメるんじゃないわよっ！！」

けど、ユキちゃんが翼を広げると同時、相手の拳を弾き返した。ＤＲＭの産物である背に生えた巨大な翼は、大気中からかき集められた膨大な魔力が固まったものだ。実際に羽ばたくことも出来るし、翼を構成する魔力を使用して魔法を使うことも出来るスグレモノ。密度が高いから防御に使えば堅固な盾になるし、訓練すれば羽を攻撃に使うことも可能らしい。

「怯まず反撃！！」

「う、うん！！」

ユキちゃんに答えながら、拳を弾かれ隙が出来た闇の書さんにレイジングハートを向ける。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

「シュート！！」

至近距離でなおかつ相手は隙だらけ。これなら…！！

「プラズマスマッシャー」

「なっ！？」

でも闇の書さんもただでは落ちてくれなかった。魔法陣から溢れ出

した雷の奔流が、ディバインバスターを相殺する。

「掛かった！！」

だけどユキちゃんはそれを読んでいた。一瞬動きの止まった闇の書さんに、バインドを掛け拘束する。

《Ｂｒｅａｋｕｐ》

しかし闇の書の声と輝きと共に、漆黒のバインドが砕け散る。でも、

「それも想定内！！」

それすらもユキちゃんにとっては次の手の為の布石に過ぎなかった。いつの間に生み出していたのか、空を埋め尽くす程大量の弾丸が鈍く輝き、闇の書さん目掛けて疾走する！！

《Ｓｌｅｉｐｎｉｒ》

とても防御出来るような代物ではない為、闇の書さんは翼を広げ羽ばたいた。宙を舞いながら弾丸をかわして行くけれど、

「コントロール…！！」

私も黙って見ている訳にはいかない。目を閉じ意識を集中させ、弾丸をコントロールしようとする。けど、

「っ…、あっ…」

あまりの情報量に頭が悲鳴を上げ、脳が自らを守るべく制御を無理矢理弾いた。こんなモノを表情一つ変えず全て操るユキちゃんの才能は、まさに異常の一言に尽きる。

「細かいことはあたしがやるから、なのはは撃ち抜くことだけ考えなさい！！それがあんたの役割よ！！」

「う、うんっ！！」

ユキちゃんの言葉に頷きながら、私は魔力をかき集める。愛杖の先端に集束した魔力が、その圧倒的な力で周囲の空間を歪ませる。

「今っ！！」

「バスタアアアアアッ！！」

ユキちゃんが弾丸をコントロールし闇の書さんを目的の場所へ誘導し終えた瞬間、レイジングハートが火を噴いた。スターライトブレイカーにこそ劣るものの、強力なエネルギーを秘めた砲撃が宙を翔け闇の書さんにぶち当たった！！

「やった！？」

「んな訳ないでしょ」

仕留めたと思い歓喜の声を上げる私を遮り、ユキちゃんはレイジングハートを構え警戒を解かないまま。そして、その判断が間違っていなかったことを、私はすぐに思い知らされた。

「そ…、んな…」

煙が晴れた先にいた闇の書さんは、無傷。あの程度の攻撃大したことないと言わんばかりに、無感情な瞳でこちらを見ている。

「なのは、カートリッジは残りいくつ？」

そんな光景を見ても諦めず、ユキちゃんは冷静に尋ねてくる。その頼もしさは彼の兄であるナツキ君を想像させ、私に不思議な安堵感をもたらす。

《Ｒｅｌｏａｄ》

「マガジン残り三本、今装填したのを含めてカートリッジは二十四発。スターライトブレイカー、撃てるチャンスあるかな…？」

《Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｍｅｔｈｏｄ（手段はあります）》

答えながら不安を漏らす私に、レイジングハートが短く告げる。

「え？」

《Ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｅｘｅｌｉｏｎ　Ｍｏｄｅ（エクセリオンモードを命じて下さい）》

エクセリオンモードって…、まさか…！？

「ダメだよ！！あれは本体を補強するまで、使っちゃダメだって…！！ＤＲＭも起動している今、私がコントロールに失敗したら、レイジングハート壊れちゃうんだよ！？」

それも確かに選択肢の一つだ。巨大な魔力放出に特化したエクセリオンモードなら、闇の書さんが相手でも互角以上に渡り合える。

――だが、強度が足りない。

いかにユキちゃんが作ったデバイスだとしても、カートリッジシステムとＤＲＭから供給される異常な量の魔力には耐え切れない。そのあまりにも膨大な魔力を私がコントロールしきれなかったら、レイジングハートは砕け散ってしまう。

「そうよレイジングハート、まだ早いわ」

レイジングハートを窘めながら、悲痛な叫びを上げる私にユキちゃんは笑う。

「チャンスがないなら…、作ればいいだけよ」

不敵に頼もしく告げるユキちゃんに微笑み頷きながら、私はアースラへと通信を飛ばす。

『リンディさん、エイミィさん、戦闘位置を海の付近に移しました。市街地の火災をお願いします！！』

『大丈夫、今災害担当の局員が向かっているわ』

私の声にリンディさんはすぐに答えてくれた。よかった、それなら大丈夫だ…。

『それから闇の書さんは、駄々っ子ですがなんとか話は通じそうです。もう少しやらせて下さい！！』

「行くよ、ユキちゃん！！レイジングハート！！」

それだけを告げ念話を切りながら、私はパートナー達に声を掛ける。

「もちろん！！」

《Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（はい、マスター）》

二人の声を勇気に変えて、私は異形の翼を羽ばたかせた。

「お母様、おはよー」

「おはよープレシア」

食堂に置かれたテーブルと椅子、その内の一つに母さんは座っていた。無邪気に駆け寄ったアリシアとアルフが、明るく挨拶をする。

「アリシア、アルフ、おはよう」

対し母さんは柔らかな笑みを浮かべ、二人に挨拶を返した。私の記憶にはいない、アリシアの記憶の中だけに存在した優しい母さんが目の前にいることに、私は例えようのない程の衝撃を受ける。

「プレシア、困りましたよ。今日は嵐か雪になるかもしれません」

リニスの声に振り返りながら、母さんが首を傾げる。そこにジュエルシードを追い求めていた母さんの面影はなく、どこにでもいる普通の母親だった。

「ほら、フェイト」

「……」

リニスに促され、私は恐る恐る柱の陰から出る。私の隣に誰もいないことが、いつも私を庇うように前に立っていた背中がないことがひどく心細い。今程お兄ちゃんに傍にいて欲しいと思ったのは、半年前のあの時くらいだと断言出来る。

「フェイト、どうしたの？」

「どうも、何か怖い夢でも見たらしくて。今が夢か幻かと思ってるみたいですよ」

尋ねた母さんの言葉に答えながら、リニスが心配そうに私を見遣る。その仕草は間違いなくリニスのそれで、だからこそ母さんの気遣いという違和感が浮き彫りになる。冷たくあしらう母さんと、そんな母さんに食ってかかるリニス。私の記憶にある二人のイメージはそんなものしかないから。

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

「ありえる」

空気を和らげようと思ったのか、アリシアが冗談めかして私に笑い掛け、アルフもこくこくと頷いた。

「フェイト、いらっしゃい」

「……」

穏やかな笑顔で手招きされ吸い寄せられるかのように、私はふらふらと母さんに近付いていく。だけど、まだ頭の中は混乱しっぱなしで、母さんの顔をマトモに見れない。

「……っ！？」

急に両手で頬に触れられ、身を竦めた私を母さんが優しく抱きしめた。

「怖い夢を見たのね？でももう大丈夫よ。母さんもリニスもアリシアも、みんなあなたの傍にいるわ」

私を抱きしめ頭を撫でながら、母さんが優しく言葉を紡ぐ。その優しい温もりはお兄ちゃんと同じもので、そのことが更に私を動揺させる。

「プレシアー、あたしもー」

「そう、アルフもね」

（違う…）

不満げに付け足すアルフに微笑む母さんを見て、私の中で渦巻いていた疑念が膨らみ始める。考えないようにしていたその結論が、私の頭を侵食し始める。

「まぁ、朝食を食べ終わる頃には、悪い夢も覚めるでしょう」

「さぁ、席に着いていただきましょう」

「はーい」

そんな私に笑い掛け、みんなが席に着く。と言ってもアルフは子犬の姿だし、リニスも給仕として駆け回っているから、実際に座っているのは三人だけなのだが。

「……」

ふと向けた視界の先、私に笑い掛ける母さんを見て、私はその結論を受け入れた。

（これは…、夢だ…）

母さんは、私にこんな風に笑い掛けてくれたことは、一度もなかった。アリシアも、リニスも、今はもういない。

（でも、これは…）

だけど目の前には、私が求めてやまなかった光景が広がっている。夢だと気付かず過ごしていれば、最高の環境が広がっている。

――なら、受け入れてしまっても、いいのではないか。

「ねぇ、今日はみんなで街に出ましょうか」

「ホント!?」

「いいですね」

そんな私の迷いをよそに、安らかな夢は時を進めて行く。どこにで

もある平穏な家庭、そんな風に思わせる会話が弾んでいるこの空間で、私だけがそれを心から受け入れられていない。

「フェイトには、新しい靴を買ってあげないとね」

「あー、フェイトばっかりずるーい」

私にプレゼントという現実ではありえない出来事に、アリシアが頬を膨らませる。その姿は愛らしいの一言で、全く同じ顔なのに感情を出せない私なんかいらないんじゃないのかとさえ思ってしまう。

「魔導試験満点のご褒美ですよ。アリシアも頑張らないと」

「そーだぞー」

「ううー…」

逆に不真面目さを二人に指摘され、しょんぼりとするアリシア。万華鏡のように様々な表情を見せる彼女と、正反対の自分。どちらがいいかなんて、聞くまでもなくわかってる。

「フェイトー、今度の試験までに、補習をお願い」

「う、うん…」

アリシアの言葉に頷きながら、ふととある日の出来事を思い出す。

『うわ、ナツキ君すごーい。全部満点だなんて…』

ベットに寄り掛かって座る少女が、床に広げられた紙を見て感嘆の

溜め息をつく。言われた対象である少年は椅子に座り、何やら手元に書き込んでいた。

『ま、理数は元々得意だし、ユキの研究を手伝って文献を漁ってたせいか色々と知識が付いちまってな。漢字も一応書けるぞ』

『あの、お兄ちゃん、よかったら漢字教えてくれないかな？私、ちょっと苦手で…』

なんでもないことのようにサラリと答える少年に、ベットに腰掛けていた少女が声を掛ける。最近こちらに来たばかりの彼女は、文系が壊滅状態なのだ。

『ああ…、フェイトにとっちゃ漢字は外国語みたいなもんだもんな。いいよ、俺に出来る範囲ならいくらでも』

『あ、私も。文系はちょっと苦手…』

そのことに得心がいった少年が頷く中、もう一人の少女も手を挙げる。彼女程ではないにしろ、この少女の文系の成績も下から数えた方が早いレベルだ。

『なのはもかよ。文系で必要なのは思考よりも記憶だからなぁ…、人によってまちまちだぞ？』

『でもでも、コツとかあるでしょ？ここさえ押さえれば大丈夫！！みたいなコツ』

溜め息混じりに呟く少年に、少女が期待の眼差しを向ける。その瞳には信頼だけが込められており、曇りなど一点もなかった。

『文系は問題の中に答えが書いてあるからな。それを見抜ければ普通に八割は取れるよ。漢字は精々一～二割だし』

『そうなんだ…。お兄ちゃんすごいなぁ…』

文系の得意な者の大半が言うであろうセリフを吐く少年に、少女は尊敬の眼差しを向ける。彼女にとって少年は、目標であり憧れであり、兄であり片思いの相手なのだから、無理はないかもしれないが。

『いやいや、普通だって普通。ほら、始めようぜ勉強会』

手元のそれ、文系の問題集からよさ気なものを抜粋していた少年が立ち上がり、少女達に手渡す。

『『うんっ！！』』

少女達は笑顔で頷き、少年と共に丸テーブルを囲む。

――そんな、過去の一シーン。

「っ…、うぅ…」

今ここにあるのは、私がずっと、ずっと欲しかった時間だ。何度も、何度も。夢にまで見た時間だ。

――なのに、足りない。

私にとって大切な人が、決定的に足りない。穏やかな過去（夢）には二人がいなくて、先の見えない未来（現実）には母さん達がいない。

（どちらにも大切な人がいる私は…、どっちを選べばいいの…？）

心中の問いに答えはなく。私は「一人」の心細さを痛感した。

（眠い…）

前後左右、上下の感覚すらない闇のように暗い空間。その中をたゆたう私の心の中にあるのは、ただその一言に尽きる。全身をけだるくも心地好い睡魔が包み、夢と現の狭間の中、私はただ眠る。

「そのままお休みを、我が主。あなたの望みは、全て私が叶えます」

（誰…？）

どこかで聞いたことがあるような、穏やかで心安らぐ声。その声はただ私に、身を委ねろと告げてくる。

「目を閉じて、心静かに夢を見て下さい」

（私は…、何を望んでたんやっけ…）

わからない。何もわからない。考えることがひどく億劫だ。心地好い闇の感触がそれを助長する。

「夢を見ること。悲しい現実は、全て夢となる。安らかな眠りを」

（そう…、なんか…？）

この闇に浸り続けることが、私の望み？本当に、それでいいのか？

（私の…、本当の望みは…）

「ここは…」

ゆっくりと目を開けた俺の視界に広がるのは、一つの村。約一年前、とある大魔導師によって滅ぼされたはずの俺の故郷。

「…記憶を元に作られた世界、ってところか」

大方闇の書の意思の仕業だろう。我が内で眠るといいとか言ってたし。確かによく出来ている。が、

「生憎俺は惰眠を貪る程睡眠欲が強くないんでな」

冗談めかしながらニヤリと笑い、手元の銀刀を見下ろす。外にはなのはとフェイトが残っているのだ、黙ってこのまま寝ている訳にはいかない。

「とは言っても…、どうすっかな…」

脱出する方法がてんで思い付かない。空間制御で無理矢理ぶち抜くことも不可能ではないが、中にははやても取り込まれている。もし彼女に何かあっては困る為、強行手段はなるべく使いたくない。

「適当に歩き回って調べるしかないかなぁ…」

そもそもこの空間に果てはあるのか。あるとしたらどこまでなのか。わからないことが多過ぎる。まずは状況の確認をしなければ。

「……当てがない」

が、ユキの介護やらに追われていた為自分の時間を取らなかったせいか、行く当てが全くない。精々が自宅と診療所、そして、

「あの丘、か…」

家のすぐ近くにある小高い丘。よく二人で星を見に行った、あの丘。

――ユキが、死んだ場所。

「……」

吹っ切れていない訳ではない。だが、心残りがないとも言い切れない。プラスとマイナスの記憶が眠る、そんな微妙な場所。

「…とりあえず、行くか」

なるべくあの場所には行きたくない。だが、二人の為なら俺は向き合うだけの覚悟がある。

「…いつの間にか、俺も変わってたんだな」

迷わずその答えを出せた俺自身に思わず苦笑する。確かに二人のことは大事だが、ここまで彼女達の存在が大きくなっているとは思わなかった。

「…答えを出す、いい機会なのかもしれないな」

ユキとの記憶に。なのはの言葉に。フェイトの想いに。俺も、答え

を出さなければならない。

「行こうか、相棒。答えを出して歩み出す為に」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

アクセルの頼もしい声と共に、俺は駆け出した。あの丘に、何かがある。そんな予感を胸に秘め。

「くっ…！！」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

殴り掛かって来た闇の書の意思の拳を防ぐべく、なのはがレイジングハートに命じシールドを展開する。

《Ｓｃｈｗａｒｚｅ　Ｗｉｒｋｕｎｇ》

激しい火花を散らし続けるシールドを無表情に見据えながら、闇の書の意思がもう一方の拳を振りかぶった。黒い魔力を纏った右手がシールドを粉砕し、あたし達目掛けて襲い掛かる。

「ちぃっ！！」

「きゃあっ！！」

あたしはとっさにレイジングハートの柄で防ぐけど、凄まじい衝撃にあたし達の体は吹き飛ばされ、巨大な水柱を噴き上げながら海中

に落下する。

『ナメんじゃないわよ…。なのは!!ちょっと借りるわよ!!』

『……』

あたしの言葉に対しなのはは無言。うんともすんとも言わない。

『…なのは?』

遅れて彼女が気絶していることに気付いた。どうやら先程の衝撃でやられたらしい。

『あたしの意識がなかったら大惨事じゃない…!!』

溜め息と共になのはから体の制御権を奪い、漆黒の魔法陣を展開する。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

環状魔法陣で加速した漆黒のレーザーが海を割り、闇の書の意思目掛けて襲い掛かる。

『シュート!!』

更に宙に残存する魔力をかき集め、数十発の弾丸を生成、発射。並行してＤＲＭをコントロール。レーザーの弾丸の影に隠れ飛翔し、闇の書の意思の背後を取る。

「せぇっ!!」

そのまま大量の魔力を纏ったレイジングハートを、加速魔法付きの全力で振り下ろす！！

《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

が、闇の書の意思は両手に障壁を展開し、全ての攻撃を受け止める。器用な奴…！！

「ならこれはどう！？」

叩き込んだレイジングハートをくるりと回し、そのまま魔力を集束させる。

「シュート！！」

《Ｓｌｅｉｐｎｉｒ》

間一髪翼を展開した闇の書の意思が、ディバインバスターの斜線上から逃れる。ほぼ一瞬で撃ったのに、即座に防御を捨てた…！！こいつ、頭の回転が速い…！！

「…なるほど」

と、距離を取った闇の書の意思が、納得したように頷いた。

「時々見え隠れしてはいたが、そちらの人格は少し厄介だな」

どうやら、なのはが時折見せる異常なまでの戦闘技術に疑念を抱いていたようだ。今は制御権をあたしが握っている為、さすがに相手

も気付いたのだろう。

「ならどうする！？」

「…知れたこと」

アクセルシューターを展開するあたしに対し闇の書の意思は、

「迷い子たるお前も…、我が内で眠るといい」

――静かに、そう答えた。

「なっ…！？」

瞬間、海中から生えて来たあのワイヤーのような触手に囚われ、身動きが取れなくなる。いつの間に…！？

「悲しみのない夢の中で…、お前も安らかに眠れ」

闇の書の意思の穏やかな、全てを受け入れるかのような声に、

「…っ」

――あたしは一瞬、動きを止めてしまった。

「しまっ…！！」

気付いた時には既に遅く。闇の書の意思はもう目の前で。

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ（吸収）》

闇の書の輝きに呑み込まれたあたしは、意識を失った。

「う…」

全身に走る痛みに目を開けると、全身にワイヤーのような触手が絡み付いていた。離れようともがくけど、異様な脱力感に苛まれる私にそれだけの力はない。

――なんだろう。この、何か大切なモノがごっそりと抜け落ちたような感覚は。

「お前は吸収されなかったのか…。あの子が身を呈して守ったようだな…」

薄れそうになる意識を食い止める私の耳に入った言葉が、私の思考を凍らせた。

吸収。あの子。守る。それらのワードが意味する言葉を、私は無意識に感じ取ってしまった。

――ユキちゃんが、いない。

私の中にいたもう一人の少女が、レイジングハートの中に眠っていたナツキ君の妹さんの気配が、どこにも感じられない。恐らくは二人のように吸収されてしまったのだろう。オレンジと桜に戻った髪と翼が、それを雄弁に物語っている。

《Ｃａｌｌ　ｍｅ．Ｃａｌｌ　ｍｅ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（命じて下さい。命じて下さい、マスター）》

レイジングハートの声に、私は覚悟を決める。傷付くことを恐れて

何もしなかったら、きっと私は後悔する。ナツキ君やフェイトちゃんの時だって、私はそうやって乗り越えて来たんだから。

「お前も、もう眠れ」

「いつかは眠るよ。だけどそれは今じゃない」

私に優しく語り掛けてくる闇の書さんに、私は俯いたまま拒絶の答えを返す。

「今は…、はやてちゃんとフェイトちゃん、ユキちゃんにナツキ君を助ける。それから、あなたも」

私の意志に答え、ＤＲＭが周囲の魔力を吸収し始める。レイジングハートがカートリッジをロードし、準備完了の意を告げる。

――さあ、行こう。全力全開で、悲しみを撃ち抜く為に。

「レイジングハート・エクセリオンモード！！ドライブ！！」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

私達の声がシンクロした瞬間、桜色の暴風が吹き荒れた。凄まじい魔力と衝撃を伴ったそれは体を縛る触手を引きちぎり、闇の書さんを数十ｍ吹き飛ばした。

バスターモードのレイジングハートを囲むように四つの環状魔法陣が現れ、カートリッジから供給された魔力が魔導師の杖を駆け巡る。音叉状だった金色のパーツが横に、カートリッジ部分が下にスライドする。音叉はその身を伸ばしながら集束し、本体である赤い宝石を守るように金色の装甲が纏われる。

――そこにあるのはもはや杖ではなく、槍と呼べるような代物だ

った。

「繰り返される悲しみも、悪い夢も。きっと終わらせられる」

真っ直ぐに闇の書さんを見据える私に対し、彼女は無言で右手を上げる。

《Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ，Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｓｈｉｆｔ》

闇の書の声と同時、彼女の周囲に無数の雷の槍が形成される。半年前にフェイトちゃんが使っていた魔法の、更に発展版だとわかる。

「行くよ、レイジングハート！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

応じるように告げたレイジングハートを構え、背の翼を広げて魔法陣を展開しながら、

――――私は、前を見据えた。

「…変わってないな、ここは」

丘の上から村を見渡しながら、ホッと溜め息をつく。小高い丘の上から一望した俺の故郷は、俺の記憶そのままの姿を保っていた。

「…まぁ、当然と言えば当然か」

最も、俺の記憶を基に作られているのだから、差異などある訳がな

いのだが。

「…結局、無駄足だったかな」

呟きと共に空を見上げると同時、一陣の風が吹き抜けた。風が髪や若葉を揺らす音に、心地よさを感じている俺がいる。

「Ｖｅｒｗｅｉｌｅ　ｄｏｃｈ，Ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｓｏ　ｓｃｈｏｎ」

――そしてその風は、この場にいないはずの少女の声を運んで来た。

「瞬間よ止まれ、汝はいかにも美しい。ゲーテの戯曲「ファウスト」の一節。今のあたしなら、その願いを叶えられる」

振り返った視線の先、丘に一本だけ生えた大木。その幹に寄り掛かって立つ、一人の少女が微笑んだ。

「お前は…、本物か」

「正解。さすがお兄ちゃん」

気軽に答えながらすたすたと歩いて来た彼女、ユキに視線を向ける。ここが夢だからか、はたまた別の理由か。下半身が麻痺していたはずのユキは、問題なく歩けるようだった。

「お兄ちゃんはいっつもそう。人の外見だけじゃなくて、中身を見てくれてる。その上でその人が傍にいて欲しいと思えば、お兄ちゃんはいつでも飛んで来てくれる。優しさの塊みたいなお兄ちゃんだ

から…、無意識にその人の求めることがわかっちゃうんだろうね」

…またこいつは。何故俺の周りの連中は、みんなして俺を持ち上げたがるのか。俺はただ、自分がしたいと思ったことをしているだけなのに。

「だからあの二人…、なのはやフェイトだけじゃなくて、あたしが好きになっても仕方ないよね」

「っ！？」

妹の呟いたあまりにも現実味のない言葉に、俺は脳天を殴られたような衝撃を受ける。ユキが…、俺を…？

「どちらかと言えばあたしのそれは恋慕ではなく依存。だけど、ずっと傍にいて欲しいという意味ではどちらも変わりない」

実の兄への恋という禁忌を犯しながら、彼女は冷静に自分の感情を分析する。まるで自分自身さえも他人のように見れる彼女に、底知れぬ不安が鎌首をもたげてくる。

「ねぇ、お兄ちゃん。現実ってなんなんだろうね？」

ふとユキは以前のように、なんの脈絡もない話を始めた。

「現実はいつだって非情でどうしようもなく理不尽で。誰もが悲しい運命に巻き込まれては消えて行って、残された人達の心に癒えない傷を生み出してしまう」

神などいない。不平等は平等に訪れる。そこに情など存在せず、無

力な人間は抵抗さえ許されない。それが理。世界のルール。誰も破れない、絶対の掟。

「覚めない夢が現実と変わらないって言うんなら…」

俺を見上げて柔らかく笑った彼女は、

「ここでずっと、あたしと暮らそう?」

――悪魔のように、囁いた。

「ここには悲しいことなんて何もない。あたしもお兄ちゃんもいなくならない。だから…、夢を見よう?覚めない幸せな夢を、あたし達二人で」

それはまさに、悪魔の契約。過去に浸り眠り続けるか、理不尽な現実と戦い今を生きるか。以前なら答えを出せなかったであろうその問いに対し、

「断る」

俺は端的に、一言で切り捨てた。

「確かに昔の俺にはユキしかいなかった。両親を失って、ユキも死に掛けて。もう誰もいなくならないで欲しかったから、必死で頑張った。ユキの為なんて言い聞かせてはいたけど、結局は自分の為だったんだよ」

そう、結局俺は俺のことしか考えていなかった。ユキに死なれたら、今度こそ俺は壊れてしまうから。ユキに笑顔を取り戻して欲しかっ

たというのもあるが、だからと言って俺のエゴが消える訳ではない。

「だけど、ユキが死んで、あの世界でなのはやフェイトと出会って。俺は前を向けた。ユキの死を乗り越えて、天城ナツキとしての一歩を踏み出せた」

なのはが俺をぶっ飛ばして、目を覚まさせてくれた。フェイトの悲しげな瞳を見て、俺は前に踏み出そうと思えた。だから俺は今、ここにいる。

「弱いままの俺だったら、迷わずここで眠ることを選んだと思う。だけど…」

確かに過去に縋るだけのナナシだったら、ここでユキと共に過ごすことを選んだだろう。だが、

「もう俺は、天城ナツキなんだ」

――――もう俺は、ナナシじゃない。

「俺には大切な人達がいる。守りたい人達がいる。だから俺は、例え辛く苦しい未来が待っているとしても、俺はあいつらと共に現実を生きる。楽園の守護者と災厄を切り裂く刃の名の下に、二人を守り抜く。それが、俺の答えだ」

まだこの感情がなんなのかはわからない。だけど、俺はそれをなくしたいとは思わない。脳裏に浮かぶ二人の笑顔があれば、俺はきっと何度だって立ち上がれる。

「…そう」

俺の答えを聞き終えたユキが、呟きと共に顔を俯かせる。

「あんまり手荒なことはしたくなかったんだけど…、仕方ないよね」

そのままぶつぶつと呟きながら、面を上げた彼女の顔に浮かぶのは、

「お兄ちゃんが、悪いんだから」

――――狂気の、笑み。

「っ！？」

瞬間、ユキから溢れ出した漆黒の魔力が、暴風のように荒れ狂い始めた。俺に向けて、生きているのが嫌になる程の殺気を向けて、ユキは歪んだ笑みを浮かべる。

「しょうがないから…、お兄ちゃんはあたしのお人形にしてあげる」

漆黒と紫の混じったゴスロリ風のドレスを身に纏い、十字架と翼を歪めて作られたような形状の杖を構えながらユキが笑う。その背には漆黒の巨大な翼が生え、彼女の本気度合いが窺えた。

「S、L、D、来なさい」

「「「御前に」」」

「なっ…！？」

ユキが一声掛けた瞬間、空間が揺らぎ三人の少女が現れる。その姿

は紛れも無く、さっき闇の書に吸収されたあの三人だった。

「まさか、こんな風に再会するとは思いませんでしたよ」

「まぁボク達にとっては、マスターの指示が絶対な訳で」

「うぬが選択の代償だ。恨んでくれるなよ、天城ナツキ」

星光の殲滅者、雷刃の襲撃者、闇統べる王がそれぞれの言葉を口にしながら、自分のデバイスを構え俺を取り囲む。そうか…、守護騎士達は「蒐集」されたが、俺や彼女達は「吸収」された。だから消えることなく、闇の書の内部空間で生き残っていたのだ。

「…そうか」

俺は俯きながら、歯を砕けんばかりに噛み締める。目の前にいるのは、ナナシ。かつての俺の、その行く末。

「お前はまだ…、彷徨ってるんだな…」

他人の目から見たナナシの姿は痛々しく、見る者をひどく悲しませた。なのはやフェイトも、こんな気持ちで俺を見ていたのか…。

「やるぞアクセル…、フルドライブだ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

使用を禁じられていた、滅多な時以外使うなと言われていた切り札、フルドライブ。それを今使わずに、いつ使うというのだろう？ユキに勝つには、天城一族最高の天才に勝つには、そのくらいのリスク

ならいくらでも背負わなくてはならない。

「あはははははっ！！一緒に夢を見ようよお兄ちゃん！！覚めることのない幸せな、最高で永遠の夢を！！」

狂ったように高笑いしながら、壊れた笑みを浮かべるユキ。だが、何故か俺の目には、

――――彼女が泣いているようにしか見えなかった。

「そうだよな…。俺だってなのはやフェイトに会わなきゃ変われなかったんだ…。ずっと独りだったお前には…、残酷過ぎるよな…」

全ては俺の責任だ。ユキを守れなかったのも、ユキが壊れてしまったのも、俺が弱かったからだ。だから…、

「来いよ、天城ユキ。いや…、理操る狂気の魔女」

《Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ》

アクセルの声と同時、白銀が煌めいた。カートリッジをロードした白銀の刀がその刀身を厚く大きく伸ばし、俺自身の身長を越える程の大太刀へと姿を変える。

「全力全開、俺の命の全てを懸けて…」

《Ｄｒｉｖｅ　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

白銀の大太刀を構えながら、過去（ユキ）と向かい合う。悲しみを切り裂くのが俺達の銘、その在り方。だから、過去に囚われた悲しき魔女（妹）を、

「お前を…、倒す…！！」

――俺が、救い出してみせる。

第十六話「幻想」（後書き）

はい、今回はここまでです。
見てわかると思いますがオリジナルが加速し始めるのでご注意くださいw

戦う覚悟を決めたなのは、迷い続けるフェイト。答えを探すはやて、過去に縋るユキ。そして、悲しみを切り裂く為に立ち上がったナツキ。
それぞれの思惑が動き出す中、兄と妹は死闘を演じる。その先にあるのは、過去か未来か。

次回、天城兄妹＋マテ子の壮絶（笑）激闘回です。

第十七話「天城」（前書き）

それはきっと、心を繋いだ確かな絆。
強く確かなはずの兄妹の絆は、だけど今は彼女を縛る悲しい鎖。
遠い過去を夢見る魔女と、最高の未来を描く守護者は、しかし交わり合えぬまま。
この手の刃は、悲しみを切り裂く為の力。大切な人達を、守り抜く為の力。
だからもう、泣かないで。きっと俺が、連れ出してみせるから。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

※水樹奈々さんのＳｉｌｅｎｔ　Ｂｉｂｌｅを聞くのもよいかと。

第十七話「天城」

「パイロシューター！！」

「ドゥームブリンガー！！」

まず動くのはやはり、星光の殲滅者と闇統べる王の二人だった。桜色の誘導弾と純白の鋭利な羽が、複雑な軌道を描き俺目掛けて迫ってくる。

「光翼斬！！」

更にその陰に隠れる形で飛び出した雷刃の襲撃者が、大鎌と化したバルニフィカスを振りかぶり突っ込んで来た。以前と同じ、完璧なコンビネーション。だが、

「蜃気一閃！！」

俺は慌てず白銀の大太刀を振るい、黒色の斬撃を飛ばす。

――それだけで、桜色と純白が消滅した。

「面倒な…！！」

俺と刃を交えた雷刃の襲撃者が、顔を歪めながら力を込める。白と黒という真逆の存在が矛盾して共存する刃には、彼女達と互角かそれ以上の魔力が込められているのだ。あの程度の攻撃、落とせない方がおかしい。が、

「アクセルシューター、インフィニティシフト」

――それは、相手が常識の範囲内のレベルならばの話だ。

「ちっ…！！」

雷刃の襲撃者をバルニフィカスごと蹴り飛ばし、俺はアクセルを腰溜めに構える。茜色に染まる空を覆うのは、夜の闇より深い漆黒の色。天を埋め尽くさんばかりに展開された、無限の弾丸。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｂｕｒｓｔ》

カートリッジをロードすると同時、アクセルを全力で振り抜く。先程よりも巨大な衝撃波が空を翔け、弾丸の半分近くを相殺する。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｌａｎｃｅｒ》

「アクセルッ！！」

十六の黒き槍を生み出すと同時、重力制御で加速した俺は弾丸の豪雨をかわしながら、雷刃の襲撃者目掛けて突っ走る。

「電磁抜刀…！！」

《Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｚａｍｂｅｒ》

磁力制御で加速した銀刀が雷刃の襲撃者の胴体に迫るが、彼女は笑みと共に視界から消える。ブリッツラッシュ。フェイトも使っていた瞬間的な加速魔法。大方前回同様、背後から襲い掛かるつもりなのだろう。ならば、

「はあっ！！」

「んなっ！？」

振り抜く勢いのまま体を回し、背後の雷刃の襲撃者目掛けてアクセルを振るう。驚きながらも彼女はとっさにガード。バルニフィカスと激突し火花と金属音だけを残し、かなりの距離を吹き飛ばされる。

「ブラストファイアー！！」

「アロンダイト！！」

追撃に移る思考をするか否かといったタイミングで、再び後衛の二人が介入。桜色と純白の砲撃が雷刃の襲撃者を守るように撃たれ、俺は方向を変え駆け出した。

「ほう…」

狙いははやて似の少女、闇統べる王。彼女の砲撃魔法の恐ろしさは、過去の経験からわかっている。その分接近戦が手薄な為、一度近付けば落とせる自信はある。

「行かせると…」

「思いますか？」

が、そうやすやすと戦力の一角を落とせる訳もなく。漆黒と桜色の混合弾幕を前に、俺は後退しながら背後に刃を振るった。

「この…！！」

不意打ちを防御された雷刃の襲撃者が毒づきながらも、アクセルを弾き後退する。正しい判断だが、俺もそのくらいは予測出来る。

「シフト！！」

「わっ！？」

先程雷刃がかわしたはずの黒き槍が反転し、背後から彼女に襲い掛かる。警戒を怠っていた水色の少女に、防ぐ術はない。

「プロテクション」

だが天城一族最高の天才と謳われたユキには造作もないことだった。漆黒の槍が当たる寸前、それ以上に黒いドーム状のバリアが雷刃の襲撃者を囲んだ。

「この光景前にも見たなぁ」

《Ｉｔ' ｓ　ｓｏ（全くだな）》

防がれた黒槍を見遣り溜め息をつくと同時、アクセルが同意と共にカートリッジを排出する。マガジン三本、今のでマガジン内のカートリッジは尽きたから残り十八発。ジリ貧…、だな。

「あははははは！！どうしたのお兄ちゃん！？威勢良く言った割にはずっと同じことの繰り返しだよ！？」

「言ってろ」

先程から３０分近くも続けられる行動を、狂ったように笑うユキに言い返しながら、俺はアクセルのデータを見遣る。イグゾースティブサーチ進行率１００％、スキャニング１００％。肝心のプログラム修正率は、

――――１００％。

『アクセル、行けそうか？』

『Ｉｔ　ｉｓ　ｕｎｑｕｅｓｔｉｏｎａｂｌｅ．　Ｉｔ　ｉｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｄｏ　ａｔ　ａｎｙ　ｔｉｍｅ（問題ない。いつでもやれる）』

戦闘と並行してとあるモノをスキャンしつつ、空間干渉でそれを隠蔽していたアクセルは、俺の問いに端的に答えた。…ホント、お前は優秀で助かるよ。俺一人じゃきっと出来なかったから。

「まぁ、確かに終わりのない作業って拷問だよな」

「？」

アクセルを握った右手を下げたまま呟く俺に、ユキだけでなくマテリアルの三人まで首を傾げる。それはそうだろう。状況は圧倒的に俺が不利。あいつらからすれば俺が敗北宣言をしたようなものなのだから。

「窮鼠猫を噛む、って知ってるか？」

――――茶番（終わりのない作業）という名の戦闘は、もう終わりだ。

「…アクセル、やるぞ」

俺の声と同時、銀色の魔法陣が展開し魔力が渦巻く。膨大な量のそれは俺自身の保有魔力だけでなく、周囲からかき集められたもの。

「なっ…！？」

「嘘…！？」

「まさか…！？」

「へぇ…」

その現象の意味を理解した三人が絶句し、ユキは面白いと言わんばかりに笑みを浮かべる。そしてアクセルが、

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）》

――それを、告げた。

「同じことの繰り返しには、お前らも飽き飽きしてたんだろ？」

背に巨大な白銀の翼を生やした俺は、ゆっくりと四人を見据える。全身を膨大な魔力が駆け巡り、その圧倒的なプレッシャーを周囲に撒き散らしている。

「いいぜ、だったら…」

ユキと互角かそれ以上の魔力を従え、新たなマガジンをセットしたアクセルを構えた俺は、

「決着を、つけてやる」

――――終焉(終焉)を、告げた。

「…あれ？」

時の庭園から程近い草原に寝そべっていたアリシアが、暗くなってきた空を見上げる。遠くでは雷鳴が鳴り響き、黒い雲は徐々にこちらへと向かって来ていた。

「雨になりそうだね。フェイト、帰ろう？」

大木に寄り掛かりぼーっとしていた私に、本を抱えたアリシアが促す。けど、私は…。

「フェイトってば」

「ゴメン、アリシア…。私はもう少し、ここにいる」

色々なことを考えないといけなくて、頭の中がぐるぐるしている。少し、一人になりたかった。

「…そうなの？じゃあ、私も♪」

可愛らしく小首を傾げたアリシアが、私の隣にとたとたと歩いてくる。

「一緒に、雨宿り♪」

座り込んだアリシアを見て、私の中に渦巻いていた思考や疑問が固まり始めた。…いい機会、かな。

「ねぇ、アリシア…。これは、夢なんだよね？」

そのまま私は口を開き、その禁句を口にした。アリシアは無言のまま、私の言葉に耳を傾けている。

「私とあなたは、同じ世界にはいない。あなたが生きてたら、私は生まれなかった」

「…そう、だね」

ゆっくりと頷き、アリシアはそれを肯定した。夢の住人が夢だと認める。そんな異常とも言える光景を見ても、今の私はなんとも思えない。

「母さんも、私にはあんなに優しくは…」

「…優しい人だったんだよ。優しかったから、壊れたんだ。死んじゃった私を、生き返らせる為に」

「うん…」

言いかけた私を遮り、アリシアが答える。今の母さんこそが本来の母さんで、私に冷たかった母さんはあくまで悲しみで壊れてしまった母さんなのだと。

「ねぇ、フェイト。夢でも、いいじゃない。ここにいよう？ずっと一緒に」

こちらを見据えたアリシアが、私にそう告げた。一緒に、夢を見ようと。

「私、ここでなら生きていられる。フェイトのお姉さんでいられる。母さんと、アルフとリニスと、みんなと一緒にいられるんだよ？」

アリシアも、母さんも、アルフも、リニスも。ここには、私の家族がみんな揃っている。私が欲しかった家族が、ここには全員いる。

「フェイトが欲しかった幸せ、みんなあげるよ？」

懇願するようなアリシアの顔を見て、私は覚悟を決めた。

――答えを、出そう。フェイト・テスタロッサとして、私の答えを。

「私が…、欲しかった幸せ…」

「健康な体。愛する者達との、ずっと続いていく暮らし。眠って下さい。そうすれば、夢の中であなたはずっと、そんな世界にいられます」

私の呟きに対し、眼前に立つ彼女、闇の書の管制人格は穏やかに告げる。夢を見ていていいのだと。ここにいていいのだと。

――でも、それじゃあかん。

「せやけど、それはただの夢や」

首を振って否定しながら、私は真っ直ぐに彼女を見据えた。

――イグゾースティブサーチ。

グラビティフォールを応用した空間探索魔法で、空間内に存在する指定対象を全力で解析するというもの。その魔法を用いて俺が戦闘と並行して調べていたものとは、

――天城ユキの、ＤＲＭ。

俺の戦闘技術は彼女達を上回っているにも関わらず、彼女達に勝つことは不可能だ。数の差ということもあるが、彼我の戦力差を決定的に隔てているのは、ユキが無限の魔力を保有しているからに他ならない。

――なら、こちらも無限の魔力を得たとしたら？

俺はユキが目覚める前から、独自にＤＲＭを解析し組み上げていた。未だ完成していなかったそれは当然起動出来ないが、眼前にオリジナルがあるなら話は変わってくる。

フルドライブを起動した瞬間から、俺はアクセルと共にユキのＤＲＭを解析していた。更にグラビティフォールの空間干渉でそれを隠蔽、戦闘と並行してプログラムを書き換えていた。

――そして俺は今、理を狂わすモノの力を手にした。

「はあっ！！」

「せえっ！！」

ＬとＳが、それぞれのテバイスを振りかぶり突っ込んで行く。大量の魔力が乗せられたそれは、掠めるだけでもかなりのダメージを負うだろう。

――だが、今の彼には届かない。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｚａｍｂｅｒ》

お兄ちゃんは巨大な翼で攻撃を受け止めながら、身の丈を越える大太刀を振るう。辛うじてブロックしたようだが、二人はかなりの距離を吹き飛ばされた。

「アクセルシューター、インフィニティシフト」

そんな彼に鋭い視線を向けたまま、あたしは歪な杖を振るう。天を覆う漆黒の弾丸が、一斉に彼目掛けて降り注いだ。先程までならカートリッジを一発費やして、半分を打ち消せる程度だったその攻撃。

――だが、理を狂わすモノの名は伊達じゃない。

「駆けろ、銀月」

お兄ちゃんの呟きに答え、翼がその輝きを増す。その巨大な身を羽ばたかせた瞬間、彼は視覚から消失する程の推進力を得る。

「ちっ…！！」

一瞬で眼前に現れたお兄ちゃんに、舌打ちしながらあたしは魔法陣を展開。十を越えるプロテクションを張り、銀刀の一撃を受け止めた。…さすが、お兄ちゃん。ＤＲＭという互角の条件を得た今、あたしと渡り合えている。

「アロンダイト！！」

その隙を縫って、Ｄが純白の砲撃を放って来た。眼前に集中している以上、本来なら防御は不可能だろう。

――――だが、ＤＲＭはその道理を捩曲げる。

「なっ！？」

白銀の翼がその身を折り畳み、アロンダイトを軽々と防ぐ。撃った本人は絶句しているが、それは今はどうでもいい。

『ちいっ…！！Ｓ、Ｌ、Ｄ、時間稼ぐからブレイカーで仕留めなさい！！』

バックステップで距離を取ったあたしは、マテリアル達に念話を飛ばす。この状況でお兄ちゃんを、無限の魔力を得た彼を沈めるには、それくらいの魔法を叩き込まなければ足りない。

『『『了解！！』』』

三人が声と共に下がり、魔法陣を展開する。お兄ちゃんが警戒し三人の方へ向かおうとするが、それを許す程あたしも甘くない。

「シュート！！」

三点砲撃に加え千以上の弾丸による複合弾幕を前に、お兄ちゃんが後ろに下がる。

「スティンガーブレイド、エクスキューションシフト！！」

更に漆黒の刃を無数に形成、全包囲からお兄ちゃん目掛けて放つ。
さすがにこの量をかわしきることは難しいのか、何発かはお兄ちゃんを掠めていく。

「集え、明星！！全てを焼き消す焔となれ！！ルシフェリオンッッッ！！」

その間に着々と準備を進めていたSが天にルシフェリオンを構え、桜色の魔力を流星の如く集束させる。

「砕け散れ！！雷神滅殺！！オーロラザンバアアアアア！！」

続けてLが大剣を振りかぶり、金色の魔力をその極大の刀身に集束させる。

「絶望に足掻け、塵芥！！エクスカリバアアアアア！！」

更にベルカ式の三角形の魔法陣を展開したDが、三つの頂点に純白の魔力を集束させる。
そして、三つの魔力が限界まで膨れ上がった瞬間、

「「「ブレイカアアアアア！！！」」」

――――破壊の力が、解き放たれた。

三人の声がシンクロした瞬間、桜色、金色、純白が絡み合い、一本の極太レーザーと化した砲撃が俺目掛けて放射された。
――――トライアングルブレイカー。

僅か三人の魔導師によって発動された究極の砲撃魔法は、あの龍を滅ぼす程の力を秘めていた。これならさすがの俺も、ちょっとばかり危ないかもしれない。が、

「アクセル、やるぞ」

《Ｆｕｌｌ　Ｒｅｌｏａｄ》

俺の呟きに答え、アクセルが六発カートリッジをロードする。ＤＲＭの魔力と混じり合ったその力の塊は、それだけでトライアングルブレイカーの総魔力量を上回る。

「なっ…！？」

星光の殲滅者は気付いたようだがもう遅い。スイッチは、押した。

――世界は今、黄昏時。

「導け、終焉。黄昏の光の名の下に、全てを砕き染め上げろ！！」

沈み行く太陽を背にした俺の声に答え、白銀の翼がその身を広げる。太陽を囲むように展開された翼の間に、金色の光が集束する。

《Ｔｗｉｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

アクセルの声と同時、俺はゆるりと左手を挙げる。カートリッジ六発分に加えＤＲＭ。溜めなんか、必要ない。

「トワイライトッ！！ブレイカアアアアアアッ！！」

指をパチンと鳴らし、その名を叫んだ瞬間、

――黄昏の光が、弾けた。
金色の奔流と化した魔力の塊は、待ち侘びたかのように一瞬で宙を翔けた。トライアングルブレイカーを呑み込み、マテリアルの三人を呑み込んだブレイカーが爆発的な閃光で視界を焼く。
――トワイライトブレイカー。
周囲の空間を歪ませ太陽光を集束、極大のエネルギーを金色の奔流として解き放つ魔法。アースライトやスターライトの数倍の威力を秘めたそれは、俺のオリジナルブレイカー。

「……やり過ぎたか？」

《Ｉｔ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｃａｒｅ（構わん）》

爆煙の晴れた先、気を失って倒れる三人を見て呟く俺に対し、アクセルはドライに答える。性格悪いなぁ…。
――ぞくぅっ！！

「っ！？」

瞬間、異常なまでの殺気を感じた俺は、背後に振り返る。

「残念でした」

「なっ！？」

が、ユキの声と同時にバインドが掛けられ、身動きが取れなくなる。
いつの間に…！！

「トライアングルブレイカーはフェイクだったの。本命は…、こっち」

超極大の魔法陣を展開したユキは狂気の笑みをその顔に浮かべた。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｗｏｒｌｄ　ｅｍｐｔｉｎｅｓｓ（私は空虚から生まれ落ちた）」

杖を地面と並行に構えたユキは、超上級魔法に必要な詠唱を始めた。

「Ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｉｓ　ｃｈａｏｔｉｃａｌｌｙ　ｄｙｅｄ　ｔｏ　ｆｒｅｎｚｙ，ａｎｄ　ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ　ｇｏｅｓ　ｕｐ　ｉｎ　ｍｅ（混沌と狂気に身を染めて、私は一人立ち上がる）」

大気が歪む。時空がズレる。全てが恐れをなしたかのように、漆黒の少女に跪づいていく。

「Ｉ　ｗｈｏ　ｈａｄ　ｓｔｕｄｉｅｄ　ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ｍａｇｉｃ　ｔｈｏｒｏｕｇｈｌｙ　ｆａｃｅｄ　ｔｈｅ　ｅｎｄ　ｂｅｉｎｇ　ｎｏｔ　ａｂｌｅ　ｔｏ　ｄｏ　ａｎｙｔｈｉｎｇ（億千万の魔導を極め、我は無為に地に堕ちた）」

それはとても悲しき祝詞。両親と魔法を失い理不尽な運命に巻き込まれて死んでしまった、天城ユキの心の闇。

「Ｔｈｅ　ｆｒｉｅｎｄ　ｉｓ　ｎｏｔ，ａｎｄ　ｉｓ　ｎｅｖｅｒ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ　ａｓ　ｎｏｂｏｄｙ　ｆｏｒ　ｆｒｅｅ（ただの一人も友はおらず、ただの一度も理解されない）」

その闇が凝り固まり、漆黒の魔法陣を媒体に、今目覚めようとしているのだと俺は直感的に理解した。

「Ｉ ｓｐｅｎｄ ｆｒｅｎｚｙ ａｎｄ ｃｕｒｓｅ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ ｂｙ ｏｎｌｙ ｏｎｅ ｐｅｒｓｏｎ ｉｎ ｔｈａｔ ｈｉｌｌ（我は一人あの丘で、狂気を糧に世界を呪おう）」

それにしてもなんとバカげた魔力だろう。ＤＲＭがあることを考えても、ここまでの魔力を制御することは普通なら不可能だ。

「Ｈｏｗｅｖｅｒ，ｉｔ ｃｏｍｅｓ ｆｏｒ ａｌｌ ｔｏ ｄｉｓａｐｐｅａｒ，ａｎｄ ｆｏｒ ｅｖｅｒｙｏｎｅ ｎｏｔ ｔｏ ｌｅａｖｅ ｍｅ（故に我は乞い願う）」

それこそが、天城ユキの才能。魔法に関わるものなら天城ユキは、どんな無茶苦茶ことでも成し遂げる。鬼才？神童？そんなカテゴリで括れる程、狂気の魔女は安易な存在ではない。

「Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ，Ｅｎｄｌｅｓｓ Ｃｈａｏｓ Ｐｈａｎｔａｓｍ（全てを呑み込み喰らい尽くす、終わりなき混沌の幻想を）」

そしてユキはあの目で、過去のユキやフェイトが見せていた悲しげな表情を見せて。

「天城式神智学大図書館（アカシックレコーダー）、解放」

――――終焉を、願った。

暗い海の上に広がる濁った空を舞台に、紫掛かった黒と桜色が、流

星となりぶつかり合う。

「きゃあっ！！」

だが体格的に劣る私は、何度も弾き飛ばされてしまう。

「くっ…！！」

「一つ覚えの砲撃…、通ると思ってか？」

レイジングハートを構え直す私に対し、両手に漆黒の力を纏う闇の書さんが問い掛けてくる。通るかって？そんなこと、決まってる。

「通す…！！レイジングハートが力をくれてる！！命と心を懸けて応えてくれてる！！」

カートリッジを二発ロードすると同時、レイジングハートの先端から桜色の六枚翼が展開される。通るか通らないかじゃない。無理矢理にでも貫き通す！！

「泣いてる子を、救ってあげてって！！」

《Ａ．Ｃ．Ｓ．，Ｓｔａｎｄｂｙ》

二人の声がシンクロした瞬間、足元の魔法陣が輝きを増す。それを見た闇の書さんが顔を強張らせるけど、今は無視。

「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム！！」

《Ｏｐｅｎ》

レイジングハートの槍のような先端から、桜色の刃が生える。ストライクフレーム、突貫用のバレルを展開した私は、その名を叫ぶ。

「エクセリオンバスター、Ａ．Ｃ．Ｓ．！！」

瞬間、爆風の煽りを受けたかのように翼が折れ曲がり、魔力を集束させていく。応じるように背の翼もその身を畳み、突撃態勢に移行する。

「ドライブッ！！」

魔力の楔を解き放った瞬間、私は爆発的に加速した。突撃兵のように槍を構えながら、闇の書さん目掛けて突っ込む！！

「届いてっ…！！」

闇の書さんの展開したバリアに阻まれながらも、想いを力に変え全力でレイジングハートを突き込む！！お願い…！！届いて…！！

――――キィン。

澄んだ音を響かせ、激しく火花を散らしながらも、レイジングハートの先端が僅かにバリアを抜いた。

「ブレイクッ…！！」

カートリッジを四発ロードし、その先端に魔力を集束させる。応じるように計八枚の翼が、その輝きを強め身を膨らませる！！

「…まさか！？」

「シュウウウウトッ！！」

驚愕する闇の書さんに構わずそのままレイジングハートを突き入れ、私はエクセリオンバスターを叩き込むっ！！

「はぁっ…、はぁっ…、はぁっ…」

（ほぼゼロ距離…。バリアを抜いての、エクセリオンバスター直撃…。これでダメなら…）

自分自身も爆発の余波で傷付きながら、アクセルフィンと背の翼を羽ばたかせ距離を取る。カートリッジ四発分とＤＲＭの魔力を費やしての最高クラスの砲撃をゼロ距離。これ以上となると…。

《Ｍａｓｔｅｒ！！（マスター！！）》

「っ！？」

思考を遮るように響いたレイジングハートの声に顔を上げると、爆煙が晴れたその先に彼女がいた。

――ほとんど、無傷で。

「…もう少し、頑張らないとだね」

《Ｙｅｓ（はい）》

互いを励ますように言葉を交わしながら、私は新たな策を練り始めた。

「私、こんなん望んでない。あなたも同じはずや、違うか？」

真っ直ぐに彼女を見据えながら、私は静かに問い掛ける。私も、彼女も、きっと願っていることは同じだと信じて。

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士達と同じように、私もあなたを愛おしく思います。だからこそあなたを殺してしまう、自分自身が許せない」

「っ！！」

闇の書の管制プログラムである彼女は、当然悪意ある改変の影響も多いはず。私が主に選ばれた以上、もう呪いから逃れることは叶わない。だからせめて、幸せな夢の中で眠らせようとしたのだろう。

「自分ではどうにもならない力の暴走…。あなたを侵食することも、暴走してあなたを食らい尽くしてしまうことも、止められない…」

「…覚醒の時に、今までのこと少しはわかったんよ。望むように生きられへん悲しさ、私にも少しはわかる…。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、寂しい思いして来た…」

私も彼女達も、理不尽な運命を強いられ、苛酷な生を歩んで来た。悲しいことや辛いこともたくさんあった。彼女はきっと、諦めてしまったのだろう。立ち向かうことを、諦めずに足掻くことを。

「せやけど、忘れたらあかん」

「っ！？」

車椅子から身を乗り出し、彼女の頬にそっと触れる。驚いたように顔を強張らせているけど、構いはしない。

「あなたのマスターは、今は私や。マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん」

私達はまだ、戦える。諦めずに、立ち向かうことが出来る。

――だから、私は。

「…なんだ？」

黄昏よりも赤く染まった空を見上げながら、俺は一人呟く。先程までいた場所に変わりはないはずなのだが、何かが違うと俺の本能が訴え掛けてくる。

異常なまでに重厚な空気。赤と黒で染め上げられた世界。そして何より、

――濃密な、死の香り。

「ここは、あたしの世界」

「っ！？」

不意の声に振り返った先には、両手を広げ空を見上げる漆黒の少女。

「生物でありながら無機物として生を歩んだあたしは、有と無の絶対の理、その境界の抜け道を見付けた」

「が、はっ…！！」

瞬間、数十の剣が現れ俺の体に突き刺さった。なんだ…？何が起きた…！？

「そしてＤＲＭで得た魔力を糧に、私はこの幻燈結界（ファンタズマゴリア）を完成させた」

ユキの紡ぐ言葉がキーになったかのように、何もない空間から何百本もの短刀が現れ、その鈍く輝く刃を俺の体に埋めていく。全身に傷が刻まれ、激しく血が流れ出す。

「十五分の間だけ、あたしは神になれる。一定領域内でだけ、全てがあたしの思うがままになる。破壊も創造も、ありとあらゆることが可能になるあたしの究極魔法」

「そりゃまた…、バカげた力だな…」

膝を着きながら、俺は辛うじてそれだけを言い返す。おそらくこの魔法は、固有結界のようなものだろう。自分の領域を展開し世界を侵食し、その範囲内で魔法を越える魔法を操る魔法。かつての古代世界の魔導師でも、固有結界を扱えるものは片手の指で足りる程。そんな相手を前にしては、ＤＲＭが上乗せされた俺の力でも勝てる訳がない。

「この世界でなら、全てがあたしの思い通りになる。なにもかもが屈し跪づき、なにもかもを手に入れられる」

領域内で全てを思うがままにする、神の如き力を手にした狂気の魔女は、両手を広げたまま語り続ける。俺の心を屈服させるかのように、無駄なことだと悟らせるように。

「なのに…、なんで…」

だが、そんな誰もが羨むような力を持つ少女は、顔を俯かせ体を震わせ始める。

「なんで…！！あたしはこんなに空っぽなの！？」

ユキの絶叫と共に無数の火球が現れたと思ったら、俺の周囲に着弾し火柱を上げた。…空っぽ？

「あたしには何もない！！父さんも母さんも死んで、大好きな魔法も奪われて！！ようやく踏み出せたと思ったのに、あの女に殺されて！！死に物狂いで頑張って、やっとお兄ちゃんと会えたのに！！お兄ちゃんさえも、あたしのところからいなくなっていく！！」

巨大な氷柱が、荒れ狂う暴風が、轟き輝く轟雷が、現れては無茶苦茶に撒き散らされる。まるで駄々っ子がやたらめったらに散らかすような、しかし簡単に人を殺せるレベルのその光景を見た俺は、そのまま動くことが出来ない。

「どうしてよ！？あたしには力があるのに！！なにもかもが思うがままなのに！！どうしてあたしはっ！！いつまでも一人なのよぉっ！！」

鋭利で長大な槍が生み出され、四方八方に投擲される。僅かに頬を掠め血が流れ出すが、今の俺にはそれさえ気にならなかった。

「やだよ…、寂しいよ…、悲しいよ…」

綺麗な赤い瞳から、大粒の涙を零しながら。

「一人は…、やだよ…」

――ユキは、そう言った。

（…バカか、俺は）

業火？焼きたきゃ焼け。
暴風？切りたきゃ切れ。
剛槍？貫きたきゃ貫け。
――それが、どうした？

（あいつだって…、悲しんでない訳ねぇだろ…！！）

俺以上に強くて、俺以上に弱いあいつが、天才故誰とも関われず、ずっと一人でいるしかなかった彼女が、

（寂しくない訳…、ねぇだろうが…！！）

アクセルを待機状態のネックレスに戻し、ＤＲＭを解除。ゆっくりと立ち上がり、泣き続ける少女を見遣る。今必要なのは力ではない。今彼女が望んでいるものは…、

（待ってろよ、ユキ…）

大分遠回りしてしまったけど、ようやく見付け出せたから。今度こそ、お前を。

（俺が…、救う…！！）

全身に力を込めて、俺はユキ目掛けて歩き出した。

レイジングハートの中から、あたしは全てを見ていた。お兄ちゃんがなのはと出会い、過去を乗り越えた所も。お兄ちゃんがフェイトと出会い、前に踏み出せた所も。お兄ちゃんは二人と出会えて、変われた。前よりも強く、優しくなれた。

――でも、それが遠い。

お兄ちゃんが二人と関わる程、お兄ちゃんが成長する程、天城（あたし）ユキは過去のものになっていく。あたしは確かに生きていたのに、お兄ちゃんの妹として生きていたのに、

――忘れられてしまう。

生きているのに、生きていたのに、誰にもそれがわからない。果たしてそれは、生きていると言えるのだろうか。

――なら、あたしって何？

――あたしの生きていた意味は、何？

――あたしという存在は、存在する価値があるの？

「来ないで…」

何百と刃物が刺さり血が流れているのに、お兄ちゃんは立ち上がった。あまつさえデバイスもＤＲＭを解除し、あたしの方へ歩いて来る。

「来ないで…！！」

剣を、刃を、業火を、轟雷を、無数に量産しながらお兄ちゃん目掛けて叩き込む。

「来ないでよ…！！」

その全てを被弾しながらも、お兄ちゃんは止まらない。ゆっくりと一歩ずつ、私に近寄って来る。

「来ないで！！どうせいなくなるんだから、これ以上あたしを乱さないで！！」

一際巨大な剛槍が腹を貫通したのに、お兄ちゃんは止まらない。もう致死量レベルの負傷と出血をその身に抱えているのに、

――――止まらない。

「…バカが」

「っ！？」

そのまま私の眼前にまで来たお兄ちゃんは、私を優しく抱きしめた。

「俺がユキの前から…、いなくなる訳ねぇだろうが…！！」

その一言だけで、あたしは死ぬ程の喜びを貰える。だけど…、だけど…！！

「だけど…！！あたしと一緒じゃ嫌だって…！！」

「前提が間違ってんだよ、お前は」

反論したあたしを抱きしめ、頭を優しく撫でるお兄ちゃん。

「確かに現実はいつだって理不尽で、残酷で。大切なものを奪っていく。俺もそのせいで、何度も人生を狂わされた」

両親を奪われ、村を奪われ、人生を無茶苦茶にされて。同じ人生をたどって来たはずの少年は、それでも夢を拒んだ。

「それでもな、ユキ。逃げちゃダメなんだよ」

――――何故なら、覚悟を決めたから。

「俺達は現実に生きている。それはどうしようもない事実だし、絶対に変えられない。だから夢の中で幸せになったって、現実は変わらない」

確かにお兄ちゃんもあたしと同じで弱かった。だけどお兄ちゃんは、仲間と共にそれを乗り越え、強くなることが出来た。

「眠り続けるその人を見て、誰かが悲しむかもしれない。共に歩みたくて、傍にいて欲しくて、その人の目覚めを待っているかもしれない。だから俺は、夢よりも現実を選ぶ。なのはやフェイトだけじゃない。ユーノやアルフ、クロノ達、もしかしたらはやて達とも。共に生きて、最高に幸せな未来を掴んでみせる」

過去を乗り越えて、大切なモノを手に入れて。二人の少女に救われた少年は、笑顔でそう断言した。

――――ああ、そうだった。

あたしはこの優しい少年の、この笑顔のおかげで立ち直れたんだ。

「…だから、お前も来いよ」

「え…？」

そう言ってお兄ちゃんは、あたしに手を差し出した。あたしはその手とお兄ちゃんの顔を、恐る恐る交互に見遣る。

「まだお前はやり直せるんだ。お前は生きてここにいる。だから一緒に外に出て、新しい自分を始めればいい」

「でも…、あたしは…。なのはやフェイトを、勝手な理由で殺そうとして…」

いかにやり直すと言っても、過去は消えない。あたしが自分勝手な理由と独占欲で、二人を殺そうとしたのは事実なのだから。

「なのはやフェイトは優しいから、きっと笑って迎えてくれる。想像してみろよ。もしみんなで笑って過ごせるんだとしたら…」

そんなあたしに笑い掛けながら、お兄ちゃんはその未来を思い描く。みんなと共に過ごす幸せな明日を想像したお兄ちゃんは、

「最高に、幸せだと思うぜ？」

――今までに見たことのない、最高の笑顔を見せた。

「だからさ、行こう、ユキ。夢や現実なんかぶっ壊して、俺達自身の力で幸せな未来を生み出す為に」

その言葉に、あたしを縛っていた何かが壊れていく。運命も現実も、自分達の力で乗り越えられる。かつてあたしと同じだったお兄ちゃんの言葉には、それを信頼させるだけの力があった。

「あ…、ああ…」

赤い空が砕け、元の丘に帰って来る。散々迷惑を掛けたのに、死ぬ程の怪我を負わせたのに、お兄ちゃんはただ笑うだけ。

――――全てを、許すかのように。

「う…、あ…、うわあああああああん！！」

もう、抑えが効かなくて。お兄ちゃんに縋り付きながら、あたしは思いっ切り泣き叫ぶ。

「ホント、どいつもこいつも勝手に一人で抱え込みやがって…。ちったあ周りを頼れってての」

そんなあたしを優しく抱きしめながら、お兄ちゃんは頭を撫でてくれた。一年経ってもお兄ちゃんは、優しいお兄ちゃんのままで。それがすごく嬉しかった。

――――こうしてあたしは、狂気から解放された。

第十七話「天城」（後書き）

はい、今回はここまでです。
……いやぁ、ナツキは今回もやらかしてくれましたw
ともあれこうしてユキも、過去を乗り越えることが出来ました。
次回からどうなることやら…（ぇw

…しかし戦闘、gdgdだったなぁ（遠い目

次回、五人の意志が一つになります。

ちなみにトワイライトブレイカーですが。
語呂でわかる方はわかると思いますw
なんのこっちゃという人は活動報告をどうぞw

第十八話「名前」（前書き）

彼女を縛る悲しみは、白銀の刃によって切り裂かれた。
彼女の目的が空中分解した以上、私達にもうすべきことはない。
だからせめて、潔く。私達は笑って逝こう。
優しい二人が、傷付かないように。
願わくは、彼らの未来に安らかな温もりがありますように。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

※八神はやて（植田佳奈）さんのＳｎｏｗ　Ｒａｉｎ推奨。

第十八話「名前」

「確かに昔の私なら…、弱いままの私なら、迷わずここで過ごすことを選んだと思う」

立ち上がった私はアリシアに向き直り、自らの想いを語り始める。

「だけどね…、足りないんだ…」

――だけど、私はもうあの時の私じゃない。

「ここにはなのはがいない。ユーノがいない。アリサやすずか、クロノに、リンディ提督がいない」

たった半年、本当の私として生きただけ。だけど、それだけでもこんなに繋がりが出来た。そしてその繋がりは、ここにはない。

「そして何より、お兄ちゃんがいない」

――そして、大好きな人がいない。

「私はお兄ちゃんに救って貰えて、ここまで来れたんだ…。だから私は、みんなと一緒に現実を生きる」

お兄ちゃんと一緒なら、私はきっとどんな現実でも乗り越えられる。

だから、進まなきゃいけないんだ。

――悲しみの中で眠っても、何も変えられないから。

「フェイト…」

「ごめんね、アリシア…。だけど…、私は行かなくちゃ」

表情を歪めるアリシアに謝りながらも、私はその答えを告げる。覚悟は決まった。後はそれを貫き通すだけ。

「…そっか」

そう呟いたアリシアは、私に手を差し出した。

「…え？」

「じゃあ行こう、フェイト。ここから出る為に、みんなが力を貸してくれるから」

首を傾げた私に対し、アリシアは優しく微笑んだ。

「…終わりましたか」

「ああ」

泣き止んだマスター、天城ユキの頭をぽふぽふと叩きながら、天城ナツキが振り返る。血が流れ過ぎな気もしますが、良く生きてますね…。

「お前らもサンキューな」

「…何のことやら」

唐突に礼を述べる天城ナツキにギクリとしながらも、視線を逸らしすっとぼける。

「バカ言ってんな。どの攻撃にも殺気はあったけど、全力は出してないだろ？」

「……」

普通に考えればありえないであろう言葉に、私は思わず口を閉ざす。

「お前らが全力を出したのは、仮面の男絡みと龍を相手にした時だけ。なのはやフェイトを相手にしても、寸止めしていた。違うか？」

…何故、見抜けるんでしょうかね。あなたは。

「…鋭過ぎると嫌われますよ？」

「かもな」

溜め息をついた私に、天城ナツキは苦笑する。本当、良くわからない人です。

「さて、それでは私達は消えるとしましょう」

「…は？」

唐突な踵を返しながらの発言に、天城ナツキが間の抜けた声を上げる。

「心残りだったマスターもあなたがいれば大丈夫そうですし…。マスターが立ち直れた今、あの二人を追う必要はありません」

そう言って振り返り、微かな笑みを浮かべながら、

「役目を終えた人形は、捨てられるのが定めです」

――別れを、告げた。

「…ふざけんな」

対し俯いた天城ナツキは、一言だけ呟いた。

「心残りがない？役目は終えた？だったら…」

そう言いながら顔を上げた天城ナツキは、怒りと悲しみがないまぜになったような表情で、

「なんでお前ら…、そんな悲しそうな顔してるんだよ…？」

――そう尋ねた。

「え…？」言われて頬に手を当てると、温かな水滴。作り物のはずなのに、所詮人形のはずなのに。

――私は、涙を流していた。

「ふん…、高性能過ぎるのも問題だな…」

「心なんて…、なければよかった…。そうすれば…、悲しまずに済んだのに…」

隣の闇統べる王と雷刃の襲撃者も、顔を歪ませながら呟きを漏らし涙を流す。なまじ完成度が高い分、私達には心があった。だからこそ今、こうして消えてしまうことを悲しんでいる。

「そうですね…。私達は確かに消えたくありません。ですが、こんな私達を世界は…、作り物である私達を人々は…、受け入れてくれるでしょうか…？」

その事実を認めながら、自らを嘲るような笑みを浮かべた私達に対し、

「…とことんバカだなお前ら。半年前フェイトにも言ったんだがな…、作り物？知らねぇよそんなもん」

近寄って来た天城ナツキが、関係ないと言いながら私達を抱き寄せた。

「お前らはここにいて、自分のマスターを気遣ってやれる優しさを持ってる。だったらお前らは何物でもない、人間だ。例え世界中全ての奴らが否定しようとも、俺だけは何度だって言ってやる。お前らは心優しい、普通の女の子だ、ってな」

「「「っ！？」」」

敵だったはずなのに、自分を傷付けた相手のはずなのに。この少年はどこまで他人に甘く、優しいのだろうか。

「ボク達が…、人間…？」

「バカを言うな…。所詮我等は作り物だ…」

戸惑いの声を上げる雷刃の襲撃者と、諦観したように呟く闇統べる王。私はと言うと衝撃のあまり、口を開いても言葉が出て来ない。

「なぁ、ユキ。こいつらって名前ないのか？」

「下手に情を移したくなかったからねー、コードネームしかないよ」

「そっか」

そんな私達を気に留めず、天城ユキと訳のわからない問答を終えた天城ナツキが振り返り、

「なら、俺が名前をやるよ」

――衝撃的な一言を、告げた。

「星光の殲滅者、シオン。雷刃の襲撃者、エリス。闇統べる王、イリヤ。それが、お前らの名前だ」

私達を真っ直ぐ見据えながら、その名を呼ぶ天城ナツキ。

「シ…、オン…」

「エリ…、ス…」

「イ…、リヤ…」

記号や肩書きなどではない、ちゃんとした名前。私達だけの、名前。

「なんとなくで決めちゃったから、嫌なら別の考えるけど…」

「そんなことない！！」

頭を掻きながらそう続ける天城ナツキを、雷刃の襲撃者改めエリスが遮る。

「エリス…、エリス…、ボクの…、ボクだけの名前…」

エリスは目を閉じ自らの体を抱きしめながら、何度もその名を口ずさむ。私達の中で感情の波が一番激しかったエリスだからこそ、嬉しさも人一倍のはずだ。

「ふ、ふん。イリヤ、か。まぁ悪くない名前だ。うぬが頼むのであれば、使ってやらんこともない」

闇統べる王改めイリヤも頬を赤くし、そっぽを向きながらごにょごにょと呟く。…素直じゃありませんね、あなたも。嬉しいなら嬉しいと言えばいいのに。

「シオン、ですか。気に入りました。素敵な名前をありがとうございます、天城ナツキ」

かく言う私、星光の殲滅者改めシオンも頭を下げる。シオン。すんなり頭に入って来る、いい響きだと思った。

「堅苦しいな、ナツキでいいって」

「では、ナツキ」

苦笑しながら手を振った彼、ナツキに私達は揃って向き直る。

「「「ありがとうございます」」」

「…はい？」

膝を着いて頭を垂れた私達に、ナツキが片言で聞き返す。

「あなたの言葉は、私達の胸に響きました」

「ボク達を普通の子として扱ってくれて、素敵な名前もくれて。本当に、嬉しかった」

「だから我等はここに誓おう。うぬが呼べば、我等はいつでも駆け付ける。うぬが望めば、我等はその全てを尽くして力になろう」

ですが、これだけは言わせていただきます。私達に新たな生と名前をくれたナツキの為ならば、私達三人はその全てを捧げられると。

「お前ら…」

「「「ご命令を。我等が主」」」

呆然と呟くナツキに対し、私達はただ一言。創造主たる天城ユキにも感謝はしていますが、私達の心を救ってくれたナツキだけは、私達の中で特別な位置にいると断言できる。

「……ああ」

表情を引き締めたナツキが、頷きと共に私達を見据える。

「シオン。エリス。イリヤ。俺が望むことは、ただ一つだけだ」

順々に私達を見遣りながらナツキが告げる、そのただ一つだけの望みとは、

「みんなで幸せに暮らすこと。その為に今、悲しみの闇を撃ち抜く力が欲しい」

――――とてもちっぽけな、だけど、最高に輝く素晴らしい夢。

「だから俺に…、俺達に、力を貸してくれ」

そして彼はそれを守る為に、命すら投げ出すことを覚悟している。

ならば私達の答えは、一つだけ。

「「「お任せを。我等が主」」」

――――例えこの身が朽ち果てようとも、主の願いを叶えるのみ。

「やれやれ…。お兄ちゃんは相変わらず天然の女誑しだね」

「んなっ!?人聞きの悪いことを言うな!!」

そんな光景を見守っていた天城ユキの溜め息混じりの言葉に、ナツキが全力でツッコミを入れる。

「そうですね…。私も先程の言葉にグラッと来てしまいましたし…。ちょっと狙ってみましょうか」

「うおいっ！？」

先程までの空気が気恥ずかしくなり、私も冗談に乗ってみると、ナツキがかなり焦った表情で振り返る。

「冗談です」

「シオン…、頼むから真顔で心臓に悪い冗談を言わないでくれ…」

あっさりと否定した私に、ナツキはがっくりと頭を下げる。…苦労人ですね、あなたも。まぁ、グラッと来たのは本当ですが。

「失礼しました」

「で、ナツキ。これからどうするつもりだ？」

ぺこりと頭を下げた私に続けて、イリヤが今後の方針を尋ねる。忘れそうになるがここは闇の書の内部空間。早く脱出しないと取り込まれる可能性も十分ありえる。

「とりあえずイリヤにはやって貰うことがある。ユキ、準備出来てるか？」

「いつでも行けるよ、任せといて」

イリヤに答えながら背後に振り返るナツキに、杖を振るい魔法陣を展開しながら答える天城ユキ。

「さすが。それからエリス、シオンも。頼めるか？」

「オッケー！！」

「はい」

そんな妹の頭を撫でながら、ナツキが私とエリスに振り返る。当然だと言わんばかりに答えた私達に、彼はニヤリと不敵に笑う。

「よし、始めるぞ！！」

「「「「了解！！」」」」

さぁ、反撃の始まりです。

「母さん」

「来たわね、二人共」

アリシアに連れられ入った大広間には、母さんとリニスが待ち構えていた。母さんはゆっくりと、アリシアから私に視線を移す。

「フェイト、決めたのね？」

「うん。私はここから出る」

「…そう」

きっぱりと答えた私に頷き、母さんはリニスに振り返る。

「リニス、準備は出来てる？」

「はい、もちろんです」

手元のコンソールを弄りながら答えるリニスから視線を戻し、母さんは私を真っ直ぐに見据える。

「…フェイトにも、大切な人が出来たのね？」

母さんは穏やかな表情で、静かに問い掛けてきた。

「…うん。お兄ちゃんの為なら、大好きな人の為なら私は、なんだって出来る」

照れ臭いけど本当の気持ちを、ありのままに伝える。それが私の、フェイト・テスタロッサの想いだから。

「…だ、そうよ？」

「…え？」

天を仰いでそう言う母さんに、首を傾げ上を見ると。

『いやー、ボクのオリジナルって結構大胆な子だったんだね』

『やっぱりお兄ちゃんは女誑し決定だね』

『だから人聞きの悪いことを言うな！！』

宙に浮かぶ水晶から響く、聞き覚えのある三人の声。特に重要なのは、三人目の声。

「え…、お兄、ちゃん…？今の、聞いて…」

『バッチリと聞こえましたよ』

『情熱的な告白だったな』

恐る恐る尋ねた私に対し、更に増えた二人分の声が答えた。……聞かれちゃっ、た。

「あう…」

『…フェイト、ありがとうな』

思わず顔を真っ赤にして座り込む私に、お兄ちゃんから声が掛けられる。

『俺はまだ選ぶことは出来ないけど…、必ず答えを出すから。それまで、待っていてくれると嬉しい』

「…うん」

お兄ちゃんは既になのはからもその想いを告げられている。優しいお兄ちゃんだからこそ、悩んで悩んで悩み続けるだろう。

「兄妹なんだから、ずっと一緒だもん。いつまでだって、私は待つよ」

『…ありがとう』

だから、私はいつまでも待ち続ける。お兄ちゃんがその答えを出してくれる日まで。

「…天城ナツキ君、よね？少しいいかしら？」

『夢の中のプレシアか…。何か？』

と、母さんが面識のないはずのお兄ちゃんに呼び掛ける。…どうしたのかな。

「まずは礼を。私に夢を見せてくれて、フェイトを救ってくれて。本当にありがとう」

――私に、夢を？

『っ！？まさか…！？』

「ええ、何故かあなたが私に見せている夢が、この闇の書の夢とリンクしている。この私は確かに、あなたが夢を見せたプレシア・テスタロッサよ」

…え？つまりこの母さんは、虚数空間に落ちて行った本物の母さん！？なんでそんな…！？

『…夢同士無意識に引き合ったのかもな。穏やかに過ごせているようで何よりだ』

「次に謝罪を。アリシアの為とはいえ、あなたの親族にはとても迷

惑を掛けたわ…。本当に、ごめんなさい」

予想を述べるお兄ちゃんに、今度は頭を下げる母さん。アリシアを生き返らせる為ジュエルシードを求めて、お兄ちゃんの村を襲っちゃったんだっけ…。

『…過ぎたことだ。気にするな』

「贖罪になるとは思えないけど、ここからの脱出に力を貸すわ。協力させてちょうだい」

遮るように答えたお兄ちゃんに対し、母さんがそんな言葉を口にする。

『…いいのか？』

「そろそろ私の体は病に冒され死に至る…。最後くらい、娘の手助けくらいさせなさい」

恐る恐る尋ねるお兄ちゃんに、母さんは平然と答える。母さんは時々咳と共に血を吐いていた。むしろこの半年よく保ったと思ってしまう。

『…ありがとう』

『あなたも乗り越えられた、のかな？』

「そういうあなたもそうみたいね、天城ユキさん？」

聞き覚えのある声、確かお兄ちゃんの妹のユキの声に、母さんが微

笑みを返す。二人には通じる何かがあったのだろうか。

「ユキさん、回線は繋げました。後はそちら次第です」

と、一人黙々とコンソールを弄っていたリニスが、ユキに対して呼び掛ける。

『オッケー。シオン、イリヤ、準備はいい？』

『いつでも行けます』

『任せろ』

ユキの声にシオンとイリヤと呼ばれた少女が答える。…何だろう、どこかで聞いたような…。

「フェイト」

と、私の前に立った母さんが、あるものを差し出して来た。

「あ…」

それは金色の三角形、私のデバイス。

――バルディッシュだった。

「さぁ、頑張りましょう」

「…うんっ」

受け取った私に微笑む母さんに、頷きを返した私は宙を見上げた。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書なんて言わせへん。私が呼ばせへん」

そっと頬に手を沿え断言した私に、彼女は瞳から涙を流す。やっぱり彼女はプログラムなんかじゃない。シグナム達と同じで感情のある、人だ。

「私は管理者や。私にはそれが出来る」

「無理です…。自動防御プログラムが止まりません…。管理局の魔導師が戦っていますが、それも…」

続けて言う私に対し、尚も彼女は頭を振る。今まで辛いことや苦しいことばっかりやったから、素直には信じられへんのもわかる。…でもな、

「…止まって」

私の意志に応え、足元に展開された純白の魔法陣が輝きを強める。

――八神はやてを、ナメたらあかんで？

「え…？」

私のやや上に浮かんでいた闇の書さんが、急にその動きを止める。

何かの罠かと警戒し、私は身体に力を込める。

『外の方!!えっと…、管理局の方!!』

「あっ…」

と、不意に闇の書さんの中から、聞き覚えのある声が聞こえた。この声、もしかして…!!

『えと、そこにいる子の保護者、八神はやてです!!』

「はやてちゃん!?」

よかった、無事だったんだ!!

『な、なのはちゃん!?ほんまに!?』

「うん、なのはだよ!!色々あって、闇の書さんと戦ってるの!!」

驚きの声を上げるはやてちゃんに、私は手短に状況を告げる。だが、状況の急転は止まらなかった。

『…繋がった!!』

「ナツキ君!?」

闇の書さんの中から、更にナツキ君の声が聞こえてくる。ナツキ君も無事だったんだ!!

『なのはだな!?よっしゃ、ユキ、シオン、リニス、ナイスだ!!』

『お兄ちゃん、急いで！！あんまり長くは保たないよ！！』

「え！？ユキちゃんまで！？」

リンクが繋がったことを喜ぶナツキ君の後ろから、聞き違える程明るくなったユキちゃんの声が聞こえて来た。聞いたことない名前の人もいるし、一体何がどうなってるの！？

『悪いが話は後だ！！はやて、聞こえてるか！？』

『う、うん！！聞こえとるよ！！』

『オッケー、闇の書からお前を救い出す為に、一体何が出来る！？』

細かいことは後回しだと尋ねるナツキ君に、はやてちゃんが答える。どうやら空間制御とユキちゃんの頭脳を合わせて、無理矢理リンクを繋いだようだ。

『ゴメン、なのはちゃんは外か？なんとかその子、止めてあげてくれる？』

「え！？」

不意に名前を呼ばれた私は、思わず驚きの声を上げる。闇の書さんは体を動かそうとしているけど、何かに阻まれるように動けないままでいる。

『魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が表に出てると管理者権限が使えへん。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから！！』

「え…、え?」

訳のわからない言葉の羅列に、私の頭がこんがらがる。一体何をどうすれば…?

『闇の書完成後に、管理者が目覚めてる…。これなら…!!』

『ユーノ、どうやら見解は同じみたいだな?』

不意に響いたユーノ君の声に、ナツキ君が不敵に笑う。どうやらユーノ君達にもリンクを繋げていたようだ。

『なのは!!わかりやすく伝えるぞ!!今から言うことをお前が出来れば、はやてもフェイトも俺達も、みんな外に出られる!!』

「う、うん!!」

ナツキ君の言葉に頷きながら、私は耳を傾ける。今この場で私がすべきこと。それは、

『どんな方法でもいい、目の前の奴を魔力ダメージでぶっ飛ばせ!!全力全開、手加減なしで!!』

「っ!!さっすがナツキ君!!」

頼れるパートナーの、大好きな人の声を聞いた私は、レイジングハートを闇の書さん目掛けて構える。

「わっかりやすい!!」

《Ｉｔ' ｓ　ｓｏ（全くです）》

レイジングハートの同意の声と共に、私は魔法陣を展開する。いつだってナツキ君はわかりやすく、私に色々なことを、やるべきことを教えてくれた！！

「エクセリオンバスター、バレル展開！！中距離砲撃モード！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

私達の声がシンクロした瞬間、背の翼が輝きを強める。長かった柄が更に伸び、桜色の六枚翼を展開。先端には、槍の如く鋭利な刃。

《Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ》

レイジングハートの声と共に先端に渦巻いた衝撃波の塊が、暴風の弾丸となって闇の書さんにぶち当たる。マトモに爆風の煽りを受けた闇の書さんが、宙に四肢を拘束される！！

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る。強く支える者。幸運の追い風。祝福のエール」

呆然と私を見上げる彼女に、私は優しく笑い掛け。

「…リイン、フォース」

――その名を、呼んだ。

『そういう訳だ、タイミングは任せる。外で会おうな、フェイト』

「うん、後でね」

そのやり取りを最後に、宙に浮く水晶が輝きを失う。もう言葉はいらない。後は外に出てから、好きなだけ話せばいい。

「外で彼女に出会えたら、よろしくお伝え下さい」

アサルトフォームのバルディッシュに触れ、笑顔と共にリニスが消えて行く。今まで私の面倒を見てくれて、本当にありがとう。

「フェイト。これを」

次に前に出て来たのは母さん。紫色に輝く結晶を、バルディッシュの水晶の中に埋め込む。

「私の魔力の全てが込めてあるわ。上手に使いなさい」

徐々に足元から宙に溶けながら、それでも母さんは優しく笑う。

「ナツキ君と一緒に…、幸せな未来を」

私とお兄ちゃんの幸せを願いながら、母さんも消えて行った。

「行ってらっしゃい、フェイト」

最後に前に出たアリシアが、バルディッシュに触れ自らを構成する魔力を全て注ぎ込んでいく。

「もしも来世で出会えたら…。また私が、お姉ちゃんだといいな」

ニッコリと太陽のような笑みを浮かべたまま、アリシアも光の粒子となって消えて行った。

「…行くよ、バルディッシュ。ザンバーフォーム、やれるね？」

悲しくないと言えば嘘になる。だけど私は、前に進むことを決めたから。

――もう二度と、立ち止まらない。

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（当然）》

「…いい子だ」

いつものように一言で答えた相棒を、私は天へと構える。金色の光が弾けると同時、私の体がバリアジャケットに包まれる。

《Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ》

カートリッジが二発ロードされると同時、バルディッシュがその名を告げる。くるくると回転したヘッド部分が柄を収縮させ、刃の部分が伸び漆黒の柄となる。中央から生えた細長い刃に沿って金色の刃が展開されたその姿は、

――轟雷の、大剣。

「疾風、迅雷！！」

足元に極大の魔法陣を展開した私は、バルディッシュ・ザンバーを

静かに構えた。

「さあ、俺達も始めるぞ。イリヤ、ユキ、行けるな？」

「当然だ」

「もちろん」

振り返った背後、銀髪の少女達が頷きを返す。なのはやフェイト、はやてを基に作られたシオン達は、オリジナルの精神と僅かにリンクしている。そのリンクをリニスとユキがたどり、俺が空間制御で繋ぐ。闇の書の内部空間にいたにも関わらず、外部と連絡が取れたのはその為だ。もし彼女達がいなかったら、俺達は脱出出来なかったかもしれない。

――彼女達は今間違いなく、俺達の命を救ったのだ。

「アクセル、あと少しだけ…、付き合ってくれるか？」

《Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ》

手元を見下ろし尋ねた俺に、相棒はカートリッジをロード。ただ大太刀の姿になることで答えた。…言葉はいらない、ってか。

「…ありがとな」

ただそれだけを告げ、俺は大太刀を大上段に振りかぶる。

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓ

ｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）≫

「切り裂け…！！」

白銀の翼を背負い、俺は同色の魔力を刃に纏わせ始めた。

「「……っ！！」」

応援に駆け付けてくれたユーノ君とアルフさんが、鎖状のバインドで触手を縛り上げている。二人やはやてちゃんが頑張っている今を逃せば、もうチャンスはない。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！！」

万感の想いを込めて叫んだ私に応え、レイジングハートが環状魔法陣を四つ展開する。先端にＤＲＭがかき集めた膨大な魔力が集束し、放たれる時を待ち続けている。

大剣を肩に担ぐようにして構えると同時、大広間内を紫と金の雷が駆け巡る。母さんが、アリシアが、私に力を貸してくれている。なのはやアルフ達、そしてお兄ちゃんが待ってくれている。

――それだけで私は、どこまでも強くなれる！！

「スプライトッ！！ザンバアアアアッ！！」

想いと願いと、ありったけの魔力を込めて。私はバルディッシュを

全力で振り下ろす!!空間破壊効果を付加された大剣が床に触れた瞬間、
――空間が、砕けた。

ユキのサポートを受けて空間破壊の効果が付加された大太刀を、俺は肩に担ぐ。白銀の魔力が渦巻き、夕暮れの光を映した刀身が煌めき輝く。

「トワイライトッ!!ザンバアアアアッ!!」

黄昏の金と白銀の魔力を秘め、全ての始まりである丘目掛け、アクセルを振り下ろす!!

「さようなら…。あたし達の故郷」

ユキの声が響いた瞬間、
――空間に、亀裂が走った。

「ブレイクッ!!シュウウウウトッ!!」

私の叫びと応えるかのように、先端に集束していた桜色の光球がその大きさを倍近くまで膨らませる。フォースバースト、即ち四本のレーザーと化したエクセリオンバスターは互いに競い合うかのように加速し、拘束された闇の書さんにぶち当たる!!その輝きが一際強まった瞬間、
――桜と金と、銀色が弾けた。

「祝福の風、リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります」

金色の空間に浮遊しながら、私はリインフォースの声に耳を傾ける。なのはちゃん達が…、うまくやってくれたんやね…。

「…あっ！！」

宙を見上げたアルフさんが、思わずと言った感じで声を上げる。その視界の先にいるのは、金色の大剣を構えた漆黒の少女。

「…ただいま」

「フェイトっ！！」

静かに告げるフェイトちゃんに、アルフさんが喜びの声を上げる。よかった、無事みたい…！！

「…やれやれ、空間内の空の方が綺麗ってどう思う？」

「それでも現実を選んだのはお兄ちゃんでしょ？」

と、フェイトちゃんとは反対方向の空から、聞き覚えのある声が響いてくる。

「夫婦漫才ですか」

「いやどっちかって言うと…」

「兄妹漫才？」

私達にそっくりな少女を引き連れ、漆黒の衣服を纏った少年と少女が、気の抜けた雑談を交わしている。

「お兄ちゃんっ！！」

「ユキちゃんっ！！」

フェイトちゃんと私の叫びに、振り返ったナツキ君は笑みを浮かべ。

「天城ナツキ、実妹と新たな仲間を連れてただいま帰還、ってな」

――――ピースサインをして、現実への帰還を告げた。

「ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が、じき暴れ出します」

「んー、まぁなんとかしよ」

なのはちゃんやナツキ君、リインフォースもおる。きっとなんとかなるよ。

「行こか、リインフォース」

「はい、我が主」

本来の姿へと戻った闇の書、夜天の魔導書を抱きしめて。私達は、歩き出した。

『みんな、気をつけて!!闇の書の反応、まだ消えてないよ!!』

全員集合してホッとしているなのはさん達に、モニタールームからエイミィが警戒を促す。…そう。まだ、終わっていない。

「さて、ここからが本番よ。クロノ、準備はいい？」

『はい。もう現場に着きます』

海上を飛んでいる息子に通信を飛ばすと、頼もしい言葉が返って来た。頷きを返した私は、手に握られた赤い鍵を見下ろす。

「アルカンシェル…。使わずに、済めばいいけど」

最後の手段、アルカンシェル。周囲への被害が大き過ぎるので、出来れば使いたくはないのだが…。

「…頼んだわよ、ナツキ君」

半年前も絶望的な状況を、その身一つでひっくり返したジョーカーのような少年を思い描き、私はモニターに視線を戻した。

第十八話「名前」（後書き）

はい、今回はここまでです。
戦闘後の余韻なのかなんなのか、gdった感が拭えないw
ユキだけでなくマテリアル、シオン達も救ったナツキは、無事？に脱出しなのは達と合流できました。
ですが、本番はこれからです。最強にして最悪の敵が、まだ一体残っています。

次回、分割につき状況説明回です。

第十九話「仲間」（前書き）

初めて知った真実の重さ。時を超え刻まれた悲しみの記憶。
過去の痛みは、心の中に静かに溶かして。
あの日、胸に灯った炎を消さないように。
深い闇に消えないように。結んだ絆を守る為に。
今、未来へ向かう扉を開く。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

第十九話「仲間」

「管理者権限発動」

金色の世界を漂いながら、私は主として成すべきことを成す。祝福の風を相棒に、闇の書の闇を押さえ込みに掛かる。

「防衛プログラムの進行に、割り込みを掛けました。数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます」

「うん。それだけあったら十分や」

リインフォースの声に答えると同時、私の周囲に光り輝く珠が現れる。紫、紅、翠、青み掛かった白の計四つ。

――リンカーコア。

「リンカーコア送還。守護騎士システム、破損修復」

リンカーコアの輝きが増した瞬間、四色の魔法陣が周りに展開される。光り輝くそれの中から、守護騎士の四人が現れる。

「おいで…。私の騎士達」

――さぁ、行こう。

『闇の書の主、防衛プログラムと完全に分離しました!!』

アレックスの声が脳内に聞こえて来た。どうやらはやてが上手くやってくれたようだ。

『みんな、下の黒い淀みが、暴走が始まる場所になる！！クロノ君が着くまで、無闇に近付いちゃダメだよ！！』

「あ、はい！！」

眼下の海にあるのは、昏き闇の巨大な球体。聖祥附属の校舎がすっぽり入りそうな程大きなそれは、見る者に不快感と忌避感を、何より得体の知れない恐怖を植え付けていく。

「さて…。どうなることやら」

あんなバカげた魔力の塊、俺とユキが命を捨てるくらいの力を尽くしても消せるかどうか。はやてが助かったとは言え、まだまだ問題は山積みのようだ。

「な、ナツキ君！？」

「ん？どうした？」

なのはの傍に降り立つと同時、彼女が顔を蒼白にする。一体どうしたんだか。

「どうしたじゃないよ！！ボロボロで血だらけじゃない！！ユーノ君！！」

「わかってる！！」

なのはに答えたユーノが魔法陣を展開し、俺の体が緑色の光に包まれる。治癒魔法を掛けられて、少しずつ傷が塞がり始めた。

「……あー。そういや俺めちゃくちゃ重傷だったっけ。完全に忘れてた」

ユキの固有結界内で百近くの剣やら短刀が刺さった挙句、槍が腹を貫通したんだっけ。痛覚麻痺してたし必死だったから忘れてた。

「忘れるようなものじゃないでしょ！？」

「お兄ちゃん、大丈夫！？」

顔面蒼白なままのなのはと近寄って来たフェイトが、泣きそうな顔で俺にズイッと詰め寄って来る。…よく見たらバリアジャケットも血で真っ赤じゃん俺。そりゃ誰だってこんな顔するわな。

「大丈夫大丈夫。まだ倒れるには早いしな」

「「…よかったぁ」」

二人の頭を優しく撫でながら言うと、ホッとしたように脱力するなのはとフェイト。

「「「……え」」」

そして落ち着いて互いに互いの状況を見て、俺達は絶句する。巨大な大剣を持つフェイト、桜色の翼を展開し槍のような杖を握るなのは、白銀の翼を生やし身の丈を越える大太刀を下げた俺。そんな三人が互いに顔を見合わせる。

「お、お兄ちゃん!?何その翼!?」

「フェイトちゃん!?なんかバルディッシュがすごいことになってるよ!?」

「とか言うお前もＤＲＭとエクセリオンモード同時使用してんじゃねぇか!!危ないから使うなって言われただろ!?」

フェイトは俺を、なのははフェイトを、俺はなのはを指差し、戸惑いの声を上げる。何この状況。ツッコミ所が多過ぎて何から処理すればいいかわかんねぇ。

「はいはい、三竦みはそこまで」

と、そんな俺達の膠着をユキの声が突き崩した。

「…何なんですか、この混沌としたやり取りは」

「何だ、バカの集まりか」

「とか言いつつ混ざりたそうにちらちら見てるじゃん」

俺達の独特なノリに置いて行かれていた、シオン達も会話に混じってくる。うん、混沌としてるのは否定しない。

「「「「「「「あ…」」」」」」」

と、以前は敵同士だった為か、六人が顔を俯かせ黙り込む。ユキに至っては完全に私情だったから、罪悪感も強いのだろう。

「…なのは、フェイト」

――――だから俺が、六人の架け橋になればいい。

「紹介するよ。実は生きてた妹のユキと、俺達に力を貸してくれるシオンとエリス、イリヤだ」

「「え？」」

ユキ達を指差しながら笑い掛けた俺に、なのはとフェイトが首を傾げる。

「四人共友達がいないからさ…。よければ友達になってやってくれ」

「「「「あ…」」」」

続けた俺の言葉に、ユキ達も声を漏らす。なんとなく、意図は察してくれたようだ。

「…こうして会うのは初めて、だね」

「えと…、その…」

一歩前に踏み出したなのはの言葉に、ユキは顔を俯かせぼそぼそと呟く。…頑張れ、ユキ。

「一緒に頑張ろう、ユキちゃん。今度は、みんなで」

「なのは…」

ニッコリと微笑み告げるなのはの顔を見て、次第にユキの表情も和らいで行く。共にいた時間が長いから、何か通じるものがあったのかもしれない。

「えっと…。何か事情があった、んだよね？」

フェイトも一歩を踏み出し、シオン達に笑い掛けながら尋ねる。

「ええ、まあ…。色々と…」

「事情というか…、何と言うか…」

「…説明するのもバカみたいな理由だがな」

三人が頭を掻いたり視線を逸らしながら、ぼそぼそと答える。…お前ら見てると、類は友を呼ぶって言葉の意味がよくわかるよ。

「じゃあ、もう戦う必要もないよね？」

「はい…」

ニッコリと笑うフェイトに、シオンが頷く。そう、俺達の間を隔てるものは、もう何もない。

「それじゃあ、今度はお友達として。よろしくね、ユキちゃん、シオンちゃん」

「エリスと、イリヤも」

なのはとフェイトが満面の笑顔を見せながら、四人に向けて両手を差し出す。

「…うん。ありがとう」

「…はい。よろしくお願いします」

「えっと、なんだかんだで色々あったけど、よろしく」

「…ありがとう」

四人も応じぎこちないながらも、笑みを浮かべて手を握る。…きっと、大丈夫だ。

「うし、これでオッケー」

パン、と手を叩くと同時、ユキが大剣となったバルディッシュに視線を落とす。

「…会うのは初めて、かしらね」

不意にそう呟いたユキに対し、

《Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　ｔｈｅ　ｐｒｏｄｕｃｅｒ（初めまして、製作者）》

――バルディッシュは、衝撃的な答えを返した。

「「「「「え…？」」」」」

製作…、者…？

「あれ？知らなかった？バルディッシュを設計したのはあたしよ」

「「「「「え…、えええええええっ！？」」」」」

ユキの口から発された衝撃的な発言に、場が絶叫で包まれる。え、嘘！？マジで！？

「昔街中で辛気臭い顔したリニスに会ってねー、ちょっと図面を直してあげたの」

「そうだったんだ…」

つまり俺達三人共、ユキが作ったデバイスを使ってた訳か。そりゃ引き寄せられても不思議じゃないわな。

「…通りでバルディッシュの改造も出来た訳だ」

「まぁ、初見のデバイスでも堅くなければ五分で解析出来るけどね」

…おい。何この子。マジで世界滅ぼせるんじゃないのか？

「「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」」

と、そんなことを考えていた俺達の視界が、純白の光に包まれる。輝きの中心には白い球体と白いベルカ式魔法陣があり、それを守るように囲んで立っているのは、

「ヴィータちゃん！！」

「シグナム！？」

二人だけではない。シャマルとザフィーラもいる。闇の書に蒐集され消えてしまったはずの守護騎士達が、完全に復活していた。

「純白の魔力光…。まさか！？」

復活した守護騎士達、ベルカ式魔法陣、イリヤと同じ純白の魔力光。そこら導き出される結論はただ一つ。

――八神はやての、覚醒。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主有る限り、我等の魂尽きることなし」

「この身に命が有る限り、我等は御身の下にあり」

「我等が主、夜天の王。八神はやての名の下に」

四人の守護騎士達が誓いの祝詞を上げると同時、純白の輝きが強まる。

――夜天の、光。

「リインフォース、私の杖と甲冑を」

「はい」

二人の少女の声が響いた瞬間、純白の球体が砕け散った。中から現れたのは、ノースリーブのシャツとミニスカートを合わせたような、

ベルカ式のバリアジャケットとも言える黒い騎士甲冑を纏い、本来の姿を取り戻した夜天の魔導書と、剣十字の装飾があしらわれた身の丈を越える、金色の杖を携えた八神はやて。
――夜天の、王。

「はやてちゃん！！」

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース、セェェエット・アップ！！」

なのはに微笑み返したはやてが杖を掲げ叫ぶと同時、杖から純白と漆黒が弾けた。腰のバイザーからマントが伸び、丈の短い純白のジャケットを身に纏う。茶色だった髪はクリーム色に変わり、頭にはベレー帽。背から漆黒の六枚翼が生えると同時に開いた瞳は、澄み渡る空の蒼。
そこにいるのはもはや、闇の書に蝕まれ世界に絶望した哀れな少女などではない。
――夜天の騎士達を統べる、小さいながらも立派な王。

「…かっけぇなちくしょう」

笑いと共にそんな言葉を漏らしながら、俺達ははやての下へと向かった。

「はやて…」

「ん」

瞳を潤ませながらこちらを見るヴィータに、私は優しく微笑み掛ける。優しい子やから、一番辛かったろな…。

「すみません…」

「あの…、はやてちゃん…。私達…」

シグナムとシャマルも顔を俯かせ、私に謝ってくる。…もう、みんなして気にし過ぎや。

「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど、細かいことは後や。今は…」

そう、ただ今は。

「お帰り、みんな」

――――みんなの無事を、喜ぼう。

「う…、うわあああああん!!」

感極まったのか、ヴィータが泣きながら私に抱き着いて来た。…ほんま、ヴィータは甘えん坊さんやなぁ。

「はやてぇっ!!はやてぇっ!!はやてぇっ!!」

私の無事を確かめるように、ぎゅうっと私を抱きしめながら、何度も名前を呼ぶヴィータ。みんな…、ほんまありがとうな。

「…とりあえず、問題なさそうだな」

ふわりと降り立ったナツキ君が、優しく笑いながらそう言ってくる。後ろにはなのはちゃんやフェイトちゃん達。特にナツキ君となのはちゃんはボロボロで、相当大変だったのだろうことは想像に難くない。

「なのはちゃんとフェイトちゃん、ナツキ君もごめんな。家の子達が色々迷惑掛けてもうて」

ヴィータの頭を撫でてやりながら、三人に頭を下げる。内部空間に閉じ込められたり、防衛プログラムと戦ったりで散々やったしな。

「ううん」

「平気」

「気にすんな」

対し三人は笑顔で答える。懐が深いと言うか、お人よしと言うか。

「リインフォースから話は聞いてる。ナツキ君の妹さんと、私やなのはちゃん達を基にしたマテリアルやね？」

そのまま背後の四人、漆黒の少女達に視線を送る。フェイトちゃんによく似た銀髪の少女と、私達にそっくりな三人の少女。

「…初めまして、ね」

「間接的にですが、あなた方にも迷惑をお掛けしました。すみません」

ユキちゃんがバツの悪そうな顔で口を開き、シオンちゃんが頭を下げる。…もう。

「ええよ。それはお互い様や。それにイリヤちゃん達は私達にとって、双子の妹みたいなもんやろ？」

私達を基にしているんだから、イリヤちゃん達は私達の妹みたいなもの。そう思っての発言だったのだが、

「…つまりはやては我の姉上なのか？」

「…え、フェイトがボクのお姉ちゃん？」

「…なのはは私の姉さんですか」

思ったよりも大きな影響があったようで、三人がぽかんとした表情を浮かべる。

「「えええええええっ！？」」

そして三人の発言に、なのはちゃんとフェイトちゃんに驚きが伝染した。なんやもうみんなして。

「えと、その、突然言われても…」

「わ、私はお兄ちゃんの妹のままでいいよ」

わたわたオロオロとしながら、手をブンブンと振る二人。って、フェイトちゃんさりげなく凄まじいこと口走ってへん！？

「あ、つまりナツキもボクのお兄ちゃんなんだ」

「仮に私がナツキと結婚した場合、なのははナツキに姉さんと呼ばれる訳ですか」

「そうなると我の場合は…、八神家の末っ子か？」

が、そんな二人を見てエリスちゃんが素で、シオンちゃんはニヤリと、イリヤちゃんはヴィータ達を眺めながら続ける。…シオンちゃん、いい性格しとるなぁ…。

「はいはい、面白おかしい未来予想は後回しよ」

「そういう楽しい話はいつでも出来るしな」

そんな混沌とした空気を断ち切ったのは、天城兄妹のツッコミだった。二人の視線の先を見遣ると。

「…済まないな」

黒い服を纏った少年が、宙から舞い降りて来るところだった。

「水を差してしまうんだが…。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「まぁ、今は切羽詰まってるから仕方ないさ。状況は？」

すまなそうに会話に混じって来た少年、クロノ君に苦笑しながら、ナツキ君が視線を鋭くする。

「時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが、あと数分で暴走を開始する。僕らはそれを、なんらかの方法で止めないといけない」

頷きと共に説明を開始したクロノ君が、眼下の闇を鋭い視線で見下ろす。

「停止のプランは現在二つある。一つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシェルで消滅させる。これ以外に、他にいい手はないか？闇の書の主と、その守護騎士の皆に聞きたい」

手に握った銀色のカードと、遥か上空を指差しながらクロノ君が尋ねてくる。確かに彼らよりも、私達の方が闇の書のことをよく知っている。

「えーと…、最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん」

――それ故に、状況が絶望的だとわかってしまう。シャマルとシグナムの言葉に、クロノ君も顔を歪めた。

「アルカンシェルも絶っ対ダメ！！こんな所でアルカンシェル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

「そ、そんなにすごいの…？」

泣き止んだヴィータが両手で×の字を作りながらもう一方のプランを却下した。そのあまりの語調の強さに、なのはちゃんが近くのユーノ君へと顔を向ける。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。って言うと、だいたいわかる？」

「……？」

が、説明が難し過ぎるのかなのはちゃんは、頭に疑問符を浮かべ首を傾げる。ちなみに私やフェイトちゃんもよくわからず、みんな仲良く首を捻っている。

「…要は、ここで撃ったら防衛プログラムどころか、海鳴市までぶっ飛ばしちまうような危険なものってことだよ」

「「「っ！？」」」

溜め息混じりにめちゃくちゃざっくりわかりやすく説明してくれたナツキ君の言葉に、私達の顔が青ざめる。海鳴市までぶっ飛ばすって…、どんだけやねん！？

「あの、私もそれ反対！！」

「同じく、絶対反対！！」

「わ、私も反対！！」

クロノ君に詰め寄りながら、三人で反対意見を述べる。私達だけじゃなく、その場の全員が頷きを返した。

「僕も艦長も使いたくないよ…。でも、あれの暴走が本格的に始まったら、被害はそれより遥かに大きくなる」

「暴走が始まると触れたものを侵食して、無限に広がって行くから…」

悔しげに顔を歪めたクロノ君に、暗い表情でユーノ君が続ける。…ほんま、八方塞がりって言葉がピッタリ過ぎるくらいピッタリやわ…。

「ユキ、お前の固有結界で消滅させられないか？」

「対象範囲が広過ぎ。いくらＤＲＭで魔力を供給しても、領域を広げるのは難しいわ」

ナツキ君がユキちゃんに尋ねてみるも、ユキちゃんは両手を上げて溜め息。…参ったなぁ。

『はい、みんな！！暴走臨界点まで、あと十五分切ったよ！！会議の決断は、お早めに！！』

と、通信から少女の声が決断を迫って来た。時間もあんまりない、早くなんとかせななあかん…。

「…何かないか？」

「済まない、あまり役に立てそうもない」

「暴走に立ち会った経験は、我等にもほとんどないのだ」

尋ねたクロノ君にシグナムとザフィーラが、顔を俯かせながら答える。そうなると頼れるのはリインフォースくらいやけど…。

『リインフォース、どう？』

『今打開策を探していますが…、難しいですね…』

私と融合しているリインフォースに念話で尋ねてみるも、芳しい答えは返って来なかった。あかん、ほんまに手がない…。

「でも、なんとか止めないと…。はやてちゃんのお家がなくなっちゃうの、嫌ですし」

「いや、そういうレベルの話じゃないんだがな…」

気合いを入れ意気込むシャマルに、クロノ君が冷静にツッコミ。まあ確かに、海鳴市がなくなる云々の話なのに私の家だけ残っても…、なぁ？

「戦闘地点をもっと沖合に出来れば…」

「海でも空間歪曲の被害は出る。いかに天城でもその余波を全て抑え切るのは不可能だ」

ユーノ君が名案とばかりに呟くがシグナムに否定され頭を掻く。と、

「「あああああ、もおおおお！！」」

アルフさんとエリスちゃんが、頭を掻きむしりながら絶叫した。な、

なんなん!?

「なんかごちゃごちゃ鬱陶しいなぁ…!!」

「みんなでズバッとぶっ飛ばしちゃえばいいじゃん!!」

そのあまりにも極端で力任せ過ぎる提案に、場のみんながずっこける。ぶっ飛ばすて…。

「アルフ…、エリス…」

「これはそんなに単純な話じゃ…」

「「うう…」」

ユーノ君とクロノ君の言葉に、二人が呻きながら縮こまる。けど、

「…ズバッと、ぶっ飛ばす?」

二人の言葉に何かを感じたのか、なのはちゃんがぽつりと呟く。

「ここで撃ったら被害が大きいから撃てへん…」

「でも、ここじゃなければ…」

私とフェイトちゃんも首を捻りながら、ぶつぶつと呟く。ぶっ飛ばす、ここでは撃てない、ここ以外。

――それらの言葉が、繋がる。

「「「……っ!!」」」

待ちい…、もしかして!?

「ユキ!!シュミレート開始!!」

「もうやってるよ!!」

ほぼ同時に気付いたのかナツキ君がユキちゃんに指示を飛ばし、宙に歪な杖を突き立てたユキちゃんの周囲に黄緑色に輝くキーボードが現れる。それらを残像が見える程の高速で叩きながら、ユキちゃんが何かを計算し始めた。

「上等!!クロノ!!」

「なんだ?」

それを見届けたナツキ君が、クロノ君に声を飛ばす。

「アルカンシェルって、どこでも撃てるの!?」

「どこでも、って…。例えば?」

続けて尋ねたなのはちゃんに、クロノ君が例を尋ねてくる。

「今、アースラのいる場所…!!」

「軌道上…、宇宙空間で!!」

更にフェイトちゃんと私が引き継ぎ、遥か上空にいるであろうアースラを見上げる。

『管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなぁ…。撃てますよぉ…、宇宙だろうが、どこだろうが！！』

「おい！！ちょっと待て君ら、まさか…！？」

オペレーターの少女の言葉で何か勘付いたのか、クロノ君が信じられないと言わんばかりに尋ねてくるが、

――――私達五人は笑顔で、その予想を肯定した。

「光…、収まった？」

「うん…、海にまだ黒いのがあるけど…」

高台から海上に蠢く闇を眺めながら、私はアリサちゃんと言葉を交わす。さっきまで黒と桜がぶつかり合ってたけど、それも収まったみたい。

「一体何なの…？まさかこんなのが、このままずっと続いたりしないよね…？」

「何となくなんだけど…、大丈夫な気がするの」

不安げに呟くアリサちゃんに、私はぽつりと呟く。

「え？」

「きっと、戦ってくれてるから」

白い少女と、黒い少女、そして、銀色の少年が、きっと立ち向かってくれている。そんな気がした。

「なのはとフェイト、ナツキが？」

「うん」

こくりと頷いた私を見て、アリサちゃんが溜め息一つ。

「…すずかに真顔で言われると、なんかそんな気がするから怖いわ…」

…どういう意味だろう、それ。信頼されてる、ってことでいいのかな…？

「…まぁ、それにしても、よ」

そのことについて尋ねようとした瞬間、アリサちゃんが俯いた。…どうしたのかな？

「あああああもおおおおお！！訳わかんない！！楽しいクリスマス・イヴに一体どういう事態なの！？夢なら覚めて、一刻も早く覚めてよおおおおお！！」

「あ、アリサちゃん、落ち着いて…」

癇癪を起こしたかのように暴れるアリサちゃんを必死に押さえながら、私は海上に視線を移す。

（なのはちゃん…、フェイトちゃん…、ナツキ君…）

――大丈夫、だよね？

『…なんともまぁ、相変わらずものすごいと言うか、ぶっ飛んでると言うか…』

ブリッジにいる母さんから、感心と呆れを足して割ったような声が投げ掛けられる。正直僕も同じ気持ちだ。

「シュミレート完了！！全員が限界まで力を使えば、成功率は１００％！！しかも周囲への被害はなし！！」

『計算上では、実現可能ってのがまた怖いですね…。クロノ君、こっちのスタンバイはオッケー。暴走臨界点まで、あと十分！！』

成功確率の計算を終えたユキの叫びと、コンソールを操作するエイミィの声が重なる。…やるしかない、な。

「実に個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが…。まぁ、やってみる価値はある」

全員の顔を見回しながら、僕は静かに決行を告げる。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合七層式。まずはそれを破る」

「バリアを抜いたら本体に向けて、私達の一斉砲撃でコアを露出さ

せる」

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！！」

『後は、アルカンシェルで蒸発、っと』

『上手く行けば、これがベストですね』

はやてとフェイト、なのはに母さんが作戦をおさらいし、エイミィが笑みと共に呟く。もしこのプランが成功したら、周囲への被害はゼロ。まさに最高のシナリオだ。

「フェイト、バルディッシュ貸して。成功率上げる為にも、ＤＲＭを組み込むから」

「え…、うん。お願い」

黄緑色の台座を作りながらのユキの言葉に、フェイトがバルディッシュを託す。作戦の要である最後の一斉砲撃を任されている以上、戦力を上げておいて損はない。

「それと…、はやて」

「ん？」

キーボードを高速で叩きながら、ユキがはやてに銀色のブレスレットを放り投げる。そこに刻まれている文字は、

――ＤＲＭ。

「それを使えば一回だけ、無限の魔力を得られるわ。上手く使って」

「…うん。ありがとな、ユキちゃん」

おそらく単発用であろうそれを左手首に嵌め、ユキに礼を述べるはやて。ＤＲＭ保有者が五人か…。最強とか無敵を通り越して、神にでもなるつもりなのだろうか。

「提督、見えますか？」

『ああ、よく見えるよ』

そんなメンバーを尻目に通信回線を開きながら、この光景を見ているであろう提督に語り掛ける。彼の声はいつも通り静かで、だけど何かを期待しているようにも思えた。

「闇の書は、呪われた魔導書でした。その呪いはいくつもの人生を食らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせて来ました。あれのおかげで僕も母さんも、他の多くの被害者遺族も、こんなはずじゃない人生を進まなきゃならなくなった。それはきっとあなたも、リーゼ達も」

はやても、母さんも、父さんも。僕も提督もリーゼ達も、他の人達も。運命に弄ばれて苛酷な人生を歩まざるを得なくなった。

「なくしてしまった過去は、変えることが出来ない。だから…」

呟きと共に銀色のカードを、提督から託された切り札を起動する。

《Ｓｔａｒｔ　ｕｐ（起動）》

水色の輝きが弾けた瞬間、カードが杖へと変化する。槍をモチーフにした銀色の杖は、静かに主の声に応えた。

『アルカンシェル、チャージ開始!!』

『『はいっ!!』』

母さんの声と、アレックスとランディの応答に重ねるようにして。

「だから僕達は、今を戦って…、未来を変えます」

――――決意と覚悟を、告げた。

『暴走開始まで、あと三分!!』

眼下の蠢く闇を眺めていると、エイミィのアナウンスが聞こえてきた。…そろそろ、動き始めないとな。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ナツキ君」

「「「?」」」

と、並んで眼下を見据えていた俺達に、はやてが声を掛けてくる。…どうしたのだろうか。

「シャマル」

「はい、三人の治療ですね」

はやてが振り返った先には、ニコニコ微笑むシャマルの姿。…なんだ？

「クラールヴィント、本領発揮よ」

《Ｊａ（はい）》

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シャマルがクラールヴィントに口づけると同時、足元に翠色の魔法陣が展開される。周囲が翠の輝きに包まれ、心安らぐ空間が広がっていく。

「あ…」

「え…」

「すご…」

輝きに包まれた俺達の傷が癒え、ボロボロだったバリアジャケットも修復されていく。たった一人で、ここまで癒せるものなのか…！？

「湖の騎士シャマルと、風のリングクラールヴィント。癒しと補助が本領です」

翠色の花びらを手に乗せて、ニッコリと微笑むシャマル。なるほど、通りで今まで前線に出て来なかった訳だ。

「すごいです！！」

「ありがとうございます、シャマルさん！！」

ダメージの少なかったフェイトは言うに及ばず、闇の書の意思との戦闘で疲弊していたなのはも完全回復。ユーノの治療で辛うじて持ち直したくらいの俺の傷も、跡形もなく癒されていた。…凄まじいな。

「あたし達はサポート班だ。あのうざいバリケードを上手く止めるよ」

「うん」

「ああ」

そんな俺達をよそに、アルフとユーノ、ザフィーラのサポート班は手筈を確認している。周囲に蠢く触手達を潰さなければ俺達の作戦は始まらない為、かなりの重役とも言える。…頼むぞ、三人共。

「シオン。エリス。イリヤ。今まで色々あったけど、これはとても大事な戦い。だから絶対、勝ちに行くわよ」

「「「お言葉のままに」」」

少し離れたところではユキとシオン達が、決意を固め戦意を漲らせている。この戦いを終えての、みんなでの暮らし。それを心待ちにしているであろうことは想像に難くない。

「よし、全員集まって円になってくれ」

そんな光景を眺めていた俺は、全員を集めて円陣を組む。柄でもないが、戦意の高揚でもさせときますか。

「見ての通り状況は切羽詰まってて、このままじゃ世界が滅ぶかもしれない。今世界の運命は、俺達十五…、いや、リインフォースも含めた十六人に懸かっていると言っても、過言ではないと思う」

俺の言葉に全員の顔が険しくなる。それは当然だろう。たった十六人の少年少女達に世界の命運が懸かっていて、一歩間違えれば全てが終わるかもしれないのだから。

「でもな…、正直に言うと、俺は世界なんてどうでもいいんだ」

「「「

「だからお前らも、胸の内に大切な人を思い描け。一人でもいい、ちっぽけでもいい、守りたいものを思い描け」

再び全員の顔を見据えながら、俺は言葉を紡ぎ続ける。この場の全員が、何かを守る為に集まった存在だと言うならば。

「魔法の力は想いの力。守りたいという想いがあれば、俺達は誰が相手だろうと絶対に勝てるって信じてる」

守りたい心が、強い願いが、悲しい運命を切り開く。半年前だって出来たんだ、あの時以上に繋がれて強くなった今の俺に、出来ない道理はない。

「だから、行こうぜ。友との明日を守る為に。最高に幸せな世界（未来）を作る為に」

笑いと共に言葉を締めて、握った拳を前に突き出す。この事件が始まった時に、なのはとフェイトと交わした誓い。

――絆の、誓い。

「世界の命運より目の前の仲間、ね…。さっすがお兄ちゃん。あたしに負けず劣らず狂ってるね」

ユキが楽しそうに笑いながら、左の拳を差し出してくる。

「あなたがどの道を選んだとしても、私達は最後までご一緒します」

シオンも柔らかく微笑み、左手を。

「我等三人は何があろうと、うぬを守ると誓ったであろう」

イリヤがニヤリと笑みを浮かべ、右手を。

「よおおおし、なんだかボク燃えて来た！！」

気合いを入れたエリスも、応じるように右手を。

「ホントにもう、かっこよく決めちゃって」

やれやれと言わんばかりの苦笑と共に、ユーノが右手を。

「さっすがナツキ！！フェイトが見込んだだけあるね♪」

アルフも楽しげに笑い、右手を。

「同じ守護者の想いの叫び、しかと我等の心に届いた」

ザフィーラが凛々しい顔付きで、右の拳を。

「我等守護者の願いはただ一つ。ならば肩を並べ、共に行こう。天城」

シグナムも微かに笑い、右の拳を。

「おもしれぇ、やってやんよ！！」

ニヤリと笑みを浮かべ、ヴィータが右手を。

「前線には出られませんが…、バックアップは任せて下さい」

ニッコリと微笑みながら、シャマルが右手を。

「まぁ、元々原因は私らやしな」

はやてもニコニコ笑いながら、右手を。

「世界を守る管理局に所属している身として大きな声では言えないが…、確かにそれには一理ある」

クロノも苦笑と共に、握った右手を差し出す。

――そして、俺の大切な人達も。

「ナツキ君」

「お兄ちゃん」

俺の瞳をしっかりと見据え、二人が手を差し出す。俺がここまで来れたのは、彼女達に支えて貰ったから。

――だから今度は、俺が。

「…ああ」

言葉はいらない。俺達三人はいつだって、心で繋がっているのだから。

「みんな!!勝つぞ!!」

三度見回し絶叫した俺の言葉に、

「「「

「」

十四人の若き勇者達の答えが、シンクロした。

第十九話「仲間」（後書き）

はい、今回はここまでです。
前半部分だけで1万文字越えるとかもう駄目だ俺ｗ
いくらなのは書き始めた理由の半分である回とは言え…、ねぇ？ｗ
しかしナツキ…、相変わらずと言うかなんというかｗ

次回、最終決戦。

第二十話「力」（前書き）

立ち塞がるは、悠久の時を経た悲しみの闇。
立ち向かうは、強い絆で結ばれた少年と少女達。
全てを終わらせる為に、全ての力を尽くして。今、最後の戦いを始めよう。
明るく笑い合える明日の為に。みんなと歩む、未来の為に。
楽園の守護者と、災厄を切り裂く刃の名に懸けて。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

※水樹奈々さんのＢＲＡＶＥ　ＰＨＯＥＮＩＸを激しく推奨。

第二十話「力」

「始まる…」

管理局の少年が眼下の闇を見下ろした瞬間、周囲から闇が光の柱となって立ち上る。何も知らない者が同じものを見たとしても、「何か」が目覚めると本能的に理解させる、その光景。

――闇の、恐怖。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…。闇の書の…、闇」

我が主が静かに呟く中、それは現れた。

――闇を無理矢理型に押し込めたかのような、異形の龍。

巨大な爬虫類のような体、その胴体を突き破って生えたような甲殻類の太い六本足。ＤＲＭのものとは比べものにならない程長大な六枚翼、血走った赤い瞳。

――そして頭部から生えた、紫色の肌をした女性の上半身。私にそっくりな、人の形を弄びし何か。

まさに異形、まさに異端。以前天城や守護騎士達が戦った黒龍をベースに、更に凶悪化した巨大な怪物。魔法という非現実的な環境に身を置く者でありながら、更にその先へと至った何か。

――真の、闇。

「ゴオオアアアアアア！！」

闇から生まれ落ちた歪な雛鳥が、耳障りな産声を上げる。圧倒的なプレッシャーを秘めたそれに、歴戦の魔導師達も思わず固まってしまう。だが、そんな中彼だけは、

「…はっ」

――――不敵に、笑った。

「よかったよ…。奴がリインフォースの姿じゃなくて、本当によかった…」

全員が訝しげな視線を向ける中、黒衣の少年は俯きながら笑う。私の名を出したことに疑問を覚えた瞬間、

「全力全開、手加減なしで…。あいつをぶっ飛ばせるんだからなぁっ！！」

顔を上げニヤリと笑みを浮かべた守護者が、猛き雄叫びを上げた。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｆａｌｌ》

ズドオオオオン！！

デバイスの銀刀の声と同時、飛び立とうとしていた異形の龍が高圧重力によって海面に叩き付けられる。優しさ故に誰が相手でも、全力を出し切れていなかった少年が無限の魔力を得て、今その全ての力を発揮していた。

「縛れ、鋼の軛！！でえええええええあっ！！」

その隙を逃すことなく、蒼き狼が続いた。正面に展開した魔法陣から現れた青白い光が、鞭のように龍の周囲、海面に蠢くワーム状の触手を薙ぎ払っていく！！

「ゴオオアアアアア！！」

負けじとばかりに龍も触手を伸ばし反撃に出た。四方八方から複雑な軌跡を描き、私達目掛けて襲い掛かる！！

「チェーンバインドッ！！」

「ストラグルバインドッ！！」

が、橙色の少女と緑色の少年が魔法陣を展開。数十本からなる輝く鎖で触手を縛り上げ、その全てを引きちぎって行く！！

「さぁ、始めるぞ！！」

白銀の翼を羽ばたかせ、銀刀の少年が所定の位置に着く。私は主の中から、先陣を切る三人の少女達に視線を移した。

「ちゃんと合わせて下さいよ…！！なのは！！ヴィータ！！」

「シオンちゃんもね！！」

槍の如きそっくりなデバイスを構えた、鏡写しの少女達が言葉を交わす。片方は白と桜、片方は黒と紫。正反対の衣と得物を携えた二人だが、その想いは同じだった。

「…最初は、あたしがやる」

――――そして、それはあたしも。

「ヴィータちゃん…？」

一歩を踏み出したあたしを、白い少女が心配げに見遣る。…今まで敵対してたってのにホント、こいつらの優しさは底無しだな。

「…しっかりやれよ、シオン！！なのは！！」

二人の顔をしっかりと見据え、あたしは二人の名前とそれだけを告げる。言葉はいらない。今はその一言だけで通じる。そんな確信染みた信頼があった。

「…！！うんっ！！」

「はいっ！！」

威勢よく答えた二人に笑い掛け、背を向けたあたしはグラーフアイゼンを担ぐように構える。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！！」

堂々と名乗りを上げると同時、アイゼンの柄が伸び、縮んだ。ロードするカートリッジは三発。一度に装填出来る、限界数。

《Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ》

アイゼンの声と同時、デバイスを魔力が駆け巡る。ハンマーの頭部が紅い光に包まれて分解、金色のパーツを中心に、あたしの頭数個分程の巨大な鉄が合体する。あたしの、アイゼンの、最後の切り札。

自身の数倍の大きさとなった巨大な鉄槌、ギガントフォルム。
――その姿は、まさに巨人（ギガント）。

「轟ォ天ッ、爆砕ッ！！」

だが、それだけでは終わらない。あたしがアイゼンを振りかぶると同時、巨大な鉄槌が更にその身を膨張させる。柄が雲を貫き天を衝く程まで伸び、頭部は黒龍と同等かそれ以上の大きさへと変貌する。
――巨人？いいや違う。これはもう、そんな生温いものではない。

「ギガントシュラアアアアアクッ！！」

絶叫と共に巨神の一撃を、その得物である鉄槌を振りかぶり、全力で振り下ろすっ！！

バヂィッ！！

第一層目である赤いバリアと、紅き鉄の鉄槌がぶつかり合い、激しい火花を散らす。さすがは闇の書の闇。膨大な魔力の塊が相手じゃ、あたしのギガントでも辛うじて互角と言ったところか。
――だけど、あたしには守りたいものがある。

「おおおおおおっ！！」

文字通り全ての魔力を注ぎ込み、アイゼンを握る手に力を込める。後先は考えなくていい。ただ全ての力を尽くせ。あたしとアイゼンのコンビに、壊せないものなど何もない。

「ぶち抜けえええええええっ！！」

――ただ今は、大切（はやて）な主を守る為に！！
想いを叫びと力に変えて、渾身の力を込めてアイゼンを振り抜くっ！！

バリィィィィン！！

「頼むぞ…！！シオォォォォォンッ！！」

赤い欠片が降り注ぐ中、荒い息を整えながら。
――あたしは、その名を呼んだ。

「星光の殲滅者シオン、ルシフェリオン！！行きますっ！！」

ヴィータの叫びと想いを受け取り、私は足元に魔法陣を展開する。
オリジナルであるなのはと同じ、桜色のその輝きを手に私は叫ぶ。

「集え明星、全てを焼き消す焔となれ！！主に降り懸かる災厄を、その身を以って焼き払え！！」

正面に展開された極大の魔法陣に、桜色の輝きが集い始める。流星のようにも見えるそれは、膨大な魔力の塊。

「行きますよ…、ルシフェリオン！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（もちろんです）》

ルシフェリオンに声を飛ばしながら、私は頼もしき愛機を振りかぶる。魔法の力が想いの力だと言うのなら、

――主ナツキへの私の想い、その全てをこの一撃に!!

「ルシフェリオンッ!!ブレイカアアアアアアッ!!」

魔法陣に槍と見紛うその杖を突き込んだ瞬間、桜色の魔砲が突っ走る!!巨大な魔力の奔流となって、異形の黒龍を覆う二層目の橙色にぶち当たった!!

「くっ…!!」

文句無しに私の最強の技を叩き込んでいるのに、バリアは未だ砕けない。桜と橙が火花を散らし、幻想的な光景が繰り広げられる。

「な…、めるなあああああああっ!!」

今だけでいい。主の為、彼の大切な人達の為、

――私に悲しみを撃ち抜く力を!!

「はあああああああっ!!」

絶叫と同時、ルシフェリオンの輝きが増す。限界を越えた魔力放出に、愛機がミシミシと悲鳴を上げるが、

バリィィィィン!!

――桜色が、橙色を、貫いた。

「頼みましたよ…、なのは…!!」

橙色の破片が桜色と混じって散って行く中、私はオリジナルたる彼

女を、
――――不屈の心を持つ、桜色の天使の名を呼んだ。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン！！行きますっ！！」

託された二人分の想いを受け取り、私はレイジングハートを構える。
この戦いは絶対に、負ける訳には行かない。

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ガシュンガシュン！！

レイジングハートを天に掲げ足元に魔法陣を描くと同時、カートリッジを四発ロード。槍の如き杖の先端から六枚翼が広がり、背中の翼が周囲の魔力を吸収し始める。

「行くよ、レイジングハート！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

頼もしく答えるレイジングハートをバトンのようにくるくると回し、闇の書の闇、異形の龍目掛けて構える！！

「ゴオオアアアアアア！！」

再生し始めた触手が蠢き、私達目掛けて襲い掛かる。だけど私は、微動だにしない。

――まとめて撃ち抜けば、それでいい！！

「エクセリオンッ、バスタアアアアアアッ！！」

《Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ》

レイジングハートの先端に集束した荒れ狂う暴風が、巨大な風の弾丸と化して触手達を吹き飛ばし、三層目の黄色にぶち当たるっ！！

「ブレイクッ！！」

だが、まだ終わりではない。バレルショットはあくまで対象の拘束用。

――本命は、これから！！

「シュウウウウウウウトッ！！」

レイジングハートから放たれた四本の桜色が互いに競い合うかのように加速し、黄色いバリアにぶち当たる！！

「く…、うっ…！！」

が、その守りは堅固にして強大。シオンちゃんのブレイカーでも辛うじて破壊出来るようなものだった代物を、エクセリオンバスターで破壊しきれる自信はない。けど、

「ナツキ君と一緒なら、私は…！！」

大好きな人を、守りたい人を胸の内に描く。いつだって私達の前に立ってくれた、ただ私達を守りたいと言ってくれた少年を。

――だから私も、応えたい！！

「どこまでだって、羽ばたいてみせる！！」

叫ぶと同時背中の輝きが増し、更に大量の魔力が集束する。四本のレーザーをレールにしたかのように、中央から桜色の巨大な一撃が放たれる！！

バリィィィィン！！

――そして、三層目の黄色が、砕けた。

「やったよ…、ナツキ君…！！」

私は笑みを浮かべながら、第二班の先陣を切る剣の少女に視線を送った。

「次、シグナムとエリスちゃん、テスタロッサちゃん！！」

シャマルの声を聞いた私は、瞑想の為閉じていた目を開ける。眼下にあるは深淵の闇、この身にあるは絆の力。

「剣の騎士、烈火の将シグナム…。炎の魔剣、レヴァンテイン」

名乗りと共に利き手ではない左手で抜刀したレヴァンテインを、天高く掲げる。これは礼儀。かつて我等と同じであったもの、共に歩んで来たものへの敬意。

――我等が銘は、守護の騎士。

「刃の連結刃に続く、もう一つの姿を…。今、見せよう…」

右手に握った鞘を柄に触れさせると同時、鞘が紫色の輝きに包まれる。柄の下端から刃が生えた薙刀のようなレヴァンテインがカートリッジを一発ロード、再びの紫色が消えた時そこにあったのは、

――巨大な、極弓。

《Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ》

紫色の弦を引き絞ると同時、カートリッジを二発ロード。右手に一番えの長大な矢が握られる。わざわざ左手で抜刀したのは、この為の布石。

――私とレヴァンテインの切り札で、確実に四層目を射抜く為。

「騎士が誇りと魂に懸けて、主に降り懸かる災厄を討ち滅ぼさん！！」

ィィィィィィィン！！

足元に展開された魔法陣から赤き業火が立ち上り、膨大な魔力を矢に集中させて行く。全ての魔力を注ぎ込み、全身全霊の一撃に想いを込める。

「翔けよ、隼っ！！」

《Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ！！》

二人の声がシンクロした瞬間、紫色の輝きを纏った破魔の矢が、流星の如く空を翔ける。

――その姿はまさに、疾風（シュツルムファルケン）の隼。

バリィィィィン！！

「抜かるなよ…、エリス！！」

砕け散って行く緑色を眺めながら、私は五層目担当の少女に檄を飛ばした。

「雷刃の襲撃者エリス、バルニフィカス！！行くよっ！！」

シグナムの激励を受け取ったボクは、足元に魔法陣を展開する。手に握った金色の大剣を掲げ、雷と魔力を集束させて行く。

「砕け散れ、雷神滅殺！！主君を苛む災厄を、轟雷の剣で穿ち貫け！！」

オリジナルであるフェイトと同じ金色の輝きが弾け、空間が帯電していく。巨大な雷の刀身が、更にその身を膨張させていく。

「行くよ、バルニフィカス！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

ボク達を救ってくれたナツキの為に、ナツキやフェイト達と歩む明日の為に。

――全てを、切り裂け！！

「極光ォォォォォォォ斬ッ！！」

大上段から振り下ろした大剣が、更にその刀身を巨大化させていく。剣先とバリアの距離をぐんぐん縮め、五層目の青にぶち当たるっ！！

「ちぃっ…！！」

みんなの様子から薄々とわかってはいたが、めちゃくちゃ固い。文字通り全部の魔力を込めたのに、逆にバルニフィカスの方が砕けそうだ。

「こん、のおおおおおおっ！！」

負けるもんか。負けるもんか。もうボクには、大切なものが出来たんだ。

――こんなところで終わる訳には、行かないんだ！！

「いっけえええええええっ！！」

絶叫と共に全身に力を込め、バルニフィカスを全力で振り抜くっ！！

バリィィィィィン！！

――五層目の青が、砕け散った。

「次頼んだよ…！！フェイトオオオオ！！」

金色の大剣を辛うじて握りながら、ボクはオリジナルたる少女へと叫んだ。

「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュ・ザンバー！！行きますっ！！」

エリスの叫びと想いを受け取り、私は始まりを告げた。大剣のバルディッシュを振りかぶり、足元に魔法陣を展開する。

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）》

ガシュンガシュン！！カートリッジを三発ロードすると同時、バルディッシュが世界の理に干渉した。背になのはのものと同じくらいの大きさの、しかし若干形の違う金色の翼が生える。

「せーのっ！！」

周囲から魔力を取り込みながら、翼を生かして体を回す。全身のバネを使い、バルディッシュを思いっ切り振り抜く！！

「はあっ！！」

切り裂かれた大気が真空の刃と化し、復活し掛けていた触手達を切り飛ばす。

――――進路は開いた、後は叩き込むだけ！！

「行くよ、バルディッシュ！！」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

頼もしく答える相棒を天に掲げると同時、黒雲が渦巻く。その中心から降り注いだ紫色と金色の雷が、私達に力をくれる。

「撃ち抜け、雷刃っ！！」

《Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

エリスの極光斬同様、振りかぶった大剣がその刀身を伸ばして行く。紫と金が混じり合った雷の剣が、六層目の藍にぶち当たるっ！！

「ぐうっ…！！」

が、やはり固い。二色の雷を纏った巨大な大剣を叩き付けているのに、藍色のバリアは持ちこたえている。けど、

「今の私は…、一人じゃない…！！」

背の翼から大気中の魔力を取り込みながら、私はバルディッシュを握り直す。

「今の私には友達（なのは）がいる…！！母さんとアリシアが、私に力を貸してくれてる…！！お兄ちゃんが私を…！！信じてくれてる！！」

なのはの笑顔が、アリシアの言葉が、お兄ちゃんの優しさが、この紫色の雷がある限り。

――――私は絶対、負けない！！

「お兄ちゃんと一緒なら…！！私はもう、誰にも負けないっ！！」

想いの叫びに応えるように、翼と剣の輝きが爆発的に増す。かき集

めた魔力の全てを、この一撃に注ぎ込むっ！！

バリィィィィン！！

――藍の六層目、撃破。

「お兄ちゃん…、頑張ったよ…」

お兄ちゃんの笑顔を脳裏に思い描きながら、私は第三班の少女達を見上げた。

「イリヤちゃん、ユキちゃん！！はやてちゃん！！」

「わかっておる」

シャマルの声に答えながら、眼下の龍を見下ろす。その姿は否応なしに、以前屠った黒龍を思い出させた。

「前回といい今回といい…、つくづくうぬは我を怒らせたいようだな？」

前回はナツキを傷付け、今またこうして我等の前に立ちはだかっている。我等の明日を消し去ろうと、強大な魔力を従え牙を剥いてくる。

「行くぞ、エルシニアクロイツ」

非人格型アームドデバイスである杖に声を掛け、魔法陣を展開する。

主と我等の未来を阻むと言うのなら、
――全力で、叩き潰すのみ！！

「吠えろ、猛れ、王の剣！！主人を呑み込む災厄を、聖剣の名の下に遍く切り裂け！！」

正面に展開された純白の三角形、その頂点に膨大な魔力が集束して行く。聖なる剣の名を冠した我の最高の切り札が、その力を解き放つ時を待ち侘びながらどんどん魔力を蓄えていく。

「エクスカリバアアアアアッ！！」

杖を振り下ろすと同時に純白が弾け、三つの頂点から砲撃が放たれた。一つ一つが膨大な魔力を孕んだそれは、互いの身を寄り合わせ一本の巨大なレーザーとなる。
――純白に煌めくそれは、まるで伝承の聖剣の如し。

「……っ！！」

だがその力を持ってしても、七層目の紫は持ちこたえる。白と紫が混じり合い、煌めく光が空へと溶けていく。

「自惚れるなよ塵芥…！！」

だが、ここで諦める程我は弱くない。主が、ナツキが、我に名前と温かさをくれた。

「この程度も貫けずして…！！」

全ての魔力を注ぎ込みながら、ぎりぎりと歯を食いしばる。我等が

命と未来の為、主は我を信じ託してくれた。
――それだけで我は、いくらでも戦える！！

「何が王かあああああああっ！！」

絶叫と共に杖を魔法陣に突き込んだ瞬間、純白の魔力が輝きを増す。
太さが倍近くになった砲撃がバリアにぶち当たり、

バリィィィィン！！

――最後の壁、紫色が砕けた。

「手こずらせおって…。天城ユキ…、後は頼むぞ…」

だらりと杖と下げながら、我は創造主たる少女にバトンを託した。

「…さて、ここからが本番ね」

身を守る虹の七層を打ち砕かれ、丸裸の黒龍をあたしは見下ろす。
ここから作戦は第二段階、コアを露出させる砲撃の為の時間稼ぎになる魔法を叩き込む時間だ。その先陣を切るのは、あたし。

「行くよ、ネームレス」

左手に握られたストレージデバイス、十字架と翼を歪めて作られたような杖を振りかぶる。応じるように背の漆黒の翼が広がり、周囲から魔力を吸収し始める。

「天より来たれ、主神の雷…！！金色の槍となりて、穿ち貫けっ！！」

杖を振るうと同時足元に、ミッド式の魔法陣をベースに五角形と逆三角形、円周に羽をあしらった模様が追加された魔法陣が展開される。

これこそが、天城式の魔法陣。世界でただ一人あたしだけが使える、オリジナルの術式。解析すると一見ぐちゃぐちゃに見える公式だが、全体的に見ると全てが計算され効率化されている。お陰で扱いはとてつもなく難しいが、

――その分威力は、折り紙付き！！

「神砕く雷、ケラヴノスッ！！」

天に掲げたネームレスを振り下ろした瞬間、漆黒が弾けた。黒龍の真上に広がった黒雲から、一条の巨大な雷が槍のような姿となって降ってくる！！

「ゴ…、オオ…！！」

神を砕くと謳われた雷を食らい、黒龍が動きを止める。周りは海水の上麻痺効果のおまけ付き。効果覿面、確実に決まった！！

「畳み掛けるわよ！！はやて！！」

くるくると杖を回しながら、あたしは純白の少女へと呼び掛けた。

「行くよ、リインフォース！！」

『はい、我が主！！』

ユキちゃんの言葉を受け取り、私はリインフォース共々気合いを入れる。砲撃の為の時間稼ぎが、この作戦の要なのだ。気合いを入れ過ぎて困るということはないだろう。

「彼方より来たれ、宿木の枝…！！銀月の槍となりて、撃ち貫けっ！！」

左手に夜天の魔導書を広げ、右手に握ったシュベルトクロイツを振るう。全身を魔力が駆け巡り、足元に魔法陣が描かれる。

「さぁ…、行くでっ！！」

気合い一喝、私がその名を呼ぼうとした瞬間、

「ゴオオ…、アアアアアア！！」

麻痺が抜けきらない体を無理矢理動かした黒龍が、吠えた。一瞬で魔力をかき集め、闇の砲撃を放ってきた！！

「はやてちゃんっ！！」

「しまっ…！！」

「くそがあああああっ！！」

シャマルとシグナム、ヴィータの悔しげな絶叫が聞こえる。死に際特有の何かなのか、世界がやけにスローモーションで見えた。

『主！！回避を！！』

『あかん。この距離じゃ無理や』

リインフォースが促してくるが、明らかに着弾する方が速い。上級魔法の準備中やったから、防御魔法も展開出来ない。

――まさに、王手。絶体絶命としか言いようのない状況。

（…ここで、終わってまうんかな）

せっかくなのはちゃん達と友達になれて、守護騎士のみんなやリインフォースを救えて。なのに、ここで終わってまうん？

――八神はやての物語は、こんなところで終わってまうんか？

（嫌や…）

まだ私にはやりたいことがある。シャマルに料理を教えたいし、ヴィータと一緒にテレビを見たい。ザフィーラと散歩もしたいし、シグナムと二人でお風呂にも入りたい。ナツキ君と料理もしてないし、なのはちゃん達と遊びたい。

――何より、リインフォースと何も話せていない。

（嫌や…！！）

まだ終わりたくない。私はまだ始まってもいない。もっともっと、みんなと一緒にいたい。

「助けて…」

届くはずもないのに、奇跡など起きるはずもないのに、ふと口から呟きが漏れてしまう。

「助けてっ…！！」

ボロボロと涙を零しながら、目を閉じもう一度だけ叫んだ瞬間、

「翔けろ、銀月！！」

《Ｄｒｉｖｅ　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ》

――守護者の想いが、奇跡を呼んだ。

高速で飛来した白銀が私を包み込み、闇の砲撃を防ぎきる。恐る恐る目を開けたその先には、

「よ。怪我ないか？」

――白銀の翼を広げた、銀月の剣士がいた。

「え…？」

腕の中のはやてが呆然と俺を見上げ、恐る恐る周囲を見回す。どうやら状況が把握出来ていないようだ。…まぁ、無理もないが。

――ドライブアクセラレーション。

ＤＲＭにより生じた翼を羽ばたかせ加速、瞬間移動と言っても過言ではないレベルの高速移動を行う魔法。それを使用した俺は黒龍を中心にした円の反対側にいたはやての元へ飛び、翼を畳んで砲撃を

防御したのだ。ＤＲＭの翼は高密度な魔力の塊。いかに闇の書の闇の砲撃だろうと、たかだか数秒で練り上げた攻撃など簡単に防げる。

「お兄ちゃんっ！！大丈夫っ！？」

と、僅かに遅れてユキが突っ込んで来た。…大丈夫なのはＤＲＭ制作者であるお前がよくわかってるだろうに。

「ごめんなさい…、あたしがもっとしっかりケラヴノスを叩き込んでればこんなことには…」

「アホ。反撃くらい想定内だ。そのくらいちゃんと考えてるわ」

自責の念に囚われる妹に言い返し、腕の中のはやてを見下ろす。うん、傷一つない。よかったよかった。

「ナツキ君！！」

「お兄ちゃん！！」

と、桜と金の翼を羽ばたかせながら、なのはとフェイトが抱き着いて来た。…お前ら心配性過ぎ。

「っ！？お兄ちゃん！！」

と、ユキの叫びに視線を戻すと、黒龍が動き始めるところだった。体を覆うように漆黒の、闇の球体を身に纏う。

「バリアが…！！」

「あーらら」

はやての呟きに軽い口調で答えながら、闇に呑み込まれた黒龍を見遣る。隠しの一層か…、面倒な…。

「ナツキ君、どうしよう!?」

「このままじゃ、作戦が…!!」

動揺したようになのはとフェイトが、左右から俺の腕を抱きしめてくる。俺はあれか、お前らの心の安定剤か。

「あたしが一発デカいのを叩き込めば…」

「んなことしたら最後まで保たねぇよバカユキ。なのはとフェイトも落ち着け」

ネームレスを構えながら呟くユキに、俺は落ち着き払ったままツッコミを入れる。

「抵抗してくるのは予想出来てた。むしろしない方がおかしいしな」

なのはとフェイトの頭を撫でながら、俺は再び視線を黒龍に戻す。さっきの七層を一層に凝縮したかのような、そんなプレッシャー染みた魔力を感じた。

「「「じゃあどうすればっ…!?」」」

三人があまりにも動揺して詰め寄るように問い掛けてくる。…ったくお前ら、気付いてなかったのか?

「何の為にこの俺が、全メンバー中最強クラスの火力を持つ俺が、バリアの破壊に回らなかったと思ってる？」

「「「「っ！？」」」」

ニヤリと笑いながらの俺の言葉に、四人が絶句した。

バリケード破壊で三人、バリア破壊で七人。足止めにユキとはやて、クロノの三人。司令塔のシャマルを合わせて、十四人。

――俺は、いない。

「ユキ、あれをぶち抜くのに必要な魔力量は？」

「えっと…、ザッと見た感じ５００万くらい…」

不意な俺の質問に、ユキがしどろもどろに答える。俺の魔力量が１６５万だから…、

「三倍ちょっとか。余裕だな」

右手の銀刀を握り直し、ぽつりと呟く。ＤＲＭとカートリッジがあれば、どうとでもなる程度だ。

「アクセル、やるぞ」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ガシュンガシュン！！

俺の声に応えたアクセルが、カートリッジを五発ロード。背の巨大

な翼を広げ、魔力を吸収し始める。

「ゴオオアアアアアア！！」

それを許す程黒龍も甘くはない。周囲から生えたワームの頭部から、無数のレーザーを発射する！！

「「「させるかあああああああっ！！」」」

だが、緑と橙が障壁を展開し防御。剣山の如く海面から生えた青白い刃がワームを刺し貫いていく。

「スクライアが一族、ユーノ！！僕の友達には手出しさせない！！」

「フェイトが使い魔、アルフ！！主の想い人には傷一つ負わせない！！」

「盾の守護獣、ザフィーラ！！主には指一本触れさせん！！」

俺の前方に立ち塞がった三人が、魔力を巡らせ黒龍を睨む。先程は不覚を取られたが、二の轍は絶対に踏まないと言わんばかりに。

「ははっ、頼もしいことで」

抱えたままだったはやてを離しながら、アクセルを構えて三人の前に出る。俺にもプライドがあるんでな。お前らにばっかいい格好させる訳にはいかねぇよ。

「ナツキ君…」

心配げに俺を見るはやてに優しく笑い掛け、俺は視線を黒龍へと戻す。

「ミスして、いいよ」

なのはに、フェイトに、はやてに、ユキに。守るべき大切な少女達に、俺は安心させるように語り掛ける。

「失敗したっていい、出来なくたっていい。例えクリア出来なかったとしても、俺が全部なんとかしてやる」

楽園の守護者、災厄を切り裂く刃の名の下に、俺は何度だって誓おう。

――――守るべきものがあるならば、俺は絶対に負けはしないと！！

「俺がみんな…、守ってやるよっ！！」

《Ｍａｃｈ　Ｚａｍｂｅｒ》

漆黒のエネルギーを纏い肥大化したアクセルを、腰溜めから抜刀し横薙ぎに振るう。漆黒と闇がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

が、

「てめぇ如き潰せねぇ程…！！」

背の輝きを強めながら、握る手に力を込めながら、俺は全力でアクセルを振り抜くっ！！

「俺達は…、甘くねぇんだよっ！！」

――闇を切り裂いた漆黒の白銀が、黒龍の胴体をバリアごと両断した。

「嘘…」

その光景を見たユキちゃんが、信じられないと言わんばかりに呟きを漏らす。なのはちゃんとフェイトちゃんに至っては、ぽかんと口を開けたままだ。
その原因である光景、白銀の刃で黒龍をバリアごと切り裂いてみせた少年は、振り抜いた姿勢のまま私を見て、

「はやて!!」

――名前を、呼んだ。

「…うんっ!!」

応えるように杖を振りかぶり、魔法陣を描く。周囲から魔力をかき集める為に、ユキちゃんから託された切り札を使う。

『理を狂わすモノ、起動』

リインフォースの声と共に、背の漆黒の六枚翼が消える。次の瞬間現れたのは、対照的なまでに清廉な、
――純白の、巨大な二枚翼。

「行こう、祝福の風」

『行きましょう、夜天の王』

互いに言葉を交わしながら、身の内に眠る膨大な魔力と、かき集めた大量の魔力を魔法陣に注ぎ込んでいく。宙に展開されたベルカ式魔法陣を中心に、純白の六つの輝きが宿る。

『石化の槍…！！』

「ミストルティンッ！！」

シュベルトクロイツを振りかぶった瞬間、純白が弾けた。六つの輝きと魔法陣から放たれた一条の光が、銀月の槍となって黒龍に突き刺さる！！

ベキベキベキッ！！

――瞬間、黒龍の体が石化していく。

石化の効果を秘めた宿木、銀月の槍ミストルティン。準備に時間が掛かる上威力こそ低いものの、その効果は絶大！！

「ゴ…、オオ…」

頭部に生えていたリインフォースそっくりな女性が、石化した後崩れ落ちる。全身が石の灰色に染まり、動きが完全に止まった。よし、効いてる…！！

「締めは任せたで、クロノ君！！」

最終段階の為魔力をかき集めながら、私は足止めの取りを飾る少年の名を呼んだ。

『……なっ！？』

変化は突然だった。ユーノ君が見ている視線の先、ナツキ君のマッハザンバーで胴体を両断され、はやてちゃんのミストルティンで石化したはずの黒龍が、

――――徐々に再生し始めていた。

断面から触手のようなものが生え結合し、更にそこから尻尾、足、頭部などがごちゃごちゃに生えて来た。まだ先程までは龍というイメージの範囲内だったが、これはもはやそんなものじゃない。胴体中から足や頭部を生やし、首や頭部から尻尾を伸ばすようなモノを、

――――果たして龍と呼べるのだろうか？

『うっわ…、キモ…』

『なんだか…、すごいことに…』

そのおぞましい姿を見て、アルフとシャマルも顔を歪める。だが、モニターで龍、いや、闇の書の闇を調べていた私はそれどころではない。

「やっぱり、並の攻撃じゃ通じない…！！ダメージを入れた傍から、再生されちゃう！！」

少し鈍っているとは言え再生速度は相変わらずバカみたいに速い。あのナツキ君の全力の攻撃であれなら、いくらブレイカークラスを叩き込んでもすぐに再生されてしまう…！！

『だが、攻撃は通ってる！！プラン変更はなしだ！！』

「だけど、このままじゃ一斉砲撃まで保たないよ…！！」

続行を告げるクロノ君に言い返し、私はコンソールを操作する。ユキちゃんはああ言っていたものの、ケラヴノスは十分あのレベルの相手を潰せるだけの魔力が込められていた。ＤＲＭ付きでその程度しか効かないのだから、ＤＲＭのないクロノ君では効果時間は更に短くなる。はやてちゃんのミストルティンも消えてしまったし、このままじゃ最終段階まで辿り着けない…！！

『だったらその分、僕が時間を稼げばいい！！』

「ちょっ、クロノ君！？」

回線を切った少年が、モニターの向こうで闇の書の闇に向き直る。現場に出ることの出来ない私は、アルカンシェルのスタンバイをしつつここから見守ることしか出来ない。

（頼んだよ…、クロノ君…！！）

「行くぞ、デュランダル」

《ＯＫ，Ｂｏｓｓ（了解しました、ボス）》

全ての元凶である闇の書の闇、もはや言葉で形容出来ない歪な何かとなったそれを見下ろしながら、右手に握ったデュランダルへ声を掛ける。

――提督から託された、闇の書封印の切り札。

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

詠唱と共に魔法陣を描き、両手を左右に広げる。まるで十字架に磔けられた聖者のように、

――救いを齎す救世主（メシア）のように。

バキバキバキバキ！！

僕の背後から吹き荒れる吹雪が海面に触れた瞬間、全てが凍てついていく。水の流れがあるから凍らないと言われている海が、見渡す限り完全に凍結していた。海面にいる闇の書の闇も、当然凍り始めている。

「悲しみも…、憎しみも…。ここで全て、眠（おわ）らせる…！！」

提督の悲しみも、僕の憎しみも。母さんやリーゼ達の想いも。

――全てここで、決着を付ける！！

「凍てつけっ！！」

《Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ》

デュランダルを振りかぶった瞬間、水色の光が弾けた。徐々に闇の書の闇を侵食していた氷が、その速度を増し始める。

「くっ…、う…！！」

だが、守りが固い。氷の進行を阻んだ闇が、徐々にそれを押し返し

始めた。シャマルが言っていた通り、純粋な魔力の塊にこういった補助効果持ちの魔法は効果が薄い。だが砲撃を通すには、これしか…！！

『…クロノ』

歯を食いしばる僕の肩に、声と共に手が乗せられる。振り返ったその先にいたのは、

（父さん！？）

――十一年前に亡くなったはずの、父さん。

『このデバイスは元々、私が使っていたものを提督が改造したものなんだ。どこかに私の意識が残っていたのかもしれないな…』

『父さん…』

デュランダルを見遣りながら、懐かしそうに呟く父さん。そうか…、道理で僕に馴染む訳だ…。

『よく頑張ったなクロノ。母さんと共に乗り越えて、よくここまで来てくれた』

僕の瞳を見据えた父さんが、温かな笑みを浮かべ、

『もう少しだ、頑張れ』

――凛々しい表情で、そう告げた。

『…はいっ！！』

闇の書の闇に向き直ると同時、父さんがデュランダルに手を沿える。
ナツキには遠く及ばないけど、僕にだって背負うものや守りたいものがある。
――――だから絶対に、負ける訳には行かない！！

『凍えて…！！』

「眠れぇっ！！」

二人の叫びがシンクロし、水色の輝きが弾けた瞬間、
――――闇の書の闇が、完全に凍結した。

「なのは、フェイト、はやて、ユキ、…行くぞ！！」

完全に凍結した闇の書の闇を見下ろし、囲むように宙に浮かぶ四人の少女達に視線を送る。最終段階、一斉砲撃で闇の書の闇のコアを露出させる、この作戦のキーポイント。

「はいっ！！」

「うんっ！！」

「行くで！！」

「任せて！！」

そんな重要な局面を前に、背から翼を生やした少女達は笑った。彼女達が覚悟を決めたなら、
――俺も、全力で応えるのみ。

「天城ナツキ、ガーディアン・オブ・アルカディア！！楽園の守護者と災厄を切り裂く刃の名の下に、悲しみの闇を打ち砕くっ！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｒａｉｌｇｕｎ》

天に掲げられた白銀の刀が、その名を告げる。俺の最強にして最高の切り札、
――超重力電磁砲を。
カートリッジを全弾ロード、更に白銀の翼が大気中から魔力を取り込み始める。

「頼むぞ…、みんな…！！」

足元と正面に魔法陣を展開しながら、俺は周囲の少女達に視線を送った。

「行くよ、レイジングハート」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ（わかりました）》

左手に握られた相棒に声を掛け、静かに眼下を見下ろす。私達の倒すべき敵、私達が明日も笑って過ごす為に乗り越えなきゃいけない壁。
――悪魔で、いいよ。

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

レイジングハートの声と共に、私の周囲に魔力が渦巻き始める。桜色の流星が、正面に展開された魔法陣へと集って行く。

「全力…、全開っ…！！」

世界の為に、なんて言わない。それはきっと、とてもおこがましいセリフだから。ただ、私達が幸せな明日を迎えられるように、――――眠って、下さい。

「スタアアアライトオオオオオッ！！」

レイジングハートを振りかぶった私はその名を、全てを打ち砕く星の光の名を叫んだ。

「行くよ、バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

右手に握った相棒へと声を掛け、眼下のそれを見下ろす。私達が明日を迎えられる為、打ち勝たなくてはいけない強敵。世界の理不尽、その体言。

「雷光…、一閃っ…！！」

詠唱と共に肩に担がれたバルディッシュを、天から降り注いだ金と

紫の雷が覆う。母さんとアリシアが、未来へ進めと背中を押してくれる。
――――優しい夢を見せてくれて、ありがとう。
「プラズマザンバアアアアア！！」
絶叫と共に私は、バルディッシュを全力で振りかぶった。

「行こか、リインフォース」
『はい、我が主』
リインフォースと言葉を交わしながら、私は魔法陣を展開する。シュベルトクロイツを掲げ、背の翼からかき集めた魔力を集束させる。

「ごめんな…」
眼下で凍てつく闇の書の闇を、かつての夜天の魔導書の一部を見遣りながら、ぽつりと呟く。

「おやすみな…、っ！！」
杖に集束した魔力が弾け、純白と漆黒の力が溢れ出す。夜天の王として最高の魔法が、その姿を現し始める。
――――せめて一撃で、終わらせるから。

「響け終焉の笛っ！！ラグナロクッ！！」

正面に展開された三角形の頂点に、膨大な魔力が集束する。それを確認した私は、シュベルトクロイツを全力で振り下ろすっ！！

「行こう、ネームレス」

眼下にあるは闇。深淵なる昏き闇。今それを撃ち抜く為に必要なのは、私の絶対的な作った力。

「名も無き王よ、玉座へと至れ！！神の力を従え今、世界に終焉を齎さんっ！！」

手の中にある歪な杖を構え、漆黒の翼を広げる。周囲から魔力をかき集め、足元に魔法陣を形成する。私の力と知識の結晶である、天城式魔法陣を。

――――有と無の境界、その先にある原始の力である、混沌の力を。

「ケイオスフィアッ！！」

正面に展開された魔法陣目掛けて、絶叫と共にネームレスを振り下ろすっ！！

「星を束ねる二つの力よ、我が剣に宿り、災厄を終焉らす光となれ！！」

背から集められた魔力とカートリッジの魔力が混じり合い、正面の魔法陣に白銀の重力が渦巻く。圧縮して一点の破壊力を高めるのが

グラビティレールガンの最大の特徴だが、あまりにも膨大過ぎる魔力を圧縮しきれず、普段ならサッカーボール大程度の大きさになるはずの重力球は正面に展開した魔法陣、俺の身長より大きなそれを上回る程の大きさになっていた。

「明けない夜は…、悲しみの輪廻は…！！俺達がここで、終わらせるっ！！」

この一年間で、俺は様々な経験をした。なのはと、フェイトと、他のみんなと出会い、ユキとも再会出来た。

――守りたい、大切な人が出来た。

「だから俺は…、お前を踏み台にして先に行く…！！」

俺は以前なのはやフェイトに害を及ぼすなら、例え誰であろうと叩き潰すと言った。その言葉を曲げるつもりはないし、今更躊躇うつもりもない。

許せ、とは言わない。…だけど、

――ごめんな。

「グラビティレールガンッ！！」

アクセルを構え直した俺は、絶叫と共に全力で魔法陣に突き入れるっ！！

「「「「「ブレイカアアアアアッッッ！！！！！」」」」」

五人の声がシンクロした瞬間、世界が震えた。

桜色の砲撃が、金色の奔流が、純白の一撃が、漆黒の光線が、白銀の閃光が、一点目掛けて同時に放たれた。混じり合った五色は空を裂き海を割り、強大なエネルギーを伴って闇の書の闇を消滅させて行く。

――ファイブゴッドブレイカー。後にそう名付けられる、最強の魔導師五人の合同一斉砲撃魔法は、闇の書の闇の巨大な体、その奥にあるコアにまでダメージを与え、隣街にまで爆風が届く程の大爆発を引き起こした。

「本体コア、露出…！！」

クラールヴィントのペンデュラムから伸びたリング、旅の鏡の中の翠色の空間。その中に一点だけ、昏い闇の塊があった。

「捕まえ…、たっ！！」

翠色の魔法陣を展開し、闇の書の闇である本体を捕らえる。準備、完了…！！

「長距離転送！！」

「目標、軌道上！！」

その反応を基に、ユーノ君とアルフがコアの上下に魔法陣を描く。三人合同で放たれるそれは、大気すらも越える程の長距離転送魔法！！

「「「転送オオオオオオッ！！」」」

絶叫と共に両手を振り上げた瞬間、完全に消滅した闇の書の闇の残骸を囲むように、三色の混じり合った環状魔法陣が描かれる。そして何かを孕んだ虹色の球体が魔法陣を通過した瞬間、
――光の矢となって、宙を翔けた。

「コアの転送、来ます！！」

「転送されながら、生体部品を修復中！！凄い速さです！！」

アレックスとランディの声に、私は少し目を閉じる。作戦は順調、想定外のアクシデントもあったが、それさえもナツキ君という名のジョーカーがひっくり返してくれた。
――ならば、私達も全力で応えるだけ。

『アルカンシェル、バレル展開！！』

エイミィの声と同時、アースラの先端部分に白い環状魔法陣が描かれる。三つ展開したそれの内、真ん中の一際大きな魔法陣に魔力が集束していく。

「ファイアリングロックシステム、オープン」

目を開け呟くと同時、私の正面に錠が現れた。錠を囲むような白い立方体を中心に、環状魔法陣が三つ展開されたそれは、
――アルカンシェルの、発射キー。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！！」

「「了解！！」」

アースラの正面、地上から伸びた光の柱を、虹色の輝きが通過してくる。夜天の魔導書を狂わせた闇の書の闇、数々の人の人生を壊したその根源。

――全ての、元凶。

「……」

手に持っていた赤い鍵を差し込むと同時、立方体と環状魔法陣が赤く染まる。普段は危険を告げるはずのその色は、しかし今だけは強力な味方。

――あらゆるものを消し去る、管理局最強の魔導砲。

「アルカンシェル、発射！！」

鍵を捻った瞬間、白い閃光が弾けた。魔法陣の正面にレンズが展開され、集束した膨大な魔力が極太のレーザーとなって突っ走るっ！！

「これで…！！」

そのレーザーが何か、闇の書の闇のコアにぶち当たる。強烈なエネルギーの奔流となって、闇の書の闇のコアの周囲の時空を歪ませ始める。

「終わりよっ！！」

私の声にシンクロするように、アルカンシェルの白い閃光が、

――闇の書の闇のコアを、貫いた。

十六人の魔導師達が、グレアム提督とリーゼ達が、アースラのスタッフ達が見守る中、それは起きた。
――闇の書の闇のコアを中心に、空間が裂けた。
次元の狭間、有と無の境界、その中から溢れ出す消滅の力に、対象の姿が掠れ出す。そして裂けた空間が閉じた瞬間、
――白い閃光が、コアを呑み込んだ。

『効果空間内の物体、完全消滅。再生反応…、ありません!!』

『準警戒態勢を維持。もうしばらく、反応空域を観測します』

『了解。ふぅ…』

空を見上げる俺達の視界の中、リンディ艦長とエイミィのやり取りが聞こえてくる。反応が消滅ってことは、つまり…。

『…という訳で現場のみんな、お疲れ様でしたっ!!状況、無事に終了しました!!この後まだ残骸の回収とか、市街地の修復とか、色々あるんだけど…。みんなはアースラに戻って、一休みしてって』

エイミィの声が終了を告げるが、燃え尽きた感というか何と言うか。あまり現実感が伴わないようで、俺達は互いにぽかんと顔を見合わせる。

「…終わったん、か?」

「終わった、な」

はやてが恐る恐る上げた声に、俺が笑みと共に答えた瞬間。

「いいよっしゃあああああああっ！！」

ヴィータの上げた歓喜の叫びに影響されたように、場がワッと賑やかになる。

「やったよナツキ君！！勝ったよ！！」

「お兄ちゃん！！私達勝ったんだよ！！」

飛び込むようにして抱き着いて来たなのはとフェイトが、満面の笑みを浮かべて喜ぶ。…ったく、散々恥ずかしいセリフ言ってたくせによくもまぁ…。シグナムとヴィータがめっちゃニヤニヤしてるんですが。

「ああ、二人共本当によく頑張ってくれた。ありがとな」

「「えへへ…」」

労るように頭を撫でてやると、嬉しそうに表情を緩める二人。半年前と今回で、三人力を合わせれば何だって出来ると、そんな確信が出来た。

「エイミィ、アリサとすずかは無事か？」

そんな二人の幸せそうな顔を尻目に、俺はエイミィに通信を飛ばす。

結界内に取り残されていた、二人の少女の安否が気に掛かる。

『ああ、被害がひどい場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻って貰ったよ。大丈夫』

「これで心残りもゼロだね♪」

エイミィの声に安堵の息をつくと同時、ユキがニコニコ笑いながら近寄って来る。

「ユキもサンキュ。助かった」

「当然。お兄ちゃんの為だもん」

片手を挙げ礼を言う俺に、ハイタッチで答える妹。さすがはユキ、ケラヴノスにしろケイオスフィアにしろ、オーバーSランクの上級魔法を連発。火力面でも頭脳面でも立派な働きをしてくれた。

「エリス、イリヤ、良い戦いぶりでした」

「そう言うシオンが一番気合い入れてたくせに」

「当然だ。我等が主の為だからな」

シオン達三人もハイタッチを交わし、そんなやり取りをしている。いくらなのは達を基にしているとはいえ、ＤＲＭなしであそこまでやってくれるとは思っていなかった。感謝してもしきれない。

「クロノ、お疲れ様」

「ユーノもね。さすが結界魔導師」

ユーノとクロノも一息つき、互いの健闘を讃え合っている。普段はなんだかんだ言ってるけど、仲はいいみたいだな。

「ナツキ君…」

と、周りの様子を見ていた俺に、はやてが近付いて来た。

「ほんま、ありがとな」

「友達を助けるのは当然、だろ？」

怖ず怖ずと手を差し出して来たはやての手を握り、笑顔で言ってやる。そう、周りは優しいだのなんだの言っているが、俺にとっては至極当然のこと。だから別に、感謝されなくたって俺はやる。それが天城ナツキの生き方だから。

「あはは…、敵わんなぁ…」

苦笑いしながらはやてが握り返した瞬間、

「あ…」

――――はやてが、落ち始めた。

「はやて！？」

「主！！」

融合を解除したリインフォースが間一髪支えるが、はやては気を失いぐったりしている。

「はやてちゃん！！」

「はやて！！はやてぇっ！！」

シャマルやヴィータ、シグナム達が必死に呼び掛けるが、それでもはやては目覚めない。闇の書の影響か、はたまた魔力の使い過ぎか。いずれにせよ調べなければわからない。が、

「ぐっ…！！」

「お兄ちゃ…、うっ…！！」

突然眩暈に襲われふらつき、支えようとしたユキも苦しげな声と共に脱力したように落下し始める。

「ユキちゃん！？」

「お兄ちゃん！？」

ユキをなのはが、俺をフェイトが支えるが、ユキは苦しそうな息を吐くだけ。一体何が…。

「俺は単に血が足りないのと魔力の使い過ぎだ…。問題ない…」

シオン達、仮面の男、闇の書の意思、ユキ達四人、そして闇の書の闇。いくらユーノやシャマルのお陰で回復したとは言え、使った魔力や流れた血まで戻る訳ではない。少し休めばすぐに治るが、問題

は二人だ。

「はやて…、ユキ…」

雪が降り注ぐホワイトクリスマス、全てが終わった海の上、全員が心配げな声を投げ掛けるが、

――二人は、答えなかった。

第二十話「力」（後書き）

はい、今回はここまでです。
いやぁ…、終わったねぇ…。書きたかったシーンが書けて本望ですわ…。
てかみんな強過ぎw今更だけどw
そして相変わらずナツキ無双。自重？そんなものはなかった（ぇ

次回、夜天の書の終焉です。

第二十一話「奇跡」（前書き）

それは、小さな奇跡でした。祈りは、遥か空の彼方へ届いて。
涙は、虹になって、光に変わって。長い夜は終わりを告げて。
最後なんて認めない。全員がいなければ、それは最高の未来では有り得ないから。
だから今、禁じ手を使おう。最高で最強のジョーカーを切ろう。
神様でも、悪魔でもいい。目の前の悲しみを断ち切れるなら。
彼女の本気が世界を狂わし、その運命を捻じ曲げる。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

第二十一話「奇跡」

「やはり…、破損は致命的な部分にまで至っている。防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ」

軌道上に浮かぶ艦船アースラ、その中の一室で眠る主はやてを見遣りながら、私は現状について簡潔に説明する。あの後私達は倒れた二人とふらつく天城と共に、アースラに保護されていた。そして今夜天の魔導書の状態について、守護騎士達に説明中なのだ。

「私は…、夜天の魔導書本体は…、遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう」

「やはり、か」

「修復は…、出来ないの？」

烈火の将が重々しく頷きを返し、風の癒し手が恐々と尋ねてくる。が、

「無理だ。管制プログラムである私の中からも、夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

夜天の魔導書は悪意ある改変を受けた結果、その原形すら残らない程歪められてしまっている。オリジナルの情報が、どこにも残っていないのだ。

「元の姿がわからなければ、戻しようもないということか」

「そういうことだ」

元の姿がわからない以上、直せるのは製作者のみ。だが、夜天の魔導書が生まれたのは数百年前。どう考えても故人になっているだろう。

「主はやては…、大丈夫なのか？」

「何も問題はない。私からの侵食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している。不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう」

烈火の将の不安げな声に、私は理由を列挙しながら答える。管理局の医療設備や天城妹の力があれば、桜の花が咲く頃には完治しているかもしれない。

「そう…。じゃあ、それならまぁ…、よしとしましょうか」

「ああ。心残りはないな」

風の癒し手の安心したような言葉に、烈火の将が頬を緩めながら頷く。心残り…？まさか、気付いていないのか…？

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば暴走することも二度とない。…代わりに、あたしらも消滅するけど」

紅の鉄騎の言葉が、全員の胸に突き刺さる。夜天の魔導書の一部である以上、破壊されれば守護騎士達も消えてしまうのは少し考えればわかることだ。

「…すまないな、ヴィータ」

「なんで謝んだよ、いいよ別に。こうなる可能性があったことくらい、…みんな、知ってたじゃんか」

人一倍主はやてに懐いていた紅の鉄騎には、とても辛い話だろう。他の三人も度合いの差こそあるが、主はやてとの別れが寂しくないはずがない。

「いいや、違う」

――だが、祝福の風はそれを是としない。

「お前達は残る。逝くのは…」

呆然とした表情で、私に視線をやる守護騎士達に笑い掛けながら、

「私だけだ」

――そう、告げた。

「ん…」

目元を擦りながら体を起こし、ぼーっとする頭で辺りを見回す。ここは…、アースラかな？

「おはよ、ユキ」

「あ、おはよお兄ちゃん」

徐々に覚醒してきた頭を声の方に向けると、お兄ちゃんが椅子に座っていた。顔色も悪くなさそうだし、大丈夫みたい。

「あれからどうなったの？」

「とりあえず全員でアースラに戻った。はやては別室で寝てる。闇の書の侵食がいきなり抜けた反動と、慣れない魔力の運用による疲労らしい」

そっか、はやてはとりあえず大丈夫みたいだね。…って、

「…お兄ちゃんは？」

肝心のお兄ちゃんの容態は完璧にスルーされていた。そこが一番聞きたかったのに。

「ん、鉄分摂取して来たから大丈夫。もう完全復活だ」

「…もう」

相変わらずと言うか、何と言うか。他人ばかり優先して自分を後回しにする辺りは、昔と全然変わってない。

「…で、お前はどうなんだ？」

――そして、心配性で優しいところも。

「あの苦しみようは単なる魔力の使い過ぎには見えないんだが…。大丈夫か？」

あたしを心配げに見遣りながら、お兄ちゃんが不安そうに尋ねてくる。…ホント、そのうちストレスで倒れるんじゃないかしら。

「…あたしがユキの肉体から避難された、オリジナルの精神だってことは説明したよね？」

確認するように呟くあたしに頷き、お兄ちゃんが表情を引き締める。うん、真面目な顔も似合ってるね。

「だけどこの肉体は…、お兄ちゃんに助けて貰ってからの数分で急拵えしたものなの。シオン達のデータがあったからよかったものの、所々にバグがある、不完全な存在。だから、ちょっと具合が悪くなっただけ」

世界は調和と秩序の元に成り立っているもの。いかに天城ユキ自身とは言え、バグ持ちの不完全な肉体が突然現れたら、体がおかしくなるのは当然の話だ。

「…まさか、このまま死んだりなんか」

「しないよ。これから半日くらい掛けて、あたしの体を最終調整するわ。そうすれば何も問題ない。リンカーコアも正常で、自由に動き回れる、あの事故以前の天城ユキに戻るの」

椅子から腰を浮かしたお兄ちゃんを遮り、今後について簡単に説明する。あたしの頭脳と魔法、ＤＲＭさえあればどうとでもなる程度のことだ。

「お兄ちゃん達との第二の人生、楽しくしたいもん♪」

――――そう。天城（あたし）ユキはこれから、始まるんだから。

「そっか…」

あたしの笑顔に安堵の息を漏らし、お兄ちゃんが椅子に座り込む。

「安心した？」

「当たり前だ」

悪戯っぽく尋ねたあたしに答えながら、お兄ちゃんがぎゅうっとあたしを抱きしめる。

「あ…」

「ちょっとなのはやフェイトの所に顔出してくる。ずっとここに篭ったままだったしな」

そのまま離れたお兄ちゃんは、笑顔を残して部屋を後にする。…まだお礼も言ってないのに。

「えへへ…」

あったかいな…。昔と同じ、心が落ち着く温かさだ…。

「それじゃ、頑張ろっと」

お兄ちゃんの笑顔を思い浮かべながら、あたしはネームレスを起動した。

「夜天の書の破壊!?」

「どうして!?防御プログラムはもう破壊したはずじゃ!?」

アースラの食堂、そこに集まった私達はクロノ君の放った言葉に絶句する。そんな…、どうして…!?

「闇の書…、夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムって…、ナツキ達が戦ってた?」

「ああ」

管制プログラムってことは…、リインフォースさん!?なんで急にそんなことを…!?

「防御プログラムは無事破壊出来たけど、夜天の書本体はすぐプログラムを再生しちゃうんだって。今度ははやてちゃんも侵食される可能性が高い。夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ」

「だから闇の書は、防御プログラムが消えている今の内に、自らを破壊するよう申し出た」

ユーノ君とクロノ君が、顔を歪めながら説明する。確かにあんなも

のが再生したら困るけど…！！

「つまり今管制プログラムの中には、闇の書の歪みが集まっている状態…」

「そこを叩けば全て終わり、か…。確かに理には適ってはいるが…」

「チャンスが今しかない以上、決断しなければなりませんね…」

エリスちゃんとイリヤちゃん、シオンちゃんも腕を組みながらぽつりと呟く。合理的な判断だとは思うけど、やっぱり納得出来ないよ…！！

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…」

肩を落とす私の隣、フェイトちゃんが立ち上がりながら詰問する。

そっか、ヴィータちゃん達も闇の書のプログラムだから、一緒に消えちゃうんだ…！！

「いや、私達は残る」

「シグナム！？」

けど、その予想はシグナムさんの言葉に否定された。続いてシャマルさんとザフィーラさんも入って来る。

「防御プログラムと共に、我々守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ」

蒼い狼姿のザフィーラさんが、補足するように説明する。そっか、じゃあ守護騎士のみんなは大丈夫なんだ…。

「それで、リインフォースから天城君達…、ナツキ君となのはちゃん、フェイトちゃんにお願いがあるって」

「お願い…？」

お願い…。この得体のしれない胸騒ぎと、何か関係があるのかな…？

――――杞憂で、ありますように。

「はやての幸せが、あたし達の一番の幸せ。だからリインフォースも笑って逝くってさ」

眠るはやてに布団を掛け直しながら、あたしは穏やかな笑みを浮かべる。あいつもあたし達と同じで、願うことは一つだけ。

――――だからせめて、夢の中だけでも報われて欲しい。

「夢の中でいいから…。褒めてあげてね、あの子のこと」

呟きを部屋に残し、あたしはそっと扉を閉めた。

「…ああ、来てくれたか」

クリスマス。雪の降る桜台。その広場に彼女はいた。ノースリーブ

のシャツにスカート、右足だけのニーソックスというひどく寒そうな格好で。

「リインフォース、さん…」

「そう呼んで、くれるのだな…」

あまりにも遠く、あまりにも脆い彼女に恐る恐ると掛けられた声に、リインフォースは穏やかに笑う。

「あなたを空に帰すの、私達でいいの？」

「お前達だから、頼みたい」

迷いを吐き出すようにして尋ねた私の言葉に、リインフォースはやはり笑う。

「お前達のお陰で、私は主はやての言葉を聞くことが出来た。主はやてを食い殺さずに済み、騎士達も生かすことが出来た」

夜天の魔導書を抱きしめながら、リインフォースは感謝の言葉を述べる。諦めず何度も立ち向かった私やなのは、お兄ちゃんに。

「感謝している。だから最後は…、お前達に私を閉じて欲しい」

リインフォースは目を閉じながら、私達に語り掛ける。最後の我が儘のつもりだろうか。だとしたらあまりにも、

――悲しい最後だ。

「はやてちゃんと…、お別れしなくていいんですか？」

「主はやてを…、悲しませたくないんだ」

なのはの言葉に僅かに顔を歪めながらも、リインフォースはそう答える。まるで飼い主を悲しませたくないから、どこも知れぬ場所でひっそりと生を終える猫のようだ。

「リインフォース…」

「でも…、そんなのってねぇよ…！！悲し過ぎるだろ…！！」

私の呟きを遮って、無言を貫いていたお兄ちゃんが泣きそうな声で言葉を零す。

「せっかく闇の呪縛から解き放たれて…、綺麗な名前を貰って…、これからなのに…！！なんでだよっ…！！」

自らの無力さを嘆くように、俯き涙を零しながら絶叫するお兄ちゃん。誰よりも優しいお兄ちゃんだからこそ、はやてやユキを救えたからこそ、

――あとたった一人を救えないことが、ものすごく辛いのだ。

「また俺は…！！見送ることしか出来ないのかよっ！？何も出来ないまま…！！目の前で消えて行くのを見守るしかないのかよっ！？」

「…お前にもいずれわかる。海より深く愛し、その幸福を守りたいと思える者と、出会えればな」

肩を震わせるお兄ちゃんに、リインフォースが優しく語り掛ける。愛しているからこそ、自分を犠牲にしてでも守りたい、か…。

「ナツキ君…」

「お兄ちゃん…」

なのはも同じ考えに至ったようで、私と一緒にお兄ちゃんに呼び掛ける。

「…確かに悲しいけど、リインフォースさんの気持ちもわかるから」

「だから私達は…、リインフォースの願いを叶えてあげたい」

私達がもし同じ立場で、お兄ちゃんを守る為ならば、私達も同じ選択をしたと思うから。確かに悲しませてしまうけれど、それでもはやて(お兄ちゃん)を守りたいから。

「…わかってるよ」

目元を拭ったお兄ちゃんが顔を上げ、アクセルを起動する。覚悟は決まったみたい。

「…そろそろ始めようか」

それを見たリインフォースが満足そうに頷き、空を見上げる。降り注ぐ雪の中、静々と歩いて来た守護騎士達に笑い掛けながら、

「夜天の魔導書の…、終焉だ…」

――――終わりの始まりを、告げた。

「……」

目を覚ました私は、ゆっくりと体を起こす。どうやら自分の部屋のようだ。

「うっ、ぐっ…！！」

――――ドクン。

「っ！？リイン…、フォース…？」

胸に走った奇妙な痛みと、何故か漏れたその名前。なんだろう…、嫌な予感がする…！！

「っ！！」

車椅子に乗り込んだ私は、上着を羽織りながら一目散に家を出た。

頂点に円を抱く三角形の形をした、純白のベルカ式魔法陣。その三辺に接続された、ミッド式の円形魔法陣が三つ。私を中心に展開されたそれを囲み、七人が立っていた。

《Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　Ｓｅｔ（準備完了）》

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ（同じく）》

《Ｇｅｔ　Ｓｅｔ（いつでも行ける）》

「ああ…。短い間だったが…、お前達にも世話になった…」

準備完了を告げる三人の手に握られたデバイス達に、三人の相棒に礼を述べる。

《Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ（気にせずに）》

《Ｔａｋｅ　ａ　ｇｏｏｄ　ｊｏｕｒｎｅｙ（良い旅を）》

《Ｉｔ　ｉｓ　ｎａｔｕｒａｌ（当然だ）》

「ああ…」

気にするなと答える三機に微笑み掛け、魔法陣の輝きが強まった瞬間、

「リインフォースッ！！みんなぁっ！！」

――主の声が、聞こえた。

「「「「っ！？」」」」

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

見ると必死に車椅子を動かしながら、主はやてがこちらに向かって来ていた。

「はやてちゃん…！？」

「はやて！！」

「動くな！！」

心配げに動き出そうとした風の癒し手と紅の鉄騎を一喝と共に遮る。

「動かないでくれ。儀式が止まる」

「あかん！！やめてぇっ！！リインフォースやめてぇっ！！」

厳しい表情のまま理由を述べると同時、主はやてが魔法陣の外から悲痛な叫びを上げる。

「破壊なんかせんでええ！！私が、ちゃんと抑える！！大丈夫や、こんなんせんでええ！！」

私達全員を見回しながら、絶叫する主はやて。天城の顔付きが、目に見えて歪んでいくのがわかった。

「…主はやて、良いのですよ」

「ええことない！！ええことなんか、なんもあらへん！！」

微笑みながら呟いた私に、主はやてが首を振って否定する。

「随分と長い時を生きて来ましたが…、最後の最後で私はあなたに…、綺麗な名前と心をいただきました。騎士達もあなたの傍にいます。何も心配はありません」

「心配とかそんな…」

わかっている。主はやてが言いたいことくらい、痛い程わかっている。互いの理論は平行線。交わることは決してない。

「ですから、私は笑って逝けます」

――それでも私は、主はやてを守る祝福の風だから。

「っ！！…話聞かん子は嫌いやっ！！マスターは私や、話聞いてぇっ！！」

笑顔を浮かべた私に言葉を詰まらせながら、涙を流しながら主はやては私を説得しようとする。そんな表情を大切な人にさせていることが、ひどく心を痛ませる。

「私がきっと何とかする！！暴走なんかさせへんて、約束したやんか！！」

「その約束は…、もう立派に守っていただきました」

主はやてが。高町なのはが。テスタロッサが。天城兄妹が。守護騎士達が。全力で戦い死力を尽くし、闇の書の暴走を止めてくれた。

――それで、十分だ。

「リインフォースッ！！」

「主の危険を祓い、主を守るのが、魔導の器の務め。あなたを守る為の、最も優れたやり方を、私に選ばせて下さい」

「そやけど…、ずっと悲しい思いして来て…、やっと…、やっと…、救われたんやないかぁっ…！！」

まるで自分のことのように悲しみ、泣きじゃくる主はやて。その優しさに、私達がどれだけ救われたことか…。

「…私の意志は、あなたの魔導と、騎士達の魂に残ります。私はいつも、あなたの傍にいます」

例え体が朽ち果てようとも、その想いと信念は残る。友の心と魂の中で、ずっとずっと共にある。少なくとも私は、今の私はそう考える。

「そんなんちゃう！！そんなんちゃうやろ！！リインフォース！！」

「駄々っ子は、ご友人に嫌われます。聞き分けを、我が主」

それでも食い下がる主はやてに、慈母のような笑みを浮かべる。こうなることがわかっていたから、会わずに済ませたかったのだが…。

「リインフォース！！あっ！！」

「っ！？」

止めようと車椅子を動かすも、段差に引っ掛かりバランスを崩し、主はやてが倒れ込む。

「これから…、やっと…、始まるのに…！！これから…！！うんと幸せにしてあげなあかんのに…！！」

ボロボロと涙を零す主はやてに歩み寄り、そっと体を抱きしめる。

「大丈夫です。私はもう、十分に…。世界で一番、幸福な魔導書ですから」

「リインフォース…」

私の悟りを開いたような、穏やかな声に主はやてが呆然と呟く。

「主はやて…。一つ、お願いが」

そんな彼女に愛おしさを覚えながら、私は最後に一つだけ我が儘を言う。

「私は消えて、小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく、あなたがいずれ手にするであろう、新たな魔導の器に、送っていただけますか？」

それは、私が決めていたこと。主と共に空を翔ける。まだ見ぬ小さな融合騎。

――――受け継がれし、祝福の風。

「祝福の風、リインフォース。私の魂は、きっとその子に宿ります」

私の誇りと魂は、二代目の少女へと。きっと。

「リイン…、フォース…」

「…はい。我が主」

瞳を潤ませる主はやてから離れ、魔法陣の中心へと戻る。言うべきことは言った。もう心残りはない。

「主はやて。守護騎士達。それから、小さな勇者達。ありがとう…。そして…、さようなら…」

「リインフォースッ！！」

主はやての絶叫が響き渡り、私の体の輝きが増した瞬間、

「ふざけんなこの大馬鹿共がああああああっ！！」

――――運命はまた、変わり始める。

「ぐはっ！！」

絶叫と共に放たれた少女の蹴りが顔面にクリーンヒットし、天城は数m程ぶっ飛ばされた。

「「「「「「「「「「……え？」」」」」」」」」」

あまりにも衝撃的な、衝撃的過ぎる光景に場の全員が固まった。泣きじゃくっていたはやてでさえぽかんと口を開き、蹴り飛ばしたユキと蹴り飛ばされた俺を交互に見遣っている。リインフォースを天に帰す儀式魔法も俺が移動、というか蹴り飛ばされたせいで、魔法陣は完全に消失してしまっていた。

「なっ…、ユキ！？なんでここに…！？」

「あんた達が一世一代の大馬鹿やらかしてるって聞いて飛んで来たわよ！！まったく、最終調整終わったってのにくつろげやしない…！！」

ガバッと身を起こし尋ねた俺に、腰に手を当て仁王立ちしながら答えるユキ。白いワンピースと黒いジャケットを纏ったその姿は健康そのもので、ホッとしている俺がいた。最終調整終わったのか…、道理でキレのある蹴りだった訳だ…。って、そうじゃなくて！！

「やれやれ、我のオリジナルならもう少ししっかりしたらどうだ？」

「イリヤ、ちゃん？」

黒いシャツにデニムのスカート、裾の長い白のパーカーという普通の服に着替えたイリヤが、はやてを抱き起こし車椅子に座らせる。イリヤがいるってことは…。

「「こら」」

「「痛っ！？」」

二人の声が響いた瞬間、なのはとフェイトの声がシンクロした。そちらに視線を向けてみると。

「何をやっているんですか、あなた達まで…」

「ホント、ボク達が間に合わなかったらどうなってたことやら…」

「シオンちゃん…」

「エリス…」

なのはとフェイトにチョップをかました、シオンとエリスが溜め息をつく。シオンは赤と白のチェックシャツに紫のスカート、黒いハイソックス。エリスも水色のシャツに白いミニスカート、黒いジャンパーという普通の格好だ。

「ねぇ、お兄ちゃん。あの言葉は嘘だったの？」

呆然とするみんなをよそに、ユキは俺の顔を覗き込む。その瞳にあるのは以前とは違う、事故に遭う前と同じ強い意志の光。

「俺がみんな守ってやるって言葉…、あれは嘘だったの？」

「んな訳ねぇだろ！！」

「じゃあなんで今、こうしてリインフォースを消そうとしている訳？」

否定の叫びを上げる俺を遮り、ユキはリインフォースを指差す。もう消えてしまった魔法陣の中心には、確かにリインフォースが立っていた。

「あたしを助けてくれたお兄ちゃんなら…、傲慢で何一つ捨てる気がなくて、心配性のくせに自分が一番無茶する、とっても優しいお兄ちゃんなら…」

目を閉じ自らの体を抱きしめながら、絶対の信頼を抱くような声でユキは、

「闇の書の闇くらい、何度だって叩き潰してやる。それくらい言うはずでしょ？」

――そう、告げた。

…ああ、そうだよ。確かにその通りだよ。

「…じゃあ、どうすればいいんだよ！？」

――でも、世界はそんなに優しくはないんだ。

「確かに俺達全員の力を合わせれば、闇の書の闇なんか何度でも倒せるさ！！でもそれで街は！？人々は！？侵食を受けるはやてはどうなる！？」

俺達全員なら、闇の書の闇如きに負けるはずがない。だがそれでも被害は出る。今回こそ奇跡的に死傷者ゼロだったが、次もそうとは限らない。しかも、侵食されるのははやての体なのだ。そんな光景を見ていたら、みんなきっと耐えられない。

「俺の力じゃ…、どうにも出来ないんだよ…！！」

前の事件だってもっと上手くやれれば、フェイトがプレシアと穏やかに暮らせた未来を作れたかもしれない。今回だって結局何も出来ず、こうして終わりを迎えようとしている。

――本当に、俺は無力だ。

「…ホント、どうしようもなくバカだね、お兄ちゃんは」

溜め息をついたユキは、俺を呆れたように見下ろした。恐る恐る見

上げたその先にあったのは、

「だからこそ、その答えしか出なかったんだよね…。優し過ぎるお兄ちゃんだから、他人が傷付くくらいなら自分で全て抱え込むようなお兄ちゃんだから」

――穏やかに、優しく笑う一人の少女。

「いい？お兄ちゃん。わかりやすく一言で教えてあげる」

片膝を着き俺を抱きしめながら、出来の悪い子に諭すようにしてユキが語るその言葉は、

「仲間を、頼りなさい」

――ひどく簡単な、たった一つの魔法の言葉。

「例え一人じゃ無理でも、みんなの力があれば乗り越えられる。それはあの戦いでよくわかったでしょ？それを教えてくれたのはお兄ちゃんでしょ？」

一人の力では、どう足掻いても限界がある。人は弱くて、脆い生き物。だから繋がって、強くなって、立ち向かえる。フェイトやユキが、過去を乗り越えられたように。

「…だけど、闇の書を…。一級指定のロストロギアである夜天の魔導書のプログラムに干渉出来るような奴なんて…、っ！？」

口にしている途中で気付いた。そんな奴がすぐ身近に、今目の前にいることを。

「やっと気付いた？まだまだ柔軟さが足りないね」

俺を離したユキがニッコリと笑いながら、すたすたとリインフォース目掛けて歩き出す。

――俺の知り得る限り、最も神に近い頭脳と技術を持つ少女が。

「ユキ…、お前まさか…！？」

「いい、バカ共。一言だけ言ってあげる」

震える声で呟く俺を気に留めず、ユキは俺達全員を見回す。解けない問題を前に悩む周りを笑うような、ひどく楽しそうな笑みを浮かべて。

「理操る狂気の魔女を、ジュエルシードを生み出した天城一族最高の天才を」

胸元の十字架を模したネックレスを、ネームレスに変えながら。

「天城（あたし）ユキを、ナメるな」

――天城（神）ユキは闇（悪魔）の書に喧嘩を売った。

「ネームレス、インターフェース展開」

起動したネームレスを地面に突き刺すと同時、あたしを囲むようにして鍵盤が展開される。黄緑色に輝くそれは、あたしの作業場にし

て聖域。

「リインフォース、ちょっと我慢してなさい」

その一角に手を翳すと同時、あたしの手にプラグのようなものが握られる。リインフォースの胸に突き刺さったそれは、さながらシャマルの旅の鏡のようにリインフォースの体内に沈み込んで行く。

「ぐっ…！？」

「接続完了。さて、それじゃ」

苦しげな声を上げるリインフォースを尻目に、あたしは黄緑色に輝く椅子に腰掛ける。応えるように鍵盤が輝き、十重二十重とあたしを囲むように展開される。

「オペレーション、スタート！！」

正面に展開された半透明のスクリーンに視線を固定し、あたしはキーを叩き始めた。

「うっわ…。ぐちゃぐちゃなんてレベルじゃないわね…。しかもどこに爆弾が隠されてるかわからないブラックボックス状態…。こりゃ一回で全部直すのは無理かなぁ…、専用設備がないと…」

多重展開されたウィンドウを見遣りながら、全方向に広がるキーを叩き続ける。別に視線を動かさなくても、慣れ親しんだキーの位置くらい体が覚えている。

「なるほどね…。すぅーっ…、はぁーっ…」

一通り状態を把握し、目を閉じて深呼吸。本気を出す時の、いつもの儀式。

「問題となるのは無限再生プログラムとそれによって修復される防御プログラムつまりそれさえ潰せばオールクリア時間を掛ければ完全とは行かなくてもオリジナルに近い形に戻すのも可能それならコアにクラッキングして管制権を乗っ取り全体をフルスキャン資料とあたしの知識を総動員して歪みを発見し次第迅速かつ慎重に修復とりあえず今回の目標は無限再生の停止と防御プログラムの基盤抹消以上証明終了方針決定行動開始!!」

目を開けると同時一息に今後の方針を呟き、手を動かし始めた。凄まじい速度でウィンドウが現れては消え、数々の文字列を羅列していく。

「クラッキング…、完了!!コード保存フルスキャン開始!!」

リインフォースのリンカーコアに接続されたプラグが、夜天の魔導書の情報を吸い出していく。

例えデータが消されてしまっていたとしても、残滓が残っていれば多少は復元出来る…!!

「……っ!!見付けた!!」

並行して探していたお目当てのプログラムを発見し、一際巨大なウィンドウを展開する。

「リインフォース、ちょっとばかし響くけど我慢しなさい!!」

リインフォースに言うと同時クラッキングを開始し、無限再生プログラムをありとあらゆる方向からスキャンしていく。

「ぐっ…、あああ…！！」

「……来たっ！！」

自らの核とも言える部分を踏み荒らされリインフォースが苦悶の声を上げるが、その成果はあった。無限再生プログラムの構造を、完全に把握したのだ。

「後はこいつを停止させれば…！！」

無限再生プログラムの詳細を映しながら干渉し始めると同時、干渉した部分が修復された。…へぇ？

「ふぅん…。要するにあんたの再生とあたしの書き換え、どっちが速いかって訳ね」

答えず再生速度を上げた画面の数値を睨みながら、あたしは両手を組んでぐるぐると回す。上等、相手にとって不足なし。

「いいわ、見せてあげる…。あたしの本気を…！！」

――瞬間、あたしの手が増えた。

いや、正確にはあまりにも速過ぎるあたしの手が残像として残り、阿修羅もかくやという光景が繰り広げられているのだ。

「んなっ！？」

「嘘っ…！！」

「ほらほらほらほら、無限再生の名が泣くわよ？」

呆然と呟くなのはとフェイトをよそに、あたしは更にスピードを上げる。再生速度を上回る程の速度で、プログラムを強引に書き換えていく。

「そんな…！！」

「こんなことが…、人間に出来るのか…！？」

シャマルとシグナムが信じられないと言わんばかりに言葉を漏らすが、これはあたしにとっては普通のこと。幼い頃からこうして来た、天城ユキの日常風景。

《Ｃｏｍｐｌｅｔｅ（完了）》

スクリーンの表示と同時、リインフォース内の無限再生プログラムが完全に書き換えられる。再生機能が消えた以上、再生はしないし防御プログラムも生まれない。まさに最高のハッピーエンドだ。

「あたし、細かいこと得意なの♪」

ネームレスとプラグを引き抜き、周囲の鍵盤を消しながら、あたしはニッコリと微笑んだ。

「終わった…、のか…？」

「とりあえず最低限、無限再生と防御プログラムだけはやっといたよ。他にも歪みは腐る程あるけど設備が足りないし、急に全部書き換えるとリインフォースに悪影響を及ぼしかねないから」

恐る恐る尋ねたナツキ君に、ユキちゃんがサラリと答える。自分の体を見下ろしたリインフォースが呆然と私を見て、

「再生プログラムが…、完全に停止しています…」

――その奇跡を、告げた。

「まあ書き換えただけで残ってはいるから、元の機能に戻すも完全に消去するもあなた次第よ。また一週間後くらいに他の所直すから、要望はその時までに纏めといてね」

なんでもないことのように言いながら、ネームレスをネックレスに戻すユキちゃん。…ほんまに、直ったん？

「主はやて…」

表情を引き締めたリインフォースが、呆然としたままの私に向かって歩いて来る。心なしか、足取りが軽いように見えた。

「前言を撤回します。私は…、祝福の風リインフォースは…」

私の前に片膝を着き、私と目線を合わせた彼女は、柔らかく優しい笑みを浮かべて。

「いつまでも、あなたのお傍に」

――誓いの言葉を、述べた。

「リインフォースッ…！！」

色々なことがいっぺんに起き過ぎて、頭の中がぐちゃぐちゃで。でも、一つだけわかること。

――リインフォースと、一緒にいられる。

「ひくっ…、えうっ…」

「大丈夫です、我が主。私はもう、自らの生を諦めません」

泣きじゃくる私を抱きしめながら、リインフォースは静かに呟く。

この温もりが、消えずに済んで。大切な家族を、失わずに済んで。

――本当に、よかった。

「うぅ…、うわあああああん！！」

リインフォースに縋り付きながら、まるで赤子のように、

――私は、思いっ切り泣いた。

「…はぁ」

「お疲れ様」

安堵の溜め息をついたあたしに、お兄ちゃんが近付いて来た。さっ

き思いっ切り蹴り飛ばしちゃったけど、ケロッとしてる辺りさすがお兄ちゃんだ。

「どう？あたし頑張ったよ？」

「ああ…。ホントお前は…、最高にすげぇ奴だよ」

胸を張って自慢げに言うあたしの頭を、お兄ちゃんが優しく撫でる。昔と変わらない、温かな感触。

「えへへ…」

気が緩むと同時、ふらついたあたしはお兄ちゃんの方に倒れ込む。

「ちょっ、ユキ？」

「さすがに疲れたわ…。少し寝る…」

最終調整の後すぐに飛んで来た挙句さっきのクラッキングと書き換えで、かなり頭と魔力を使ってしまった。後で糖分補給しないと…。

「…ああ。後は俺がやっとくから、安心して寝とけ」

お兄ちゃんがあたしを抱きしめて、優しく頭を撫でてくれる。あたしが壊れる前も後も変わらない、あの温かな感触。

「うん…。お休み…」

その温もりに身を委ねながら、あたしは睡魔に身を委ねた。

第二十一話「奇跡」（後書き）

はい、今回はここまでです。…やっちまったなぁ（ぇw
アンケの結果通り、リインフォースは無事？生き残りました。よかったよかった。
しかしユキ…、お前再生以上の速度で書き換えってチート過ぎるんじゃ（今更

次回、最終回。
ナツキの選択と、それぞれの未来と。
果たして、最後に笑うのは誰なのでしょうか。

最終話「未来と答え」（前書き）

なのはと出会えてよかった。彼女と出会えなかったら、俺は過去と向き合えなかった。
フェイトと出会えてよかった。彼女と出会えなかったら、俺は前へ進めなかった。
だから今、答えを出そう。俺を好きだと言ってくれた二人に、この想いを伝えよう。
例えその先にどんな未来が待っていようとも、少なくとも俺だけはこの答えに誇りを持とう。
――それが俺の、天城ナツキの全てだから。
魔法少女リリカルなのはＡ's　Ａｎｏｔｈｅｒ、最終回。始まります。

最終話「未来と答え」

「…そう。わかった。報告ありがとう。今日は家で妹達とゆっくり休みなさい。私も明日には帰るから」

「ナツキ君から？」

通話を終えて携帯を閉じると同時、隣のレティが声を掛けて来る。闇の書事件の事後処理の為、本局に出向中なのだ。

「うん。ユキさんが魔導書のプログラムを書き換えたそうよ。今後少しずつ直していって、十年後を目処にリインフォース共々完全修復するつもりらしいわ」

「…相変わらず、天城の二人は無茶苦茶ね…」

闇（黒龍）の書の闇をバリアごと両断する兄と、ロストロギアのプログラムを強引に書き換える妹。もういない天城一族の、最高の天才達。だがまさか、壊れたはずの夜天の魔導書まで修復するなんてね…。

「まぁ、ナツキ君とその妹さんだもの」

「それで納得出来るのが怖いわ…」

実際あの兄妹なら、「まぁあの二人だし」の一言で納得出来てしまう。二人で世界を滅ぼせるんじゃないか、なんて馬鹿馬鹿しい考えまで脳裏を過ぎってしまう程、二人の秘めた力は凄まじい。

「グレアム提督の件は、提督の希望辞職ってことで手打ちみたいね。

故郷に帰るそうよ」

「まぁ、具体的なのはクラッキングと捜査妨害くらいだし…、それくらいよね。はやてさんのことはどうなるのかしら？」

エレベーターに乗ると同時、レティがもう一つの懸案事項について語る。グレアム提督も方法を誤っただけで、平和の為に動いていた。妥当な判断に頷くと同時、気に掛かるのは一人の少女。

「今まで通りに援助を続けるって。あの子が一人で羽ばたける歳になったら、真実を告げることになるだろう、って」

「そう…」

辛い現実を突き付けられて、はやてさんもくじけそうになるかもしれない。でも彼女にはナツキ君達が、守護騎士達が、何よりリインフォースがいる。きっと、大丈夫だろう。

「あなたもこれで、ご主人への報告に行けるわね。いつ行くの？」

「来週。クロノとフェイトさんとナツキ君、ユキさんにシオンさん、エリスさんにイリヤさん。八人で行ってくるわ」

「随分とまた大所帯ね…」

すらすらと答えた豪勢なメンバーに、レティが冷や汗混じりに呟く。だって…、ねぇ？

「だってナツキ君とユキさんも息子と娘みたいなものだし、シオンさん達もユキさんの妹か娘みたいなものでしょう？」

「それもそうか。なんて報告する予定？」

私の言葉に呆れながらも納得しつつ、レティが尋ねてくる。そうね…。

「多分、いつもと同じよ。相変わらず慌ただしい日々だけど、元気にやってますよ、って」

「そっか」

ニッコリと微笑み答えた私に、レティも頬を緩めた。

「事件終了、かな…」

「だな…」

「でも、ちょっと寂しいかな…」

夜の帳が降りた街、フェイトちゃんとナツキ君がぽつりとそんなことを呟く。私としては目の前の集中出来ることがなくなって、なんだか複雑な気分。

「…クロノが言ってた。ロストロギア関連の事件は、いっつもこんな感じだって。大きな力に惹かれて、悲しいことが連鎖していく」

ナツキ君の手を握りながら、フェイトちゃんが言葉を漏らす。半年前も今回も、悲しみの悪循環が続いた結果の結末だ。ナツキ君やユ

キちゃんが頑張ってくれたけど、それでも被害の爪痕は残ってしまう。

「私、局の仕事続けようと思うんだ。執務官になりたいから。母さんみたいな人とか、今回みたいなことを、少しでも早く止められるように」

雪の舞う空を見上げながら、フェイトちゃんは自らの夢を語る。その瞳に迷いはなく、この一年で一回り成長したんだなぁと思えた。

「俺は…、俺も執務官、かな…」

つられるようにナツキ君も、空を見上げ自分の目標を呟く。

「ジュエルシードに運命を狂わされて、全てなくしてナナシになって…。だけど、今回ユキを見てわかった。ナナシは自分自身だけじゃなくて、周りも悲しくしてしまう。マイナスの感情に囚われて、本当に大切なことを見失ってしまう」

本当に大切なこと。そう言いながらナツキ君の視線は、私達二人を捉えていた。

「だから元ナナシの俺が、そんな奴をぶっ飛ばしてでも止める。もう二度と、あんな事件を起こさせない為に」

かつて自分が経験したからこそ、もう同じ人を生み出させたくない。それが、ナツキ君の決めた進むべき道。

「なのはは？」

「え？」

「なのはは何か考えてる？これからのこと」

不意に二人に問われ、私は考えを巡らせる。まだあんまり見えないけど、一つだけわかっていることがある。

「私は…、執務官は無理だと思うけど、方向はきっとフェイトちゃんやナツキ君と一緒。ちゃんと使いたいんだ。自分の魔法」

ナツキ君やフェイトちゃん、大切な人達と巡り会わせてくれたこの力を、誰かの為に役立てたい。形は違えど向きは同じ。二人と共に、歩むこと。

「「「……」」」

三人で拳を合わせ、互いの顔を見る。私達はきっと、ずっと。一緒の道を歩むんだろうと思う。

「あ、いたいた」

笑みと共に手を離すと同時、男の子の声が聞こえた。視線を向けた先にいたのは、

「ユーノと…、アルフか」

傘を差したユーノ君と、手綱を握られたアルフさんだった。どうやら散歩に付き合っていたようだ。気が付けば私達もフェイトちゃんとナツキ君の家の前に着いている。

「それじゃ、また明日」

「うん、また明日」

「なのは、お休み」

ナツキ君と挨拶を交わし、アルフさんを抱き抱えたフェイトちゃん共々戻って行く。欲を言えばナツキ君に送って欲しかったけど、ユキちゃんやシオンちゃん達が家で待ってるのだから仕方ない。

「ユーノ君、せっかく戻って来てくれたのに、ほとんど話せなかったね」

「あはは…、ずっと調べ物だったからね…。並行してナツキに頼まれたものも探してたし、思ったより時間食っちゃった」

ユーノ君と一緒に歩きながら、久しぶりの雑談を交わす。ユーノ君は夜天の書について調べるのと同時に、ナツキ君の依頼でＤＲＭの研究に必要な資料を探していたのだ。

「ユーノ君、この後は？」

「うん。局の人から、無限書庫の司書をしないかって誘われてるんだ。本局に寮も用意して貰えるみたいだし、発掘も続けていいって話だから、決めちゃおうかなって」

ふと気になって聞いてみると、ユーノ君も今後の方針を決めたみたい。私もまだはっきりとは見えないけど、ナツキ君達と一緒に頑張って行けばその先で、きっと何かを掴める気がする。

「本局だとミッドチルダよりは近いから、私は嬉しいかな」

「そっか」

そんな感じで歩き続けて、気が付いたら私の家の前。クリスマスも終わり、か…。

「じゃあ、僕はここで」

「え？」

そんな私に微笑みながら、ユーノ君が数歩下がる。え、フェレットモードになって家に来るんじゃ…。

「仕事が決まるまで、アースラにいていいって話だから」

いつまでもお世話になるのも悪いし、と苦笑いするユーノ君。…ちょっとだけ、寂しいかな…。

「ユーノ君、年末とかお正月とか、時間あるようならお話しようね。話したいこと、たくさんあるから」

「…うん」

両手を広げながら言う私に頷き、ユーノ君が魔法陣を展開し消えた。転移魔法の光の残滓を眺めていると、携帯の着メロが鳴り始める。差出人は、

「…あ」

――月村すずか。

『明日、ちょっと時間あるかな？午前中、アリサちゃんと一緒にはやてちゃんのお見舞いに行って、それから家でクリスマス会をしようかなと思っています。フェイトちゃんやナツキ君も誘ってます。来てくれると、嬉しいな』

色々あってすっかり忘れてたけど、すずかちゃんとアリサちゃんには私達のことを見られている。…いい機会、なのかも。

「…ちゃんと話さないとね。今までのこと」

ナツキ君やフェイトちゃん、はやてちゃんにユキちゃん。みんなとの繋がりに密接に関わる、私達の共有する秘密。

――覚悟を、決めよう。

「話さないと、だよね…」

「まぁ…、この世界は魔法が普及してないからね…」

すずかからのメールを読んだフェイトが不安げな声を上げ、エリスも微妙な表情で頭を掻く。励まそうにもどうにも出来ない、という状況に戸惑っているようだ。

「なんだったら我が記憶を書き換えてくるが？」

「いえ、さすがにそれはどうかと」

イリヤがどこかズレた答えを返し、シオンが呆れてツッコミを入れる。確かにそれは俺も考えたが、これはいずれ乗り越えなければいけないこと。直面した以上、先送りにしても意味はあまりない。

「…フェイト」

「あ…」

どんよりとした空気を纏うフェイトに近付き、そっと抱きしめてやる。こういう時のフェイトは、こうした方が早い。

「大丈夫。アリサやすずかなら、きっとわかってくれる。俺やなのはもいるし大丈夫だ」

ぎゅうっと抱きしめながら、優しく頭を撫でてやる。アリサもすずかも、優しい子だし大丈夫だろう。

「…うん」

表情を和らげたフェイトも、怖ず怖ずと俺を抱きしめ返す。とりあえずはこれで大丈夫、かな?

「誰かー、お熱い二人に冷房持って来てー」

「あぅ…」

が、今俺には妹とその妹、いや、娘?が三人いることを忘れていた。盛大な冷やかしの声に、フェイトが顔を赤くしフリーズする。

「…元病人は寝てろ」

「お兄ちゃん冷たいぞー」

ベットに寝そべったままのユキが、不満の声を上げる。やはり昼間の書き換えは疲れたようで、目を覚ましてからずっとこんな感じなのだ。

「…しかし、ユキのこともどう説明したもんか」

俺やフェイトの家庭環境を話すとどうしても魔法が絡んでしまうので、アリサやすずかには話していない。ユキのことや俺達のことを説明する以上、世界の汚い部分や悲しい部分を晒さなければならない。一般人に過ぎない二人の少女に、そこまで話してしまっていいのだろうか…？

「んー？テキトーでいいでしょ」

「変な所で楽天的だなお前は…」

呑気なユキを見ていると真面目に考えていた自分がアホらしくなって来る。…考えたって変わらない、か。

「ま、なるようになるか。考えてても仕方ない」

「そーそー。何とかなるって」

能天気な笑みを浮かべるユキに頷き、壁に寄り掛かる。ぼーっと上を見上げながら、フェイトの頭を撫で続ける。

「今までだって何とかなったんだし、大丈夫だろ」

「…うん」

そっと抱き着いてきたフェイトに微笑み掛けながら、俺は目を閉じる。結局闇の書の闇を倒しても色々あった為、きちんと休めなかったので眠い。

「…お休み」

重力制御で布団を引っ張り寄せ、体に掛けながら、俺は睡魔に身を委ねた。

「はやて、病院に戻ったんだ」

「そういえば、入院中に抜け出しちゃったんだもんね…」

「ま、転移魔法で連れ出された訳だし仕方ないけどな…」

翌朝。バスに乗った俺達は、はやてのいる海鳴大学病院に向かっていた。予定の時間には少し早いが、今後についてはやて達と色々話しておいた方がいいと判断したのだ。

「ていうか、あたしと本局の設備さえあれば春までには治るわよ？」

と、バスから降りたなのはとフェイトに向かって、振り返ったユキが呟く。春まででって…、三ヶ月で全快かよ。

「…相変わらず無茶苦茶だなお前は」

「回復促進魔法とかリインフォースの解析結果を基に新しく魔法作ればいい訳だし。速効性が強過ぎるとあれだから調整は必要だけど」

呆れて呟く俺に、サラリと答えるユキ。ホント、我が妹ながら凄まじい…。

「まるで八神一家の主治医みたいな口ぶりだな」

「似たようなものでしょ？実際」

「それもそうか」

そんな取り留めもない雑談を交わしているうち、はやての病室にたどり着く。…さて、どうしたもんか。

「おはようございまーす」

「あ、おはよー」

「みんな元気そうね」

「お陰様でな」

部屋の中にははやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、リインフォースの五人がいた。やっぱザフィーラは入れないのか。…って、

「あれ？もう退院？」

「残念。もうしばらくは入院患者さんなんよ」

「そうなんだ」

リインフォースに抱き抱えられ、車椅子に座らされているはやてを見てなのは達がそんなやり取りを交わす。退院したらユキや本局に依頼しとかないとな…。

「まぁ、もうすっかり元気やし、すずかちゃん達のお見舞いはお断りしたよ。クリスマス会直行や」

「そっか」

はやての言葉にユキが頷く。通りで時間に几帳面なアリサ達がまだ来ていない訳だ。

「昨日は色々あったけど、最初から最後までほんまありがと」

「ううん」

「気にしないで」

車椅子で近寄って来たはやてが、俺達の前で頭を下げる。…やれやれ。

「別に大したことしてないしな」

「またこの天然兄は…。あ、そだ」

何故か半目で呟いたユキが、金色の剣十字をあしらったネックレス

を取り出す。…なんだ？

「はい、頼まれてた奴作ってみたよ」

「あ、ありがとな」

ユキからそれを受け取ったはやては、魔力を通したりして感触を確かめている。…まさか。

「ユキ、それって…」

「はやて専用のデバイス。一昨日使ってた奴のデータは昨日手に入ったし、ちょうどいいリハビリかなーって」

俺と同じ結論に至ったフェイトの言葉に、ユキがサラリと答えた。

…いつの間にそんなもん作ったんだこいつは。

「え、はやてちゃん、魔導師続けるの？」

「リインフォースのくれた力やし、今回の件で私とシグナム達は管理局から保護観察受けることんなったしな」

驚いたように尋ねるなのはに、はやてはニコニコと答える。保護観察…、フェイトと似たようなもんか。

「そうなの？」

「まぁな」

「管理局任務への従事、という形での罪の償いも含んでます」

「クロノ執務官が、そう取り計らってくれた」

「任期こそ長いが、主はやてと共にいる為だ。その程度で済んで、むしろ感謝している」

なのはの疑問の声に、ヴォルケンの面々も素直に答える。クロノの奴…、今回の件はやたら気合い入ってたからなぁ…。

「私は嘱託扱いやから、ナツキ君達の後輩やね」

「…ま、そうなるのか」

俺とフェイトは言うまでもなく嘱託、なのはも試験は受けていないが嘱託扱い、ユキは昨日リンディ艦長と話し合って管理局所属を決めた。つまりはやては俺達五人の末っ子みたいなものだ。

「んじゃ、今後ともよろしくな。はやて」

「ん、よろしくな。ナツキ君」

互いに握手を交わしながら、自然と頬が緩むのを感じる。このメンバーは今後長い付き合いになる。何故かそんな予感がした。

「はやてちゃん、今日はちゃんと帰って来てね。約束よ」

「はい、約束です」

「夕べとか今朝、やっぱり大変だった？」

主治医の石田先生に何度も念を押される中、ふとなのはがヴィータに尋ねる。

「ああ。無断外泊だったからシグナムとシャマルがめちゃくちゃ怒られてた」

「怖い先生なんだ…」

事情があったとは言え無断外泊になってしまったのは事実。説教している石田先生を想像すると、自然と体が畏縮してしまう。

「でも、いい先生だ」

「…そうみたいだね」

頬を緩め呟くヴィータに、なのはもニッコリと微笑む。優しいからこそ厳しい、それは時折お兄ちゃんも見せる態度だから、何となくわかるのだろう。

「…あ、そうだ。なぁ天城」

「どっちの天城だよ。名前で呼べ」

と、思い出したように声を上げたヴィータに、お兄ちゃんがツッコミを入れる。そっか、お兄ちゃんもユキも天城だもんね…。

「んじゃ、ナツキ…。ありがとな」

「「「「…え？」」」」

不意にぺこりと頭を下げたヴィータを見て、四人共フリーズする。

…お兄ちゃん、何かしたっけ？

「ほら、蒐集してた頃。龍にぶっ飛ばされた時」

「…あー」

ヴィータに言われ上を見上げたお兄ちゃんが、納得したように声を上げる。え、何？何の話？

「いや別に大したことしてないぞ？ヴィータ軽かったし、結局トドメ刺したのユキとシオン達だし」

「それでもお前だって助けてくれただろうが。それに一昨日だってはやて助けてくれたし…。って、言わせんな恥ずかしい」

苦笑いしながら答えるお兄ちゃんに、礼を述べながらも頬を赤らめ視線を逸らすヴィータ。…えー、と。

「…またお兄ちゃんはフラグ立てたの？しかも狙ったかのように年下ばっかり」

「…お前とはいっぺん拳で語り合う必要がありそうだな？」

ユキが漏らした茶化すような言葉に反応し、何やら黒いオーラを出すお兄ちゃん。…まぁ、年下に甘くなる原因を作った張本人に言われたら、ねぇ？

「まぁまぁ…」

「二人共落ち着いて…」

なのはがユキ、私がお兄ちゃんを説得に掛かる。ヴィータは二人の様子を眺めながら、ぽかんとした表情を浮かべていた。

「気をつけてねー」

「はーい」

と、タイミングよく向こうも終わったみたい。はやてとシャマル、シグナムがこちらに歩いて来る。

「お待たせー」

「ううん」

はやてとなのはが言葉を交わし歩き出す中、私とお兄ちゃん、シグナムだけがその場に残る。

「…テスタロッサ。預けた勝負、いずれ決着を付けるとしよう」

「はい。正々堂々、これから何度でも」

結局決着が付かなかった勝負を、いずれ行う宣告をするシグナムに、私は柔らかく笑い掛けた。

「…ふっ」

私の言葉にしばし呆然とした後、シグナムが私の頭を撫でる。お兄ちゃんの時とはまた違う、不思議な温かさがあった。

「まぁ、仲がいいのは構わないが、怪我させたら問答無用でぶっ飛ばすからそのつもりで」

と、私達を見守っていたお兄ちゃんが、不敵な笑みを浮かべながらシグナムに宣言する。

「…実妹が帰って来ても天城は天城か」

「当然。伊達でフェイトの兄を名乗ってる訳じゃねぇよ」

呆れたように呟くシグナムに笑い、私の頭を撫でるお兄ちゃん。…シグナムには悪いけど、やっぱり私はこっちの方が好き。

「えへへ…」

「…やれやれ」

温かな感触に頬を緩めながら、シグナムの苦笑を聞きながら。私達ははやてを追って歩き出した。

「…ふぁ、おはよー恭ちゃん」

リビングへの扉を開けながら、ソファに腰掛けた兄に挨拶を投げ掛ける。ううー、眠い…。

「早いことあるか。もう昼過ぎだぞ」

「んー…。ん？何見てるの？」

ツッコミをスルーしソファに座り込むと同時、恭ちゃんが何か持っているのに気が付き尋ねる。

「なのはからの手紙」

「何々…？」

渡されたクリスマスカードを眺め、文面に目を通す。可愛らしいプリントがされた紙に、なのはの小綺麗な文字が書かれていた。

『お父さんとお母さん、お兄ちゃんとお姉ちゃんへ。今夜ちょっと大事なお話があります。リンディさんとフェイトちゃん、ナツキ君も来てくれるので、晩御飯の前にでも少しお話を聞いて下さい。なのは』

「…なんだろうね？大事なお話って」

読み終えたそれを返しながら、恭ちゃんに聞いてみる。あのなのはがこんな風に畏まってるってことは、結構重大なことだ。

「そうだな…。多分、将来の話とかじゃないか？」

「案外ナツキ君絡みじゃない？フェイトちゃんも来るってことは」

予想を述べる恭ちゃんに、半ば思い付きで言ってみる。二人の美少女から好かれている果報者が、遂にどっちかを決めたとか。

「ナツキに会ってからなのは、すごく幸せそうだもんな…」

苦笑いを返す恭ちゃんを尻目に、私達はとりあえず待つことにした。

「なのはとフェイト、ナツキにはやて、もうすぐ到着だって。もう一人の友達を含めて、五人で打ち明けたいことがあるってさ」

「うん」

携帯をパチンと閉じながら、アリサちゃんが私に振り返る。三人までは予想出来たけど、はやてちゃんにもう一人、か…。

「一昨日のあれ、もしかしてはやても一緒だったのかな？」

「どうだろうね…？」

まぁ、今考えた所でわかる訳もない。素直に五人を待つとしよう。

「ま、なのは達が秘密にしたいことなら、別に秘密のままでもいいんだけどね。教えてくれるってんなら、ちゃんと聞きましょ」

「うん。フェイトちゃんやナツキ君との出会いの話から、聞かせて貰えると嬉しいかな」

フェイトちゃんやナツキ君と出会ってから、なのはちゃんは更に明るく可愛くなって、毎日が幸せそうだった。その始まりが聞けると思うと、ちょっぴり嬉しい。

「全部聞かせてくれたら、なのはちゃん達ともっともっと仲良くなれる気がするから」

「そだね」

私達はニコニコ笑いながら、五人の到着を待つことにした。

「そうか、君も本局勤めか」

「うん。なのはも嘱託を続けるそうだし、なんだかみんな局勤めになっちゃったなぁ…」

本局の廊下を歩きながら、クロノと言葉を交わす。結局全員管理局で魔法に携わることになってしまい、何とも言えない微妙な心境だ。

「頼もしい限りだよ。なのはには戦技教官をしないかって話も出てるしな」

「ふぅん…」

戦技教官、か…。確かになのはの戦闘センスはずば抜けている。それをみんなに教える仕事なら、やり甲斐もひとしおだろう。ナツキに教えて貰ったというのもあるし、ある意味ピッタリかもしれない。

「君の司書としての活躍にも、ちょっぴりだが期待している」

「…それはどうもありがとう」

ニヤニヤ笑いながら冗談めかして言うクロノに苦笑を返しながら、僕は無限書庫へ向かった。

こうして、闇の書事件は全て終わりました。いくつもの出会いと別れを越えて、始まって行くのは新しい日々。私達は、きっと、ずっと。

――六年後。

「ほんならシャマル、グレアムおじさんに小包送っといてな」

「はい、お任せです」

玄関に座った私は、背後のシャマルに振り返る。今日は月に一回の、おじさんへの報告日なのだ。

「シグナムは後で合流やね」

「はい、後ほど」

シグナムと今日の予定を確認した私は、軽い掛け声と共に自らの足で立ち上がる。ユキちゃんや管理局の尽力のおかげで、私の足はあの後数ヶ月で完全に回復したのだ。

「はやて、いってらっしゃい」

「うん、いってきます」

アルフに習ったと言う子犬姿のザフィーラ、その手綱を握るヴィータの声を背に、私は学校目掛けて駆け出す。

――――あれから六年。

私こと八神はやては、私立聖祥附属中学校三年生を続ける傍ら、時空管理局特別捜査官として仕事をこなしている。ヴォルケンリッターを率いる優秀な魔導騎士として、ロストロギア関連の事件の捜査に才覚を発揮、なんて言われてたりもしてるけど、あんまり自覚はないかなぁ？

「っと、待ち合わせに遅れてまう」

待たせるのも悪いし急がなあかん。過去に浸るのはまた今度や。

「急ごっ」

胸元に飾られた金色の剣十字を握り締め、私は走る速度を上げた。

「よし、と」

キッチンでお弁当を作っていた女性が、それを巾着に詰めてこちらに持って来た。リンディ・ハラオウン。時空管理局提督たる彼女は艦長職を退き、現在は平穏な本局勤務の日々を過ごしている。

「フェイトー、ユキー、お弁当」

「ありがとうございます、母さん」

そんな母さんの正式な養女になった私、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。聖祥附属中学三年生と時空管理局執務官を兼任して、使い魔のアルフと一緒に執務官として第一線で活躍中だったり。

「ありがとねー」

隣でニコニコと笑みを浮かべるのは、ハラオウン家の居候でありお兄ちゃんの実妹でもある、天城ユキ。聖祥附属中学三年生兼時空管理局執務官補佐をしていて、お兄ちゃんのフォローの傍ら技術開発分野で凄まじく貢献。リインフォースと夜天の書の修復、デバイスの整備も担当している。

「フェイト、そろそろ出ないと間に合わないよ」

「え、もうそんな時間？」

ユキに言われ携帯を取り出すと、そろそろ家を出る時間だった。急がないとかな…。

「じゃ、いってきまーす」

「いってきます」

「いってらっしゃい」

二人並んで家を出て、待ち合わせの場所目掛けて駆け出す。同じ妹

同士共感出来るところもあって、なのはの次くらいに仲が良かったり。

「ほら、急ご！！」

「わ、待ってよ～」

先を行く銀色の髪の少女に手を引かれ、私もスピードを上げる。ツインテールをやめ、腰の辺りで束ねられた髪が風に揺れて、桜の花びらと混じり合った。

「なのはー」

「なのはちゃーん」

「あ、フェイトちゃん、はやてちゃん、ユキちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん」

ぼーっと空を見上げ、風に揺れるサイドポニーを追っていた視線を落とすと、フェイトちゃんとはやてちゃんとユキちゃん、アリサちゃんにすずかちゃんが集まっていた。

――あれから六年。

私は聖祥附属中学校三年生。時空管理局武装隊戦技教導官として新任局員への戦技教導の傍ら、捜査官としても活動している。

「今日もお仕事？」

「うん。今日は久しぶりにみんな集まるんだ」

すずかちゃんの言葉に頷きながら、六人仲良く歩き始める。去年まではあと一人いたんだけど、もう卒業してしまいました。

「愛しの彼氏様と会うの、三日ぶりだっけ？」

「うん、すごく楽しみ…」

アリサちゃんのからかうような声に、その七人目であるお兄ちゃんを思い出したフェイトちゃんが頬を緩ませる。…とか言いつつ私も、実はかなり楽しみにしてたり。

「ま、お熱いバカップル共はほっといて。昼過ぎに早退しちゃうから午後のノートお願いね」

「はいはい。頑張ってコピーしやすいノートとるわよ」

そんな私とフェイトちゃんを尻目に、ユキちゃんが片手を上げ頭を下げる。いつものことで慣れてるアリサちゃんも、快諾してニッコリ笑う。

「ありがとな」

「どういたしまして」

さて、午後のお仕事までは学生として、真面目に頑張らなきゃ。

「で、今日の相手はボクだっけ」

時空管理局本局のとある訓練室で、二人の少女が対峙している。私から見て右側に立つのはエリス。オリジナルであるフェイトからテスタロッサの姓を貰った彼女は、今や時空管理局執務官補佐。フェイトのサポートとして次元世界を飛び回っている、立派な魔導師だ。

「ああ。戦闘能力も大分回復して来たからな。リハビリがてら一本頼む」

対し左側はリインフォース。融合機能以外はほぼ全て回復した彼女は、時空管理局特別捜査官補佐として主と共に、ロストロギア関連の事件に当たっている。

「わかっているとは思いますが、くれぐれも無茶だけはしないように」

そう言いながら溜め息と共に注意を促す私こと高町シオン。時空管理局武装隊戦技教導官補佐として、姓をくれたなのはと共に戦技教導に精を出す毎日。たまにシグナムの模擬戦に付き合ったりもしていますが。

「結界の準備も完了した。存分にやるといい」

そう言いながらこちらに歩いて来るのは八神イリヤ。時空管理局特別捜査官補佐としてリインフォースと共にはやてのフォローに回っている。ヴォルケンリッターの面々とも仲良くやっているとか。

「ああ、ここにいたか」

「お久しぶりです、シグナム」

噂をすればなんとやら。訓練室にシグナムが、騎士甲冑を纏いながら入って来る。

「ただ待つのも退屈だからな。シオン、手合わせしないか？」

入って来てすぐそれですか。ヴィータがバトルマニアと言うのも頷けますね。

――最も、私も同じ穴の狢なのですが。

「いいでしょう。今日こそ決着を付けてあげます」

「ほう？言うじゃないか。いいだろう。来い、シオン」

六年前から変わらない、黒いバリアジャケットを装着する。最近の任務は格下の相手を倒すだけでしたからね…。心が躍ります。

「剣の騎士、烈火の将シグナム！！参る！！」

「星光の殲滅者、高町シオン！！行きます！！」

互いに名乗りを上げながらデバイスを起動し、地を蹴って加速する。私達の反対側では、バルニフィカスと拳をぶつけ合うイリヤとリインフォース。…混沌としてますね、いつものことながら。

「…結局我が苦労するのか」

…ご愁傷様です、イリヤ。

「今日は久しぶりに、全員集合だな」

軌道上、艦船アースラ。ブリッジの艦長席に腰掛けた僕は、ふと呟きを漏らす。背も伸び声も変わった僕も、もう二十歳。提督になり母さんの後を継いでアースラの艦長をしている。

「そうだね。クロノ君の艦長就任以来、初めてかもね」

振り返りながら答えるのはエイミィ・リミエッタ。今は管制司令としてアースラのスタッフを束ねている。昇進しても何故かエイミィとは一緒で、またかと思う反面安心している自分もいて笑えない。

「まぁ平和な任務だ。ちょっとした同窓会だな」

「そのようで」

「ユーノもいいか？」

エイミィと雑談を交わしながら、画面の向こうにいる少年に確認の言葉を投げ掛ける。

『ああ、時間通りに』

答えたのは長い金髪に眼鏡を掛けたユーノ・スクライア。時空管理局データベース「無限書庫」の司書長であり、司書の傍ら古代史の論文を発表して学者としての実績を重ねているそうだ。

「ああ、それじゃあ後はナツキ達を待つだけか」

『あれ？ナツキは任務だったんじゃ…』

僕の漏らした呟きに、ユーノが首を傾げる。ああ、そういえば任務の前に会っていくって話していたな…。

「あいつなら任務を片付けた途端海鳴に飛んで帰ったよ。相変わらず恋人には甘いんだから…」

『まぁ、それでこそって気もするけどね』

互いに苦笑を交わしながら、今頃到着したであろう一人の少年に思いを馳せた。

「ふぁ…、あったかいと眠うなるね…」

「ま、お昼時だしね」

教室の窓際、最後尾から三番目。両手を組んだはやてちゃんが伸びをして、近付いたユキちゃんが溜め息。普通ならこれからお昼だけど、私達は出先で集まって食べることになっています。

「あ、メール」

「私も」

と、着メロの鳴り響く携帯を取り出し、ディスプレイの表示を確認する。

――天城、ナツキ。

「屋上に来てくれ、って」

「あら、彼氏から呼び出し？」

「去年まで通ってただけあって、完全に時間把握してるね…」

読み上げた私にアリサちゃんが冷やかし混じりに、すずかちゃんが冷や汗混じりに溜め息をつく。…いや、まぁ。ナツキ君だし。

「それじゃ、行ってくるね」

「「「「いってらっしゃーい」」」」

みんなに手を振って、フェイトちゃんと一緒に教室を後にする。ドキドキが止まらなくて、今にも胸がはちきれそうだ。

「行こ、なのは」

「うん！！」

フェイトちゃんと手を繋いで、階段を駆け上がる。最上階を越えて、屋上へ。その扉を開けた先にいたのは、

「…よ。来たか」

――――私達の、恋人。

六年前から大分背も伸びて、体付きも逞しくなったけど、優しげな笑顔と瞳は変わってない。

時間管理局執務官、天城ナツキ。妹の二人やシオンちゃん達と共に

数々の事件解決に貢献し、管理局内での評価を揺るぎないものにしつつある、管理局最強と謳われる魔導師。

「ナツキ君久しぶり～」

「おー、元気してたか？」

飛び込むようにして抱き着いた私を受け止め、苦笑いと共に頭を撫でるナツキ君。この温かな感触も、六年前と同じ。

「フェイトも遠慮すんなって、ほら」

「…うんっ」

怖ず怖ずと抱き着いたフェイトちゃんを抱きしめて、ベンチに腰掛けるナツキ君。なんてことはない、いつもの風景。

「やっぱお前ら抱きしめてると落ち着くわ…」

「「えへへ…」」

私達の髪に顔を埋めるようにして呟くナツキ君に、私達も自然と笑みが漏れる。

（あれから三年、か…）

「なのは、フェイト」

なのは達の卒業式。あの日の俺は今日と同じように、二人を屋上へ呼び出した。

「お前らのくれた言葉に…、答えを出そうと思う」

「「っ！？」」

それだけでこれから始まることは伝わったようだ。二人の表情が目に見えて張り詰めていく。

「俺が選ぶのは…」

呟きながら、二人へと視線を向ける。静かな声で、ただ答えを告げる為に。

「…なのは」

右に立つのは、この世界で初めて出会った少女。俺が過去と決別するきっかけをくれた、桜色の優しい少女。

「…フェイト」

左に立つのは、妹にそっくりな少女。俺が前へ進むきっかけをくれた、金色の優しい少女。

――――さぁ、答えよう。三年越しの想いに、決着を付ける為に。

「二人共だ」

「「え…？」」

両手を二人に向けて差し出しながら放った俺の答えになのはが、フェイトが、世界が凍る。
――――やはり俺は、優しくなんかない。

「俺にとっては二人共、掛け替えのない大切な人だ。その想いはもう三年前からあって、答えを出す為にずっと悩んでた。どっちもなくしたくなくて、二人に笑って欲しくて。…だから俺は、覚悟を決めた」

だが、一度決めた以上もう他の道はない。真っ直ぐに、正直に、自分の想いを伝えるだけ。

「なのは。フェイト。好きだ。どっちが一番とかじゃない。二人共同じくらい、この世界で一番、二人が好きだ」

俺を支えてくれた二人の少女。俺なんかを慕ってくれる二人の少女。そのどちらかなんて、決められる訳がない。
――――だから俺は、三つ目の選択肢を選んだ。

「だから…、俺と一緒に生きて欲しい。俺の隣で、俺と同じ道を歩んで欲しい」

真っ直ぐに二人を見据えて、多分人生最初で最後の、その一言を告げる。

「俺と、付き合って欲しい」

最低だと罵られても構わない。狂ってると言われても構わない。でもそれが、紛れもない俺の本心だから。
――――それが、天城ナツキの答えだから。

「「…ふふっ」」

全てを言い切って、脱力感と緊張感に包まれる俺に返されたのは微かな笑み。

「…ホント、ナツキ君ってば…」

「どこまでも…、優しいね…」

「…は？」

この後に及んでそんなことを言う二人に、首を傾げた瞬間。

「「えいっ」」

二人が俺の差し出した腕に抱き着いて来た。…え？何これ？どういう状況？

「ナツキ君は一つだけ、大きな勘違いをしてるの」

「確かに私達は、お兄ちゃんに好きだ、って言ったけど…」

抱き着いて来た少女達は、揃って俺の顔を見上げ、

「「私達、付き合って欲しいなんて一言も言ってないよ？」」

――とんでもない爆弾発言を投下した。

「……はぁ？」

その言葉に俺は脳内の記憶を全力で検索し、一つずつじっくりと検証していく。

――確かに、言われていない。

「例え一方通行の想いでも、私達は全然構わないの」

「お兄ちゃんの傍にいられれば、私達はそれだけで十分幸せだから」

幸せそうな笑みを浮かべながら、抱きしめる力を強める二人を見て最初に感じたものは。

――バカらしさ。

「……はは」

なんだよそれ。そんなんありかよ。つまりなんだ？俺の悩みに悩んだ三年間は。時には徹夜さえしてまで悩んだ三年間は。

――全部、無駄だったって訳だ。

「…ホント、お前らには一生勝てる気がしねぇよ」

苦笑いと共に二人の体を、思いっ切り抱き寄せる。三年間もこんな俺を待っていてくれた、強く優しい少女達を。

「なのは」

「ふぇ？…ん！？」

呼ばれて顔を上げた少女の口を、自らの唇で塞ぐ。目を白黒とさせるなのはが、なんだか新鮮でおかしかった。

「え、あ、えと、あの、その」

「待ってた時間はお前の方が長かったからな。延長料だ」

顔を真っ赤にして何やら呟くなのはにニヤリと笑いながら、今度はフェイトに顔を近付ける。

「んむっ！？」

俺となのはのキスに呆けていたせいもあり、あっさりとフェイトの唇を奪うことが出来た。なのはと全く同じ反応を返す少女を見ていると、自然と笑みが込み上げて来る。

「ま、その分フェイトはずっと俺にべったりだった訳だし、おあいこってことで」

「あうあうあう…」

ファーストキスをなのはに譲った理由を述べるも、フェイトはそれどころではないようだ。…そういや昔、間接キス程度で目ぇ回してたっけ。

「で、一応聞いとくけどお前らの答えは？」

万が一にもないと思うが、念の為聞いておく。答えはわかりきってるけど、やっぱり言葉に出すことは大事だから。

「もう…」

「わかってるくせに…」

顔を赤くしながらも、二人揃って深呼吸。そして二人は俺を真っ直ぐに見据え、

「「ずっと、一緒にいるよ」」

――――答えを、告げた。

「それじゃ今後とも…、いや、一生どころか来世でも。俺は未来永劫お前らと一緒にいるから」

愛しい少女達を抱きしめながら、俺は誓いの言葉を述べる。先は色々大変だし、考えることもたくさんあるけど。

――――今は素直に喜ぼう。二人が俺と共に歩んでくれることを。

「「…うんっ！！」」

俺を見上げた二人は、元気よく肯定の答えを返し、

――――最高の笑顔を、浮かべた。

「…しかし、今思い返すと凄まじいな」

「もう…、すごくびっくりしたんだから」

「私はてっきり、そのまま終わりになるかと思ってたのに…」

「いやー、やっぱやられっぱなしじゃ立つ瀬がないからな」

あの時のことを思い返しながら、三人で笑い合う。周りから見れば異常な、だけど俺達からすれば普通の光景。周りがなんと言おうとも、二人は俺の選択を受け入れてくれた。
――なら最後まで、それを貫き通すだけだ。

「っと、そろそろか」

「お、ちょうどナツキ時空も終わりみたいやね？」

携帯のアラームに顔を上げると同時、二人分のかばんを持ったはやてがニヤニヤしながら入ってくる。…相変わらずこいつは。

「…覗きかよ。執務官権限で訴えるぞ？」

「んー？覗いてたーなんて一言も言ってへんで？」

「…にゃろう」

ニヤニヤ笑いを継続しながら、冷やかしの言葉を投げ掛けてくるはやて。なのはとフェイトはフリーズしてしまうが、こういう軽口を叩き合える悪友のような存在は素直に嬉しかった。

「…とか言っちゃって。はやてだってお兄ちゃんに貰ったヘアピン、ずっと大事に持ってるじゃない」

「んなっ！？」

と、背後から現れたユキの囁くような一言に、はやての顔が赤くなる。…え？ヘアピンあげたのって大分前じゃ…。

「そ、それは…、あれや！！初めて男の子から貰った誕生日プレゼントやから取ってあるだけや！！」

「ふぅーん？」

真っ赤になって反論するはやてに、ニヤニヤ笑うユキ。打ち解けた分性格の悪さが前面に出て来てるな…。相変わらず末恐ろしい奴。

「なのは、フェイト」

「「んむっ！？」」

二人がギャーギャー騒いでいる隙に、恋人達の唇を奪う。ま、三日ぶりなんだしいいよな。

「さ、行こうぜ」

「もう…」

「相変わらずなんだから…」

ニヤリと笑った俺に苦笑いしながら、満更でもなさそうに二人が反論する。ホント、こんな可愛い彼女がいて幸せだな、俺は。

「お前らもほら、他の連中も待ってる訳だしそろそろ行こうぜ」

「う、うん！！はよ行こ！！」

「ちぇー」

立ち上がりながらの俺の言葉にはやてとユキも頷き、全員が輪になって集まる。

「レイジングハート」

《Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ（はい、マスター）》

なのはの左手に握られた宝石が、赤い輝きを点し宙に浮く。この六年を共に戦い抜いて来た、なのはの相棒、魔導師の杖。

「バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

フェイトの右手から浮かんだ金色の三角形が、眩い光を放つ。いつもフェイトと共にあり、言葉少なく支えてくれた閃光の戦斧。

「行くよ、リイン」

「オッケーです、はやてちゃん！！」

金色の剣十字を掲げると同時、はやての肩に３０ｃｍ程の少女が現れる。ユキとはやてが共同で制作した、幼いながらも立派な二代目の祝福の風。

「ネームレス」

ユキの左手に下げられた翼と十字架をあしらったネックレスが、僅かに漆黒の輝きを放つ。非人格型ストレージの為意識はないが、ユ

キの力を最大限に引き出す魔杖、理操る終焉の杖。

「アクセル」

《Ｇｅｔ　Ｓｅｔ（いつでも行ける）》

俺の右手に握られるのは、十字架を模したシルバーネックレス。長きにわたり俺を支え続けてくれた、災厄を切り裂く白銀の刃。

《Ｓｔａｎｄｂｙ，Ｒｅａｄｙ（準備完了）》

レイジングハートの声を合図に、五人で顔を見合わせる。あの日出会った絆は、今もちゃんと結ばれて。こうしてみんな、同じ現実を生きている。

「「「「「セェェェット・アップ！！」」」」」

――さぁ、行こう。

――俺達の、最高に幸せな未来へ。

最終話「未来と答え」（後書き）

はい、これにて第二期完結です。
ナツキの答えは、「二人」です。傲慢でも偽善でも、最良の選択肢だと作者は思っています。
個別ルートを期待していた皆様には、ごめんなさいとだけ言わせていただきます。
ですが、それが作者の、ナツキの選択です。

最後まで見てくださった皆様方、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7612n/

魔法少女リリカルなのはA's Another

2011年4月4日01時53分発行